貧乏な彼女

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貧乏な彼女

【Ｎコード】
Ｎ００５７Ｋ

【作者名】
作戦参謀

【あらすじ】
不況…それは時に人を悪い方向に、あるいはいい方向へと向ける。
これはそんな不況の世で偶然出会った男女２人の物語である。

Ｐａｒｔ１：侵入者（前書き）

初投降です。
始めまして、作戦参謀です。でも作戦立案は苦手です（笑）
始まりはなんかもうどこにでもありそうな感じですが読んでいただければ幸いです。

part1：侵入者

１００年に１度の経済危機……
その波は身近な所まで押し寄せている。

まもなく高校２年生、保坂充（ほさかみつる）はただの高校生でこいつの家はまだまだ大丈夫だがお隣の村井家は俺が１年の時に突如として姿を消す。
やはり不況の影響だろうか？
さらに去年の夏、突如同級生の両親が失業していろいろあって退学する。確かに身近だったが俺にとってはまだ遠いものであった。

しかし……この日のよる、本当にありえねえぐらいお金がない奴っているんだなと実感する。
それは始業式の前日であった。

「うぅ…トイレトイレ……」

それは俺がトイレに起きた時の話だ。
なぜか台所からがさごそと音が聞こえる。保坂家は両親が働きにぶらっとどこか出かけている為家には年中いない、たまに帰ってくるのみ、つまり俺１人、なので家に自分以外誰かがいるはずがない。
（なんだ？……ま…まさか泥棒！？そうだ、まちがいない！親がいなけりゃ兄弟もいないし俺の嫁だっていないんだ！！絶対そうだ、うん、期待しちゃダメだ……よ～し……）

俺は部屋に戻り、三八式歩兵銃のモデルガンを手に取る。
なかなかの威力があり中れば痛い、これで相手を奇襲し撃ったら今度はこれで殴りかかる、そうすれば相手は地べたに伸びてしばらくは動かなくなるだろうからその隙に通報しようと俺は考えた。

「……えっ？」

俺は我が目を疑う、照準を合わせ攻撃しようとしている相手はとびっきりかわいい女の子だった。

（うわあ、なにあの子かわいい……そうかぁあんなかわいい子が泥棒する時代かぁ、いいねぇ…ってんな事言ってる場合じゃない！！中っても死なないけどとりあえず死ねぇぇ！！！）

俺もは迷いつつも引き金を引き、弾を撃った。

当然中っても死なないがその弾は勢いよく少女に命中、直撃した。

「ひゃあうぅっ！！」

「よし、てぇぇぇ！！！」

俺はフルボッコにしようと思った。しかし…

「あぅぅぅごめんなさいごめんなさい！！やめるから許してぇぇ！！」

「っ！！……」

少女のその言葉を聞き手を止めた。

「ど…どうでもいいけど泥棒さん。何しにきたんだ？泥棒か？」

「ど、泥棒です！！」

「ってそのまんまかい…」

黒くて長い髪…でも質素な服を来ており天然キャラっぽいかわいらしい顔をしているその少女、泥棒と名乗る。そのまんまだった。。

「あのなぁ…お前、泥棒って正直言ってどうかと思うぞ？ってか通報するぞ？」

「はぅ……ごめんなしゃい……ひっく…」

涙目で謝る少女の姿はこれ以上怒る気を失わせた。俺の気を変えてしまうとはすごい奴かもしれないが…どうするべこれ？このままだったら明らかに俺ロリコンで犯罪者だぞ？だってこの子ちょっと小柄だし顔ロリっぽいし、それに座りこんで泣いてる、俺はそんな少女を見下すように見ている、絶対ここだけは他者から見れば俺は犯罪者に見える、今見られたらまずい！！

「わわわ、わかった！！今日はとりあえず許すから泣くな！！」

「ほんと？」

「…お…おう」

「うぅぅ、ありがとうございます！！ホントにホントにありがとうございます！！」

少女はまだ目に涙が残っているのだが笑顔で俺にそう言ってくる。

さて、ここからは俺による尋問タイムだ、お前は誰なのか、そしてなんの為に泥棒をしようと思ったのか、とにかく追求してやる。

「って、お前名前は？」

「早川優希（はやかわゆうき）です！ちなみに出身は道内、あっ、ここですね」

さっきまで泣いていたとは思えない様子だが…かわいい。

「早川さんね。って何で泥棒？」

「え～っと…その…両親が職を失ってその後はいろいろと深いわけがあって私一人ぼっちになって…お金もないからせめて食べ物がほしかったからついつい」

「親御さん失業したのか？」

「うん…」

地の文だから別に会ったばかりで親しくない人だけど優希っていっても問題ないか、その優希は何か辛い事があったのかとても暗かった。見てるこっちが気まずくなる。

「っまああれだ、うん。お前の事については大体わかった。まあ準備ができたら家に帰れ」

「家ないんですよ？全然わかってないじゃん」

「そ、それはもうどうでもいいわ！とりあえずお前がいるといろいろとその…俺の平和な日常生活がぶち壊されそうな気がしてついでに回りからも犯罪者扱いされかねないんだよ！ってかもうこれ通報フラグだし、頼むから出てってくれ！！寝床だったら友達の家に！！」

「……友達…いないんです」

「えっ？」

やばっ…俺まずい事言ったか？

「すすすす…すまん悪かった！！もうそんなきつくは言わないから泣かないで！」

半分犯罪者になりたくないという気持ちもあるが友達がいないのは

流石に可哀想だと思った。すると優希は急に目の色を変える。
「じゃあじゃあ!!!私を住ませてください」

「はいぃ!?なんでぇ!?」

「だって寝るところないですし!」

「うぅっ……」
いかんいかん!また泣かせてみろ?今度はどうなることやら。
さらに今、夜中の3時ですぜ?あんまりうるさくすると隣に住んでいる幼馴染の金剛榛名(こんごうはるな)とか近所の歩くテレビと言われているおばちゃんとかが起きてしまう!…ってそれ以前に朝になれば榛名が料理をつくりに俺の家にきてしまう!

この危機的状況…こりゃあこいつを家にとめてあげるわけにはいかない。
「いや、その…こっちにも都合があって…その…ごめん!」

「うわあああ死んでやる!!私死んでやるぅぅ!!!」

「あああ!!ごめんごめんごめん!!!嘘!!嘘だってば!住んでもいいから死んじゃらめえぇぇぇ!!!!」
ここは俺の家、ってこの家には今俺と優希だけ、もし優希が自殺したら多分俺のせいにされる…それだけは避けなければ俺は刑務所行きで人生そのものに影響してしまう。

なんとしてもそれだけは阻止せねばと同居を泣く泣く許可してしまった。
「ありがとうございます!」

「切り替え早！！…まぁいいか…でも困ったなぁ…寝るところが…あっ、そうだ。俺ソファーでネルから俺のベット使っていいぞ？」

「えっ？でも貴方が…」

「なぁに、今まで家もなく親もいなく寒くて寂しい思いをしているのと比べたら大分マシだ、家の中だし」

「本当にありがとうございます、このご恩は絶対いつかお返しします！」

いや…別に返さなくてもいいんだけれど…
そんなこんなで、こいつとの同居生活が始まった。

どうなるの？これ？

Ｐａｒｔ１：侵入者（後書き）

御意見とか御感想とか大歓迎です。

part2：修羅場

「…ちゃん！充ちゃん！」

「んん…？」

おはようございます。どうも、保坂充です。
え～っと、俺は朝に弱いからこうやっていっつも幼馴染の榛名に起こしてもらっているわけで朝ご飯も榛名が作ってくれるわけです。

「んん？誰？」

「ひっど～い！昨日会ったばかりなのにもう忘れたの！？榛名だよ！は・る・な！」

「…あぁ、でも本当に榛名か？」
俺は幼馴染を少しだけいじめてみる事にした。

「ほ、本当だよっ！」

「じゃあ質問、榛名は何歳？」

「１５歳」

「次に得意な事と苦手な事」

「得意な事は料理とピアノに苦手な事は勉強とスポーツ」

「うむ、じゃあ最後。榛名はドがつくほどの貧乳でブラジャーをし

ていない」

「ひっど～い！！！5年生のころからつけてるよ！！そこまで子供じゃないよもう！！」

でも胸が小さいのは確かだ。

って昨日の奴といい、どうして俺の回りはこういう年齢のわりに子供っぽい奴が多いんだ？…ん？昨日の奴？…あれって夢だよな？…そういえば俺…ま…まさか！？

「んもぉ、充ちゃんなんでこんな所で寝てるの？」

やっぱり…夢じゃないのかあれは？

「ちょっと、充ちゃん？」

「あああ！ごめんごめん、いやぁ昨日果てしなく疲れていたもんだからソファーで横になってたらその…朝が訪れていたという…」

「風邪ひいても知らないよ？とりあえず朝ごはんつくるからね」

「へいへい」

さて、詳しい事を説明しよう。

金剛榛名（こんごうはるな）、変てこな苗字がお悩みらしく俺の友人にいるミリオタ曰く「金剛型の艦魂！」っと言われているがそんな非現実的な事はないし多分親が無知だっただけだろうと思うので気にしないほうがいいと思う。第一俺も知らん。

１５歳、茶髪、くせのある短めの髪、身長１５３ｃｍ　Ｂ７７、Ｗ５６、Ｈ８３、なんで俺が知っているかは秘密。

俺の幼馴染で小学校も中学校も一緒だったが1歳年下で、その為俺が上の学校に行って2年生になり入学すると1年違う学校にいただけなのに寂しかったと甘えてくるちょっと困ったちゃん。

料理とピアノが得意らしいが勉強は苦手で高校受験の時は俺がよく教えていた。ってスポーツも苦手で１００ｍのタイムは秘密にしたいぐらいらしい。
ちなみに胸が小さい事を気にしている様子…って、昨日の奴は何歳なんだろ?それに比べたらほんの僅かに榛名のほうが大きい気がする。

…っあ!!そうだ!!昨日の奴!!
俺は階段を上り自分の部屋の扉を開けた。ベットにはとても幸せそうな様子で寝ている早川がいた。

「むにゃむにゃ……ほぁぇ?」

あっ、起きた。
「う…うっす……」

「あぁ、昨日のどろぼーしゃん…」

いや、どっちがだよ、しかも人のベットで寝て。
…どうでもいいけど寝起きの早川、かわいいな、まあ所詮は犯罪者だけど。とりあえず俺は早川に言いたい事があって来た、それを言うために俺は早川に近づいた。

「ふにゃぁ?なんですかぁ?」

「いいか早川」

「私固いの嫌いです、優希でいいですよ?」

「ゆ…優希、いいか?静かにしてるんだぞ?後俺これから学校の制服に着替えるから……『絶対』にこっちを見るなよ?まあ簡単に言えばもう少し寝てろって事だ」

「ふぁ〜い…は〜くしたぁ…おやすみ……むにゃむにゃ…すぅ…」

どんだけ朝に弱いんだよ、散々寝てた癖にもう寝やがった。
とりあえず寝ているのを知った俺はさっさと着替えた…っとはいうものの、そこのベットには女の子が寝ているわけだからやっぱり恥ずかしい。

俺は布団を被せ、早川が完全に見えないようにした。
幸い早川はいびきなんてものをかかないのでまあ多分大丈夫だろう、掃除とかしなかったら。

…あと、下の名前で呼ぶのはやっぱり恥かしい。まあ明日にはこの事も忘れてるだろ多分。

そして階段を降りて1階へ、朝飯を食べようとした。
「おっ、また今日はうまそうだな」

「えへへ、腕によりをかけて作ったんだよ充ちゃん」

「ははは、いつもわりぃな、いただきます!」

俺は目の前に広がるいかにもおいしそうな朝ご飯を口に入れた。
榛名の料理は本当にうまい、本当に俺の口に丁度いいぐらいだ。

「今日榛名、入学式で学校に行くのが充ちゃんより遅いから家掃除しといてあげる」

「うっ！！」

まずい…バレる！！

「あははは！！いいよいいよ別に！！うん！俺昨日掃除しまくったし！だっから疲れたんだ！！」

「？……なんか今日の充ちゃん、変」

「えっ？」

「何か隠し事してない？」

「いやあそんなわけないじゃないか！！これで何か隠し事をしているったらどこにでもあるアニメとか漫画とかと同じ展開じゃないか、アハハハ！！」

だぁーなんてわざとらしいんだ俺！！
もう少し冷静になって演技しろ！！

「怪しい…よ～し！榛名が調査してあげる！」

「やめてぇぇぇそれだけは！！」

「え？今止めても無駄だよ？だって充ちゃんあと少しで行かないと間に合わないよ？」

「うっ！！」

まずい……非常にまずい！
とにかく早川をバレないようにしなければ。
「わかった、充ちゃん卑怯な事は嫌いだもんね、じゃあ今正々堂々男らしく」
「いや榛名は女の子でしょ！ほんっとそれだけは勘弁して！」
「なんで？やっぱり何か隠してるの充ちゃん？」
「Ｎｏ！Ｎｏ！念の為にドイツ語でも言っとくけどナインですよアハハハハ！！」
「怪しい！！強行突破しちゃえ！！」
「あ、ちょっと待て榛名！！マジでやめてくれ！！」
榛名は走って階段を登った。
おそらくその後は俺の部屋に行く→優希発見→ひどいよ…充ちゃん…→俺死亡（腹を刺されて）って事に……嫌ァァァ！！多分榛名はヤンデレじゃないと思うけどそんな展開になるのだけは嫌だ、あと榛名に嫌われて自分で作ったまずい朝飯を食べるなんていうのも嫌！
必死になって榛名を追いかけた…しかし遅かった。
その時榛名は俺の部屋にいた。
「ちょ！マジやめてくれ！！」
「いいじゃない充ちゃん！充ちゃんだって榛名の部屋漁るの好きだったでしょ？」

「それは小学生の頃だろ！俺は今は高校生なわけでそれをやったらリアルで犯罪者って事になるわけで……」

「ふあぁぁぁ…んん……うるしゃいよ……あれ？」

「あっ」

「げぇっ！！」

最悪の展開来る！

覚悟はできた、玉砕の覚悟はできた、俺はいつでももう玉となって砕けられる。さあ来い、どうせ死亡するんだったらさっさと来い！

「あ…おほよーございます」

「お、おはようございます…アハハ……って充ちゃん？」

「うっ！！」

榛名は今、とてもいい笑顔、その笑顔がとても怖く思えるのは俺だけ？ものすごく嫌な予感がするのは俺だけだろうか？

「どういう事？……是非とも事情を…ふふふふ……」

「きゃぁぁぁぁ！！ごめんなさい！！ってもう時間だし！後で説明するからボコらないでー！！」

まさに、修羅場だった。

その後俺も榛名も用を済まし再び俺の家に…

Ｐａｒｔ２：修羅場（後書き）

御意見、御感想とかお待ちしています。

Ｐａｒｔ３：学校へ行こう

「…っというわけで、仕方なく家に泊めたわけであって、決して俺の彼女じゃないしあれでもなんでもピー（放送禁止用語）でもありません！」

「どうだかねー」

榛名はまったく俺を信用しないという表情だった。

「頼むよ本当だって信じてくれよ！」

「だって怪しいんだもん。充ちゃん見知らぬ女の子を家に泊めるような人じゃないもん」

「はっ…いいさ。こういう場面で男性が不利になるのはずっと前からさ。そして大体女性に有利になるのそ、これぞ噂の女尊男卑の法則」

「いや、それとこれとは関係ないと思うよ充ちゃん」

追い詰められる俺、そんな時にドアチャイムが鳴った。

クリーニングかなんかだと思ったがそれは違った、なんと見知らぬ男が入ってきたのだ。

「だ、誰！？」

「はっ！陸上自衛隊３等陸佐の古賀と申します」

「えっ？自衛隊の人がうちに何か？」

「いやぁ、この辺に自分の親戚の女の子が逃げてきたという情報をつかんで…なんでもこの付近の家に引きこもっているとか…」

まさかとは思った。

「ちょっと、いいですか？」

「はい」

俺は早川をつれてきた。

榛名と話している途中だったのでいきなりつかまれたせいかとても驚いていた。

「こいつですか？」

「…ああ！！そうだ！」

「！！」

何故か早川は俺の後ろに隠れた。

「ん？どうした？お前のおっさんじゃないのか？」

「う…あんなの私の親戚じゃないよ！」

「いや…そう言われても血が繋がっているわけで…」

「バーカ！バーカ！」

「ってこんな所で喧嘩すんな！」

とりあえず俺は古賀３佐を家に入れ、話を聞く事にした。

早川はさっきまではただのロリっぽい女の子であったのにこの古賀３佐の前では意地をはっているかのような態度でかなり嫌っている様子だった。

「え～っと実は……両親が職を失って逃げたもので、私の家で暮らす事になったのですが…私の家は御殿場市にありまして、この早川は友達と別れて別な学校に行くのが嫌だというので逃げたんでしょうな…でもそういうわけにも行きませんし、ですから…」

「それが余計！私は戻る！」

「だ…だけど…」

子供かよ…と思わせる理由だった…いや、小学生でも転校の為に友達と別れるという現実は受け止めるだろ常識的に考えて。しかし目の前の早川は違った。

「ねえ充ちゃん…あの人達…何？」

「俺に訊くな…ん？」

「うっせえ…戻るっつてんだろうがおっさん！！」

バキィ！！

「あああぁぁ！！今度演習あるのに怪我したくないよぉぉぉぉぉ！！！」

古賀３佐は星になった。

早川はその後笑顔になりこっちを見ていた、でも今更遅い、さっき正確が１８０度変わった気がした。しかし早川の気持ちがわからないわけでもない、確かに別れるのはつらいだろうししかもその原因

は両親の失業による両親の逃走だ。なんて無責任な親なのだろうと思った。

「と…ところで早川さん？もう転校とかは？」

「いや、手続きはこれからという所で明日さっきぶっ飛ばした古賀のく…おじさんと一緒に学校に行くところだったの」

今糞って言いかけたよね？

「って、お前の学校って？」

「そこの飛鷹高校だけど？」

「えええ！？俺と同じ！？…でもお前いたっけ？」

「私も知らない」

「…そういえば誰か1人欠席だったような……ま、まさか！？」

「私かも」

「…ンな馬鹿な！？」

それは始めて知った事実だった。早川は同じ高校で同じ学年で同じクラスの子だった。なるほど昨日自己紹介とかやらなかったし出席確認といえるほどのものも特になかったし、ただあいつ欠席かと先生が言っただけだったから気がつかなかった。

「あっ、でもマンション追い出されちゃったしどうしよう」

って、なんで俺をなにかを求めるような目で見るんでしょうか？
「お願いします！是非とも居候させ…」

「いや、それはちょっと…なぁ榛名？」

「う、うん！充ちゃんが犯罪者扱いに…」

「さっき早速お前が俺を犯罪者扱いしていただろ？」

「あ、あれは私のその…ちょっとしたミス！」

「も…もういいわ、話をややこしくしたくないし。って早川さん、本当に住むところがないのか？」

「はい」

早川を見ればなんとなくわかる。おそらくは本当だろう。
確かに早川は家がある人とは違う雰囲気を放っている、本当に貧乏な様子だ。
「…そうだ榛名の家！」

「ダメ！保護者の承認が必要」

「ってお前まで俺の家にこいつを居候させる事に協力する気かい！」

「だって…面白そうじゃない？フフフ…」

榛名の笑み、いつもは可愛らしいのにこの日はとてつもなく恐ろしく感じた。
「お前そんな腹黒キャラだったっけ！？」

「ありがとうございます！できるだけ迷惑かけないように生活しますのでよろしくお願いします！」

「ええ！？俺まだ許可してな……ひぃぃぃっ！！」

俺の首のあたりにギラリと光る鋭いものが見えた、背後には何か企んでいるかのような目で俺を見る榛名がいた。

「許可…したよね？」

まずい…殺される…

「ははは、もちろんさ、あははは……」

俺は半分やけになって笑顔で答えた。

こうして、半ば強制的に俺と早川は同居する事になったのである。

またこの後古賀さんはしばらく現れなかったし早川の転校も未遂に終わったので邪魔するものは今の所はほとんどいない。

問題は、早川と同居しつつどうやって暮らすか。まちがいなくクラスの奴らはおろか下手をすれば全校生徒全員に冷やかさついでに先生からは犯罪者扱い。

乗り切るためには方法は一つ、俺と早川が同居している事をひたすら隠す事しかない。

――翌日――

「あれ？先に行っちゃうの？」

「無論！」

俺は早川と榛名を差し置いてパンを加えながら学校へ全力疾走した。

走れば学校まで12分！だいたいそれぐらいの時間には到着した。

「うぃ～っす充！」

「よお」

突然現れた茶髪のこの男は柊雄一（ひいらぎゆういち）、中学の時からの友だ。ちなみに隣のクラスに彼女がいるらしい。

「どうした雄一？今日は機嫌がいいな」

「いやぁ昨日梨佳ちゃんとデートして、やべえよ初めてしちまったぜ」

「えええ！？は、初だと！？」

「ちょっと待て充！お前とんでもない事想像してないか？キスだぞ」

「な、なんだ、まあもちろんそうだよな」

この時、本当に初体験かと思った。

しかし雄一と井上梨佳（いのうえりか）という女の子は前に見たところ、本当に幸せそうで俺なんかよりも先に童貞という噂のあれを捨ててしまいそうなほど、親密な関係に見えた。

こっちも見ていて羨ましい…という気持ちはあるけど心から応援したくなる。

「おっ？あれ早川さんじゃないか？」

「えっ？げっ！！」

やっぱり同じクラスだった。

しかも何故かこっちに向って手を振っている。
「あれ?あれお前に向って振ってるんじゃないか?」

「きき、気のせい!大体俺あいつ初めて見た気が…」

「そうか?結構かわいいし、男達の間じゃ有名人だけど……まぁお前自分の回りしか見てなさそうだし知らなくても仕方ないか」

「なんだよその言い方、なんか俺悪者かなんかだと思ってない?」

「別に~」

「ああ!お前絶対彼女がいるから優越感を感じているんだろ!彼女いない暦=年齢をなめるな!童貞なめるなよ昨日初体験をしたお方!」

「なっ!!」

まわりの人々は雄一のほうを不潔な人のように見ていた、そして俺はずるそうな顔をする。
「お前!!初体験じゃねえって!!話がややこしくなるだろ!?」

「悪い悪い、まあ幸せにやってるんだったらそれでいいだろ?」

「あ…あぁ」

これでとりあえず雄一を落ち着かせた。
これが日常、今まで変わる事もなく続いていた日常……しかし今年それは変わるのかもしれない。早川優希、1人の少女が俺の家で暮らす事になった。

夢のようといえば夢のよう、一方で悪夢であるといえば悪夢……高校生活2年目は波乱の年になりそうです。

Ｐａｒｔ３：学校へ行こう（後書き）

おまけ：キャラクター紹介（しかも今更、４人分）。

・保坂充

『仕事で家に親がいないのでかなり自由に暮らしている高校生』

生年月日：１９９２年１２月８日

身長：１７８ｃｍ

趣味：パソコンをいじったり漫画を読んだりゲームをしたり川を眺めてたら鉄道が少し好きだったりなど多趣味。

特技：高〇名人に匹敵するほどの連打。

特徴：どこにでもいそうな普通の高校生、髪の手入れは特にしていない。

運動神経はわりといいが勉強の面では普通。家事は苦手で今の所榛名
任せ。本人は気がついていないが女子からの人気が高い。つまりモテ
る男。

好きなタイプ：可愛い子ならよし！

得意科目：大体の教科は得意。

苦手科目：家庭科。

・早川優希

『親は失踪、家はなし、現在保坂家に居候中の少女』

生年月日：１９９２年１２月１０日

身長：１５１ｃｍ

その他のサイズ：Ｂ７６　Ｗ５７　Ｈ８４

特技：男相手でもぶっ飛ばす事（現役陸自３佐の古賀さんをぶっ飛ばすほどの実力）

趣味：音楽鑑賞（不明）

特徴：黒色の髪は長く天然が入っているが古賀さんの前だと何故か態度が一
　変する。肉体的には強いが精神的には弱者でしかも貧乏人、しかし充
　に対してはがんばれば大胆になれるかも。体格は小柄で顔も歳のわり
　に幼く見えるのであんまり親密になりすぎるとロリコン扱いされる可
　能性もあるので注意。
好きなタイプ：自分の事をよくわかってくれて優しい人。
得意科目：英語、家庭科。
苦手科目：理数系全般。

・金剛榛名
『充の幼馴染』
生年月日：１９９３年５月２７日
身長：１５３ｃｍ
その他のサイズ：Ｂ７７、Ｗ５６、Ｈ８３
特技：料理とピアノ。
趣味：充のお世話。
特徴：くせのある短めの髪をしておりその髪の色は茶色、料理と音楽
　（特にピアノ）は得意だが一般教科は苦手でスポーツも苦手。しかも甘
　えん坊でたまに腹黒いなど少し困った子だが根は優しく幼馴染想いで
　もある。充の友人に名前が某海軍の戦艦ぽいと言われそれ以降名前に
　ついて悩んでいるようである。
得意科目：音楽、家庭科。
苦手科目：一般教科全般（ただし英語は比較的マシなほう）、体育。

・柊雄一
『充の親友』
生年月日：１９９３年３月１０日
身長：１７３ｃｍ
特技：女の子をナンパする。
趣味：
特徴：既に彼女がおり幸せそうな様子。趣味は女の子をナンパする事で実は
　今の彼女もナンパで入手したとか。
得意科目：国語。
苦手科目：理科、数学。

ちなみに昨年（２００９年）という設定です。

part4：ある1日

1週間後…

目覚ましが鳴る、カーテンをあけると気持ちのいい日差しが部屋に入り込む。日本は電池が充電され今日も1日がんばれそうな気分にさせてくれる。

今日も清々しい朝だ。
階段を降り、台所を見ると今日目に映る後姿は榛名のものとは違った…なんと同居している早川だった。

「あれ?」

「おはよー保坂さん!」

「早川?そういえば榛名は?」

「ここにいるけど?」

「うわっ!!」

突然後ろから榛名が現れた。
「びび…びっくりした!いきなり現れるなよ!しかも何その野菜がついた包丁は?それを持ったまま俺に近づくなよ殺気感じるんですけど!」

「えへへ、大丈夫。充ちゃんを殺すなんて真似はしないよ」

「ならいいんだけど…ってか今日は早川が飯作ってるわけ？」

「みたい、折角朝ご飯作りに来てあげたのに…でも私もお手伝いする事にしたの！」

「そうか、悪いな毎朝」

「いいのいいの、元々1人暮らししていたのに家事全般が出来ない充ちゃんには私が必要でしょ？」

「ま…まぁな。それにあそこにいる早川…って待てよ？早川って料理できるのか？」

「見たところは上手よ」

「そ…そうか」

やっぱり他人の料理を初めて食べるのは緊張する。
下手したら人を殺傷できるほどの料理が出てくる可能性だったないわけじゃないし、だから早川が朝食を作っている所を見ると俺は不安になってしまう……ところが出てきた料理はとても立派だった。

「おっ、見た目はうまそうだ」

「保坂さん料理できないって榛名ちゃんから聞いたから腕によりをかけて作ったよ」

「ほお…見た目とは裏腹に……」

俺はまず焼きたての魚を口に入れた。

「おっ！うまいじゃないか！」

「よかった、これでもう子供とは言わせないよ？」

「いや、見た目は完璧ロリだろ？」

「ひどいぃぃ、うるうる…」

うるうる泣く人を初めてリアルで見た、ちょっとかわいいかも……って思っている俺、ロリコンなのかな？言われて見れば榛名もぱっと見ロリっぽいし、俺の回りにはなんでロリっぽい奴ばっかり集まるのだろうか？宿命か悪戯かはわからないけれどとりあえず早川の料理はおいしい。榛名の料理と比較しても全く劣らぬ出来だ。

「あぁ～！！うまかった」

「よかった」

早川は最近笑顔を取り戻したかのようだ、きっと辛かったあの頃をなかった事のようにし今を精一杯生きている。

「保坂さん行ってらっしゃい！私も後で！」

「行ってくる」

「一緒に行けば面白い事になりそうなのに、フフフ…」

やっぱり榛名、最近黒くなったかも。

「そりゃ勘弁してくれよ！雄一とかがうるさいだろ？」

「冗談！私が優希ちゃんと一緒に行くから、行ってらっしゃい充ち

ゃん」

「おう」

俺はいつものように、俺と早川が特別な関係である事を隠すために家を出てからは別々に行動した。最も学校に到着すればクラスも同じわけでお話もするわけだから概ね仲良しであるという事はバレている。それぐらいが普通に友達という程度で怪しまれない程度だと思う。

一部の輩は「彼女乙ｗｗｗ」と冷やかしてくるけど……

さ、とりあえず、学校に行こう。

今日は何があるかね……

――大陸行進曲――

呼べよ日本一億の　命溢れる足音に　地平も揺れよ大陸の　すべての物は　今朝だ

果てなく青い野と風に　今日から鳴るぞあの旗は　進む大陸日本の　意気の印だ　魂だ……

そんな曲が背後に流れる、機会を窺い今だと思った所で突撃、銃弾の雨を潜り抜けると鉄条網が目の前に、俺は近くにあった鋏でそれを切り突撃を敢行、すると目の前に学校が見える。もうすぐだ！歯を食いしばりながら銃弾と砲弾の鉄の雨を潜り抜け、ようやく学校に到着した。

（ぜぇ…ぜぇ…疲れた、何戦争しながら学校まで来てるの俺？）

学校まで到着する苦労を描こうとしたのはよいとして、歌詞だけじゃ伝わらない気がするのは多分俺だけではないはずだ。

俺は学校の中に入り下駄箱をあけた。

「ん？」

中には一枚の手紙が入っていた。当然期待をする、噂のラブレターというものかもしれない。早速中身をあけて手紙を読む…って全然ラブレターとかそういうのではなかった。

「ゆ…雄一めぇぇぇ！！！」

その内容は「彼女無き充君へ、どう？一瞬嬉しかっただろ？たまにはこういう悪戯もいいかと思ったんだ、これからもよろしくな！柊雄一」と書かれていた。

教室まで突っ走り、すごい勢いで扉を開けて雄一の頭を鞄に殴った。

「いってえええ！！何すんだよ充～」

「お前！！なんだよこれ！一回期待してしまったじゃないかバーロー！！」

「まぁまぁいいじゃないか」

（あー、誰かこいつ殺してぇ）

雄一の笑顔が余計腹立たせる。

こういう悪戯は始めてじゃないし慣れてはいるが…とりあえず一瞬でも期待させてしまったという大罪を犯した雄一は俺は一瞬憎んだ。

やがて時が経ち、お昼休みが訪れた。

「おっ！お前の弁当は相変わらずうまそうだな、畜生俺もそんな幼馴染ほしい！」

雄一が嘘泣きをしながら本音なのか嘘なのかいまいちわからない事を言った。

「お前彼女いるだろ？」

「梨佳ちゃんが毎日側にいてくれるんだったら俺は学食なんか食ってないよ！」

こいつは泣きそうになって俺に語りかけてくる。別に食えておいしければいいだろう、それが俺の考えだ。まあ今日の弁当は優希が作った弁当だけど。

「ん？今優希が作ったって」

あ、今のは俺のミス…ってか前に優希でいいって言ってたよなあいつ。

まあ恥かしいけど下の名前で呼ぶのも悪くはない…って待てよ？なんでこいつが俺が今優希って思ったかわかるんだ？まさか！？

「コラー！地の文を読むな！優希っていうのは気のせいだ！」

「そ、そうか」

まずい、今気がついた。

『たまに地の文を読まれる』事に…という事は地の文でも優希優希って読んでたら俺ら特殊な関係にされちゃうの？それは後で面倒だ！うん、やっぱり早川にしておこう！

その時、榛名が目の前に現れた。

「充ちゃん」

「なんだ？」

榛名は何か今すぐに俺に伝えたい事がある感じで俺の様子を窺った後、用件を口にした。

「今日ね、体験入部に行くんだ」

「そういえばお前中学校の時は吹奏楽部だったな」

「うん、それで充ちゃんもいく？」

「お、俺2年だから行っても何の意味もない気が…」

「俺が行く！」

「えええええ！？」

突然現れたこの眼鏡をかけた男、春原太一（すのはらたいち）。

眼鏡をかけているが黙っていればイケメンでいい男だ、では何故黙っている必要があるかというとご覧のように女の子には目がないただの変態だ。

「いいだろ充！？榛名ちゃんを俺の嫁にして！」

「ちょっと待て！初対面でそれはおかしいだろ！？」

「なんで？お前には優希ちゃんがいるじゃないか？」

「いやちょっと待てなんでそうなる！？」

「だって見たし」

ぎくっ！

まずい…よりによって太一の野郎に見られたか？

「仲良く話している所を？なんで？知り合いなの？」

「知らん知らん！たまたま席が近いだけ！それとこれとは別でとりあえず榛名から手を離さんかい！」

「なんで？」

いや、どう見ても榛名嫌がっているし…

「あの…先輩、私やっぱり1人でいいです、じゃあ…」

ほら振られた。でも太一は諦めなかった。

「待て！俺と幸せな学園生活…ぶへっ！！」

「しつこいわ！！」

俺は太一を蹴った。

危ない危ない、榛名がこいつの欲望を満たす為の機械になってしまう所だった。

「じゃ、じゃあ充ちゃん。後でね、あと今日の晩御飯カレーでいい？」

「勿論！」

「待ってぇぇ落ち着こうよ」

「いや、お前が落ち着けよ！」

「ひでぶっ！」

こんな変なメンバーに囲まれて暮らしているのが俺。これがいつもの日常、早川は相変わらず外をうろついていた時を思い出しているのか弁当を食べる時はお祈りをし米粒の一つも残さずに食べていた。でも米粒一つすら残さないとかは参考にすべき事かも。

ｐａｒｔ４：ある1日（後書き）

おまけ：キャラクター紹介

・春原太一

『見た目はイケメン中身は変態、いわゆる黙っていればいい男』

生年月日：１９９２年８月７日

身長：１７７ｃｍ

趣味：アニメ、漫画、ゲーム、とにかくそういうのが好きらしい。

特技：早食い。

特徴：眼鏡をかけているがなかなかいいデザインでしかも顔もかっこいい為

　本当に黙っていればいい男……なのに性格はただの変態で本当にもっ

たいない男、充や雄一とは友達だ。

好きなタイプ：可愛い子ならよし！

得意科目：大体の教科は得意、特に保健体育の保健はぴか一。

苦手科目：特になし！

Ｐａｒｔ５．奪われた初めて

今日もいつもどおりに学校に行く。
結局榛名は中学校の頃と同じで吹奏楽部に入部する事にしたらしい、ちなみに俺はどこの部活にも杯っていない。そもそも部活というものに興味がなかったし部活に使う時間をもっと別な事に使いたいという事もあった。

そのせいか友達の何人かからはなんで？なんで？と問われたりするけど、とにかくそういう理由で俺は部活に入ってない。多分これからは今までどおり家に帰るのも榛名より俺のほうが早い…なんて日も多いだろう。

早川は部活には入ってないらしい、理由はやっぱり興味がなかったからだそうだ。そもそもうちの学校はあまり部活には力を入れていないという事実もあって運動系は弱いし文化系もいまいち、吹奏楽部も上手な事は認めるが他校に比べたら微妙、そんな吹奏楽部のせめてもの救いは今年の入部者に榛名がいた事だろう。

「オッス！オラ太一！」

でた！トラブルメーカー！
「あれ？誰だったっけこうやって自分の事名乗る奴？」
それは多分言ったら著作権の都合で消されると思いますよ太一。

「誰でもいいだろ」

無視するのはかわいそうかと思ったから適当にそう答えてみる。し

かし太一は俺の冷たい回答にうんともすんとも言わず、ただ話を変えただけだった。まあ太一らしいといえば太一らしい行動だ。
「まあいいや、それより！あれ貸してくれ！そうだな…生〇会！」
何故に伏字にしたか、それはちょっと著作権の都合です。
ってか俺そんな小説持ってないし！
「いや持ってないから」
「えっ？そうなの？まあいいや」
「お前…本当に軽い奴だな…」
「まあいいじゃないか！」
俺はその後教室に入った、少し遅れて早川も入ってくる。
どうやら太一とだらだら話している間に優希は追いついてしまったんだろう、しかし相変わらず寝癖が微妙にそのまんまだったり声を出して欠伸をしたりたまに指を加えたり、天然なのか子供なのかどっちなのやらという行動をとる、でも俺は見ていて嫌いではないと思った……って何を考えておる俺は？
「ねえねえ保坂さん」
「ん？どうした？」
昼、早川が突然俺に話をかけてきた。
「…暇なのです！」
「ぶっ！」

なんというくだらない理由。
「それはしょうがない、お前友達はどうしたんだよ？」
「いるけど暇～、なんか面白い事ない？」
「面白い事ったってねぇ……俺には何も思いつかないよ」
「え～？それなりにお金を持っているんでしょ保坂さん？なのに面白い事ないの？」
「貧乏人には解りづらいかもしれないけど、普通の奴だって楽しい事って何なんて聞かれたらすぐに答えられる奴もいるけど思いつかない奴だっているんだよ」
「変なの、じゃあ腕相撲しようか！」
突然早川を袖をめくって右手を出した。
「えっ？いきなりなに？」
「腕相撲、暇つぶしにはいいと思ったんだけど？」
「いやその…なんというか」
「やなの？腕相撲やなの？……遊びたいよぅ」
「わかったわかった！するから頼むから公の場で泣くな！」
この状況だと周囲の目線が冷たくなるし、早川に泣いてもらってはちょっと困る。

「いっくよー！」

「いけば？」

常識的に考えれば男のほうが力が強いイメージがある、当初俺もそう思った…っが試合開始前にある事を思い出した。

皆さん最近２０１０年にサバゲーで屈辱にも韓国軍にボロ負けしたと噂の陸自の３佐の古賀さんを覚えているだろうか？あの人、一応自衛官で常人よりは強いはず…でもその古賀さんをあっという間にぶっ飛ばした少女がいる。

その名も早川優希だァ！！

まずいまずい！自衛官あっさり倒す相手だぞ？ちょっと天然入ってるっぽくて実年齢よりも見た目ややる事が子供に見えるけどア○レちゃん風に言えばめちゃんこ強い奴だ、俺勝てるの？腕折れたらどうしよ？

「いくよ！必殺お相撲さんアタック攻撃！」

アタックも攻撃も意味同じな気がするんですけど！

ってか強！想像を超える力だ、気がついたら俺の腕はフルパワーになっていた、優希、流石に強い。

貧乏人で自分の力で生きる為なのかその実力は常人離れしている。

俺は当然自衛官でもなんでもないのであっさり優希に敗退する。

バァン！

「いってえぇぇぇぇ！！」

俺の件に激しい痛みが走る。

「痛かった？」

「痛い…」

「そんなに力入れてなかったのに…」

いやアンタ、手加減ってもの知らないでしょ？明らかに力入ってたんですけど？

周りの輩は拍手をしていた。

「すご～い！流石優希ちゃん！」

「ははは、保坂よええぞ！オラ失望しちまった！」

っと太一は某鳥〇漫画のあのキャラのような口調でそういった。多分冷やかしているんだろう。

まあ別に負けても悔しくはなかった、日々訓練している自衛官より強いかもしれないしこの子。

「…でも大丈夫だよね！保坂くんなら！」

「大丈夫かは知らんぞ？」

「大丈夫なの！」

えっ？

早川は突然、俺の脳では今すぐには理解ができない行為をやりやがった。早川のやわらかくて暖かく、小さくて可愛らしい手が俺の左のほっぺたを包み、唇にはなんというか、言葉では表すのが難しい

なんともいえぬ、いい感触だ。

それは早川の唇…これってキス？

…おいおい待て待て！それはある意味で困る！

皆見てるし…大体何俺の初めてを奪っているんだこいつは！？

「ふぅ……おりょ？」

優希は周りを見回した、当然一同そろってにやにやしている。見られているこっちは非常に恥ずかしい。

「あの…私何か変な事しました？」

「うん、普通人前でそれをするか？」

「ええ？痛いっていう気持ちぶっ飛ぶかなと思ったけど、ダメだったの？」

「いや、それ以前の問題だと思うけど…」

「そうなの！？」

驚く事？

「そーなの！そーなんす！そうでがんす！」

「ふんがー」

「まともに会話せんか！何またパクリの方向に持ってこうとしてるの！？」

「だって最近の小説っていうのはパロディが…」

「それ裏の話でしょ！頼むから物語の中で小説とか言わないでくれ！不自然に思われるし！」

確かに普通小説のキャラがそんな事は言わないだろう。
それは俺も思っている事だが早川にはその認識がないようだ。
「えっ？でも」

「でもとかじゃなくて、もういいわ、とりあえずそういう事は言わない事、わかった？」

「なんか子供扱いされてる気分、ぶー！」

「反応が子供じゃん！」

「ほぉ、やっぱりお2人さん仲がよろしい事」

「げっ！雄一！」

リア充の雄一が俺と早川の事をまるでバカップルがここにいるかのような目線で見つめる。なんか…リア充にそんな目線で見られるとものすごく腹が立つのは私こと保坂充のみでしょうか？ってか太一までほかの奴らよりもにやにやとしている、普段から変な奴のあいつはほかの奴より浮いて見えた。

「お前、もう早川さんと付き合っちまえ、そして！俺は榛名ちゃんと！」

「え～っと、とりあえず幼馴染に有害な手を出したら打ち殺すっと」

「そりゃひどくね?俺そんなに有害!?」

「多分」

「うわあああああ!!早川さんラブの充がいじめるぅ!!」

「こらー!!また紛らわしくなる事をいうなぁ!」

周囲は俺の事を噂する、そんな声が俺の耳に入ってきた。

「頼むからもうほっといてくれぇぇぇぇぇぇ」

だんだん俺は脱力していった。

Ｐａｒｔ５．奪われた初めて（後書き）

御意見、御感想とかお待ちしています。

Ｐａｒｔ６．これは……人生／（＾ｏ＾）／オワタ

「っというわけでいつも言ってるけど、ちゃんと高校生らしく生活するんだぞ？特に保坂」

「はい？」

っと俺の事を指名するこの人物は辻五十鈴（つじいすず）、ちょっと男っぽい喋り方をするが見た目は完全女の子で教師暦も長くなく若い先生で男からの人気は絶大だ。ただし性格にちよっと南りといった感じだし、そもそも生徒と先生が…っていうのはどうなの？

ちなみに名前の由来だが本人曰く生まれた時爺さんがまだ若くて５０歳だったらしく丁度五十鈴先生が生まれた時に近くの鈴が鳴ったから爺さんの年齢と鈴という偶然を合わせて五十鈴になったらしい。って別に考えなくてもみんなそう思うだろうけど滅茶苦茶適当な命名じゃね？

いかんいかん！そんな事考えては、ちなみに生徒からは五十鈴先生と呼ばれているわけで辻という名字を聞いた事はほとんどない、それだけ下の名前のインパクトが強かったんだろうと勝手に予想する。

って、その五十鈴先生が俺に何だろう？

「お前確か早川さんにキスをしたって訊いたぞ？年頃なのは解るし男じゃなくてもキスぐらい一度はして見たいという気持ちはあるからわかるんだけど、頼むから面倒事だけはおこさないでくれ」

「はぁ！？なんで五十鈴先生がそれを知ってるんですか！？」

「ふっ、我がエージェントの春原が」

「太一の仕業かい！」

「いやぁおもしろそうな事になるかなと思って」

「それは友としてどうかと思うぞ！ってかなんで皆笑うわけ？」

笑っている人が考えている事は顔を見れば予想がつく。

「きも」「お気の毒、ブｗｗｗ」「お願いだから土日に面倒事は起こさないで！」

この３つが多数派の意見でしょう。

ってかどれも俺のイメージがダウンするんですけど、という事で徹底的に抗議した。

「大体あれは早川からしかけてきたわけであって正しくは『お前確か早川さんがキスをしてきた』ですよ！」

「ふぅ～ん、早川さんそんな事するイメージなさそうだけど」

「見た目で判断っすか！？じゃあ俺だってそんな事するようには…」

「見える、とにかく明日からの土日健全に過ごしなさいよ」

もう抗議するのがめんどくさくなってきた。

「後は……特になかったわね、はいそれじゃ解散」

ＨＲは終わり、生徒達は鞄を持って帰ったりそのまま友達を立ち話をしたり、それぞれのやるべきことをやっていた。俺も家に帰る事にした。

「あのー？保坂さん？私何か悪い事しました？」

「もう…いいよ、忘れるのが一番って事もあるさ」

「そうなの？」

「そうなんす」

「了解しました」

早川がそういい切ると雄一と太一が俺の目の前に現れた。

「よっ！未来のカップル！」

「だから違うっての太一、どんだけ榛名が欲しいんだ？」

「バルバロッサ作戦を3回やってもいいほど」

「うわ…」

…ってかバルバロッサ作戦って何？

そう思っている頃今度は雄一が話をかけてきた。

「まあ気にすんな充、そういう事だってあるさ、それにあれは常識外れだったかもしれないけど本人に悪気がないんだから許してやれ」

「本人に悪気がないからって以前にもうめんどくさくなったから許したよ」

「あ？そうなの？」

「うん、保坂さんやさしい人だから」

やさしいとかそれ以前の問題だと思うけど…まあ水を差すような事はいわん事にしておこう。教室を出て、階段を降り、玄関に向った。

下駄箱から靴を取りだしそれを履いて外に出た。ちなみに今日榛名は部活で遅いらしい。だから今日は家の前まで一緒なのは早川だけだろう。

「あれ？そういえば早川さん親が破産して逃げたっていうけど今どうやって暮らしてるの？」

それを訊いてきた雄一、実に答えづらい質問だ。

「え～っと、親戚の家に居候しています」

ナイス誤魔化し！

「へぇ～、じゃあさ親戚の家って！？」

太一、余計な事を！

「ほさ…ふぎゅっ！！」

俺は思いっきり早川の口を押えて適当に誤魔化した。

「3丁目の田中さんの家だそうだ！」

「？」

「？」

当然2人は俺の不可解な行動を怪しがる。

ってか、まずかったか急に口をふさいだのは？

「何か隠してね？」

「うん、ここの所確かに充の動きは怪しい」
まずい、もんのすごく怪しまれてるよ。
2人は俺を死んだ豚にキスをしている変人が目の前にいる表情で俺の事を見つめる、俺って豚とキスするレベルなの？

「何も」

「…よし、じゃあ帰るか！」

「ああ、じゃあな充？」

「お、おお」

そう言って突然2人は帰った。
「一体どういう風の吹き回しだ？いつもなら食いついてくるのに」

「きっと諦めたんだよ、まあいいじゃん、榛名ちゃんも遅くなるって言ってるしさっさと帰ろ？」

「えっ？だけどこのまま2人で帰るとバレね？」

「大丈夫大丈夫！バレても多分問題ないよ」

「いや！大アリだと俺は思う！」

とはいいつつも早川と一緒に帰る俺、もしかしてロリコン？
いやいや何も、突然居候してきただけで別に特殊な関係ではない、深く考えないほうがいいだろう。いつもの通りを歩く、周りに知っている奴は誰一人といない、案外バレないものなんだな。もしかすると俺達が気がついていないだけで見られているかもしれないが、

物事ってうまく行く時といかない時がある、その差はとても大きいという事が今回よくわかった。

やがて住宅街に入り、俺の家、保坂家が見えてきた。

「ただいまー」

って言っても誰もいないんだけれどついつい言ってしまう癖がある。

「おかえり…ってえええええ!?」

「何驚いているんだ雄一、太一……ってなんでお前らがここにいるの!?」

「えっ?いやあ怪しいから、それにたまたま鍵掛かってなかったし」

「えっ?そういえば鍵は?」

「保坂さんごめん、かけ忘れてた」

「あんたのせいっすか!」

まあ早川が鍵をかけ忘れたのはまあよいとして、問題はなんでこの2人がこの家にいる事かだ。そもそも勝手に入るってこれ立派な犯罪だと思うんですけどどうなんでしょ?

「ほうほう、親戚って早川さんの事だったのか」

関心する雄一。

「道理で仲がいいわけだ…なんでお前ばっかりずるいぞ!」

っと叫ぶ太一、お前の場合はまず性格に問題があると思うんだが?

「気をつけるんだぞ優希ちゃん!そいつは狼だ!」

「こら太一！誤解を招くような事を言うな！」

「だって普通思うだろ？年頃の男女だろ？普通に考えたらやらしい方向に考えがいっちまうと思うんだが？」

確かに正論といえば正論だと思う、それには俺も賛同だ。太一と女が一つ屋根の下で暮らしていたら俺だって不安になる、女が汚されるんじゃないかって。

だけど何か納得いかない。なんでだろう？いや、まともな男としては当然の反応だと思う！

「まあ太一の言う事は気にするな、２人暮しだってのは少々俺も不安になる要素ではあるが、隣にはお前の幼馴染の金剛だっているわけだし、大体俺も姉と２人暮しだけど特になんもないぞ？」

「おお、さすが雄一、少しは物分りがいい！」

「それは姉だかだ！充の場合は他人だぞ！？」

あぁ、もう反論するのが面倒になってきた。

「っじゃあ充、俺ら帰るわ」

「あ…ああ」

「ほれ行くぞ太一」

「じゃあな」

２人は扉を閉めて、おそらくは家に帰った。

これでめでたし…なんだろうか？

「……とりあえずー、寝ます！」

「早！」

「昼寝！……すーすー…むにゃむにゃ…」

「眠りにつくのも早！」

でも、早川の寝顔はかわいい。

そう思おうとしなくても思ってしまう俺ってロリコンなの？

多分続く。

ｐａｒｔ６．これは……人生／（＾ｏ＾）／オワタ　（後書き）

おまけ：キャラクター紹介

・辻五十鈴

『見た目は若くて可愛い女教師、でも性格が…』

生年月日：内緒。

身長：１６３ｃｍ

趣味：格闘技、自動車運転。

特技：榛名山のダウンヒルを3分１５秒で走る（注：群馬に行った時に1回やっただけ）

特徴：飛鷹高校の教員で教員になってから年月が経っておらず非常に若く、おまけ

　男子からは人気であるがややいい加減な性格、しかし授業についてはまとも

に勧めるようである。でもたまにお前は教師かと疑いたくなるような事を口

にする。スポーツ観戦の他に自動車運転が好きらしいがその腕前は黄色いＦＤ

　を7秒という差でぶっちぎるほどらしい。

好きなタイプ：年下の男。

得意科目：世界史、ただし担当教科。

苦手科目：家庭科。

part7．休日

目覚ましが俺を起こす。
俺は手を目覚ましに伸ばし、スイッチを押して目覚ましを切った。

眠いけど少し唸りながら体を起こし、頭をかきながら時計を見ると時刻はまだ7時であった。
「…あ、そうか…そういえば今日土曜日だった」
俺も早川も榛名も通う飛鷹高校は公立高校、土曜日もお休みだ。
場所は近い所にあるが余裕を持っていたので毎朝7時に起きるようにしているが俺も他の奴の例外ではなく土日は不規則な生活を送る。なので金曜日は3時ぐらいまで起きていたので４時間しか俺は睡眠をとっていなかった。非常に眠いししかも月曜日であったら寝るわけにはいかないけど今日は土曜日、ゆっくり休める日だしどうせ午後になれば好き放題なんだから今日ぐらいはと俺は再び布団に入った。

…

…

…

「…さん！」

何か俺を呼ぶ声が聞こえる。

「…さんってば！お昼だよ？」

「…へ？」

時計を見れば１２時１５分を差していた。

そして声の正体は優希だった。

「保坂さん何時まで起きてたの？」

「えっ？３時」

「なるへそ……ちゃんとした生活を送ってないと体に悪いよ？」

「心配すんなって」

結局あの後だが俺と優希が同居しているのがバレてしまった。仕方なく俺は優希も言っていた通り親戚という設定にされ血は繋がっているという設定にしてもらった。

本当は血なんて一滴も繋がってないんだけれど。

「早く起きないと保坂さんの分もご飯食べちゃうよ？」

「そりゃあ困るな、よし起きる！」

「それでよしなのです」

優希は笑顔を見せた。
なんかエロゲみたいな展開だけど気にしたら負けだろう。まさか食べ物に睡眠薬が入ってるわけなんてない、変な事を考えながら優希の手作り料理を口に入れた。

相変わらずのうまさだ。多分優希の腕前なら料理人としてもやっていけそうだけど本人の性格的に定職に就けるかどうかがまず不安だ。まあなんとかなるとは思うし就職するのは多分大卒後だとは思うけど。

ってか俺何で他人の心配をしているんだろう？
しかしその心配もぶっ飛んだ。それよりも気になる事があったんだ。なんと優希の頬っぺたにご飯がついている。今日の昼ご飯は炒飯だ。米粒ぐらい子供ならついてもおかしくはないだろう。

いやでも優希って俺と同じ学年だったような、まあ教えてあげないのはかわいそうなので俺は教えてあげる事にした。
「あの…早川？」

「なに？」

「ほっぺ、米粒ついてるぞ？」

「えぇ？……ほ、ホントだ！にゃんかついてる！」

な行がおかしい事になってるぞ？
「へへへへ…ありがとなのね！」

本人は普通にやっているつもりなんだろう。
でも俺のような普通の男には演技に聞こえるがその演技っぽいのが

なんだか可愛く見える、それって俺がロリコンという証拠か？いやでも本物の幼女を見たって興奮しないし俺は多分正常だ。

「…そういえば今日は榛名の奴いないのか？」

「うん、友達と用事があるらしい」

「そうか」

榛名は部活もあれば友達もあってと忙しくて休みの日に俺の家に来る事なんて朝食と夕食を作る時以外にはほとんどない。今日もそうだと思う。

……

まずい、会話が詰まった。
どうも気まずい。しかし話のネタがない。

「…なぁ、そういえばお前は用事とかないの？」

「えっ？いや特に用事なんてないんだけど？」

そうか…訊いて損した。
飯を食い終えると俺は再び部屋に戻った、しょうがないギャルゲーでもするか。

そういう事でパソコンの電源を入れる、すると俺のケータイが鳴りだした。

「ん？親父？」

電話の相手は親父だった。

ピッ…

「おお充！！元気か！？」

「一応…」

「俺は元気だぞー！あっ！てめぇ！コラ！俺のたこ焼き奪うでねぇ！！……ああさっきのか？気にすんな、こっちの事だ！それよりお前が無事にやってると訊いて父さんは安心した！母さんも安心するだろ。じゃあ俺らそっちにいつ戻れるかわからねえけどしっかりやれよ！！……うぉっ危ねぇ！！……ゴルァ貴様ら何所目ェつけてワッパ回しとるんじゃい！！！……あ、気にすんな、こっちの事だ！じゃあまたいつか電話かけるからな！！死ぬんじゃねえぞ！！元気でな！！」

親父からの電話が切れた。

……はぁ、今思ったけど俺の親父って何者なんだろ？

ちなみに威勢はいいけど本当は喧嘩が弱いっていう噂らしい、例の古賀さんのほうが圧倒的だろう。

それはともかくようやく親父のうるさい声から解放された…っと思ったらまたしても俺のケータイが反応した。今度は太一からの電話だ。

「オッス！オラ太一！」

「お前またそれか…って何のようだ？」

「いや、夜の営みはしたのかなと思って」

「しっねーよ!!!するわけないだろアホか!」

太一の頭の中にはエロしかないのかよ!

「もういいわお前!お前のエロネタ聞いても誰も面白いと思う奴いないぞ?」

「何!?そうだったのか…・・・って違う、俺は今度のゴールデンウィークにサイパンに行こうと思ったんだ」

「何故にサイパン?」

「南の島に行きたいからさ、そういうわけ」

「…お前…パスポートとか持ってるの?」

サイパンに行く事自体は反対じゃないしむしろ俺に止める権限なんてないんだがそれが心配だ。しかし太一の奴なんで急にサイパンに?まあ俺には関係ないや。それにより衝撃の回答が太一から帰ってきた。

「パスポートって何?」

「……それ、アレだよ、理由は簡単、君馬鹿でしょ?」

「馬鹿だな!」

「自慢するなよ……とにかくパスポートないなら外国には行けないだろ?」

「し…知らなかった！！！」
っとやたら驚いた様子で太一は反応する。

真性の馬鹿だあいつ…でも成績は悪くないぞ？
多分頭のネジが2～3本ぶっ飛んでいるだけだろうがそれが致命的とも言える。
「じゃ…じゃあシンガポール！」

「お前話聞いてたか？」

「サーセンｗｗｗ国内で我慢するっすｗｗｗ」

うわあ、リアルで「ｗｗｗ」って使う奴初めて見た。
「よし、じゃあとりあえずがんばるんだぞ！でもはりきり過ぎて大変な目にあわせるのはいけないから避妊はちゃんとするんだぞ」

電話は切れた。
ＯＫ！今の話、聞かなかった言にしよう！

……あぁ…電話しただけなのに疲れたぁ。
休日って…休まるけどつまんねー。おまけにエロゲでもなんでもないけどあってほしいものがない、そう、進展だ。

進展も糞もないのに、なんだろこの物語？
そう俺は文句を言ってみるが冗談だろって聞きたくなるほどに本当に何も起こらない、読む人いるのかな？疑問に思ってきた。

……

一一一月曜日一一一

サンデーマンデー……はい、調子乗ってごめんなさい。ってか某天気予報みたいなノリだったかも。

「おはよ保坂」

「おう」

この黒髪ショートでいかにも体育会系という少女は高臣朋花（たかおみほのか）、なんかすごい名前だけど至って普通の元気な少女、このクラスで順番で言えば優希の次ぐらいに可愛いっと俺は思っている。

俺とは高校に入ってから知り合ったがそれなりに仲はいい、ちなみに一人称が僕。声はちょいロリっぽい。

「っでっで！休みの間にまさか…」

「あーもうお前の考えている事がわかった。言うな！面倒な事になるから」

「え～？ボク面倒な事好きなのに、なんかいいじゃん面倒な事って！それにぶちあたって押し返しちゃうってすばらしいじゃん！」

「はいはいそういうのは運動だけにしてくれ」

「ちぇっ、まあいいや、保坂が鬼畜モードに入ったわけでもなさそうだし、でもつまんないなぁ」

「一体高臣は何を望んでいるんだ？」

「別に！あっ、そろそろ紫先生来ちゃう、じゃあ後で売店のパン買っといて。ボク今日お弁当忘れちゃった」

「お前な！自分で買え！」

ああ、親戚って設定なのに皆してからかってくる、俺どうなっちゃうの？

ｐａｒｔ７．休日（後書き）

おまけ：キャラクター紹介

・高臣朋花

『一人称はボク…ボーイッシュだけど見た目は可愛らしい女の子』

生年月日：１９９２年９月１日

身長：１５６ｃｍ

その他のサイズ：Ｂ７８　Ｗ５７　Ｈ８４

趣味：昼ドラ観賞。

特技：短距離走。

特徴：黒髪でショートヘアで見た目は体育会系少女、顔は優希の次ぐらいに可愛いらしく男子に人気があるらしいがすべて断っているという噂あり。充達とは友達であるようだ、ちなみに１人称は「ボク」で明るくボーイッシュな感じである。

好きなタイプ：頼れる男。

得意科目：体育。

苦手科目：数学、理科、家庭科。

Ｐａｒｔ８．小学生のような高校生

やがてゴールデンウィークが過ぎた。
たとえ５日でも長い、なんでこう長い休みがあると学校とかに行くのが面倒くさくなってしまうのだろうか？時間っていうのは恐ろしいものだ。

榛名もこの学校には慣れたみたいで楽しくやっているようだ、でも毎朝ちゃんと来てくれるとはあいつも心配性だな。まあ俺が自炊できないのは事実だし早川と２人っきりじゃあ怪しいのは確かでそのせいかクラスの奴らにまで疑われているぐらいだ。第一先生に目をつけられているし」

「って、五十鈴先生、今日はなんですか？」

朝のＨＲの終わり際に五十鈴先生がこっちを睨みつけてくる。しかも怒っているのか笑っているのかよくわからない表情で。
「って、保坂。どうだったの？まさか早川さんを！？」

「「「ええええ！？」」」

「あんた本当に教師ですか？ってかなんで皆までそんな反応するのひどくね？」

「あのー、私と保坂さんがどうしたのですか？」

あ、早川にはなんだかわかってないみたいだ。まあ基本的に不純な奴には見えないけれど。

「早川さん、休みの間に何された!?」

「ちょっと待ってください先生!なんでそんな真剣な表情で訊くんですかどんだけ俺信用されてないんですか!?」

「ちょっと保坂は黙れ!」

ひどっ!あんた本当に教師か!?

リアルで言いたかったけど言ったら殺される気がしたからあえて心にその言葉をしまった。

「いえ、特に…」

「そう、よかったわ。いい早川さん、保坂は狼、気をつけなさい」

「よくわかりませんけれど気をつけます」

ああ、みんなしてひどいやひどいや。

さて、最初の授業は体育…って体育教師に道具持って来いと命令された俺は誰も絶賛していないけど絶賛体育館倉庫急行中、ボロい倉庫だけどそれがいいんだろう。

「…ねえ」

「…ん?」

誰かに呼び止められて俺は後ろを見た。そこにはどう見ても小学生の女の子が立っていた。

「お兄ちゃんって保坂充?」

「……誰？俺はお前なんて知らんけどなんで俺の名前知ってるの？」

「やっぱり！お兄ちゃん！」

「うおぁっ！！」

突然女の子は俺の事なのかおにいちゃんとか言いつつ俺に抱きついてきた。まずい！俺こんな趣味ないのに…今誰かに見られたらロリコン確定なうえに犯罪者として警察沙汰だ！

「こ、こら！やめなさい！誰なんだよお前は！」

「えー！？覚えてないの？一昨日不良のお兄ちゃん達から助けてくれたじゃん！」

不良…あ、思い出した。

暇だから雄一と太一とで街中に行った帰りに家の近くでそういえばそんな事があった。

一一一昨日一一一

「ちょっと離して！」

「うっせえチビ！ちょっと来い！」

「ああ、楽しみっすねぇ兄貴」

「久々にまだ未熟な体を……」

俺は1人デブ人眼鏡でガリの2人組が女の子を車の中に無理やり乗せようとしている所を見た。流石に犯罪を見逃すのはどうかと思った俺は仕方なく女の子を助けてやる事にした。

「なんだぁおめえは！？」

「そんなチビいじめてどうする？」

「うっせえ！！やっちまおうぜ兄貴！」

「おう！！」

「やれやれ……」

こうして俺は2人を相手に喧嘩をした。
俺はあえて第1撃を食らった、1発食らってロクに訓練もしていない俺はフラついたし痛かったけれどこれでこの戦い、俺の自衛戦闘になった。しかも男のうちのデブは刃物を出し刃先を俺のほうへと向けていた、これは明らかに殺意があるという事なので俺は命の危険にさらされているという事、これなら正当な自衛権の行使だ、俺は全力を出して戦い幸い相手も素人でしかもオタクっぽかったのでそいつらよりは強いと思う俺は怪我する事もなく勝利、男達は車に乗って撤退した。

「ったく、お嬢ちゃんも気をつけるんだぞ」

「あ、あの！……」

それが今俺の目の前に…てかくっついている女の子との出会いだ。
でもそれから2日だろ？これは唐突すぎないか？

「助けたのは思い出した、お前誰だよ？」

「あたし？古賀真紅（こがしんく）、スリーサイズは…」

「言わんでいい！どうせ上から５０、５０、５０なんだろ！」

「ひど～い！あたしだってブラつけてるもんおっぱいあるもん！」

「おっぱいとか言うな！赤ちゃんか変態さんだけにしとけ！」

とんだマセガキのようだ。

ところでこいつの名前に何か引っかかる事があるんだ。真紅は別にいい、確かに常識的に考えてみればおかしい名前ではあるがそこはまあ許してやる。でも古賀？確かに古賀ってどこにでもいそうだけれどどうも早川と出合ってからというものの古賀という名字をきくとひっかかってしまう。

「あ〝ー！！！」

「な！？高臣！？」

高臣の奴がびっくりした様子で指を俺のほうに向けながら叫ぶ。

うん！嫌な予感しかしない！

「とうとう保坂がロリコンに！？しかも何恥ずかしい事言ってるの！？…そうだ、いけないいけない！うちのクラスから逮捕者が出たら代表とか泣くしボクの立場も悪くなるし！わかったよ、保坂！見たいとか触りたいんだったらボクの胸を！」

そう言って高臣は自分の胸を強調する。

巨乳じゃないけれどそんなふうに強調されれば目立つ……って何を考えているんだ俺は！第一なんでお前の胸なわけ？それ以前に胸から離れようよ！俺は抗議する事にした。

「いらねーよ！！なんでそっちの話になるんだよ！」

「チミが男だからだよ！」

「お前も恥を知れ！大体こいつと俺は全くの無縁だ！……ってかまずい！あんまりのんびりしてると高木（体育教師）に怒られる！」

「おっとボクも新羅先生に怒られるね！でも子供に手を出すのはどうかと思うのね！」

「だっから関係ないっての！真紅ちゃんだっけ？私服って事は小学生か？とりあえず学校に戻りなさい！」

「え～？こう見えても高校生なんだけどぉ？」

「「えええー！？」」

絶対そうは見えない、高臣も驚いたって事は高臣にも小学生ぐらいに見えたんだろう。

っという事はやっぱりこいつは見た目的に高校生であるはずがない、こんなロリな高校生いるわけないだろ！最近のアニメかよ！

「編入試験も終わって明日編入なの、今日は暇だから来ただけ、だから学校はまだなの？でも1年生だし、それに君命の恩人だし、だからおにいちゃん！」

「1年って…後輩の癖に生意気な奴」

「細かい事は気にしないの、それより2人とも怒られるよ？」

ふと腕時計を見ると5分近く経過していた。
「「あぁ！まずい！」」

俺と高臣は走ったが当然雷を食らったのは言うまでもない。
それよりもどう見ても小学生な感じの高校生古賀真紅、一体何者だろうか？まさかとは思ったけどその時はそうだとは信じなかった。

やがて1日が経過し、何時もどおり榛名は部活で既に俺と早川は親戚でワケがあって同居中という事がバレているので一緒に帰る。これもバレてからはいつもどおりの事になっている。
まあ、いつもどおりいつもどおり……なわけない。

家の前に俺にロリコンで犯罪者というレッテルを張りやがった恐怖の存在が…
「お兄ちゃん！優希お姉ちゃん！」

「あ！真紅ちゃんじゃない！久しぶり……って事はまさか？」

真紅と再開した時点では早川も喜んでいたが何故か急に冷める。その理由は俺にもすぐにわかった。丁度視界に入るあたりにあの男がいたのだ。
「本日より陸上自衛隊北部方面隊第１１旅団第１８普通科連隊所属中隊長と勤めております古賀です！」

でたー古賀さん。
ってか長！しかも自衛官らしく妙にキリっとしているけど早川の怒りメーターがＭＡＸに…
「長いの嫌い！あっちいっちゃえ！！」

バキィッ！

なんか普通にすごい音がすると古賀さんが悲鳴を上げてお空に飛んでいっちゃった。とてもじゃないけどその姿は陸自の現役3佐とは思えない姿であった。嗚呼、古賀さんなんて可哀想な人。

ｐａｒｔ８．小学生のような高校生（後書き）

おまけ：キャラクター紹介（しかも今更、４人分）。

・古賀真紅

『見た目はロリ、中身もロリ、優希の妹的な存在で充にはトラブルメーカー』

生年月日：１９９３年４月６日

身長：１４５ｃｍ

趣味：ごろごろ

特技：３０秒以内に眠りにつくこと。

特徴：身長１４５ｃｍでだからといって全く太っておらず小柄な体系。

特に苦手な教科もなく運動神経も古賀３佐の娘（義理）だからか非常によく万能タイプに見えるのだが性格は子供で充を困らせる存在の１人になった。

優希とは仲良しで古賀３佐との関係も良好なようである。

好きなタイプ：年上で強い男の子。

得意科目：大体の教科は得意。

苦手科目：特になし！

・古賀３佐（本名：古賀高一）

『軍隊階級にすれば少佐、でも優希に嫌われ北に転属となり、恵まれない少佐』

生年月日：不明、３０代。

身長：１６８ｃｍ

趣味：バーベキュー。

特技：射撃。

特徴：現役自衛官、しかし優希には嫌われおまけにいきなり北の部

隊に転属となる
　など何かと不幸な3等陸佐。
　真紅は１０歳以上も年の離れている兄の子供でその兄が彼に真紅を託したきり
　帰ってこないので事実上真紅のお父さん的な存在。ちなみに普通科なので
　軍隊にすれば歩兵である。
好きなタイプ：よく自分に尽くしてくれる人。
得意な事：最近自衛官をサバゲーで負かしたという韓国兵にも負けぬゲリラ戦闘。
苦手なもの：航空機（ただの歩兵でロクな装備もないのでまともに戦えません）。
意味のない人殺し（俺は自衛官だ！人殺し専門部隊じゃない！）
大切なもの：日本、家族。
好きな言葉：守りたい。

ｐａｒｔ９．編入生多過ぎだろＪＫ…

って、保坂家ーーー

「そ、そうなんですか」

「うむ、こればかりはな。まあ左遷かどうかはわからないが本州者の自分には冬、どんなに悪戦苦闘するか……目に見えているわけなんだよ」

古賀３佐はここに転属となった為、娘と一緒に引っ越してきたらしい。しかし入学早々にお引越しとは真紅も大変だろう。古賀家は近所のアパートのようで真紅は古賀３佐と２人暮しのようだがまあ俺と違って古賀３佐は真面目な人っぽいし、変な犯罪は起こさないとは思う。

「はい真紅ちゃん、お茶しかなくてごめんね」

「いいんだよ優希お姉ちゃん、でもさお父さんの事あんまり嫌っちゃダメだよ？」

「ははは、私お父様の事全然嫌ってない事ですわ」

そう優希がキャラを変えて言っているが右手に力が入ってる。古賀３佐も殺気を感じたのか少し引いた。

「そういうわけでうちの真紅が迷惑をかけるとは思いますがどうぞよろしくお願いします」

「あれ？古賀さんって３０代ですよね？随分お若いお父さんですね」

俺はふと思った事を言ってみた。

「いやぁ、それは。まあそのうちね」

何かわけがあるみたい…だけどもうわかっている。
だって前回の後書きに義理とかいう言葉があったし、なるほど血は繋がっているが直接の親子ではないという事なのか。まあ家族である事にはかわりはない。

赤い髪でツインテールで見た目も中身も実年齢より幼く見えるのが特徴な真紅、普通に見たら小学生かと誤認しそうだ。だけど俺にとっては悩みの種、だって急にお兄ちゃんとかいって学校でくっついてきたし、そのせいで俺はあれ以降ロリコン扱いだぜ?

「ねぇお兄ちゃん!優希お姉ちゃんと一緒に住んでるの?」

「えっ?あぁいろいろ成り行きで何故か…」

また真紅がくっついてきた。
「真紅、知り合いなのか?」

「うん!お兄ちゃんはあたしを不良さんから助けてくれたの!」

「そうかぁ、保坂君、どうだね?是非とも自衛官にならないかい?」

「いや、不良倒したぐらいでそれは行きすぎでしょ?ってか俺体力的に自衛官は務まらないっす」

「そっかぁ、まあ確かに自衛官なら体力的に優希のほうが…いでっ

！！」

優希は思いっきり古賀3佐をぶん殴り、古賀3佐は家の壁にぶつかっては跳ね返ってまたぶつかっては跳ね返ってを繰り返し、1分後血だらけになってようやく暴走が終わった。まあこの血もこの小説の事だから都合によって3秒でなかった事になるんだろうけれどその姿はとても痛々しく、そして可哀想。

なんて不幸な3佐なんだ古賀さん……

「私は向いてないよぁ！時間にルーズだし」

「いや、俺よりは早起きだろ」

「保坂さんはルーズすぎなの！まだ毛も生えてないような子供じゃないんだからもっといずれは社会人になるって自覚を持ってよ！」

珍しくまともな事をいう優希だけどやっぱり天然、何かさらっと恥ずかしい事を言っているし。

でもその言葉に反論はできなかった。

「そうっすね、ってか真紅、頼むから離れて」

「やだ！あったかい！」

「春だろ今」

「道内まだ向こうより寒いもん！」

「それはしょうがな…くないわ！」

その時、ドアが開く音がして足音が聞こえてきた。まさか……まさか奴が!?

「充ちゃん!お夕飯の食材買って……充ちゃん?」

さて、現在の状況を説明しようか。

まず早川と古賀3佐は知らん振りをして向こうを向いており特に古賀3佐はあつあつのお茶を飲んでいるいかにもありがちな「私は知らんよ」というアピールをしている。って俺は真紅に抱き疲れて引きはがそうと必死なのはいいが他者から見れば仲がいいように勘違いされそうな状況、それをたった今、事情も知らない榛名が見てしまった。

……これは!?

修羅場!!

／（＾ｏ＾）＼ナンテコッタイ

「…誰かな?その娘(こ)」

えっ?何これ?榛名ってヤンデレだったっけ?

「いや、これは……妹です!」

「嘘だっ!!」

バキィッ！！

ああ…頭に何故だか蜘の鳴き声が聞こえる…そして意識が薄れていき、気がついた時にはもう夕方だった。

「…はっ！？」

「充ちゃん！よかったぁ～、ごめん！強くやりすぎた」

「強すぎだろＪＫ……ってか今はひ○らしよりもおおか○かくしだろ？」

「えっ？そうなの？」

「もうどうでもいいや……がく……」

そんなハプニングはあったがなんとか生きていたので１日は終わった。まあ榛名の機嫌が悪かったのは事実なんだけど。そういえば早川はどうも思わなかったんだろうか？まあ別に俺が考えるような事ではないけどどうも他者による自分の評価っていうものは気になる。きっと俺以外の人でもそうだと思う。

－－－翌日－－－

「保坂さん！起きてください！」

早川がいつもどおり俺を起こす。

「ふぁ～、あと４時間寝たい」

「昨日何時まで起きてたの？ま、いいや！それより朝ご飯食べよ！」

「朝から元気だなお前は…」

「私はいつもと同じだよ？」

やべえ、今俺ってものすごいリア充かも……って何考えてるんだ？こいつは成り行きでここに住む事になったんだし折角親戚の古賀３佐が近くに引越ししてきたっていうのに相変わらず毛嫌いしてここに住んでるし……所で俺は今思った事がある。

どうせ古賀３佐が近くの駐屯地に転属する事になるんだったら別にしばらく引越ししてもほとんど同じだったのでは？

もしそうなってたら俺と関わる事もなかったろう、そしたら俺は１年の時と同じような変わらない生活を送っていたのだろうけれど。

…なんて考えても既に起こった事を変える事はできない、いつまでこいつと一緒なのかは知らないけれどうまくやるしかないんだろうなぁ…

下に降りて昨日の事のせいか機嫌の悪い榛名を説得した後、いつもの３人で俺は学校に登校した。途中で真紅に会う事はなかったがまさか榛名と同じクラス…なんていうオチじゃないよね？

そんな事を思いつつやがて榛名と別れ早川と一緒に教室に入った。すると真っ先に雄一と太一と朋花の姿が目に映った。

「おはよー保坂！」

「よう」

「うっす！」

「おはよ」

そう返す、雄一と太一はおはようすら言わないがまあ仲はいいのでそれで通じる、ところで朋花はいつも俺達とつるんでるのだが他に女の子の友達とかいないのか？

「いいねぇ熱くていいねぇ！さあ是非とも榛名ちゃんを俺に！」

「やだ」

「はぁ！？いいじゃないか！優希ちゃんといい昨日の子といい！」

「その言い方だと俺がハーレムに聞こえるんだが？」

「事実じゃないか！畜生俺はうらやましい！１人譲れ！」

必死に頼み込む太一。

「だから違うだろ、勝手にしろ」

冷たく返す俺。

「畜生！じゃあ勝手にする！……高臣さん！是非とも俺の嫁に……！

太一は高臣まで俺の彼女の１人だと勘違いしているらしい。まあ当然太一は俺らとつるんでいるからついでに話をしているだけであって高臣には嫌われている。

「やだ！ボク春原の嫁になるんだったら保坂のお嫁さんになる！」

「が～ん！！畜生……燃え尽きたぜ…何もかも真っ白に…」

気持ちはわかる。

ところで高臣、今さらっと恥ずかしい事言わなかった？

「あ、そうだ。保坂と優希！」

急に話題を変えて高臣が明るく俺と早川に話を振る。

「なんだ？」

そういえば高臣の奴いつの間に早川と友達になったわけ？まあいいや。

「今日さ、転校生が来るんだってさ」

「本当？朋花ちゃん？」

「ボクの情報網を舐めちゃいけないのだ！」

確かに高臣、陸上部なんだけどその中でも諜報活動を行っているのではないかと疑いたくなるほど最新情報を掴んで持ってくる女だ。

そんな高臣が言うのだから多分本当の情報だろう。

その時、教室の前の扉が開き五十鈴先生が入ってきた。

「は～い座れ！」

うわ、寝癖立ってるし…まあ俺も人の事言えないけど五十鈴先生、あんた一応社会人ですよね？寝癖ぐらい直したらどうですか？と突

っ込みたくなるけど突っ込んだら負けです。
「突然だがうちのクラスに編入生が来る事になった。しかもロシアからの留学生だ。とびっきりかわいい女の子だけど襲うなよ?特に保坂!」

「何で俺なんですか!?」

「昨日我が校に編入してきた1年生の女の子を襲ってたらしいじゃない?」

「違う違う!あれは相手が勝手に…むしろ言うならば俺が逆に襲われてたんです!」

「ふ~ん、まあいいや、詳しい事は暇な時に訊こう。ったく…本当に面倒事は勘弁してよね?まあいい、とりあえず入っていいぞ」

普通そういうのはHRが終わったらすぐに訊こうとしませんか?
流石五十鈴先生、超アバウトな人だ。

やがて扉が開き、廊下から教室へ1人の少女が入ってきた。
金髪で明らかに白くて、でも実年齢より少しだけ幼く見えて……ってなんで俺の周りってそういう奴しか集まらないんだろう?まあただ一つ違う事といえばその少女はロシア人留学生である事だ。

「ろ、ロシアのクルスクより日本へ留学してきましたミーシャ・ジューコフと申します……えっと…ヤポーニヤ（日本）の皆さんよろしくおねがいします!」

日本に来てから日が浅いだろうにとても日本語が上手なロシア人だった。

って、俺は思った。真紅といいこのミーシャ・ジューコフといい随分編入生が多いなと。

Ｐａｒｔ１０，俺の周りは大混乱

今日の昼…

当然転校生にしてロシア人留学生のミーシャさんは注目の的だった。

「ミーシャさんミーシャさん！」

「おいおい、ミーシャってのは名前だぜ庸介？」

「関係ない関係ない！ねえミーシャさん、どう日本に来た感想は？」

「う～ん……市街地はすごい！電器屋が沢山でおどろいたよ！」

「そっかぁ、また確かに街中行ったらロシア人よくみるよな？充！」

「いや、俺知らんけど…ってか俺に振るな太一、大体なんで俺がここに？」

「まあいいじゃないか！付き合えよ」

俺は太一に付き合わされて今ここにいるのだった。

いくら外国人が珍しいったって改めてみる程ではない気がするが…

まあ可愛いのは真実だし彼女欲しいよ病の太一にはちょうどいい機会だろう。

俺はふと後ろを振り向いた、なんだか高臣が不満そうな顔をしていた。

「どうしたんだよ？」

「誰もボクに振り向いてくれない」

「いつも迷惑がってたからいいじゃないか？」

「それだと面白くないもん、やっぱりある程度の男がたかってきたら保坂がボクを助けて保坂が１人勝ちしないと例の編入生の真紅って人の処女が危うくなる！」

「そっちかよ！」

俺が大声を上げると早川まで俺の所にきてしまった。
しかも早川はなんだか高臣に協力的な感じだ。

「朋花ちゃん、そういえば昨日保坂さん真紅ちゃんと抱き合って…」

「いねーよ！あいつが勝手にだろ！そのせいで俺昨日は榛名に殺されかけて…あぁアレはマジで目の前に鉈を持った女がいるかと思ったぜ」

…つーか今思ったけど榛名の声ってレ○に似てるような…多分偶然、俺が殺されるっていうオチは多分ない。てかあってはならない！事件が原因で打ち切りになったら嫌だし。
でも間違ってもこの物語がアニメ化するなんて事はオ○ム真理教のア○ハラと太一が結婚するのと同じぐらいありえないからご安心を。

「でも大丈夫！保坂さんが暴走しそうになったら真紅ちゃんの代わりに私が身も心も捧げますので！」

「あぁ、早川にそこまで言われるほど俺って信用されてないわけ？」

「えっ？そんな事ないよぉ、少なくとも保坂さん古賀のおっさんよりは頼りあると思います！」

っと早川は言う。

時々敬語になったり生意気な口をきいたり子供っぽくなったり場所をわきまえずにさらっと恥ずかしい事を言ったりとする早川だが過去のつらい（？）出来事を知ってるという事もあるがなかなか憎めない。

そういえばなんで早川っていつも笑顔なんだ？

まあ俺が気にする事でもないか。

「…あぁ！」

「どうした高臣？」

「見て見て！春原とミーシャさんが仲良くしてる！」

「なんですって！よぉ～し阻止しちゃうぞぉ！」

確かに高臣と早川の言うとおり太一が太一の癖にミーシャと親しげに話していた。いや多分日本かロシアの事についての話でそれなりに盛りあがっているんだとは思うけど太一だし危険な香りはする。

ん？待てよ？太一にもし彼女が出来たら俺はあのメンバーで唯一彼女いない暦＝年齢！？

それは嫌だ！

「お兄ちゃん！」

「げっ！！」

さっきちらっと噂をしたが突如真紅が現れ、俺にしがみついた。
その後ろには半分は怒っているが半分は申し分けなさそうにしている榛名の姿があった。

「ごめん充ちゃん…朝の話どおり止めようとしたんだけどね？でも失敗しちゃった。大丈夫！まだチャカで撃つとかまだ方法はあるから！」

チャカってどこで覚えたんだよ！？
さりげなく怖い事をいう榛名、あぁ、きっと読者の大半は最初こんな娘だとは思ってもいなかっただろうに、見た目は可愛いほうなのに怖いっす榛名さん。

「大丈夫だよ保坂！溜まってるならボクが相手になるから！」

「変な方向に持ってくな高臣！」

「うぅ……保坂さんの為なら…犯罪者にさせない為なら…」

「お前も人前で脱ごうとするな！」

「充ちゃん！どいて！そいつ殺せない！」

「なんか怖いよ！！」

「お兄ちゃん、これあげる」

真紅から手渡されたものは指輪だった。

でも一応何か訊いてみた。

「あのー…なんすかこれ？」

「結婚指輪！だってお兄ちゃんとあたしはもう結ばれる運命…」

「えええええ！？充ちゃん！今なら充ちゃんの安全を保障しつつ速やかにその子を排除するから安心して！」

「ボク…覚悟を決めた！保坂、そのうちボクも指輪をプレゼントする！」

「保坂さん…どうか犯罪者にはならないで。大丈夫、保坂さん下の準備が出来たら私を好きにしてください」

「だあああ！！もう誰か俺を助けてぇぇぇ！！！！！！」

俺は走って教室から出ていった。

「きゃはは！保坂ったらあの言葉本当だと思ってるのかな？冗談に決まってるのに、でもちょっと可愛いかも！！」

なんか高臣の残酷っぽい言葉が途中耳に入るし……でも俺は逃げる！あんな会話教室でしてられるか！

そうだ、男子トイレなら奴ら女の子は入ってこれないはずだ！いろいろ臭いけどあそこが一番安全だと思われる、俺はダッシュで自分の教室がある階のトイレに駆け込んだ。

「ぜぇ…ぜぇ……げえっ！？」

だが恐怖はこれだけではなかった。
なんと目の前に筋肉質で高校生の癖に無精髭が生えていてしかも全裸の男が立っていた。飛鷹高校おホモ担当の富山治三朗（とみやまじさぶろう）、筋肉質で滅茶苦茶強くて顔は無精髭で汚いイメージがあってもよく見ればいい男という感じでしかもホモ……お分かりの通り最後が一番問題だ。

「やあ、あんたは確か保坂君だったな？」

「は…はいそうっすね」

「ところで俺の自慢のモノを見てくれ、こいつをどう思う？」

「あー、すごく大きいです」

俺は後ろを見ながら棒読みでそう言った。
やめてくれ、それ以上は１８禁とかＢＬ（ボーイズラブ）に引っかかるから止めてくれ治三朗！！！
逃げたほうがいい、そうだ1階の全学年が使用していい男子トイレに行こう、そこならこんなおホモもいないだろう。

「じゃあな」

「まあ待て」

俺は治三朗に肩を掴まれる。悪寒がして背筋が急に冷たくなった。

「時に保坂君、一緒にションベンでもせんかな？」

「嫌です」

「まあまあ、ほれ脱げ！」

「や、やめろぉぉぉぉぉ！！」

「ほう、中々ナニがでかいな」

「それ以上言うな！偉い人に処分されるから言うな……アッー！！！！！！！！」

……

……

……

3分後。

き…気持ち悪い。

特に何もされなかったが非常に気持ち悪い！後味が悪い！

俺はノーマルだ！あんなおっさんみたいな男なんてアウト・オブ・眼中、誰がおホモ達として付き合うか！それにこれ以上の下ネタは

NGだ、だいたいこの展開は下ネタさえあれば受けるとかいう典型じゃないか。

…確かに女の子が絡む下ネタは嬉しいけど…って何考えているんだ俺は!?

おっ、あれはミーシャさんと太一…本格的に仲良くしていやがる。

あれはあれで納得いかないけど今俺はそれどころではない、ミーシャさんと太一の後方１０ｍを真紅と高臣と早川と榛名が歩いているのが見えた。

「んもー、お兄ちゃんどこだろ？」

真紅…あれが一番俺にとって危害をあたえる存在。

見た目に惑わされてはならない、俺がロリコン性犯罪者ではないという事を実証する為にはなんとしてでも真紅から離れる必要がある。

そしてほかの女からも離れなければならない、多分真紅以外の３人も怖い事が楽しい事がスケベな事かはわからないけど何か企んでいるはず、即ち見つかればただでは済まされない。

一瞬が勝負だ、見付らなように慎重に行動せねば……

こそ…こそ…

「いたっ！」

「いでっ……あ！」

俺は背後を見ずにじわじわと後ろへ下がると誰かとぶつかってしまった。ふと振り向くとそこにはなんと生徒会長の中原亜衣（なかはらあい）さんだ。

「す、すみません！」

いくら作戦行動中といえどもこれは事故、俺が謝るべきだ。

「いえ、こちらこそ不注意で…」

中原亜衣、最もまともなお方であると思われるほどで生徒会長だからといって一般の生徒から見ても特に権力を濫用しているようには見えず真面目に見えて見た目も抜群スタイルも早川や高臣と比べるのは失礼な感じだ。

ついでに言えば太一が3度目に片思いした人物で3度目の正直なるか…と本人は思ったらしいが結果は当然の如く玉砕、しかしその太一も露す……ロシア人留学生ミーシャと仲よさそうにしているしもうどうでもいい感じはする。

「えっと…何か重そうですね？」

「えぁっ？こ、これですか？ちょっとお仕事で生徒会室まで持っていかなければいけないのですよ」

「手伝いましょうか？」

「いえいえ！そんな…他人に迷惑をかけるわけにも…」

「どうせ暇ですから！」

半分以上あの４人から逃れるためというのもあるが本当に彼女は何十枚あるのだろうか気になるほどの紙を持っていてとても重そうだった。俺にもちゃんとある良心から手伝ってあげるべきという信号

を受けて俺は動いた。

3年の階にある生徒会室まで俺はいろいろ書かれている紙を半分だけ持ち、中原先輩を手伝ってあげた。俺と中原先輩はそれを机におくと溜息ををつく。

「はぁ〜、ありがとうございます…えっと…保坂君ですね？」

「はい、あと先輩、俺2年ですから敬語で話さなくてもいいですよ」

「いえいえ、いくら後輩でも知らない人にいきなり普通に話すのは失礼ですから」

あ、なるほど。

俺の周りにいる奴より遥かに礼儀正しい人かも。

「で…では俺はこれで」

「あ、はい。ありがとうございました」

「いえいえ、ご好意でやったので…」

俺は部屋を出て下の階に戻った。

思えば今日は昼だけでも随分いろいろな事があった…まさに大混乱だったけど最後は何気なく善行をしたから別に問題はない…よな？

ｐａｒｔ１０，俺の周りは大混乱　（後書き）

・中原亜衣
『生徒会長、ファン多し』
生年月日：１９９１年１２月２５日
身長：１６５ｃｍ
その他のサイズ：Ｂ８４　Ｗ５９　Ｈ８８
特技：手際のいい作業。
趣味：読書。
特徴：飛鷹高校３年で現在の生徒会長を務めており、しかも成績はトップクラス
で男性陣はおろか女性陣からも憧れの的である。
誰から見ても「脱いでもすごい」体を持っておりさらに真面目で成績もよく
仕事をしっかりとこなす為か変態によるファンクラブがあるほどの人気、
しかし本人はあんまり気にしていない様子だ。
好きなタイプ：年齢問わず、外見もあんまりひどいのを除く。中身が大事。
得意科目：世界史。
苦手科目：とくになし。

・富山治三朗
『絶対関わりたくない！おホモ達』
生年月日：１９９２年７月１４日
身長：１８２ｃｍ
特技：高校にいる男の名前を暗記する事。
趣味：男。
特徴：飛鷹高校最大のホモで男達はおろか先生達からも警戒されて

いる危険人物。
　男なら後輩だろうが先輩だろうが先生だろうがかまわず食っちまう男で
　しかも筋肉質で無精髭もすごく高校に入学できた事自体が奇跡なほど見た目
　から汚くやる事も汚い男である。
　ちなみに下のモノは大きいらしい。
好きなタイプ：ウホッ…いい男…こんな感じがいい。
得意科目：保健体育（特に保健）。
苦手科目：英語。

Ｐａｒｔ１１，学徒出陣…じゃなくて高体連壮行会

５月１６日……この日幾人という学徒が戦場へ向けて出陣する。叙勲輝く軍旗を先頭に、飛鷹の精鋭は校長の前に　堂々の分列行進を行う。

……なんていう中学校の社会の時間で見た映像を突如思い出した。そう…本当にうちの高校から学徒が出陣…しねーよ。

まあある意味では出陣なんだけど、実はうちの高校は本日、高体連に参加する部活に対し壮行会を行う事になっている。中原先輩があんなに急がしそうだったのもこの式典の為だったらしくあの大量の紙はそれ関係のプリントだったらしい。

まあ小中高と一貫して帰宅部の俺には関係ないが榛名は吹奏楽部なのでひょっとして入場とか退場の時に活躍するかも、榛名はピアノに限らず楽器の演奏は得意で実際に上手だしすぐに吹奏楽部の戦力になるとは思う。

あと今回の学徒出…じゃなくて壮行会には高臣も出る。壮行会は陸上部なので何気にこっそりメンバーの中にいるはずだ。早川は俺と同様帰宅部なので当然出席せず……しかし俺は今週月曜日、中原先輩にある頼みごとをされたんだ。

一一一月曜日一一一

「えっ？俺がですか？」

「お願い保坂くん！応援団をやってください」

「いや…ですが何故に俺なのですか？」

「人が集まらないんです…」

そりゃあ確かに今時応援団に志願するような奴はいないだろう。前年も志願者は2人しかおらず結局は生徒会の男メンバーが学ランを来て情けのないひ弱な応援をしていたし。

「やっぱり…ダメですよね？すみません。無理を言ってしまって…」

「えっ？いや、その…」

まずい、先輩にはファンが一杯いる。
生徒会副会長の泉谷小太郎（いずたにこたろう）を始め多数の男が先輩のファンなんだ…
もしここで先輩のお願いを断ってみろ？俺は一生先輩のファンクラブの男どもと戦う事になるぞ？

いや、そもそも部外者である俺が夕方の生徒会室に先輩と2人っきりでいるのもどうかとは思う、でもそれなら見逃してくれそうだ。
でも先輩のお願いを断って先輩を悲しませてしまえば俺はまちがいなくイラクやアフガニスタンの如くファンクラブから総攻撃を受けるに違いない…

そんな事！嫌に決まってる！！

「わかりました、応援団、快く引き受けますよ」

「えっ？本当…でも都合とかが…」

「大丈夫です、自分は飛鷹高校の生徒の一員です。なので生徒会長の切実なお願いを断る事なんてできません」

「あ、ありがとうございます…本当に！ありがとうございます！」

「いえいえ、我が校をよりよい物にする為にも、そのきっかけの一部にでもなれればいいと思ってますよ…ははは」

――――現在――――

っというわけで俺は今、中学校以来着た事もない学ランを着用しているのだ。
ただし小太郎のせいで変な改造が施されているが…

「どうだ充、気に入ったか？」

「気に入ったとかそれ以前に、これ学ランというよりは軍服だよね？まちがいなく」

「えっ？そうだけど？いやぁ明治３７年の軍装っぽく改造してみたんだけどダメだったかな？」

「流石軍オタ…榛名に戦艦とか言っただけあるぜ」

泉谷小太郎…生徒会副会長にして俺とは幼馴染の１個上のお兄さん…なんだけど中学校のある時突然軍オタになり榛名に戦艦とかいうものだから榛名は小太郎二等兵と言っているらしい。

二等兵って確か最下級じゃなかったっけ？俺は疎いからよくわから

ないけど。
しかも小太郎は軍刀のつもりか木刀まで持っていた…俺が気になるのはよくこんなのを教師が許可したな。

その後俺達は体育館に入場して座った。ちなみに早川と俺の間には出席番号の都合と高体連出場により誰もいないので隣同士だ。

「これより、高体連S支部大会に出場する部活動に対し、壮行会を行います」

吹奏楽部の演奏が始まり部活動生徒が入場を始めた。
演奏者の中には榛名も混じっている。それを考えたらなんだか嬉しくなってきた。

「陸上部！」

「あ、見て見て！朋花ちゃんだよぉ！」

「おっ、本当だ」

高臣が陸上部の中に混じっていた。
いいですねぇ、いつもとは違って珍しく髪飾りをつけているけどそれがとてもよく似合ってますねぇ。その高臣を発見した早川は子供のようにはしゃいでいた。

その後、教頭が長くてかったるい激励を、そして中原先輩が長いけどなんだか癒される激励をして歓声が沸いた（主にファンクラブの人から）。

「うちの会長すごい人気だね」

「なんたっていい人だしな、ファンクラブがいるぐらいだぞ？」

「まさか保坂さんも会員？」

「俺をあんな変態グループと一緒にするなよ」

実際ファンクラブ出身の社会人が痴漢により逮捕されたという事実があるので多分変態の集まりだと俺は勝手に推測している…っていうか事実上クラブを仕切ってる小太郎を見ていれば変態である事は一目瞭然だ。

さてその後は各主将より抱負が述べられ、その後は応援、古臭い男達の義勇応援団（ほとんど生徒会の人間）とチアリーディング部の演技だ。

個人としては後者のほうが見たい…だってうちのチアリーディング部ブスが少なく皆ある一定基準を超えているんだもん…いや、それはほかの部活にはひどいのが多いけど。

どれぐらいひどいかというと早川と並んでいると同じぐらいかわいい子に見える高臣がひときわ目だって可愛く見えるぐらいだ。それだけに高臣は男からは人気で告白する輩が多いらしいが全部玉砕しているらしい。

…まあ確かにあいつ、並大抵の男じゃ満足はしないだろうな。

「義勇応援団の応援です！」

「あ、保坂さん出番だよ？」

「了解了解……」

その後俺は一回廊下に出て整列、団長、小太郎を先頭に入場する。
しかも小太郎が吹奏楽部に頼み込んだのか殴りこんだのか知らないが近くの駐屯地からたまに聞こえてくる行進曲が演奏された。急な話だったのか演奏のクオリティは入場の時の曲よりは遥かに下だったし応援団の士気も低くて行進はバラバラだった。

「貴様ら！行進がバラバラだぞ！…こら新井！行進方法が違うではないか！ちょっと軽く手を握って！足をあげて！」

一体これ何の行進？
そう疑問に思いつつ俺はステージに上り、古臭い応援を行った。

よく見れば早川と榛名が笑ってるし！悪かったな格好悪くて！
でも高臣は古きよき時代を感じるぜぇって感じで俺を見ており中原先輩はありがとうございますと目で伝えている感じで俺達義勇応援団の方向を見ていた。

そして退場の際も同じ行進で……２０秒ほど小太郎から感想を聞かされ解散となり俺は自分の居場所に戻った。

「はぁ～、終わった終わったぁ」

「お疲れ様なのです、はい！」

優希は笑顔でハンカチをポケットから出しそれで俺の顔を流れる汗を優しく拭いてくれた。

「おぉっ？ありがとう……」

はっ！？いや待て！？突然ハンカチを手渡されても周りの視線が俺と早川をバカップルのように見るだけであって……流石天然、あんまり気にしないのか。

「出た！バカップル！」

「畜生！お前は優希ちゃんなのか高臣さんなのか榛名ちゃんなのか古賀さんなのか？…ええいもうとりあえず誰か１人嫁決めろー！！！」

太一が俺にそう言ってくる。

「だから恋愛とかしてねーっての！お前はどうなんだよミーシャさんとは！？」

「へ？超仲いいけど？」

うわ、なんかその言い方すっごいむかつきます（怒）。

「続いてはチアリーディング部による演技です」

「おぉっ！！来た来た！本校の目玉！！！」

すると突然チアリーディング部が現れ演技を始めたがどこかで聞いたようなＢＧＭが流れてきてそれを踊っていた。それは某春〇部の女子高生の日常っぽいものを描いた四コマ漫画が原作のアニメのＯＰだ。

「ほう、アニメ化からかれこれ数年は経過しているが絶大な人気だＮＥ！」

「うむ、流石、参拝客が増えるほど」

太一がそう叫び雄一が何故か同意していた。
まあ去年の文化祭こと飛鷹祭でもハ〇ヒダンスが踊られたりしていたしもうどうでもいいのかも。そんな感じで今年の壮行会も無事に終了した。

「え～っと……後は特に何もなかったかな？よし、解散！」

五十鈴先生のその一言と同時にチャイムが鳴りＨＲも終了しいよいよ帰れる時間になった。

「あ、保坂さん。私ちょっと用事があるので」

「おう、わかった」

なるほど、友達関係か。
そうなると俺が手出しをするのはどうかと思うとかそんな感じだな、トイレしてからゆっくり帰るとよう。幸い治三朗と会う事もなかったので安全に小便をする事ができたし真紅とも遭遇しなかったのでロリコン扱いにはされなかった。

でも玄関付近で中原先輩とは出会った。

「あっ！」

「どうもです」

中原先輩は突然俺と出会ったからか驚いた様子だった。

「あの、本当に応援団への参加ありがとうございました」

「いえいえ、自分のご好意ですので」

「優しいお方なのですね。保坂君みたいな人がいっぱいいたらもっとこの学校もよくなると思います」

「えっ？自分はそれほどでも…」

あぁ、これか。

確かに中原先輩美しい、なるほどこれは野郎どもの気をひくわけだ。

その太陽のような笑顔がなんともたまらねぇ…って何考えてるんだ俺は！？

「あ、私これから仕事がありますので…壮行会の後始末です」

「そうですか、頑張ってください」

「はい」

そう返事をして中原先輩は笑顔で去っていった。

きたよ～、エロ（ｒｙ…ギャルゲーとかには１人はいそうな会長キャラ。

あぁ！でも考えてみれば俺がまた股をかけていると思われる原因の一つになるかも！なんで俺の周りには可愛い娘が集まるの？ある意味幸せだけどそれはある意味迷惑な話でもある。

きっと今は幸せでも時が経つにつれて不幸になる…そんな匂いがプ

ンプンします。

Ｐａｒｔ１１，学徒出陣…じゃなくて高体連壮行会　（後書き）

現在新作構想中。
でもこっちもエターならないようにがんばって執筆します。

part12，テスト

5月も末、自衛隊M駐屯地。

「あっ！お父さんだ！」

「本当だ、古賀のおじさんだね、あのまま弾がぴゅんって中っちゃってぐちゃっ！て音と同時にぐはっ！って言って死んじゃえばいいのに♪」

「でさりげなく怖い事言うなよ早川…」

俺達は今、古賀3佐の誘いで陸上自衛隊の駐屯地にいた。
別に弾を撃ってるわけではないんだけど早川が洒落にならない事をいうのでちょっとマジで怖かった俺がここにいる。しかも擬音が微妙に可愛く聞こえるから困る。

ちなみに今回は戦車に体験乗車できるとか、あ、勿論中じゃなくて上にお客さん用のスペースを設けたやつなんだけど。

「うん、いいねぇ。もう一度大陸を打通したくなるよ」

っという小太郎、いや、それは無理でしょ多分…ってか大陸ってどこ？
ところでなんで今回陸自を出したか、それは連日の勉強の疲れをぶっ飛ばすためにはインパクトのあるものを見ればいいと思ったからだ。6月といえば1年は宿泊研修という楽しそうなものがあるが2年3年は特に何も無く中間があるのでそれに向けてのテスト勉強…これがまた疲れる。

修学旅行は!?ねえ2年なんだから修学旅行は!?
それは遠い将来、１０月ぐらいだ。しかも情報ツウな陸上部員で友達の高臣曰くありがちな京都ではなく沖縄らしい。なんで１０月に沖縄なのかは知らないけどどうせなら夏に言って皆さんの水着姿を…ってこれじゃ考えている事が太一レベルじゃないか!

とにかくそういう行事はまだ将来、間近に迫るはテスト。
この苦労、学生だった者には誰でもわかるはず!

その後俺達は家に帰ったが…
「保坂さん……勉強めんどい～」

「しないと成績下がるし追試だしそれ失敗したら夏休み補習だぜ?」

「うにゅ～……榛名ちゃんうらやまじい!!!」

もはやさ行に濁点がつくようになっている。まあ確かに榛名は1年で宿泊研修があるしいくらか俺達よりは楽な思いができるだろう。それに中間は6月中旬だから特に影響もないだろう。それに比べて俺達はストレス発散ができるような事なんてないし7月にはプール授業、しかもうちの学校『何故』か女子と合同という夢のようなものがあるがその前にテスト後にはテスト返却、さらに6月～7月前半にかけて保護者懇談会があるしホントにきつい時期だぜ。

しかも俺の保護者って……噂をすればケータイが鳴り相手は案の定親父だった。

「ガッハハハ!!おう充!元気かぁ!?」

「まあ、一応」

「ガッハハハ！！いやあお父さん南太平洋でいい島を発見してだな！原住民と仲良くやってる所なんじゃぁ！そういうわけでここでビジネスでもやろうと思ったんだよ」

「何のビジネス！？」

「そりゃあちょっと大声じゃいえねえけど結構儲かる計算だぜ？まあ大声では言えないけど…こら！貴様らどこの者だ！？何？バヌアツの警察！？俺は怪しくねぇ！『チャカ』向けんなゴルァ！！危ねえだろうよ！！……何？ごめんなさい？ようしわかった許してやろういい警察だ！……あ、充気にすんな？こっちの話だ、いやぁ最近は警察が俺に変な疑いをかけてきてだなぁ、まったく人違いだってのに『やっちゃん』か何かだと奴ら思ってるな？まあいいや、もし失敗しても金ならいくらでもあるから、とりあえず高校卒業したら大学行って立派に社会人になれよ！じゃあな！元気でな！」

電話が切れた。
なんかさりげなく隠語が混じってた気がするんだけど？

「…充ちゃんのお父さん元気そうねぇ」

「保坂さんのお父様って何者なのね？」

「し…知らん…っていうか知りたくもない！」

うん、多分知らないほうが幸せだと思う。
いや一応俺息子だし、やばい仕事には手を伸ばしてないとは信じたいけどなんかあの親父信用できないし。

するとまた電話がかかってきた。またまた親父だ。
「あっ！そうだ忘れてた！保護者懇談だが事業は母さんに任せて一端日本に帰ってやるから心配すんな！まあ去年どおりだ！一応歓迎用に寿司でも用意しておけ、ん？貴様らどこの『組』だ？何？地元！？日本なめちゃいかんぜ？龍二、五郎、行け」

「「はい！」」

「ん？ああ、心配するなこっちの事だ。ちゃんと日本には戻るから心配せず、それよりもテストでしっかり点数とらねえとおめえの小指がヤバい事になるからな？じゃあ元気でな！」

またまた電話が切れた。
…龍二と五郎って誰？ってか『組』って何！？なんか親父手を出したらいけないようなものに手を出してないか！？

「ねえねえ保坂さん？もしかして保坂さんのお父様ってヤバ系？」

「だから知らないほうが幸せだって！なぁ榛名？」

「う、うん！多分知らないほうが幸せだよ……だだだ…だから優希ちゃん！触れないでおこう？」

「う～ん？よくわからないけどそうしておくね！」

ふう…。
とりあえずこれでよかった…のかな？

そうだ、多分いいはずだ。親父の詳細なんて息子である俺でも知り

たくないぐらいだし。
そんな事よかテストがんばらねば…

ーーーって結果！ーーー
「それじゃーテスト返すわよ……え～っと、荒井！池田！乾！越前……」

ん？どこかで聞いた事あるような？多分気にしちゃ負けだよ。
太一は元々頭がいいのですんなり通過、高臣は…なんか暗い顔してる、その後も大体皆笑顔だったが早川の奴はなんか…なんとなくわかる気がする。雄一はまあ通過っぽい。

「保坂～！」

五十鈴先生からテストの紙を受け取ると１００点満点中９５…まあほぼ完璧だ。

「保坂～、あんた学級１位よ。現状維持しなさいね」

「あ、はい」

学年何位だか滅茶苦茶気になるけどとりあえず点数はよかった。
まあ家庭科以外特に苦手な教科もないし、それに点数悪かったら俺の命に関わるというか……

それより。

「んじゃ、私から追試宣告を受けた者は後で来て。大丈夫！５分もしないわよ！じゃあＨＲ終了！解散！」

今日も1日が終わった。
皆疲れてるようだ、それはそうだ。テスト返却っていうのはとても緊張するしましてや追試宣告を受けた奴なんてそれこそ気が狂いそうなほどの圧迫感に…

まあ幸い俺は関係者じゃないからいいけど。
とりあえず2人を慰めてやらないと…

「早川～、どうだった？」

「ふぇ？聞かないでよぉ…」

「うん！もう結果はわかってる」

「うぅぅ～、やだやだ追試やだ！」

「それは仕方ないだろ……って、高臣も泣くな」

「だって！ボクこれでも前日は勉強したんだよ？家にいる時の8割は！」

前日？…前日はって強調するって事はまさか前日以外はしていないとか？

「と…とりあえず2人ともテスト見せてみろよ…あ！信用できないんだったらこれを見よ！」

なんか多分、頭の悪いやつから見たら俺すっごい嫌な奴に見られてるんだろうな。でも俺のテストを見せた結果何故か2人は俺のほうを新たなる志を持った感じで見つめてきた。

「保坂さん！どうやって点数を！？」

「ひゃああ、保坂が勉強できるのは知ってたけどこれは尋常じゃない。ボク感激した！保坂なら安心してこれを見せられる！」

って自信を持って見せるようなものじゃないだろ赤点なんだし！
それで俺は２人のやつを見た。…早川のは…英語は９８！？俺よりいいじゃないか！…でも理数系が僅かに及ばずで赤点か……。でも英語除くそれ以外の教科は普通だ。普段のイメージから想像できなかったけど以外とできるなこいつは。

高臣は…こいつも理数系か、後はギリギリセーフ。

「まあ…早川は１週間で克服できるかもしれないけど…高臣、お前絶対勉強してないだろ？」

「うん！受験勉強以外ほとんどした事ないや。アハハハ！」

「あははってレベルじゃねーぞこりゃ。お前の場合何か集中的にやると他の事を忘れそうで怖い」

「へえ、保坂ボクの事わかるの？」

「えっ！？実際そうだったの！？…ってかまずこうなる前に最低限勉強しろ！あと五十鈴先生の所いかなくていいのか？そろそろやばいと思うんだが？」

「「ああ！！」」

2人は完全に忘れていたらしい。
俺の事は無視でおそらくは職員室だと思うが、そっちのほうへダッシュで向った。

「…やれやれ」

まあ、がんばれってぐらいしか応援できねーなこりゃ。

Ｐａｒｔ１２，テスト（後書き）

御意見、御感想等お待ちしています。

ｐａｒｔ１３，親父帰還ス

追試…聞くだけで嫌な気分になるその一言。
こんな所にも追試な奴らが…

「あははは、充ちゃん。やっちゃったよぉ」

流石…うちの高校にギリギリで入っただけある。

「お前もかい！」

「大丈夫！榛名ちゃんの事はあたしがなんとかしておくからお兄ちゃんは気を使わなくても大丈夫なのです！」

「うぅ真紅！ありがとう！」

真紅がどれほどのものかは知らないけど…まあ大丈夫だろ。
でも榛名は本格的にギリギリだからたまに見てやったほうがいいんだろうか？

まあ何にしても真紅は新たなトラブルメーカーである事にはかわりはないが榛名とはいい仲のようだ。どこかとは全然違うらしい。

そう思って俺は早川のほうを見た。未だに古賀さんとは和解してないらしい。まああれはできないだろう多分。

噂をすれば早川がやってきた。

「保坂さん！」

「おっ？どうした？」

「ちょっと…教えて！」

「わかった」

もちろん1週間でなんとかなるって保障はないが一応助けてやらないと、それに今思い出したがこいつ帰る場所もないんだよな。とりあえず自立して普通に暮らせるようになるまでは…って事はそれまでうち住み？それはちっょと困る気が…（汗）

……3日後、再び家。

「お…お前本当は出来るんじゃないか？もうセーフって所まで来たじゃないか？」

「ほ、ほんと？…で、でもこれは保坂さんが教えてくれたからで！」

っとなんか慌てた様子で早川は俺に言う。

「別に否定する事でもないだろ？簡単に言えばお前は見掛けによらずできるって事だよ」

「ほ、ほんと？なんか嬉しいかも…」

「…まあ手を抜いたら前よりひどくなる可能性があるからしっかりやれよ」

「うん」

よかった、自信が沸いてきたらしい。
そういえば今週から保護者懇談会か…まさか親父が帰ってくるとか
!?

そうふと思った瞬間俺のケータイが鳴った。

「もしもし?」

「おう充!俺だ俺!お前の親父だ!」

声で親父なのはわかったけどそれはたとえ古い手口でもやばいと思
うぞ?

「はい質問、親父は何してた?」

「南太平洋のどっかの島で事業を…」

「よろしい!って、何の用?」

「何ってお前、保護者懇談会だろ?だから今お前の家に向っている
所だ」

「そうか…えええ!?」

俺は早川のほうを見た。
そういえば親父が帰ってくる事は知っていたけど早川の事はまだ親
父には言っていなかった。このままでいくと人生がオワタになる。
まちがいなく人生＼（＾ｏ＾）／オワタ!

「お、親父！今どこだ！？」

「どこって？自衛隊前だが？」

「あわわわ、と、とりあえず待ってるから！」

「おう！じゃあ待ってろよ！あ、そうだそうだ榛名ちゃんは元気か？」

「えっ？ああこれでもかってぐらい元気だけど？」

「ひゃああ、榛名ちゃんと出会うのは本当に久しぶりだなぁ…って、おっぱいのほどは？」

やっぱりかこのエロ親父！

「俺に聞くな、さっさとこねーとさっきの発言を榛名に言うぞ？」

「お、わりぃわりぃ！んじゃあダッシュで行くからな！」

電話が切れた。

まずい！早川だけじゃない、今日は真紅もいやがる！

俺の人生いよいよ終了か？…ん？榛名？

そうだ！真紅は榛名の友達で真実だし早川は榛名の先輩って事にしておけばいいんだ！なんて頭がいいんだ俺。

ゴンゴン…ドン！ドドドド！！！

何この小説らしかぬ擬音の乱用！？

…まちがいない、奴だ。

「おろ？一階が騒がしいみたい」

「…さっき電話してただろ？多分親父だ……

「へ？保坂さんのお父さん？」

早川がそういった瞬間、下から「おう！榛名ちゃん久しぶりじゃねーか！！」とかいうケータイでは聞きなれた声が響いてきた。

…まずい！

「お、おい早川」

「なぁに？」

「いいかお前！今から数日榛名の先輩…っていうか1歳年上のお友達って設定になれ！」

「う、うん！」

俺と早川は慎重に階段を降りそれぞれ別々に親父と会った為なんとか誤魔化す事ができた。俺がリビングに入ると皆さん揃っていた。

「おぉ！？そこのわりといい男な青年はもしかすると充かぁ！？」

「よ、よう」

「おおお！！しばらく見ねえ間に随分いい男になったじゃねーか！！いつの間にか俺より背も高くなってやがるしの！！！」

さて、前々から度々ケータイが響くうざい声でしかも時々隠語を使ったり部下がいるっぽい会話をしていたりと詳細不明の怪しい髭面で筋肉質でまだ6月だっていうのに半そでで日に焼けているいかにもおっさんというこの男は保坂徹雄（ほさかてつお）、俺の親父だ。

「ところで充？この3人はみんなお前のこれか？」

親父は小指を立てた。

「違う違う！榛名は幼馴染でそっちのチビは榛名の友達でそっちの天然は小学生の頃から榛名と遊んでる1歳上のお姉さんのようなお友達で俺は関係者じゃない！」

「ち、チビ！？ひどいよお兄ちゃん！」

「天然！？天然って何ですか保坂さん！？」

早川はそっちかよ！後で教えてあげるとしてとりあえず2人とも親しげにしないでくれ！親父に誤解されたらおしまいだ。

「はっはっは！どうみても関係者じゃないか！まあ仲良くやってるみたいだしどうでもいいや！それよりお父さんはなぁ、お前と榛名ちゃんが立派に成長していた事のほうが感激だよ」

以外と真面目な事をしみじみ言う。

喋り方も何時もと違って大人しい、どうやら本当にそう感じているようだ。そこまで言われると嬉しいようなよくわからないような…

まあ完璧な悪人ではないのは確かな気はした。

「まぁ、充はいいとして榛名ちゃんはすこしおっぱいのボリュームが足りない気が…」

おーっと！余計な一言！

「うぅぅ…充ちゃん！！そのおじさんの戦闘力は！？」

「多分推測だが５だ！」

「ふん！ゴミめ！」

「あのー、榛名さん？聞きたいんだけどこれなにごっこ？」

「リアル殺人！」

「待て待て待て！！！押えろ押えろ！それは流石にヤヴァイっての！」

例によって榛名はいつもの暴走モードに入りどこに隠し持っていたのか刃渡り５ｃｍ以上の外で持ち歩いたらいけないような刃物を出して親父のほうに向けていた。

「ふん、生憎だが私の戦闘力数は５３万だ。榛名ちゃんどこまで戦えるかな？」

「何親父まで乗り気になってんの！？」

こりゃあまずい。

俺の力じゃ止められない、となると頼みは早川！

「へぇ〜、優希お姉ちゃんって頭よかったんだぁ」

「うん、保坂さんに教えてもらっただけだけどなんとかできるようになったし一年生の内容なら大丈夫だよ？」

あ、ダメだ。

真紅の家庭教師になってやがる……となると榛名と親父の戦闘は回避不可能、両者はぶつかり合う運命、避けられない定めとなったのだ！……なんて厨臭い事言っている間に両者の戦闘は始まった。頼むから家の中で暴れないでぇ〜（家具が散乱する敵な意味で）。

「てぇっ！」

榛名がすごい勢いでパンチやキックを繰り返す！でもすぐバテた。理由は簡単、榛名はああやって強いように見せているが実は非常に弱い、でも強く見せたがる。負けづ嫌いなのかは俺もわからないけどとにかく榛名は自分より強いものが許せない。

だけどそういう奴って普通強くなりそうな気がするんだけどいっこうに弱い榛名って何？結果は親父の１撃で榛名がノックダウン、これにて勝負あり。

「うそ…負けた？」

「榛名、改めてショックを受ける事はない。お前、元々弱いだろ？」

「うぅ…充ちゃん？だって…だって…小父様私の身体的特徴を…」

それは確かに貧乳…とは言われてないけどそんな感じでボリューム

がないとか小さいとか言われたら普通は怒るだろうな。

「わかってる。榛名には榛名らしさがあるって事ぐらい。俺は胸がでかい榛名よりも今の榛名のほうが可愛いと思うしそれが榛名自身だと思ってるけど？」

「！！……充ちゃん…ありがとう…」

「何かお兄ちゃんがいい事言ってる、じゃああたしでもＯＫなんだね！？」

「お前は流石にダメ」

「が～ん！」

真紅が撃沈した所で騒動は終わった。
その後お掃除という名の労働が待っていた事は言うまでもないだろう。それよりも面倒な人物が帰ってきてしまった。

Ｐａｒｔ１３，親父帰還ス（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています

ｐａｒｔ１４，保護者懇談会

さて、それから数日、今日は保護者懇談会らしい。
保護者歓談会…っというと保護者だけって気がするけど実はなばかりで教師、生徒、親という三者面談のようなものらしい。

中学校かよ…

まあ大学進学を希望している奴には有意義なのかもしれない。
実際俺は市内の大学への進学を希望しているので別にいいのかもしれないがここの所の騒動もあるし五十鈴先生に何を突っ込まれる事やら。

「え～っと、今日は保坂と早川と越前と……」

…そういえば早川の保護者役って誰？
まさか古賀３佐じゃないだろうな？あの人部隊がどうだかって忙しいって聞いたしそもそも早川が嫌がる可能性が高いんだけど。

「っじゃ！解散！」

これにて本日は終わった…っが俺は帰らない。
懇談あるし、しかも一番最初だから掃除が終わった後すぐだ。それによっぽど楽しみにしているのか親父の姿が。

「何あの人？」

「怖い～！」

クラスの奴に怖がられてるよ親父…

「ひゃーっ！保坂、あのおっちゃん堅気かな？」

「おい高臣、変な想像すんなよ、あれでも一応俺の親父だ」

「えええええ！？うそ、息子とは正反対じゃん！」

これだから親父は、あっち系の仕事をしている疑いは高いし堅気かどうかもわからないしとにかく怪しいし見掛けが怖いおっさんだ。しかも今日は白スーツにサングラス、いくらなんでも今時そんなやっさんはいないぞ！？

それにあの親父…背中のアレは今頃…いやなんでもない！

とりあえず俺は教室を出た。

「おう充！来てやったぞ」

「アホか親父、場所を考えろよ……皆怖がるか白い目で見てるだろ？俺の親父だって事が恥ずかしいぞ？」

「えっ？そうか？おかしいな～、南の島じゃこれでも違和感はなかったんだが…」

「いや、大ありだろ！島民どんな目線で見てた？」

「あ、そういえば何か俺に優しかったな」

「それ絶対怖がってると思う！」

ダメだこの親父、ん?今度は乙武装っぽい服を着ている人……って古賀3佐!それ学校で着てくる服装じゃないと思う!

「あ、保坂君!優希は?」

「えっ?いや…そこでお友達と話してますが…今度は多分早川がキャ○テン翼のアレのように古賀さんを蹴って古賀さんがサッカーボールのように暴走する事になると思いますけど?」

「やっぱり?やっぱりそうなの!?折角左巻きの教員に絡まれてまでここまで来たのに…」

まず絡まれるって事はその格好じゃなければ未然に防げたと思いますよ古賀さん。

「ほう、陸自か」

「む?そちらはやっさんか?」

「違うな、ただの親父だ、あんたとは気が合いそうだ」

「そうですな」

なんか同盟しちゃったよこのおっさん達!
すると気がつけば掃除も終わっており机の配置も専用になっていて、五十鈴先生が俺達の名を読んできた。

「保坂さ~ん?あ、どうぞ」

俺は親父についていくがその途中ふと待合用の椅子に座っている早川のほうを振り向いた。早川は人が見ているっていうのに手を振ってきた。手を振ってくれたのは嬉しいとは思うけど古賀さんを始め、俺の事を知っている男も見ていた…あぁまずい！

「え～っとまず、保坂君の生活態度ですが。まあ特に目を見張るような事はありません、極めて普通に生活していると思います」

お、五十鈴先生が意外な方向に出た。
この分だと今までのちょっとした事件はスルーか！？

「それに昨年とは違って積極的に行事に参加してくれるようになって今年は高体連壮行会の時に人手不足の応援団に入ってくれました」

っと五十鈴先生は俺のがんばりぶりを言ってくれ、親父は納得しているようだ。

「ただ、女癖が悪いようで人前なのに平然とキスをしたりハーレムルートに突入しようと…」

「ちょっと待ってください先生！何話をややこしくしようとしてるんですか！？ハーレムなんて目指してませんよ！あとキスも俺からじゃなくて相手から一方的に！」

「ほお、充！お前モテるんじゃないか！！こりゃあ俺も安心だ、赤ちゃん量産もわりと簡単にできそうだ」

「親父は親父で変な方向に話を持ってくな！」

「へぇ？でも年頃の男の子なんだからそういう話には興味あるんで

しょ？ほら興奮したりするんでしょ？」

っと言って先生は服の一部をめくりブラジャーの一部を見せびらかした。

「おお！」

「親父は感激するな！あ、でもこれ先生が一番恥ずかしいと思います！」

「手強いみたいね、まあ一瞬だけエロゲみたいなものだと思えばいい、それより話を元に戻しまして…」

教師がエロゲって言うか普通？

「とにかく保坂君は生活面では少々不安があってもがんばっています。それで勉強のほうなのですが今回のテストの結果です」

っと先生が俺のテストの結果などいろいろな事を書いてある紙を渡してきた。

「ご覧のように保坂君は勉強は非常に出来るみたいで、あと大事なのは現状維持って所だと思います。この状態をキープすれば結構な確率で希望どおりにいけるでしょう」

「ほう、お前がんばってるじゃないか。なかなかよさげではないか、帰国したかいがあった」

というか勉強できないと殺されるのが実状だ。

現に中学校の頃俺は普通よりちょい下のレベルで懇談の度に帰って

きたこの親父にフルボッコにされた記憶がある。まあ中3の時に猛勉強して今のわりとできる子レベルにまで成長したわけだが。

その後懇談は思ったよりもきつい事を言われずに終わった。高校1年の時と同様、以外にあっさり終わったがこれが中学校の頃はこうもいかなかった。俺が出たすぐあとに古賀さんと早川が教室に入っていった。

「ふぅ、じゃあ俺は例の南の島に戻る」

「もう戻るのか親父?早!!」

「仕事があるしな、世の中さっさと仕事を貰わないと仕事がなくなる、特にこのご時世仕事がなくて困っている奴が沢山いるし仕事があるだけでも幸せだ。今回の仕事が成功すれば億万長者だぞ?」

一体何の仕事か気になるけど恐ろしいので突っ込まない事にしておく。

「そういうわけで俺はさっさと現場に戻らなければならないんだ。お前はしっかり勉強して将来の社会に貢献しろよ?」

「わかってるって」

心配しなくても親父のようにやっさんっぽい道は歩まないから。

「…あ、それからだ」

「なんだ?」

「早川優希って…今懇談中のあの子だが気をつけたほうがいい」

「えっ？なんで？」

突然わけのわからない事を言われて俺は混乱した。
親父は早川に注意しろっていう。確かにちょっと危なっかしい所もあるけど極悪人には見えないし警戒するような所なんて一つもない気がする。

「実は俺、南の島で早川の両親と出会ったんだが…」

「えっ？マジで？」

「ああ、それでだな。なんでも貧乏なのは代わりのない事なのだがそれは俺も詳しくはわからないが事情がきっかけらしい、それから古賀家にも注意しろ、古賀3佐は無知な無関係者のようだが早川家とグルだ」

「いや、まて親父、まずそれ何の話？まさか覇権争いとかじゃないだろうな？それとも今更ファンタジーな設定追加？」

「いや、覇権争いもなにも歴史的な対立だ」

「対立？」

またまたわけのわからない言葉が出てきた。

「話は長くなる、ちょっとこっちに来い」

…いや待て！

急に登場して今まで他人のふりをしていたのに急にそんな話をするのはないだろ!?えっ?何?何が起こるの?すっごい嫌な予感しかしない!

神様!いないとは思うけど頼むから俺を巻き込むような大騒動にだけはしないでけろ!

ｐａｒｔ１４，保護者懇談会　（後書き）

・保坂徹雄

『よくわからないけど、あんまり親密になりたくない人』

生年月日：？？？

身長：１７４ｃｍ

特技：荒稼ぎ。

趣味：酒と女。

特徴：本作の主人公保坂充のお父さん。

まったくもって謎の人物である。

噂によれば背中に綺麗な模様が描かれているらしく、しかも本物よりも口が

悪くただの不良なのかそれとも本当にヤクザなのかは不明。

好きなタイプ：おっぱいおっぱい！

Ｐａｒｔ１５，何ですか？その新設定は？

それから数分して体育館倉庫…

「アッー！」

「ガチでもホモでもないから心配するな。他人に聞かれるとまずい話なんだ」

「へ？そうなの？」

「やっぱりお前も俺の息子！変態だ！」

「突然他人の胸を評価したりする親父よりはマシだと思うけど？それより重要な話ってなんだ？さっさと帰って新作のギャルゲーやりたいんだけど？」

「…それ、親に言う事でもないだろ？まあいい、話そう」

…何だろうかこのシリアスな空気、この作品始まって以来のシリアスか？

でもこの小説の事だ、どうせとんでもない馬鹿な新設定が来るに違いない、ありがちかそれとも糞レベルかあるいは斬新か…まあ可能性としてはありがちか糞レベルだろう。この作品のレベルからいってそれが妥当だと俺は思う。

「…ゴホンッ！ゲホゲホッ！ヴゥエッ！！」

「汚ねえよさっさと説明しろ！」

「すまんすまん、実はだな。時は鎌倉時代に遡る。保坂家、早川家、古賀家、それなりに名の知れた武家で幾多なる戦いを乗り越え室町、戦国、江戸……あらゆる時代を生き延びた。3人とも当初は長州藩の出身で戊辰戦争でも保坂家と早川家は事情により前線での戦闘はしなかったが古賀家は出兵、戦死者も出した。ただし保坂家も早川家も後方支援を行い3家同盟とさえ言われた」

「そんなすごい家なのに歴史で習った事ないんだけど?」

「まあ気にすんな。話はここからだ。明治に入ると士族とされた者達も士族解体によって大量に失業、この3家もその犠牲となった。我が保坂家は北海道へ移り住み先祖は屯田兵として北海道を開拓し永住、戦時中も俺の爺さんが陸軍中将として大陸で戦い親父達を残してシベリアで死んだ以外特に犠牲者はいなかった。そしてごくごく普通の生活を送った」

いや、親父は普通に見えないんだが…まあ突っ込んだら負けか。

「かたや古賀家は軍人家庭となり陸軍軍人や海軍軍人が溢れ戦後も自衛隊に入隊する者ばかり、古賀3佐やその兄も陸と海という違いはあるが自衛官だ。ほとんどが佐官、将官クラスまで上り詰め財産もそこそこあった。一方早川家は同じく北海道に移り住むも古賀家の支援を受けた。しかし保坂家は支援を行わなかった。これによって古賀、早川と保坂家は断交した。しかし古賀家の支援を受けたとはいえ早川家の状況はよくならず早川家は保坂家を憎んでいた。実際俺の所にも何度も早川の手先が現れて…」

「じゃあ度々電話している時に出てくる刺客っぽいのって…」

「地元のヤクザと警察以外はすべて早川家の刺客だ。だがそんな事ばっかりしている為か当の早川家は財政難、やがて自己破産しあの優希という娘の父である早川早雲（はやかわそううん）と母の早川珠美（はやかわたまみ）、そして妹の早川雫（はやかわしずく）は優希さんを残して逃げた」

「なんで早川を残したんだ？」

「保坂家を滅ぼす為だ。あの娘が強いという情報は保坂の諜報員によって判明している」

「諜報員!?誰!?」

「辰雄のおじさんだ」

「ええ!?あのおじさん諜報員だったの!?」

なんだか話についていけなくなってきた。
とにかく簡単に整理すると支援してくれない保坂家を憎んだ早川家が復讐しようとしてその最終兵器として早川優希を用意した…って事らしい。
でももしそうだとしたらあいつは俺と初めて会った時点で俺を殺すはずだ。

「…でさ親父、あいつは大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。早川一家は宿敵保坂討つべしという紙を置いていったらしいが当のあの娘が天然でよくわってないしなにより戦闘が嫌いで肉体的には強くても精神的には弱いという情報が入っているし、そもそも目的すら覚えてなくて偶然お前の家に入っただけだろう」

「…ってか知ってたの？」

「ずっと前からな、黙っててすまなかった」

じゃあ俺が早川と同居している事を隠そうとしたあの努力はなんだったわけ！？この親父…相当できる！でもまだ俺には疑問があった。古賀さんとか真紅とかは安全なのか、あとなんで俺に教えなかったのか、これを知らなきゃ今後安心してマイライフが送れない。

「…あのさ親父、古賀さんと真紅は大丈夫なのか？」

「古賀3佐は前にも言ったとおり訓練中の事故かどうかは知らないが目的を忘れているっぽい、特に偵察もしたわけじゃないんだがちょっと接しただけでそれはわかった。だが真紅ちゃんはわからない。要監視だ」

「っじゃあ最後の質問だ。何で今まで俺には教えなかった？」

「…俺はな、せめて息子のお前にだけはまともな人生を歩んで欲しかった。だからこんな面倒な事をあえて教えようとはしなかったが今になって見ればそれは間違いだったかもしれない。お前の命の危機でもるんだ」

それ普通に黙っていたらいけないような事である気がするんだけど？もし知らなかったらなんの抵抗も出来ずに俺はお陀仏となったんだろうな……いや知った時点でどうなるってわけでもなさそうだし早川も古賀さんも危険じゃないっていうらしいから多分大丈夫だと思うけど…

…こんな話聞かされて安心できる奴なんてどこにいる？常識的に考

えてこれって大問題っすよね？

「じゃあ、まあ勝手に偵察を行った事とこの事を教えなかった事は謝るが自分の身は自分で守れよ。俺は自分の身を守るだけで精一杯なのでな。いずれ充、お前の所にも刺客は来るはずだ」

「いや、来られたら超迷惑なんですが！！」

「まあ俺…知らん！がんばれ！」

「おいこら親父！せめて護身用の武器とかよこせ！！ってか何！？まだよくわからんけど何なのこのありがちというか糞というか…もうどうでもいい新設定は！？頼む俺の平和な日常を返してぇぇ！あと待て糞親父！！……っていねぇし…」

既に体育館倉庫の扉は開けられ親父は逃げていた。

まったく…刺客とか…冗談じゃねーぞ？マジで死ぬときは死ぬぞそれ？

…そんなのヤダ！俺まだ彼女とかつくった事ないのに太一にすら負けてるっていう状況なのにわけのわからない刺客に殺されるのなんてごめんだ！

「あれ？充ちゃん何やってるの？」

「あ、榛名」

っとここで榛名登場。

「？」

そういえば今日追試だっけ？
どうだったんだろう？

「榛名、追試だったんだろ？どうだった？」

「ええ！？う、うんなんとかできたっぽい」

「そうか、よかったな」

「充ちゃん用事とかあったの？」

「いや、糞親父と2人で話してただけ。しかもくだらない話を」

「くだらない話ってなに？」

ほら予想通り訊いてきた。しかし俺はこんな事もあろうかとあらかじめネタを用意していたのだ。

「１００万円で買えるだけう○い棒を買ってそれを売ると何円帰ってくるか…とか」

「ほ、ホントにくだらない！……ま、いいか、用事ないんでしょ？一緒に帰ろ？充ちゃん」

「おう」

その後俺と榛名は帰路を歩いた。
今日は追試の関係で部活はないのか偶然榛名と一緒になり共に帰る事に……榛名と一緒に帰るのも中学校の時以来な気がする。こうし

て2人で歩いていると昔が懐かしい。

「どうしたの充ちゃん、今日は随分周りを見るね」

「そ、そうか!?いつもどおりだぞ?」

「そ、そうなの?」

「そうなのだ」

「…変な充ちゃん、ま、いっか!」

そりゃあ周りを見て警戒するわ、あんな話を聞かされたら。
冗談じゃないぞ、あの話を聞いた瞬間すぐ後ろに刺客がいるんじゃないかって心配になってしまう。そう思った瞬間だった…後ろから足音が聞こえてくる。しかもダッシュだ、まさか…早速早川か古賀の刺客か!?

「おいっす!保坂ぁ!元気?」

「た、高臣!?」

なんと俺の所にやってきたのは高臣だった。

「お前家逆だろ?」

「うん!わかってるけどボク重要な事を保坂に教えようと思ってさ」

「何だよ?」

すると高臣は顔を赤く染めた。
すごく…嫌な予感がします。

「好き！」

「「えええええ！？」」

俺と榛名はその爆弾発言に驚いた！…が！

「って保坂君に告白したい子がいるらしいから3年A組に来てください…って陸上部の先輩に言われた」

「お前じゃねーのかよ！びっくりしただろ！」

「えっ？何そのいい方！？もしかしてボクがよかったの？…よ、よかったらボクがその先輩の代わりに…」

「いやそういう問題じゃねーだろ。どうしよ？」

確かに恋人ほしいけどこんなに唐突なのはどうかと思うしそれに今そんな気分ではない。正直悩んだけど後の事を考えればここでごめんとはっきり断ればいいだろう。そうすれば後をつけられはしないはずだから解決するはずだ。

「充ちゃん、断るか逃げるか、道はあるよ？」

「う～ん、スルーしてもいいんだろうけど後つけられるのも嫌だし、断ってくるわ」

「保坂！ボクも行く？」

「いや！なんとなくお前がついてくるとすぐ校内中の噂になりそうだからいい！」

「ちぇっ」

やれやれ…俺はそのまま学校に戻り部活に励む生徒達を眺めた後、指定の時刻になったら指定の場所、３年Ａ組に向いその扉を開けた。丁度夕日が斜め角度から入ってくる。その夕日に半分を照らされるように１人の少女が立っていた。

Ｐａｒｔ１５，何ですか？その新設定は？　（後書き）

ご意見とかご感想などお待ちしています。

part16，えっ？何すかこれ？ちょ、やめろぉ！！

夕方の3年A組の教室…そこに1人の少女が立っていた。
少女とはいっても俺より1コ上の先輩だ。だから敬語を使う必要がある…でも誰もいない教室に2人っきり……エロっぽいけどよくよく考えて見たらこういうシチュでぶっ殺されそうになったっていうのを何かの小説かアニメで見た事があるんだけど？

「あの…貴方が2年の保坂くん？」

「ええ…そうですけど？」

「保坂君…実は私、保坂君の事が保坂君が入学した時から好きなんです！」

「えっ？いや…悪いんですけどちょっとわけがあって付き合えないので」

「何故？」

何故って聞かれても…とにかくそれはダメなの！
そう言えばいいかもしれないが男がいう言葉でもないしどうしよ？
そうだ、榛名を有効活用しよう。

「実は俺にはもう、榛名という彼女がいるんです」

すまん榛名、でもこんな所の話なんて聞いてないよな流石に。

「彼女…そんな……では！一度だけいい事を！」

「お、おい！！」

突然彼女は俺を押し倒してきた。

「…ま、待てください、これはいくらなんでもおかしいでしょ…っていうか名前は？」

「古谷静（ふるやしずか）、もう名前教えたからいいでしょ？」

「よくないよくない！これ以上はいろいろとまずい……！！」

俺は何だかよくわからないが古谷先輩が手をポケットのあたりに持っていったのを見て咄嗟に古谷先輩の手を掴んだ。

「なに？どうしたの？」

「えっ？いや…なんつーか咄嗟に」

「咄嗟に手が出るほど好きなんだね！しょうがない子…」

俺は少し体に力を入れ古谷さんをどかしてこの体勢から脱し立ち上がった。

「どうしたのです？」

「いや、これ以上のエロ＆死亡フラグ展開はどうかと思った」

「死亡フラグ？…もしかして…わかってた？」

えっ？まさか本当にこれ死亡フラグだったわけ？
そう思った瞬間、古谷先輩はポケットから折り畳み式のナイフっぽいものを取りだした。人を殺傷するには力不足だが連続攻撃をされればまずい……ってこれ本格的にまずいぞ！？あの時スルーすればよかったかも！

「ちょ、古谷先輩どういうつもりですか！？」

「どういうつもりって…こういうつもり！」

「うおあっ！危ね！！」

突然古谷先輩が俺を細い刃物で攻撃してくる、俺は咄嗟に攻撃をかわした。

「まさか！…刺客とか言わないよね古谷先輩」

「ぴんぽーん！なんでわかったの？古谷家は古賀家の遠い親戚、でも協力関係、だからとりあえず死ねー☆！」

「うん、こうなったら俺がやる事は一つ……逃げるが勝ち！戦略的撤退！」

「あ、こら待て！！大人しく殺されろ保坂のせがれ！！」

誰が大人しく殺されるか！こういうわけわかんない奴と遭遇した場合、戦わずに逃げるのが一番…って誰かが言ってたから俺は逃げる！たとえ主人公なら戦えよバーカザーコ弱虫とかいわれても俺は気にしない！ってか常識的に考えてここは逃げるだろ！

どこまでも古谷は追ってくる、当然俺は逃げる！

「待てぇぇ！！死ねぇぇ！！」

「死ねと言われて死ぬ人なんていませ～ん！！！」

「うるさい！保坂のせがれ、死ね！」

「嫌いやイヤァ！！俺はまだ生きる！んでもって雄一と太一に負けたのがなんとなく悔しいので彼女できて結婚して子供の顔みてその子供が成長して子供が結婚して子供の子供、つまり孫が生まれて孫の顔を見て孫が成人する姿を見るまでは絶対に死にまＳＥＮ！！」

俺は赤信号すら無視して突っ走った。古谷先輩も赤信号を無視して突っ走り古谷先輩のせいで事故が発生していた。でも関係ねぇ！俺はあちこちを逃げ回り駐屯地の近くも通った。

「ん？あれ？保坂くん？」

「あ！！古賀さん！後は頼んだ！！」

「へ？」

「死ねぇ保坂ァ！」

「ちょ、ちょー！？」

何か古賀さんまで一緒になって逃げてきた。

「ちょっと保坂くん！？あれは何奴！？」

「俺は知りません!!なんか知らないけど俺を殺そうとしてくる先輩です!」

「そっかぁ」

「そっかぁ…って落ち着いている場合ですか!なんか成り行きで古賀さんも一緒に逃げてますけどなんとかしてくださいよ!古賀さん自衛官でしょ!?国民の危機ですよ!?」

「いや、でも相手も日本国民っぽいし討てないよ、大体命令ないし今戦ったら普通に犯罪な気がするんで…」

古賀さん…害がないと聞いたし、自衛官で普段鍛えているから頼ろうと思ったのに……今有事っすよ?なんて使えない人!

「よくよく見たら一緒に逃げているのは古賀家の者!私に協力して保坂を殺せ!」

「はい!?何の話?まあよくわからないけど人殺しはいかんと思うよ君!」

そうそう、自衛官なら説教するだけでも説得力あるからがんばってくれ古賀さん!

…ていうか一応シリアスシーンだよね?何この微妙なギャグ路線?さっきから逃げてばっかりだし適当な事叫んでばっかりな気が……いや、状況から判断して逃げるのが正しい、そうに違いない!

「古賀家の人間なのに忘れたか!早川家に協力するたる者保坂は討つべし!」

ってか今思ったけど学校内に生徒として活動する人が刺客って卑怯じゃね？まあいいや、それより今は逃げる！そして古賀3等陸佐の活躍にすべてを賭ける！

「いや、そんな話聞いた事はあるよあなないような気はするけどでもそれにしたって人殺しは良くないよ君！私だってね、自衛官やってるけど人を殺すためじゃなくてＫＡと国守る為だし」

あれ？小太郎から聞いたことあるけどＫＡって海軍の隠語で「妻」じゃなかったっけ？ってか古賀さん妻いたっけ？もしかして意味わかってない？まあいいや俺もよくわからないしそういう軍ネタは軍オタで生徒会長の中原先輩ラブの小太郎に任せておけば。

それよりも俺と古賀さんの逃走劇はいつまで続くの？…お、丁度いい所に雄一、しかも彼女の井上さんつき……いい事思いついた。

「とぉう！！」

俺は雄一のズボンに手を掴み、何故か説明もしていないのに古賀さんはベルトを外しチャックを開け、そして俺は雄一のズボンをパンツごと降ろした。

「…へ？」

「…えっ？」

「逃げるわよ保坂君！」

「はい！なんかオカマ口調になってる古賀さん！ここは早急なる撤退が…」

「勝敗を分ける！戦略的撤退を開始する、行くぞ！」

「はい！」

俺と古賀さんはダッシュでその場から逃げた。
雄一は下半身全裸、井上さんがいてついでに古谷先輩もいて女の子2人は雄一のモノを見る。

「ゆ、ゆゆゆ、雄一君なんで下裸なのぉぉ！！」

「えええ！？俺知らん！知らん知らん！！」

「ろ、露出狂！…はっ！考えてみれば保坂家よりこいつは危険かも…よし、保坂よりこいつを討つべし！」

「ちょ！何！？危な！！やめろナニにそれがあたったら俺死ぬ！！…ちょ！待って梨佳逃げちゃらめぇぇぇ！！お前はやめてぇぇぇ！！！」

……なにこれ？
…まあそれはともかく翌日古谷さんと出会っても古谷さんは攻撃しようとはしなかった。逆に露出狂と勘違いされている雄一が標的となり毎日逃走劇が繰り返される、しかも井上さんにフラれたかと思いきや雄一のアレがすごかったらしく井上さんはさらに雄一にホレた。

こうして俺はなんとか一命を取りとめた……でも疲れた……

そして古賀さんは勝手に離れていたからか滅茶苦茶上官から怒られたらしい、まあ幸い処分には至らなかったようだがまあ成り行きで巻き込まれた人だし、お気の毒。

翌日…

「助けてぇぇ！」

「討つべし露出狂！」

「なんかまた回りが賑やかになったね」

高臣がそう笑顔で俺に言ってくる。

「そ…そうだな…」

「ん？どうした保坂？欲求不満か？ボクを襲うの？」

「違う、それはない。ってか今の発言はいろいろと危険だろ」

「ははは、冗談だって！それより聞いてよ保坂！ボク追試合格だってさ！優希ちゃんも一緒に合格だから補習という名の地獄はうけなくてよくなったよ」

「そうか、それはよかったな」

…まあ、めでたし、めでたし……なの…かな？

ｐａｒｔ１６，えっ？何すかこれ？ちょ、やめろぉ！！（後書き）

・古谷静

『保坂討つ！でもそれより危険な露出狂はより優先で殺します★』

生年月日：１９９１年８月１日

身長：１６４ｃｍ

趣味：研究（主に復讐の為に）。

特技：敵に反撃の暇を与えぬうちに命を奪う電撃殺傷作戦。

特徴：見た目はごく普通の少女で視力が悪いのか眼鏡をつけており髪形もショート

　とそれほど目立たない感じだが実は古賀家とは遠い親戚で協力関係にあり

　打倒保坂の為に学校に通っている。最初は充の命を奪おうとしたがある事件

　によって雄一の命を狙うようになった。

好きなタイプ：打倒保坂に協力してくれるかっこいい男であり変態じゃない男。

得意科目：大体の教科は得意。

苦手科目：特になし！

ｐａｒｔ１７，銭湯戦線異常…大アリだ！

7月…5月になってようやく桜の咲くこの地域もこの季節になったら流石に暑い、日差しも厳しくなってもう夏服も6月から始まっていた。

…結局、保坂と早川と古賀の3つの家の対立って何なんだろう？もう古谷先輩に襲われた…ってのも記憶の片隅にいってしまいそうなほど俺は4月から変わらぬ日常を送っていた。

まあこれは平和である証拠だ、多分いい事だと思う。このまま何事もなく、面倒な事にも巻き込まれずに事がすぎれば俺はそれでいいと思っているんだけどどうなるかな？いや、何もないほうがいいに決まっている。

俺はそう考えながら階段を降りてリビングに行こうとする、するとテレビの男が聞こえてきた。

「そうさ帝国俺の敵、平和を乱す侵略者！行け行け～正義のヒーロ、キョウワマーン！！」

「……」

な、なにあの超クオリティ低いヒーローもの！

「きょうわま～ん！」

何か早川ノリノリで見てるし！歌ってるし！

つーか帝国が敵ってなにそのありがちかつ古臭いネタ！？プロパガ

ンダくせぇwって小太郎が前に言っていた。

「なあ早川。それ、面白い？」

「へ？うん、ダサいのがむしろおもしろい」

あ、なるほど。

ダサすぎて腹筋崩壊シリーズか。

そのタイトルと主題歌は作品内容に非常にあっており何というか…

ダサすぎてむしろ笑いが込み上げてくる感じだ。

「ワッハハハ！すごいぞ！かっこいいぞ！キョウワマーン！！！」

「……」

でもやっぱりひどい！

あまりにもひどすぎてもうだめかもわかんね。

「あ～あ、きょうわまん終わっちゃった…暇！」

「つーか現役高校生が暇だってのもどうかと思うぞ？まあ俺も暇だけど」

「保坂さん、説得力ないね」

「うっせ」

やべぇ…本当に暇だ。

何もする事がないぞ？

そして本日の夜、いつもどおり榛名が家に来て飯を作ってついでに食った後、榛名が帰れば早川が風呂をわかそうとしてくれた。なんで俺じゃないかって?家事全般がダメダメな俺にやらすのは危険だからしい。

結局3つの家の対立って何なのっていう感じの日常が続いているがそんなある日、今日の事。

「保坂さ~ん!!!」

「どうした?」

「風呂釜が壊れてます」

「…はい!?」

「あああ…あの保坂さん!こういう時ってどうすれば!?…そうだ、自力修理!お金を掛けず身近にあるもので修理修理!」

「ダメダメダメダメ!!余計悪化したら困る!…金ならあるから業者呼んどくよ…仕方ねーな」

流石元貧乏人…いや、決してうちが特別裕福ってわけじゃないんだけど、でも早川の場合はいろいろあってもっとひどかったそうだ。しかも破産の原因が俺の一族を根絶やしにする為に資金を使いすぎたというくだらない理由。

きっと破産前から状況はひどかったんだろう。そんなに金がない生活をずっとしていたらそりゃ金を使うのを躊躇うのも仕方ないな。

でもお風呂を自分で修理ってどうなの？まさか早川家じゃもうやっていたとか！？

…いや、危ない事は想像しない事にしておこう。それがいい！

仕方なく俺と早川は銭湯に向った。

当然男湯と女湯に別れているのでどうってことはないが早川の裸体を見てみたいかも…って何を考えている俺は！だからこれだから年頃の男はと突っ込まれるんだ！冷静になれ、常識的に考えてそんなエロ…じゃなくてギャルゲーみたいな展開あるはずがない！

って当然男のほうに入る、おっさんとかガキとかしかいない。正直な感想、これ見て嬉しがるやついるの？ってこらそこのおっさん隠せよ！安全の為にモザイクかかってるじゃないか！

「……はぁ…ぶぇっ！！」

俺は普通に風呂につかっていたのだが突然背後から後頭部を押され俺の顔が突然お湯の中に、銭湯のある意味汚いお湯が口、鼻に入り非常に苦しい。

「ぶはっ！！…お、お前は！！」

「よっ！久しぶりじゃねーか充！」

「…圭一」

小村圭一（こむらけいいち）、高校1年の時からの友人で中学は高臣と同じ所だったらしい。

ただ問題点は一つ、ド変態である事だ。

「いやぁこんな所で会うとは奇遇だな！」

「奇遇っつーかお前何しにきたの？」

「それは勿論耳をかせ！」

俺の耳元にこいつの口が来る。そして圭一はぼそっと俺に話した。

（女湯を覗く為だ）

はい？

女湯を覗く？よし、その言葉を聞くと俺がとる行動といえば一つ。

「ああ、わかった。通報しとくから心配すんなよ？」

「ちょ！通報だけはやめてけれ！」

「けれって田舎者乙」

「黙れ！お前も田舎者だろう、それよりお前もこないか？女湯といえば男のロマンだぞ？天国だぞ？…天使達は今頃、俺が行く事を望んで待っているに違いない！」

ダメだこいつ、早くなんとかしないと。

「言っておくが圭一、こういう銭湯ってババアしかいないと思うぞ？」

「いや！さっき見た！早川さんと朋花が銭湯に入っていく所を！」

「高臣？あいつがなんで？」

「知らん、風呂でも壊れたんじゃね？お前のように」

「なんでそれを知っている？」

「そうでもなかったらわざわざ入りにこないだろう。まあ俺は覗くためにここにいるが！」

はい質問！

こいつ殺したほうがいいと思う人！

…って誰も答えてくれるわけないか。

「ふふふ、ちょっと潜ってみろ」

「なんだよ…ぶっ！！」

なんと風呂の中には通路のようなものがあり鉄格子でふさがっていた。しかもその鉄格子は取り外しが可能っぽいものだった。

「つい最近発見したんだ……あれって覗けって事だよな充！」

「知るか、一人でやってろ」

「いい、突撃だ！」

「こら！手を引っ張るなぶぐぼごぐおぉ……」

無理やりお湯の中に引きずり込まれ息も吸っていなかったので途中

で息が切れたかのように俺は暴れまわった。しかも鉄格子は圭一の手によってわりとあっさり外れた、もうちょっとしっかりした鉄格子を付けろよ銭湯側も！

あ、ダメだ…意識が薄れてきた。

「ぶはっ！ほれ充！見よ天国を！……あれ？」

ふっ、なんちゃって！逃げるが勝ち！勝手にやってろ圭一！

数秒後女湯から叫び声が聞こえてきた。

「キャー！！」

この様子から以外と若い子が多かったらしい。

「変態！変態がここにいるなのです！！！オットセイがついてるなのです！」

この声は早川か……

ってかオットセイ以前の問題だろ、どんだけマニアなんだ？

「うわっ！圭一！保坂だったら許してあげ…いやなんでもない！ボクの裸を見る前に死んじゃえ！」

あれって高臣の声か？

今さりげなく失言したっぽいけどまあ修羅場の圭一には聞こえてないだろうし早川は天然だからすぐに忘れるだろう。

俺は男湯でどうとも思わず、ただ他人のフリをするだけだった。

そして俺の耳には女達の声とそれを上回る圭一の断末魔しか聞こえ

ない。これは正直うるさい。

って帰り道。

「いやぁ、いきなり圭一の奴が出てきたからびっくりしたよ」

銭湯からだと途中までは帰り道が一緒な高臣は途中まで一緒に行動する事になったっぽい。あの後圭一は警察沙汰になったとか、まあ普通はそうだろ。

関わらなくてよかった。

「ほんと危なかったね朋花ちゃん、危機一髪」

「悪い悪い、あいつの暴走は止めようにも止められなかった」

「自分の暴走も？」

「そうそう…って何言わすんだよ！！」

高臣のせいで思わず余計な事を口にしてしまった。

「やっぱり保坂も変態！？欲求不満！？…ぼ、ボクが相手になってあげてもいいよ！あ、別に保坂の為じゃなくてほかの女の子が保坂に汚されるのを防ぐためで」

「だから前々から思ってたけどなんで話をそっちに持っていくの！？そんなに俺犯罪者にしたいの！？」

「いや、犯罪者に見えるから！だって優希と一つ屋根の下で同居っ

て…絶対エッチな事考えるでしょ男の子は！……きっと夜になったら普段の保坂とは打って変わって狼と化して…」

「俺よかお前が変態だろ！いろいろな意味で！」

しかし優希が天然でよかった。
あんまり俺と高臣の会話を気にしてないようだ。

「え～っ、だって陸上部じゃ有名だよ?保坂がロリコンでスケベだって事」

「ああ…俺もう陸上部の人と顔合わせたくない…」

「がんばれ！ボクは保坂に対して変な偏見は持ってないから！」

結局どうでもいい馬鹿エロルートにいくわけ?
ああ、やっぱり俺って不幸、俺の平和はどこに行った！！

ｐａｒｔ１７，銭湯戦線異常…大アリだ！（後書き）

・小村圭一
『女湯といえば男のロマンだぞ?天国だぞ?』
生年月日：１９９２年４月２３日
身長：１７６ｃｍ
趣味：ゲーム。
特技：女の子を口説く（大抵失敗）、自分の罪を他人のせいにしておく。
特徴：見た目はどこにでもいそうな高校生でわりとイケメンなほうなのだが変態
であり女湯に侵入してひどい目に遭ったほどである。
充とは友人であるがエロネタには充も介入しようとはしない、それほどに
圭一は変態かつ危険な人物なのである。
好きなタイプ：可愛い子ならなんでもいいのだ！
得意科目：特に得意な教科はなし。
苦手科目：ほとんどギリギリ。

ｐａｒｔ１８，プールｋｔｋｒｗｗ

もうすぐ夏休み…夏っていっても特にやる事もないんだけどただ学校に行かなくてもいいというだけ。でもその前に今日はプールだ。プールと言えば通常男女は分けられ女は百合っぽい…のかはわからないけどそんな感じで男はむさ苦しい授業をする…

しかし!!この飛鷹高校はどういうわけか男女合同、こんな夢のような話があるか!?
ラノベとか、エロゲーとか、それぐらいだと思ってた!

…ってこれぐらいの事で大喜びっていうのも太一とか圭一レベルだよな…ふっ。

「キタァァァァ!!!!!」

ほらな、太一が大はしゃぎ。

「おい充!夢のようだな!なんと今回はミーシャさん付き!」

「はいはい、ってかそれ本人が聞いてたらお前は殺されるぞ?」

「え?ソ連国家保安委員会にか?」

「いや、そうじゃなくて本人に」

ってかそれ違うだろ。

「とにかく雄一はもとより今や俺も勝ち組…ってお前負け組ｍ９（

＾Д＾）プギャー！！！」

オレハクサムオムッコロス（俺は貴様をぶっ殺す）
素直な感想です。

それから数分後。
「「「おおおおお！！！」」」

俺達の前に広がるのは水着の女の子！
スク水だけど…それがかえって似合う子が多く、我々男にとってはまさに夢のような光景だ。

でも俺はこいつらみたいには歓喜してないぞ。
普通にボケーっとしていた内心ではいいねと思っているだけだ。だからキモくは映らないはずだ。

「う～ん、誰がいいかな？」

「あれ？圭一、お前いたのか？」

「ひでぇ！今まで忘れさられてたのかよ！」

だって初登場が前回じゃ皆普通に違うクラスか隣でなくて離れた所にいる奴かって思うだろ？
誰も忘れていたわけじゃないとは思うが確かにお前いたのとかって聞かれるとショックだな。でも圭一だからそれはどうでもいい。

「やっぱり…ミーシャさんだな！いい体してるぜ！」

「でも、太一のものだぞ？」

「そうだったぁ…」

あ、さりげなく俺やばい事言ったかも。
まあいいや、流石のミーシャさんもこの距離だと俺達の会話は聞こえないだろ。

プールの時間はまあいろいろやらされるんだけど最後の数十分は自由、これも高木のご好意だ。

自由時間ともなればプールは無法地帯…って高木が見ているからそういうわけでもないけど皆それぞれグループをつくって遊んでいた。
小学生かよ…っと突っ込みたくなるが遊びたいという気持ちは何歳になっても変わらない、それが人間だろう。

現に大人でも公には言えない遊びを……うん、変な妄想はこのへんにしておこう。

「…ん？」

早川がひとりぽつんと何もしないで座っていた。

「どうした？」

「ふぇぁ！？」

俺が声をかけると変な反応をして驚いた。

「いい…いや、いろいろあるんだよぅん！」

そういえばこいつさっきから水に入ったはいいが何もしていなかった…まさか泳げないっていうオチ？

「なあ早川…お前まさか？」

「いい、言っちゃだめ！」

「うん、わかった。泳げないだけだろ！」

「言うなっていったのに！ばかばかばかぁ～！！！」

子供かお前は…

っていうかスク水着てるとマジでお前、ほんの少しお育ちのいい小学生に見えるぞ？

「保坂さん」

「なんだ？」

「泳げない…っていうの黙っててね」

「いや、もうバレてると思うけど？」

「ええ～！？…うぅ…」

しかし以外な事もあるものだ。

古賀３佐より強いのに泳げないのか。

「保坂さん…どうやったら泳げるようになるの？」

「…え？ここで教えるの？」

「だって…ここプールでしょ？…泳げないの恥かしいよ……」

……それぐらいで泣くか？

まあ、教えてやるのも悪くはないと思い、俺は立ち上がった。

「よし、教えてやるから泣くな」

「ほんと？」

「俺もあんまり得意じゃないけどコツを掴んだら結構簡単だから」

「ありがとう」

早川は涙を拭いていつもの笑顔を見せた。

突然泣かれてもし目撃されていたら俺のせいにされるかと思っていたからか俺も早川が再びいつもの元気そうな笑顔を見せてくれて安心した。

それから１０分後…

「お…お前、本当は泳げたんじゃないのか？」

「ほぇ？全然」

なんとまあ飲み込みがよい事でしょう。

でも確か運動神経は現役自衛官より高いし意外と覚えればなんでもできるタイプなのかもな。

…ふと俺は前に親父から聞かされた言葉を思い出した。まさかこいつが強いのって俺を殺すためじゃないだろうな?でも親父曰く早川は多分安全らしいし簡単に人を殺すような奴には見えないから多分大丈夫だとは思うけどあの言葉を聞いて以来俺は四方の警戒を怠らないようになっていた。

いつ刺客に刺される事か、いや!親父が関わっている世界ならチャカも俺の暗殺に用いるかもしれない!なんて面倒な話を聞かされてのやら…知らないで死んだほうが幸せだったかも。

って今だって背後に気配を感じたら警戒する。

「!?」

「うおっ!びっくりしたぁ~、なんだお前?そんなに早川さんと一緒にいたいのかぁ?」

なんだ、圭一か。

「お前かよ!…ってか何その…ニヤニヤしてるんだ?」

「いや!それはだな…女の子と2人きりで並んで会話って…聞いているこっちはニヤニヤせざるを得ない状況ではないか!!」

「じゃ聞くなよ!」

「気になるんだJO!」

JO…これでよというらしい。

何語?まあそれはともかく今大ピンチなのだ。

「早川さん！気をつけたほうがいい、前に貴女にキスをした事とか小学生みたいな1年の女の子と抱き合ったりだとかその他諸々…こいつは女の子に不純な事をしまくって…」

「話をややこしくするな！ってかお前不純な事はしてないだろ！そういえばお前なんでここにいるの！？」

「いやぁ、俺の大嘘をなめてもらっちゃ困るぜ。見事覗きの罪を近くにいたつるっぱげのおっさんのものにしてやったさ！」

うわぁ卑怯…ってか騙される警察も警察だと思うけど。
退学とか停学依然に逮捕されなかったのが奇跡だよお前…

「それで！お前と早川さんはどんな関係なんだぁぁぁぁぁぁ！！！」

「普通だわい！！」

「ぷぎゅるぅぅぅぅぅ！！！！！」

俺の拳が圭一のアゴに見事にヒットし、圭一は浮き上がりぐるぐる回りながらお星様になった。

「きれ～い」

綺麗なのかよ！心配とかは…するわけないか！俺もしないし！
まああいつの事だ。どうせギャグ補正とかかかってこの後プールに降ってきて高木先生に怒られておしまいってのがオチだろ。

「キャーキャーキャー！！」

某ギャグ漫画の４０歳の男のように叫び落下してくる圭一、予想通りプールに落下しようとしていた。
落下した途端、ものすごい音と非常に高い水柱が立ち圭一の「おー、おっほ！」とまたしても某ギャグ漫画の４０歳のあの男のような叫び声が聞こえた…ってこの水柱普通にやばい気がする！

「圭一！てめえ…あ、ミーシャさん大丈夫ですか！！」

「助けてぇぇ！！」

「こら圭一！流石のボクも津波は無理なの知っててやったでしょ！！おごぼぉぇ！！」

「たた、助けて死ぬ！！」

凄まじい津波でいつもの奴らが普段は見せない表情で苦しがっていた…ってその水はこっちにも来るぞ！
今思い出した、あまりに飲み込みが早かったから忘れてたけど早川、一応泳げない状態からは脱する事はできたがまだ泳ぎが得意ってわけでもないし…あの勢いだとプロでもやばい！

「保坂さん保坂さん！来ますよあれ！！」

「…っ！！」

俺は咄嗟に体が動き早川に急接近、その瞬間に波に飲まれこの時点からその次に目覚める間までの俺の記憶は完全になかった。

「……んん？……げぇっ！！」

俺は瞬間的に早川から離れた。
丁度俺の右手が早川の胸のあたりにあり優しく包むように右手が乗っかっていた。こんなのがバレたら古賀3佐の比でないぐらいにボコられるかもしれない、それに本人は気がついていなくても歴史的な対立があっぽいのでそう思った俺は瞬時に手を放した。

畜生！この手は二度と洗わな…ってそんな事考えている場合じゃない！

「ゴルァ小村！またお前か！」

「さーせん！さぁせぇん！！」

予想通り圭一は高木に怒られているけど…でもこれって圭一をぶっとばした俺のせい？まあいいや、どうせショックで忘れているだろうし。
こうして波乱のプール初回は終わったのだった。

ーーーー帰路ーーーー

き…気まずい。
なんか早川と一緒に帰るのが気まずい……

「保坂さん？」

「えっ？おぉっあ！なんだ？」

「どうしたの？」

「あぁいや…ひどい目に遭ったと思ってただけ」

それは嘘ではないから正当な理由なるだろう。

「あれね、確かに連帯責任で後始末とかやらされちゃったけど…でも楽しかったよ」

なんだろう?最後の言葉を言った時の早川の笑顔はこれまでにないぐらいだった。いい笑顔の時ってこいつ…こんなに可愛いのか?

「それに私、保坂さんには感謝してるんだ。泳げるようになったし、波に飲まれそうになった時一生懸命助けてくれたし。それに今更いうのもなんだけどお家にまで居候させてもらっているし…本当に優しい人なんだなって思っちゃった」

「!!」

「やっぱり、自分の事、よくわかってくれて優しい人っていいよね?」

「えっ?あぁそうだな…」

「でもそういうのってあまりいなくて…せいぜい初恋の人…いやいやなんでもない!」

初恋の人?いい事聞いたぜ!

俺はすこしだけ早川をいじめてみる事した。

「初恋の人?どんな人なんだ?」

「へぇっ!?…えっと……まだちっちゃい頃の話なんだけど…すごく優しい同い年の男の子がいて…でもその子小学校に入学する前に引越ししちゃったしもう名前も顔も覚えてないよ。もう一度会いたいけどもう顔とか大人っぽくなっちゃってわからないんだろうなぁ…」

小学校入学前か…そのよくわかっていない時期なら一度は恋するだろうな。自慢じゃないが俺の初恋の相手もその頃だ。同じ理由て離れ離れになったし中学校の時に再びこの地に戻ってきてからは会ってはいないが……

ん?これってフラグか?もしかしてこいつなのか!?…いや、そんなありがちな事あるはずがない。まあわけのわからない事をいって以後会話ナシ!…っていうのも寂しいからあえて突っ込まない事にした。

「あっ!ごめんね!…そういえば保坂さん彼女いない暦＝年齢だった…」

「ぐはぁっ!」

今さりげなくひどい事言った!なんか悲しい!

「あっ!ごめんなさい!…あっ!そうだ!…今日助けてくれた時の事なんだけど…」

まずい!胸の話か!?

「よく覚えてないけどマッサージ気持ちよかったです!…このへんだったかなぁ?よく覚えてないや」

そういって早川は胸の付近に手を当てる。いやその時点で気がついてもおかしくはないけど気がつかない…

それにマッサージ?

……こいつが天然でよかったぁぁぁぁ!!!!

「保坂さん?保坂さん!?…」

「うおっ!…な、なんだ?」

「あ、よかったぁ死んでなかった。何突っ立ってるの?それより帰ろ!あとアイス食べたい!」

「買ってやるから道のど真ん中で子供っぽくしないでくれ」

「は〜い!アイス、アイス♪」

一回くるっと回りながら早川は笑顔で俺の先を歩いていった。俺はしばらく突っ立っていたが置いてかれないように走って早川を追っかけた。

…今思ったけどこれってフラグか?何フラグだろう?死亡じゃなくて…いよいよ俺にも春が来るか!?

いかんいかん!邪心を消すのだ、不純な事を考えていたら太一や圭一レベルに見られてしまう!

その後俺は早川にアイスを買ってあげて2人でそれを食べながらクーラーがよく効いていて涼しいマイ・ホームに帰ったのだった。

ｐａｒｔ１９，今度は何だ！？

その夜……俺は眠ろうと思っても眠れない。
早川の台詞とプールでのトラブルを思い出してしまうからだ。

「……はぁ～、なんなんだよ…眠いけど寝れない！」

俺は一回部屋から出て台所を見に行った。
思えば初めて早川と出会ったのもこの場所だ、今となっては普通に家族の一員っぽくあいつはこの家で暮らしているが初めて会った時俺は早川を泥棒扱いしていた。

まあ常識的に考えてそれが普通だろ、人の家に勝手に入って物をあさってたわけだし。

「それに私、保坂さんには感謝してるんだ。泳げるようになったし、波に飲まれそうになった時一生懸命助けてくれたし。それに今更いうのもなんだけどお家にまで居候させてもらっているし…本当に優しい人なんだなって思っちゃった」

……ふと早川の顔と一緒にその台詞が頭の中に浮かんだ。
すると寝たいのにまたまた目が覚めてきた。

そうなるとまた俺は布団に入ったが…

「畜生……寝たいけど眠れねぇ……あぁこりゃ、明日辛いぞ…はぁ～」

……

……

…

「保坂さん！朝！朝ですよ！起きないと遅刻遅刻！」

「んんっ？…げぇっ！もうこんな時間かよ！」

「起こしに来た私も寝坊して榛名ちゃんがご飯とか作ってくれてるけど…早くしないと遅刻なのです！」

「了解！…大佐（だいさ）！よくやった！」

早川が部屋から出ると俺は慌てて着替えて一階に向いすごい勢いで朝飯を食べた。

「榛名ちゃ～ん！まだ？」

朝から暑いからか窓をあけていたら真紅の声が聞こえてきた。

「ちょっと待ってね真紅！…充ちゃん！ゆーちゃん！私先行ってるから！」

あれ？いつのまにゆーちゃんって呼んでるわけ？まあいいや、それより朝飯をさっさと食わねば！

「ごっそさん！」

「あっ！保坂さんに僅かに負けた！」

「俺は早食いが得意なのだ！って急がないとマジで遅刻だ！行くぞ！」

「う、うん！」

俺と早川は走って学校に向いギリギリセーフで学校に到着した。到着した瞬間二人で溜息をついた。難でかしらないけど二人同時に入ってきたからかニヤニヤしている奴（主に雄一と太一と圭一と高臣）がいた。

あ、あいつら…また後で面倒な事になりそうな予感…

「よ～し、2人はセーフっと…あといないのは…越前だな。あいつは今日学校だって覚えてるのか？まあいいや、それじゃ朝のホームルームを始めるわ」

五十鈴先生がいつものようにそう言った。

「…くらいかしら？あと今日の帰り際に文化祭の実行委員と出し物決めるから。前年同様、特に2年生はテストもあれば修学旅行もあって結構大変だから今のうちからある程度の準備をしておこうという事になったのよ」

なるほど、五十鈴先生にしては今日はまともに話を進めていた。

ってその通り帰り際のＨＲではそれらの事が決められた、しかもわりとあっさり。

って帰りも俺はいつもどおり早川と2人だった。榛名は相変わらずの部活、こんな生活が毎日続いていた。
ってこういうのは死亡フラグだろうか?そう悩んでいた矢先、突如俺の前に変な男が現れた。

「君君!ちょっと聞きたい事があるので来てもらえませんか?」

「はい?」

っと突如現れたのは一人の警察官だ。
男は俺に話があるらしく俺を呼びとめた。

…なんかもう…嫌な予感しかしない!

「よく来てくれたね」

「あ、あの…念の為に聞きますけど貴方本当に警察官ですよね」

「ええ、警察官ですよ。警察官だからこそ天の許さぬ反逆を犯した者を処分するのです」

「ま…まさか!?」

「おや、お気づきのようですね。実は私早川貴という者であそこの優希ちゃんのお爺さんの兄の孫で直接あの子とは会った事はありません、実にかわいい子ですねぇ、本職は本当に警察で逮捕覚悟なのですが……保坂家の者を抹殺しに来たのですよ」

やっぱりかぁぁぁ!!!
さわやかな見た目がさらに恐怖をあたえる…なんて恐ろしきこの世

！警官の中にも刺客がいるのかよ！

「何でこうなるんだぁぁぁ！！」

「なんででしょうね？生まれた家を憎み来世では幸せな生活を送ってください…それではさようなら！」

っと突然警察官は銃を構え発砲した。

「げぇっ！」

「大丈夫です、１発目は空砲ですよ…次は実弾ですがね…では！」

ここで俺が取るべき行動は一つ…それは前回も使った手段でマンネリ化は避けたいものの状況を判断した上で最も適切であると思う行動…

「撤退～！戦略的撤退だ畜生！！」

「待ちなさい、大丈夫ですよ頭を狙います。苦しいとかそういう事のないようにしとめますので」

「そういう問題じゃねぇ！俺は死にたくない！大体俺に罪はないだろ！」

「ありますよ…保坂家の人間であるという罪が！」

ひっどい理由！

俺は走って逃げようとしたが早川が目の前に立ちふさがった。まさがグルか？グルだったのか！？

「保坂さんどうしたの！？」

「殺されそうだから逃げてるの！」

「えっ？なんで殺されそうなんですか？」

よかった、よくわかってないようだ。
しかも何か早川の奴何気に一緒に逃げてるし。

「よくわからないけど俺の一族に恨みがあるっぽくて…って俺は何も悪い事してないのに命を狙われているってわけ！」

「そーなのかー！」

「そーなんです！」

「なんかこれ映画みたいで面白いね！」

「命を狙われている俺は全然面白くない！いやなんか背筋が寒いぞ！」

すると後方より銃声が響いてきた。
素早く飛ぶ弾丸が俺の近くを通りほんの僅かに風が来るのを感じた。
その瞬間俺は恐怖という名の強敵に襲われる。

もう誰でもいいから助けてくれぇぇ！！

「保坂さん保坂さん！」

「今度はなんだ！？」

「いい事教えてあげましょうか？」

「なに！？」

「警察の銃の装填数って６発らしいですよ？」

「へ？マジで？…１発目が空砲で今のが２発目…あと４発回避すれば！…ってあんな速くて小さい物簡単に回避できるかぁぁぁ！」

「保坂君！とりあえず死んで下さい！君が死ねば僕は逮捕されても英雄なのです！」

「畜生ー！お前！生きてたら後で１１０番してやる！」

警察が警察を捕まえる…一見すると変なように見えるがこれなら警察が警察を逮捕しても誰も文句を言わないはずだ…ってかこの危険人物を誰でもいいから早くなんとかしてくれぇ！！

「うわっ！とぉっ！！はっ！！ふっ！！」

なんと俺は全弾回避する事に成功した。

「すごい保坂さん！」

「今褒められても嬉しくねぇぇ！！」

「死ね……いでっ！！」

ん?警官が突如追ってこなくなった。
一体なんだろうと思い、俺は一端止まって後ろを振り向いた。なんとそこには…

「じ、治三朗!?」

「な、なんだ貴様は!?」

「ウホッ…いい男…やらないか?」

「えっ?何お前?…やめろ!どこに連れて行く気だ!!」

「やらせろ!」

「コラー!何をする!逮捕するぞ貴様ァ!!……アッー!!!!」

……なにこれ?

「あれ富山さんだよね?」

「ああ…」

「保坂さん!よかったじゃないですか!助かったんだよ!」

…まあ、今日は治三朗に感謝だ。
そこの公衆トイレからは「アーッ!」というさっきの警官の叫び声が聞こえてくる。男が一番聞きたくない悲鳴だろう。

「まぁ、今日は治三朗に感謝でもしておくか」

「それにしても保坂さん本当に命を狙われているんだね」

「俺何もしてないのに…」

「でもすごい強運だね。いきなり富山さんが現れてあの警官を圧倒しちゃうなんて」

こうしてまたも起こったちょっとした騒動は終わった。
でも俺の強運もいつまで続く事やら……ってか誰か助けてください！

Ｐａｒｔ１９，今度は何だ！？（後書き）

まずい！
徐々にネタが尽きてきた！

part20，夏が来たっぽいよ

7月も末……流石に日差しも厳しくなり、午前3時を過ぎれば次第に外が明るくなる。
実は俺は夏が苦手だ。暑い、とにかく暑い。

「あづ～」

「おいおい大丈夫か充？」

「雄一、ダメだ……あづい死ぬ苦しい助けてのたれぢぬ～！」

「なるほど、そこそこモテそうな男に彼女がいないわけがなんとなくわかった。お前！夏だからこそってものがあるだろ！」

「いや、別にどうでもいいし。ってかなんでそっちの話になる？」

やっぱりこのリア充どもは見下している。
でもフラグはあるんだ！フラグは！好き好んで手に入れようとはしないけど。

「まあ、確かにどうでもいい話だな。それより暑いな確かに」

「だがらいっだだろぉ、あづいしんぢゃうだずげでぇぇ」

ダメだ俺、もはやまともに言葉を喋れなくなってきた。
一応道内でも都会のほうの育ちなのに暑さには弱い俺、多分沖縄とかに住んでいる人からみればこれぐらいの暑さで伸びている俺をみて情けない奴だと思うんだろうな。

まあそんな事はどうでもよく。

「って、雄一。あいつらはなんだ？」

俺と雄一の目の先にはミーシャさんといちゃついている太一の姿があった。

「あの２人は熱いねぇ。畜生！せめて俺も梨佳ちゃんと同じクラスなら！！」

「やめい！！教室の気温が１２０℃上がる！！！」

「ダメか！？」

「当たり前だボケ！」

…ってか暑いから半径１ｍ以内には誰も近づくなというのが今の俺の本音だがそれを言うと全員を敵に回すので控えておきます、はい。さて、今日はつまらん終業式、明日からいよいよ夏休みだ。夏休みといっても特に用事もないし、いつもどおり家でごろごろっていうのがオチだとは思う。それに無闇に外を出歩いたら危険な気がする。

なんたって俺を狙う刺客は警官にも混じっているのだからな。街を歩いているおっさんおばさんが突然俺を襲ってくるという可能性だってありえる。

あああ、なんでこんな事になったのやら。

畜生マジで恨むぞご先祖……

終業式では校長の無意味なお話を聞かされたが突如として癒しのボイスが耳に響く。

…中原先輩。

「キタァァァァ！！！」

「亜衣ちゃん亜衣ちゃん……」

3年キモス！

「うおおお！！中原先輩！！！！！」

「お前も仲間だったんかい！！！！」

俺のクラスでただ1人熱狂するのは圭一だ。

確かに現生徒会長の中原先輩が可愛いのは認めるがファンクラブは悪名高いとの噂だ……でも圭一がファンクラブの会員なら文句はないや。銭湯の女湯を覗いて警察に逮捕されかけた男だし！

そう頭の中で突っ込んだ瞬間、中原先輩の癒される演説は終了した。

「あ～あ、話終わってしまった」

「そりゃ終わるだろ、人の話は」

「お前！！会長こと中原先輩のすんばらしい話を聞いてなんとも思わんのか！」

「そりゃあ一応なんかは考えたけどお前のように卑猥な事は考えて

ないわ！！」

はっきり言おう、圭一は欲の塊だ。
従ってこういう時圭一は大体不純な事を考えている。

その後、教室に戻り本日最後のＨＲ。

「え～っと、うちの学校は2学期制なので通知表を今配ったりはしない…けど一応高校生なんだからそれなりには考えなさいよ？わかった保坂！」

「なんで俺！？」

突然五十鈴先生にそう言われた。

「いや、成績優秀なのは知っているけど調子のいい時こそ一番危険だからよ」

「あのね先生、俺を天才君か何かと勘違いしてませんか？俺中学の時はどん底でしたから」

「あ、そうなの？まあいいや！！」

なんて軽い人！
あんた本当に先生か！！！

「って次だけど……まぁあんたら一応高校生なんだから、それらしい生活を送りなさい。とりあえず私から言う事はただ一つ、面倒事だけは起こすな！もし起こされたら…ああもうめんどくさいのよこっちが！」

それってつまり先生が楽したいだけっすよね？

「あと！ちゃんと勉強はするんだぞ、それから補習の者は休まずしっかり来るように……あとは…特に何もなかったね。じゃあ解散！」

鐘が鳴ったと同時に五十鈴先生は解散と叫んだ。

たった今から普通の生徒はしばらく学校に来なくてもいい夏休みが始まった。

「保坂さん保坂さん！」

「ん？どうした？」

早川がいつもの笑顔で俺を呼びとめた。

「保坂さん、夏休みさ……どうせ暇でしょ！？」

「ああ、暇だけど？多分寝てる事と雄一とかとどっか遊びに行ったりする事意外は特に用がないと思う」

「じゃあ海行こ？」

「なんで海！？」

「泳げるようになった記念！」

ガキかお前は！

まあ暇である事には変わりないし、どうせこいつ海にも行った事ないんだろうなぁ…と思ったけどいろいろ問題があるじゃないか！

・一つ！そんな金あると思う？

・一つ！海水浴場まで距離がある！

・一つ！俺は当然免許なんて持ってません！

「はいはい検討しておくけど交通手段がない……」

「ほう…海」

「げっ！…五十鈴先生…」

突然目を光らせて五十鈴先生がやってきた。

「げっ！とはなんじゃげっ！とは…私が近くにいたら不満か？」

「普通先生が近くにいたら緊張するもんでしょ？」

「そうか？まあいい、それならば私が車を用意してやろう、これでも毎日車通勤しているし土日もどっかこっかにはドライブに行っているぞ？」

それってつまり先生が海にいって男にナンパされて彼氏をつくりたいだけなんじゃないんでしょうか？確かに年齢的にあと数年もしたら勝手に誰も寄り付くなくなるだろうがだからって俺らの予定に介入するか普通？

「あの…先生？なんで自分では行かないんですか？」

「それは決まっているだろ?保坂と早川を2人にさせるのはなにやら危険に香りが…」

「もうそれ定説になってんの!?俺ってそんなに信用されてないわけ!?」

「まあまあ、保坂さんいいじゃない」

もしかしてこれで先生介入決定?

いや、車という交通手段を恵んでくれるのは嬉しいかもしれないけど学校の先生が生徒のお遊びについてくるとかどこのあ○まんが?

「そうだZE!!なっ!?」

「なって…圭一お前何時のまに!!しかもその反応ってまさか?」

「決まってるだろ!!お前の監視だ!」

さらに圭一だけじゃなくて高臣、雄一、太一、ミーシャさん、が続々と現れた。

「そうね、優希が行くんだったらボクも行こうかな?」

「ははは、じゃついでに梨佳も連れてっていいかな?」

「俺とミーシャさんもついでに頼む!」

「ロシア人はいろいろあってお金がないのです!でも太一君もあんまりお金が無いのです!よろしく!」

なんか続々と関係ない奴まで増えていくし！！！

「別に連れていってもいいんだけど私の車４人乗りだぞ？」

そうだよ！そうなるとせいぜいついていけるといっても俺と早川と、行く事になったらまずまちがいなくついてくる榛名だけだ。つまり雄一達がついてくるなんて事はありえないはずだ！

「だったら私にいい案が！うちのおじさん自衛官で丁度１０人乗りの車を持っててしかも８月から例の山の遭難者救出に貢献したから長期休暇らしいんだけど。そのおじさんと私の親戚の真紅っていう一つ下の子も一緒でよかったら車は手配できるよ」

ハホォォォォォ（早川の馬鹿！アホォォォォの略）！！
余計な事を！しかも１０人乗りってなにそのわりと大きい車！！

「よし、決まりだな」

「決めないでくださいよ先生！」

「いいじゃないか？それとも２人きりじゃなきゃいけない何かがあるのか？」

「うっ…それは断じて…」

「ならよしっと！」

なんてこったい！！！
こうして平和は崩されようとした。
帰り際、校内に設置されている、昼と放課後になら使ってもいい自

販機で俺は適当に缶ジュースを買った。

「はぁ…」

「あ、あの…」

「うぇぉぇっ!?…な、中原先輩?」

溜息をついた瞬間、偶然通りかかった中原先輩が声をかけてきた。

「いえ!そんな驚かすつもりは!…ただ…元気がなさそうなので…」

「あぁいや……元気がないというよりも面倒くさい事になって…って事です」

「面倒くさい事…ですか?」

ああ、なんていい子なんだ。これが高臣とかだったらここで俺を猛追撃してくるだろう。

「はい、8月の1日2日に海に…」

「楽しそうじゃないですか」

「俺は別に行きたくなかったんですけど成り行きでしかも大人数で…」

「そうですか…大変ですね」

高臣だったら猛追撃してくる所を…

マジでいい人だこの人！

「ははは、まあ決まってしまった事ですので行ってまいります。そちらも忙しいとは思いますが」

「いえいえ、そんなに忙しいってほどでも…」

「っというわけで充！俺と中原さんを連れて行け！！」

「…はぁ！？」

予想はしていたけど小太郎登場…しかも連れて行けですって！？

…は！？そういえばさっき早川が古賀さんの車が１０人乗りって…

…まさか作者の都合の人数合わせ！？

畜生！大体１０人乗りの車が都合よく出てくるなんておかしいと思った！はめられた畜生！！

「ええ！？でも泉谷君…」

「いいだろ？え！？車の席二つぐらい余ってるだろ？」

くっ！鋭い！

だけど一応年上だ、ましてや中原先輩の前…逆らえないこの地獄！

「は…はい」

「よし決まりだ！中原さん、どうせ1日2日は暇でしょう？」

「えぁ！？…はい…確かに暇ですけど……」

「気晴らし！なっ？」

「…わかりました。保坂君、ごめんなさい」

「い、いえいえ。俺はそんな…」

畜生！！小太郎！！てやんでぇバーローちくしょーっ！！てやんでぇバーローちくしょーっ！！

part21，夏休み初日

俺の目の前には刃物を持っている早川がいた。

「お、おい、なんの冗談だ？」

「冗談じゃないよ……本当にごめんね保坂さん…これも使命なの♪」

「ってそんなノリノリっぽい感じで言われても超困るっす！…あ、おい刃物はやばいって！」

「いいじゃない？どうせ死んじゃうんだから」

「ま、待て！そう無理せんでも話せばわかるだろう！」

「問答無用！」

「ギャアアアア！！」

……

……

…

「はっ！？」

気がついたらそこは自分の部屋、時計は１１時３０分を指していた。
改めて自分の体を調べると傷一つすらない、どうやらあれは夢のようだ。

「ですよねー」

よかったよかった。まさかあんな、五・一五の犬養さんの如く殺されたんじゃたまらないからな。
……そういえば今日から夏休み…なるほどだから起こしてくれなかったのか。まあそれはそれで助かった。昨日は明るくなるまで海外のサイトで落したエロゲーをプレイしていたからな。えっ？犯罪？
まあまあ今日は大目にみてくれ。

そんな事よりもそろそろ起きないと流石にアレだよな…起きるか、眠いけど…

俺は階段を降り、リビングに入るとテレビを見ている榛名と早川と真紅、そして何故か…

「おはよ、充ちゃん」

「あ、おはよー保坂さん」

「おはようお兄ちゃん！」

「おっす保坂！」

「おはよ皆…っておい！！なんで高臣が！？」

真紅までなら隣の家に住んでいる早川の親戚だし。多少俺に気があ

るっぽくて見た目が実年齢より幼いとはいってもまあ許すが高臣はおかしいだろ！
そもそもいつ来たの？

「はっはっは！ボクは朝１０時からここにいるぞ！それにしてもなんてハーレムなんだ保坂！！」

「ハーレムって…別に俺が望んでいたわけじゃなくて……それはだな、成り行きでこうなってしまったわけであって…」

「まあまあ、言い訳はその辺にしておいて。聞いてくれ保坂、実は高体連…」

「そうだ！そういえばまだ戦果を聞いていなかったな…」

「高臣先輩、どうだったんですか？」

俺と榛名が同時に質問すると高臣の奴は急に暗くなった。

「玉砕……」

「あらま！」

それはお気の毒、きっと高臣のせいじゃなくて周りがカスだったろだろう。

「朋花ちゃん、泣かない泣かない、来年があるのです！」

「そうですよ高臣先輩！ファイトです！ファイトなのです！」

早川と真紅が高臣を慰めようとする。

「うん、来年こそは……」

来年はがんばれるといいねー、でも最後だぜ？
ちなみに俺、なんであまりこの会話に介入しないかというとスポーツ全般に全く興味がないんだ。いや、確かに俺体育は苦手じゃないし運動も早川に比べれば全然だけど普通ぐらいだと思う。でも興味がない！でも趣味なんて人それぞれだから関係ないのだ！

…って活動家風に心の中で叫んでみた。

「じゃあそろそろお昼ご飯作ります、ゆーちゃん手伝って？」

「いいよ、ちょっと待っててね」

榛名と早川の共同作業…こいつはうまい飯が期待できそうだＺＥ！
って残った俺含む３人はちょっと懐かしい話をしていた。

「いやぁ、考えてみればもう夏なんだね。早いねぇ保坂！」

「確かに、俺の身の回りがうるさくなった４月からもうすぐ４ヶ月…」

「あたしは高校入学もうすぐ４ヶ月！」

そもそもまだ２１話目なのに随分話のスピードが早いっすね。そこらのこういうジャンルって普通に５０とか１００話越えてるっぽいけど。まあいいのか、あんまり長いと読む気失せるっていうのもあるし。

…そう主人公の俺が作者の気持ちを代弁してみる。はい、ごめんなさい。

「…そういえばお兄ちゃんと高臣先輩は高校入試の時どうだったのですか？」

「えっ？俺達か？」

考えてみれば真紅は編入生、編入試験にも合格し事なきを得て普通に学校生活を楽しんでいる様子。その真紅からそんな事を言われ、苦労したあの時を思い出した。

「う～ん、ボクはいろいろやらかしたけどなんとか合格したって感じだったよ」

「って、受験勉強で蓄えた知識は無駄になりついでに高校に入ってからの知識もほとんど無駄に？」

「うん！」

「うんって…自慢できる事でもないだろ？」

「大丈夫！一応こんなボクでも追試は合格したんですぜ！？えっへん！」

えっへんって！ガキかお前は！
きっとその明るさも評価されたんだろうか？ってかこいつは落されなかったのが奇跡という感じだ。

「お兄ちゃんは？」

「俺か？中学の頃はどん底だったけどなんとか中３で息を吹き返してまあ普通に合格、我ながらあの時もっと勉強しておけばもっといい所に行けたと思っている」

それは事実だ。

この調子でよっぽどのヘマでもしなければ大学も大丈夫、そう五十鈴先生に言われた…って事は俺ってもともと頭はいいほう？そう思うと余計に後悔する。

「優希はどうだったんだろ？」

「多分大丈夫だったんじゃないか？あいつ飲み込みはいいし」

「えっ？なんでわかるの保坂？まさか！？」

「おい高臣！頼むから変な想像だけは勘弁して！」

「了解っす！」

了解って…絶対了解してないでしょレディー？

その時、家の電話が鳴る。

「あ、電話だよお兄ちゃん？」

俺は受話器に手を掛け、それを持ち電話に出た。

「はい、もしもし保坂ですけど？」

「おう充！元気か！？」

「親父か？一応合言葉だ、愛国者とは？」

「らりるれろ！」

「よし！」

「よしって何が！？」

「お兄ちゃんの家の合言葉って不思議」

どうやら変な合言葉に高臣と真紅は驚いているようだ。
ちなみに俺、メ○ルギアシリーズはやった事ありません。

「充！夏休みだってな！？成績はどうだった！？」

「どうだったって…うちの学校２学期制だから夏休みの前には……って親父！なんかすごく砲撃音がするんですけど！？」

電話から砲撃音らしきものが聞こえてくる。
それはまるで戦艦の４０ｃｍクラスの主砲が砲撃しているかのようだった……ってなんで音だけでわかるんだ俺？もしかして小太郎の影響？

「砲撃音！？ああ！気にすんな！！ただ刺客に追われて……大丈夫だ！砲撃を行っているのは俺が乗っている艦だ！闇ルートで米海軍の協力を要請した所アイオワ級を出してくれたんだ！」

絶対ありえない！それリアルなの！？絶対ありえないと思う！！

「えっ！？親父冗談だろ！？なんで米軍が親父の味方なの！？」

「いろいろあったんだ！まあ事業は成功している…それじゃあ俺はまずこの海戦に勝たなきゃいけないっぽい……ん！？何！？…新たなる艦影3隻、艦種は重巡1、駆逐艦2と見とむ！？…よくやってマイルズ少尉！…あ、今のはこっちの事だ！心配するなぁ…米海軍は多分無敵だ、だがさらに上には俺がいる！俺は無敵ング！っじゃあな！」

プツッ…と電話は切れる。

…ってか今の時代に砲撃戦？そんな効率悪い戦い方…一体今何世紀っすか？そもそもマイルズ少尉って誰！？米海軍ってマジなの！？…いや、親父だし、前だってバヌアツの警察に狙われていた男だ。あまり深くは考えないほうがいいだろう。

…どうでもいいけど俺を狙う刺客って軍艦持ってるわけ？一体その非現実的な組織はどんな組織なんだ！？…まあこれも深く考えないほうが吉だろう多分。

「米軍？海戦？」

「なんか保坂の親父さんって謎だね」

「うん、謎だ。あんまり関わらないほうがいいと思う！」

「ご飯できたよ～」

「お、おう」

その後夕方になると高臣、真紅、榛名は帰っていつもの2人になっ

た。
親父からの嘘か本当かもわからない非現実的な電話がその後も2通、一つは海戦に勝利した事、もう一つはさすがに派手にやりすぎたせいか米国はおろか世界に目に目を付けられそうになっている事。
…って冗談だろ?頼むからイメージさがるから逮捕されるような事はしないでー。
ーーー翌日ーーー
「あ、もしもし親父?…えっ?昨日の海戦ゲーム?」
そういうオチかい!

Part22，AE85vsFD3S

時は過ぎて8月！

…うわっ！本当にメンバー揃ってるし！

「ちょっと充ちゃん、こんなに多かったっけ？」

「悪い榛名、成り行きでこうなってしまった」

「ま、いっか別に」

いいのかよ！

俺は嫌だ！

「どうも、陸上自衛隊北部ほうめ…ぐえっ！」

「長いからいい！！あ、五十鈴先生、あの人は私のおじさんの古賀さんって人ですよ」

「あはは…わかってるわ、それに初対面じゃないし」

「ひ、ひどい！俺にも活躍の場を！！」

古賀さん…哀れ。

早川にぶん殴られた古賀さんはくるくる回りながら空を飛んでいたがやがて自由落下してくる。でもそんな古賀さんを早川は逃さずハイジャンプ。

「ほう、まるでＶ２ロケットのようだ」

小太郎の例えはまたまたミリタリーらしいがまあ確かにそんな感じのハイジャンプだ。

しかもアイツ今日スカートだし…まずい！上空を見たら負けな気がする…はっ！？雄一と太一は彼女さんとお話してるっぽいから大丈夫として圭一がずっと空をみている。しかもなんか期待しているような目で！！

これは阻止せねば！

「うぉっ！何をする充！」

「なんとなくだ！」

「なんとなくって！俺の計画を邪魔するな！」

「お前の計画とはつまり早川のパンチラを見る事だろ！」

「その通り！」

「させるかぁボケェ！！」

「ぎえええええ！！！！！！！」

圭一は俺がこの世に生まれてから聞いた事もないような断末魔をあげていた。

「保坂の奴、随分早川に必死だな」

「もしかして好きなのかな!?」

「五十鈴先生と高臣はそこでこそこそ話さなくてもいい!!おんどれぇぇ!!」

「死ぬ!死ぬ!Ｎｏｏｏｏ!!!」

その瞬間、上空からド○ゴンボールのような効果音が聞こえ、古賀3佐が降ってきて道路になんと穴をあけた。一瞬土ぼこりが漂い視界がさえぎられるが圭一に対する攻撃は止めなかった。

「古賀少佐戦死っと…」↑なんでも軍隊に置き換える小太郎。

「しょうさ?」↑ミリタリーに疎い中原先輩。

そして血だらけの古賀3佐…まぁギャグ補正でほっとけばそのうち元気になっているんだろうけど……それより早川は?いた!着陸態勢には入っているが……

「あぁ!!保坂さんどいてぇぇぇ!」

「えええええ!?」

無理無理無理!!!そんなハイスピードで落下してくる物体をよけろなんて!

「きゃあああああ!!」

「ぎゃあああああ!!」

「お?何?衝突事故?」

一瞬高臣の声が聞こえたけどそれ以上に俺は頭がくらくらして考えようにも何も考えられないし、ついでにいえば何か顔のあたりが重いし息苦しいし鼻痛いしなにこれ？
…ってか窒息する！

「うおっ！充！貴様ァ！！」

「充…お前って奴は…」

「くそっ！おい俺にも譲れ！」

なんか雄一、太一、圭一と次々に声が聞こえてくる。
そういえば今気がついたけどこいつらって名前の最後に「一」って字がくるよな？もう面倒くさいし略して「ＵＴＫ」でいいや。

それよりも俺は今一体どうなっているんだ！？
なんか周りの奴ら噂っぽいのしてるし、一体何が？

「いったぁ……ひゃぁっ！？保坂さんなんでそんな所に！」

「とりあえずゆーちゃん立って！充ちゃんは私が直接制裁を！」

「ぶはっ！！」

やっと解放された！

「このドスケベ！！」

「ぶびぃっ！！いってぇ！何すんだ榛名！」

「へ、変態！」

変態？一体何なんだ？一体何があった！！

「ふ、わけがわからなくなって混乱している保坂に一部始終を見ていたボクを教えてあげよう。実を言えば暗くて見えなかったとは思うけど優希がお前の上に乗っかった。しかもお前の顔は丁度パ…」

「言わないでよ朋花ちゃん！！！」

「ま、ど…どうでもいいか」

うん、大体わかったからいいっす。
何この展開？それはさておきそろそろ出発、俺と早川と榛名は五十鈴先生の車に……

「ってなんですかこの走り屋が好きそうなの！？」

目の前には白と黒のツートンカラーのあの漫画で有名なトヨタのトレノがあった。しかも「辻とうふ店」のステッカー入り。

「はっはっは！実家が豆腐屋なもんで！ってこれは元親父の車で今親父はインプとかよくわかんないのに乗ってるさ」

それモロアレだよね？絶対アレだよね？
まぁ中にのったけど狭！

「あ、ちなみにこれ遅いから」

「なんでですか？」

「８５（ハチゴー）だから、うちの親父８６（ハチロク）と間違って買ったんだって…ってか保坂に説明してもわかんないか！キャハハ」

なるほど、先生の家のお父さん車好きなだけで詳しかったら某豆腐屋の親父みたいに運転うまいわけじゃないんだね。
それよりも１人で車の話して面白いですか五十鈴先生？

その後街中を走るとこのハチゴー思っていたよりパワーがある感じ。

「いやぁ実はね、あんまりにも遅いからターボつけちゃったんだよ、ドッカンだけどね！」

いや、誰も聞いてないですよ五十鈴先生。
ってかそれなんてイ○キ？

「五十鈴先生ってお車好きなんですか？」

「えっ？うんわりと」

榛名は読者の皆様の疑問に答えるかのように質問した。
まぁそんなの聞くまでもない気がするけど。そもそも普通の人ハチゴーとかドッカンとかいわれてもわからない気が…えっ？俺？さぁ？

国道は渋滞、でも道を抜けるとガラ空きになる。
峠に入ったらしいがそのうち下りに入ろうとしていた。

「うう…榛名ちゃんうらやましい…」

「なるほど榛名、お前が前乗りたいっていったのは…」

「そう、窓の恩恵を受けられるから」

「前乗ってればよかった…」

「はっはっは！前だって2人乗れるぞ！でも1人私！アハハハ」

あんな本当に教師ですか！？

…突如俺はふと後ろを振り向いた。古賀3佐の車が張るか後方に見えるがそれを抜いて1台の車がこの車に接近してきた、しかもその車はかなり速い…ってうわ！バックミラーから見える五十鈴先生の顔がマジだ！

そして後ろの車は2～3回パッシングをした後、抜いていった。パッシングをした意味ってなに？

「ふっふっふ、保坂、早川、あと金剛…しっかりつかまってなさい」

「え？まさか五十鈴先生…」

「売られた喧嘩は買う…峠の常識！！」

なにいいいいい！？

そういった瞬間五十鈴先生は車を加速させた。

きっと遥か後方の古賀さんと助手席に乗っている真紅はこう思ったに違いない。車が車なだけに五十鈴先生も走り屋か…っと。

「えっ？ちょ！ちょ！先生！目の前カーブですよ！？」

助手席に座っている榛名はいちばん怖いだろうと思う。車高そんなに高くないのに高速でカーブに突っ込もうとしているんだからその恐怖は計り知れない……そもそもこの速度で突っ込むって事はましか！？

「…！！」

凄まじい勢いでシフトダウン、なんか足も忙しそうだ。
そしてスキール音を立ててなんとハチゴーはドリフトした！

「きゃあああ！！死ぬ！死ぬぅぅぅ！！！」

「あはは！保坂さんなんかこれ面白いよ！？」

「一歩間違ったら死ぬわ！」

榛名は叫び早川は楽しそう…なにこのギャップ？
ってまたコーナーだぁぁ！！今度はドリフトとまではいかなかったけど結構怖い！！しかも何！？昼間からギャラリーがいるし！

ーーーっでここは充の耳には聞こえない場所…つまり車外ーーー

「な、なんだあの車！？」

「すげぇ！ＦＤと互角だ！！」

ーーーしかも補足するとこいつらの作画モロし○のーーー

「……あれはハチロクじゃない。ハチゴーだ」

「は、ハチゴー！？」

「ああ、単にターボを搭載しただけのようだが性能自体はＦＤの敵になるようなものではない」

「…じゃあ、何があの勝負を？」

「あるとすれば…ドラテクだ。俺の公道最速理論なら十分に可能性はありえる」

「…さ、流石…高柳たかやなぎ）りょーすけさん」

ーーー再び車内ーーー

なんだ、なんなんだ！？

そういえば今のギャラリーの中にモロアイツにそっくりだけどアフロチャツ来た奴がいたけどあそこまでやって大丈夫なの？もう俺しーらね！

「…仕掛けるポイントは…この先の2連続ヘアピンカーブ！！」

何かなりきってるし五十鈴先生！ってかこれ頭〇字Ｄだけじゃないだろいろいろと！あんた教師ってだけで絶対アレでしょ！もう絶対何か真似してればおもしろいやという中〇人とか韓〇人的な思考でやってるしょこれ！

「ってうヴぉあ！！」

その時、何があったか性格にはわからない。ただいえる事は一つ…
…必殺「溝〇し」！
五十鈴先生はいとも簡単に黄色いＲＸ－７を抜いた…あ！それより
も大変な事思い出した！確か以外にも榛名は大丈夫みたいだけど以
外な事に早川は車に弱いらしい。大丈夫なのかこんな走りされて？

「お、おい早川？」

「ふえ？何？」

「大丈夫か？お前乗り物に酔いやすいんじゃなかったっけ？」

「うん、優希ね本当は車にの…」

「ってそこでもパクリかよ！！！もういいよ言いたい事わかったか
ら！」

「へ？そうですか？」

－－－再び車の外、って別地点－－－

「札〇ナンバー…らしいな……これは面白い。高柳けぇすけを破る
相手がこんな極寒の大地にもいたとはな……次は俺のＲ３２が貴様
の相手になるぜ。当丸のハチゴー！！！」

－－－ちなみに外見はナ〇トキッズのあいつに似たような感じ－－－
－－－そんでもって保坂視点に戻ります－－－
Ｈ道Ｓ半島Ｋ村……

もう遅いので峠を出て近いここで寝泊りする事になった。

「ふっ、この展開だと次の相手はＲ３２だな」

「五十鈴先生！もうバトルの話はどうでもいいですから手伝ってください！」

「しょうがないねぇ、あぁ腕痛い足痛い…」

もう、来るだけで疲れた。

早川は楽しかったらしいけど俺は凡人なんだ！あ、読者の皆は安全運転で！真似？しちゃだめだと思うけど俺は知らないよ！警察沙汰になっても知らないよ！

Ｐａｒｔ２２，ＡＥ８５ｖｓＦＤ３Ｓ　（後書き）

おまけ：充と優希の会談。

「なあ早川？」

「なに？」

「…いや、今暇？」

「うん」

「よし、じゃあ愚痴ろうぜ」

「ぐち？」

俺と早川は椅子に座り、テーブルで向かい合った。
この瞬間の雰囲気は開戦決定の御前会議並に厳かであった。

「…なぁ早川」

「なに？」

「俺は思ったんだ、今回の話大丈夫なのか？」

「う～ん、いっつもこの小説ぶっ飛んでるし、大丈夫じゃない？」

「いややばいだろ？」

「大丈夫大丈夫！生○会シリーズとかパロディの宝庫だし」

「いや、あれって許可取ってるんじゃないの？」

「なに保坂さん？大丈夫大丈夫！フランスの著作権法第１２２条によるとパロディは著作権侵害でないと明文規定されてるから」

「いや、それフランスでしょ！？ここ日本だから、ジャパンだから、ヤーパンだから！」

「藤原定家の歌にパロがあるよ？」

「お、お前…無駄な知識は豊富だな……ってか待てよ。それ何年前だよ？」

「さあ？でもいいじゃん！それになろうならよくある事なのです！」

いや…不安です。

…まあ、俺は思った。俺ら作中のキャラに罪はない。従ってなんかあっても責任を取るのは俺ではなく！作者だぁ！！消されたりしても知らないからねあたしゃ！

（オカマ口調）

「えっ？俺っすか？嫌っすよ」

っと突如登場した奴（執筆者＝作者）

ってかうわっ！根性ねぇ作者！もう小説書くなよ！

そこは普通かかってこいとか宣言するもんだろ！！

「ってか、後書きでごたごた議論するのもどうかと思うんだよね？

充君？」

「そういう貴方も乗ってるじゃないですか？なんですか？艦〇小説のパクリですか？」

「いや、俺そういうの興味ねーし」

うわこの人！今間違いなくこの世界の数万数十万…いやもしかすると数百万という人を敵に回した！俺は知らない、知らないからな！

「あ～あ、疲れたっと……さて、気晴らしに昨日落した（ＤＬ）例の無料で配布とかいう会社にとっては自滅行為じゃないかっていうエロゲーでもする－－－－」

「「アホッ！！」」

「疲れてるならすんなボケェッ！！」

「後書きで公然とエロなんて言葉使わないでください！」

「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！個人的に好みの√は－－－－」

「ゲームの話はせんでええ！！！！√って確かに子供には通じないかもしれないけどでもそれ小学生までだから！！中ボーには通じんぞ馬鹿め！！」

「…さて、なにこれ？収集がつきそうにありません。結局これ何の意味があったんでしょう」

まさに後書きの無駄遣いであった……

――っというわけで、これからも真面目に書きますのでよろしくお願いします――

ｐａｒｔ２３．夜は大変なのです！

ああ、ここ、夕焼けが綺麗だ。

「梨佳、見ろ。夕焼けが綺麗だろ？」

「うん…」

「ミーシャさん！夕日は綺麗だけど君は夕日じゃない、始まりの朝日だよ」

「ほんと？ありがとう…」

ふっ、なんとなく想像はついていたけどあのバカップルは！なんかちょっと羨ましいけど見ててすごく腹がたちます！

「うん、絶好の告白ポイントだ。今から俺は中原さんに……」

「あ～そ～、玉砕しても知らねーぞ小太郎？」

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！」

小太郎はケツから炎が出て、Ｍｅ１６３コメートのように急上昇していった……

って実行前に玉砕ってどんだけぇぇぇぇ！！！

っとハイテンションで突っ込んでみる。

「綺麗ですね、夕焼けって」

「まったくです。自分もこれを見ながら苦しい日々を……」

「私もです。今も生徒の事を考えれば…」

「社会人っていろいろと大変ですね」

「ええ…」

って2人はなんかアダルティックだからやめてください！！
…いや、リアルでいうと痛い人に見られそうなので心の底で叫んだだけにしておきました。そういえば古賀さんも五十鈴先生もどくし…あれ？以外といいんじゃないのこれって？

でも五十鈴先生前に自分で年下が好きとか言っていたような言っていなかったような……どうでもいいや。

「中原先輩、綺麗ですね」

「そうですね」

「あ、高臣先輩！折角ですからケータイで写真取りますか？」

「お、いいねいいね！ボクも撮る！」

あっちは何やら健全な話をしていた。
…ん？何か真紅が恥かしそうな顔でトイレから出てきた。そういえばあいつ今日は何か様子がおかしいというか…到着した途端にトイレいってたな。どうしたんだべ？

「よっ！真紅」

「あっ！おお…お兄ちゃん！」

「どうした？腹調子でも悪いのか？」

「い、いやそうじゃなくて！あはは！」

「ぽんぽん壊したら今晩バーベキュー食えないだろ？一応薬は…」

「違うってば！ぽんぽん言うなー子供じゃないもん！お兄ちゃんのバカー！！！」

「ギャアアア！！！ぐぇっぶ。ぇっ！！ひ、ひどいっす…がくり…」

バキィッ！！っと凄まじい音が周囲に響き俺は１０ｍほどぶっ飛ばされ木に背中を打ちつけた。なんというありがちなやられ方。そして真紅は相変わらず恥かしそうだった。

…まさか！？アレか！？見た目は小学生でも一応年齢は…そうか！アレなのか！！！！そういえば早川も月に定期的にアレっぽく……いや、なんでもない。黙っておくことにしよう。

「保坂さん？」

「うわっ！！…なんだ早川か」

「どうしたの？そんな所で１人で？」

「いや、な、なんでもない」

ぜってぇ言えねぇ……1人のけ者にされてるとか。
って、その後の事だけどわざわざ書くような事もなかったから簡単にまとめると飯を食った後花火とかして遊んだりした。

でも…雄一×井上、太一×ミーシャ……
そして中原先輩にアタックしようとしている小太郎…

なんだこの劣等感は!?

「保坂〜」

「ん?なんだたか…ギャアアア!!!!」

花火が!花火が俺の体に!!!!

「あづぅぅぅぅ!!!!」

「ハハハハ!予想通り予想通り!」

「普通熱がるわ!」

「わかるぞ充、それは熱い!でも俺は朋花にされた……ギャァァァアス!!!!」

「ほれほれ!」

「あずぅいあづぅい!!!!」

「ボクにやられたいっていってたのは誰だぁ！」

「ちょ！火傷するｗｗｗらめぇｗｗｗｗｗ」

高臣は花火で圭一を攻撃した。あれは強烈だ、俺にやった時のようなお遊びとは違う。圭一、哀れだ…でも考えてみれば圭一は同志だ。いろいろな意味で。

「お兄ちゃん！」

「ん？なんだしん……うおわっ！！」

ねずみ花火に一瞬俺は驚く。

「「「きゃはははは！！！」」」

「お兄ちゃんおもしろい！！」

「ちょ！ちょっと充ちゃんかわいいかも！」

「保坂さんもう一回もう一回！」

「絶対ヤダ！！」

俺？遊ばれてる？

「くそ！充羨ましい…そんなに多くの女の子と遊んでもらえるなんて…うぅぅ」

「泣くな！泣くな圭一！お前の春はこれからだぞ！！」

「俺なんてどうせ来たってプラハの春だぁぁぁうわあああああ！！」

ダメだこいつ、重症だ。

おまけに髪の毛微妙に焦げてるし……

「ははは、なんだか皆さんおもしろそうですね」

「あ、中原先輩。自分は面白いというより災難です」

「そうですか？…でも、本当に嫌いでしたら誰も相手にしないと思いますよ？」

確かに…いわれてみればそうなんだけど…その理屈だと圭一ですら嫌われてないって事になりますよ中原先輩？

「あれ？中原先輩は遊んだりしないんですか？」

「ええ、私あまり得意じゃないので……」

「中原先輩！ほらほら水鉄砲！！」

「きゃっ！！」

高臣はどこから持ってきたんだが水鉄砲を中原先輩にかけた。ついでに俺もとばっちりを食らって……ってとんでもねぇ所が濡れてる！！！！

「あちゃぁ～！保坂お漏らし？」

「違う違う！！ＮＯだよＮｅｉｎ（ナイン）だよ！！！」

「ふふふ…やりましたね。私少し本気になります！」

っと中原先輩が目覚めたように走り出し近くのテーブルにあった水鉄砲を取る。既に弾（水）は装填（？）済みらしく早急な攻撃が可能だった。

…ってか、こういう遊びって普通海水浴とかプールとかでしない？

あ、ちなみに俺達はコテージに泊まるが風呂はない、でも予備の服あるから安心…あ、なるほど。予備の服があるから滅茶苦茶やってるのか。納得…じゃねえよ！股間のあたりが濡れてたらいろいろ勘違いされる！…だけど皆さんの暴走が止まらない限りは着替えるのは避けたほうがいい…と思う。

「うんうん、はしゃぐ中原さんもかわいいぜ！」

「うわっ！誰かと思ったら小太郎か…」

「なんだね？文句あるかね？」

「いえ…特に…」

次の瞬間、俺の背中に何かやわらかいものがあたる…こ、これってまさか！？

「ねぇ保坂ぁ……あぁなんかいいかもこれ…」

「い、五十鈴先生！！！やめてください！！！」

なんというデリカシーのなさ!!ってゆーか酒くさ!!!!
酔った勢いで暴走していると見た!ここは一つ。

「ああもうやってられるか畜生!!!」

俺はものすごい勢いで疾走しました。

「あぁ!!私の保坂ぁぁぁ」

誰が五十鈴先生のものになるか!!なってたまるか!!
…そういうわけで数百メートル走った末、テントが建ち並ぶ中を俺は一言も喋らず、溜息をつきながら走っていた。

家族連れやカップル、全国を旅している若者や大学生が主にここにいる奴ら、みんないたって普通の人に見える。そこで俺は思ったんだ。

なんで俺の周りって個性ありすぎな奴らばっかり集まるんだろう?
あと、もしこの中に刺客がいたらどうしよう?……いや、流石に夏休みだからって好き好んで俺を殺そうとはしないよな!流石に…

ーーーっで本当に夜ーーー

眠れない…俺はさっき居た場所とは正反対にある子供が好きそうな網型ジャングルジムにでも登ってぼーっとしていた。でも飽きたから降りた。

いい加減寝ようと思ったが……

「保坂さん?」

「うっ！」

「な、なにしてるの？」

突如として俺の目の前に現れた早川…いや、お前が何しに？

「眠れないという地獄と格闘中さ」

「そ、そうなの？私もなんか眠くない」

ですよねー、なんか折角だから寝たくないって気持ちありますよねー。それってガキって証拠か？もしかして俺早川レベル！？

「そこらへんうろうろしていれば大丈夫だよ」

「そ、そうか…って」

「えっ」

なんか右足が地面についている感覚がなくなった。それは早川も同じはずだ。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」

……

……

…

「いてて…ちょっ！！」

なんてこったい！！コンクリートで固められた穴に落ちた。幸い下は土だったし2人とも特に怪我はなかった。ただ物理的に衝撃を受けて一時的にあちこちがいたいという状態だった。

「あははは、落ちちゃったね」

「こんな所に穴があるとかなんなんだよここ……」

「まあまあ！それにこれだけ深いんだから命綱が……あれ！？」

確かに、普通こういう遊び場には綱があるはずだ…しかしない。どこか探した。

俺は妖しい物を発見、それはまさに綱だったが意地悪な奴がやったのかそれは上にあった。

「あらー」

「こりゃあダメだ、根性で登るしかなさそうだな……よぉし…おるぅああ！！！」

「がんばれ保坂さん！」

俺はダッシュで助走し、登ろうとしたがなんせコンクリート、岩肌だったら登れたかもしれないけどこれは流石に無理があった。

「いてっ！」

「大丈夫保坂さん!?」

ヤバス……腰打った!

「やばいかも、腰打ったぜ!」

「地震りげに言わないでください!」

「すまんすまん……そ、そうだ!早川、お前ハイジャンプできたよな?それで!」

「ええ、夜だし視界悪いからしたくない」

一理ある理由だけどでも俺から言わせてもらえばどうしてこんな都合の悪い時に限って特技って使えないのぉぉぉぉ!!!!!
…ここまでくると、俺は本格的にここで寝る事を考え始めた。でも早川がいる。夜だから俺はちょっと薄手だけど上着を着ている、でも早川はお気に入りっらしい白いワンピースを着ていた。だけどこれじゃ寒いだろう流石に……

「どうしよう保坂さん?」

「どうするっても、俺の腰が健在なら何度でもチャレンジするけど……これじゃあな、ここで一晩過ごすしかなさそうだぜ」

ってかこんな地雷のような遊具が何故ここにと俺は思ったけど。
でも一晩ここで過ごすしかなさそうだし……

「へくしゅっ!!うぅ〜さむいよぉ…」

「だ、大丈夫か早川？」

「う～ん…」

「ほ、ほれ！これ掛けてろ」

「えっ！？」

俺は例によって上着を早川に被せた。

「い、いいんですか？保坂さん寒くないの？」

「小学生の頃冬場で上半身裸になっても風邪引かなかった男だ。夏場の夜ぐらい凌いでやるぜ」

「で、でも……」

「海楽しみにしてるんだろ？仮に俺は風邪引いたとしても全然問題ないから。お前は健康な状態でいてくれ」

「…うん」

そういって俺は寝ようとした。今なら眠れそうだ。

薄れゆく意識の中、体の左にあたたかくて、妙に感触がよくて、そしてくっついていると癒される感じのものがくっついている。確か早川が左にいた…けど俺には意識がもうほとんど……結局何だろう…あぁもうだめぽ……

Ｐａｒｔ２３．夜は大変なのです！（後書き）

おまけ：再び！！充と優希の会談

「ってまたこのいらないコーナーか」

「まあまあ、いいじゃない」

「だいたい１日に２話投稿とか…どんだけ暇人なんだ作者？」

「いやぁ、リアルの話をここでするのはどうかと思うのでその件についてはご勘弁を…。それに自分はあの人を見習い！」

「いや誰だよ！！」

「それより今回の後半、ギャク分が少ないですね？」

「いや、だってあれじゃない。マンネリ化してるっつーか。そろそろ話に進展があってもいい気がしたんだよ」

ってか俺は思った。

別に俺と早川の会談でもないような？まあ、どうでもいいか。こんなコーナーに向きになる俺も馬鹿だわ。

…ってもこの調子だと俺って早川とくっつく設定になるの？いや、後書きだからってすべてを告白するのはどうかと思うんだけど。もっとなんかあれだ。

「充は○○とくっついてほしい！」とかあるだろ。たとえ俺が望ん

でいなくともそう思っている奴がいるはずだ。って結論誰がいいの？

・治三郎↑
・治三郎
・治三郎

なんじゃこの選択肢は！！

「そりゃあきまってるじゃないか、このほうが面白いかと」

「地の文を読むな！！」

「だって書いてるの俺だし…ああ、そうだ。俺的にはゲイとかいうのはどうかと思うけどそれも需要があるんだな。よし、いっそそっちの路線に…」

「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

ーーーこの小説はアッー！な事は勿論、いたって健全ですーーー

「もういいわ！もうこのコーナー嫌だぁぁ！！」

それが…俺の素直な感想だった…

ーーー貧乏な彼女…終ーーー

「まだ続くわい！」

俺は突っ込んだ。

Ｐａｒｔ２４．夏だ！海だ！でも俺は…

……耳にかすかに鴎の鳴き声が聞こえる。
鳴き声はだんだんと大きくなってゆく、そして俺は目を開けた。横を見たら早川が俺の事を見ていた。

「あ、お…おはよう」

「おはよ…ぶぅえっくしゅ！！」

な、なんだ！？
鼻水が！しかも喉痛！あと滅茶苦茶だる！！！

「ほ、保坂さん…大丈夫…ですか？」

「だ…だいじょーぶ、これぐらいへーきさ……うっ…ゲホッ！ゴホッ！！」

「ごめんなさい……私だけあたたかい思いしてごめんなさい、風邪ひかせてごめんなさい…」

「な、問題ないない。昨日言ったとおり俺風邪引いても問題ないから」

っと慰めてみるものの、やっぱり優希はいつもの笑顔をみせようとはしなかった。
いつもよりすぐく暗い。ん…なんか声が？

「さらばー、童貞、旅立つ俺は～。ド級戦艦、こ～む～ら～」

ひっでえ歌詞！！！！
ってかこの声圭一…

「あ、穴に落ちてる充みっけ！…ってかなんで早川さんと2人で！？まさかお前ら…」

「ちっげぇわ！！！変な誤解すん…ゴホッ！！ヴゥェホッ！！ゲホッ！！」

「お、おい。やばそうな咳してるな。大丈夫か充？」

「お、俺はこの通りピンピンしてるぜ！それよりそのロープを！」

「お、おう！」

圭一は優しい事に命綱をこっちに投げてきてくれた。
よかった、ようやく出られる！

こうして穴から抜けられたはいいが…

「ぜぇ！はぁ…ぜぇ！はぁ…ゲホッ！ゲホッ！」

「お、おい。マジで大丈夫か？」

「俺はピンピンしとる！！！！さて、朝飯食うべ！」

「あ、ああ」

俺は一見元気なように振る舞い、心配をかけないようにした。

そして俺は朝食を食べるべく、本来寝る場所であるコテージの近くに向った。

ーーーー方優希はーーー

「保坂さん……無理…しないで、ごめん…なさい」

ーーーっで充に戻ってーーー

あぁ！調子悪！！
朝飯が喉を通過するときやたらと痛む！

「ちょ、ちょっと充ちゃん！？鼻水とかひどいしさっきから咳ひどいよ？大丈夫？」

「俺は成績よくとも真性の馬鹿だ！風邪などひかんぜ！！」

っていってもバレバレな気がするんだけど、榛名も皆さんも俺を心配しているようだった。いつもなら昨日の花火とか水鉄砲とかのように悪気はなくともお遊び気分でいたずらしてくる高臣すら今日は俺を心配しているようだった。

その後準備を済ませ車に乗って海水浴場へ向う…海水浴場は下にある前浜海水浴場とかいう所で人もそれなりに多く、結構賑わっている様子だ。

「おおおおお！！！来た！キタァァァァァ」

圭一が雄叫びをあげる。
なんたって俺達の前には水着の少女（1人成人）がいるからだ。皆

さんそれぞれ自分の水着を着用…って何故早川だけスク水？

「あれ？早川、なんでスク水？」

「こ、これしかないからしかたないじゃん」

「そ、そっか…ふぇ…ぶぅえっくしょ！！！…寒！！」

「気温あがってきてるのに…これは重症ね！ボクの予想だと３８度近いかも！」

えー？そんなに重症なの？
ってか高臣の予想って信じて大丈夫なのか？

さて、俺は病人なので遊べません。
一応反対を押し切って遊べるように水着は着たけどこりゃ無理だわ……

っというわけで俺は皆さんの様子を実況する事にした。
雄一×井上と太一×ミーシャさんのバカップルは相変わらず、榛名と真紅と高臣と中原先輩は４人で仲よさそうに、五十鈴先生は肌を焼いているっぽく古賀３佐は足だけ海につかっているようだけど自衛隊で鍛え上げたその肉体がまぶしい。

圭一と小太郎の二大彼女なしコンビは榛名達に混ぜてもらう形で楽しそうに遊んでいた。
はぁ、俺もできりゃ中に入りたかったかも。でもこれじゃ無理っす……あれ？そういえば１人足りないような？

っと俺は辛い体に鞭を撃打ち、砂浜を歩いた。

ふと視界に小学校高学年ぐらいの女の子が目に入る。

…あれ？真紅より大人に見えるの俺だけ？まあそんなのはおいといて……いた！

トイレに行っていたらしい…ふっ、心配して探してた俺が馬鹿だったかも……あぁ！ダルい！！死ぬ！

……ん？

「お嬢ちゃん可愛いねぇ、１人？」

「えっ？いえ…」

「そうなのかぁ」

…これなんて誘拐？

ってかあいつら前に真紅を襲おうとした１人デブ人眼鏡でガリの２人組じゃないか。なんという再登場。

「ちょっと来てよぉ、おいしいものとかあるよ？」

幼稚園児しか吊れねぇだろそれ！

もっとなんかいろいろ方法…って味方してる場合じゃねえ！！！

「おい…」

「ほ、保坂さん！？」

「げぇっ！連れっててめえかよ！！」

「ど、どうする兄貴!?」

「おい、よく見ろ……あいつ弱ってるみたいだぞ」

まずい!もうバレてる!
そう、確かに誰からみても俺は病人に見えるほど俺は調子が悪い。
できる事なら薬飲んでベットで寝てたいぐらいだ。

「ほ…ほさ」

「うるせぇ!ちょっと黙ってろ。俺達のほうが頼りあるって所見せてやるぜ」

2人は間接を鳴らしながら俺に近づいてきた。
仕方ないから俺も全身に力を入れる…あ~あ、どこまで戦える事やら。

「くらえ!!!」

っと!!くらえといわれて食らう奴がいるか!!!
俺は思いっきりデブに対しパンチをしたがあんまりきいていない。
それどころかむしろ奴らを怒らせてしまったっぽい。

う~んと、これはとりあうず、人生＼（＾ｏ＾）／オワタでいいのかな?
…しかし突如俺の前に早川が現れた。

「保坂さんに手を出すな!!」

目怖!!!

わかりやすくいえばひ○らしのキャラがいっちゃった感じの目つきだ。普段はいい子でも怒ると怖い……ありがちな設定といえばそうだけどいざ目の前でみるとかなり衝撃をうける。

「ぎゃああ、こ、怖！！」

「畜生！！覚えていろぉぉぉぉ！！！！」

2人は逃走していった。

…結局なんだったの？アレ？

「お、おい早川。大丈夫か？」

「私は大丈夫！…それより保坂さんは大丈夫？……すごく苦しそうだよ？」

「いや、ぶっちゃけていえば死ぬわもう」

正直な所それぐらい調子悪い。

あぁ早く家に帰りたい！！！

「し、死ぬ！？」

「いや、流石に表現がオーバーだったか？」

「あ、あたりまえでしょ！……その、本当に心配しているんだから…」

以外と人の心配もする奴だなコイツ…

俺はそう思った。なんというか、今までは見せなかった姿というか

…そんな感じがする。それがどういう意味か、自分でもさっぱりわからんが。

ま、いっか。

「ぶぇっくしゅん!!!」

「ほ、保坂さん!!ほ、ほら戻ろ?と、とりあえず帰りに薬局寄ってこ?帰りに寄り道しないように先生にもっていってもらっておくから」

「それは助かる、俺を蘇生させる七つの方法のひと…ぶぇっくしゅん!!!おぇ…まずい、気持ち悪!!」

「保坂さぁん!!そもそも俺を蘇生させる七つの方法って!?」

「そっちかよ!!」

っと俺は突っ込んでみる。

今更思った事なんだけど、俺って一応主役…らしいけど、なんかどう見てもエロゲーでよくある主人公の親友のムードメーカーのようにしか見えないのって俺だけ?いや、自分で自分を見て感想をいうのもどうかとは思ったけど。

「さて、とりあえず戻ろう?支えなくて大丈夫?」

「いや、支えてもらったらそれこそ皆さんの所に到着した際に俺の命が危なくなりますので」

「了解、倒れても知らないよ?」

「俺は不死身！なんどでも蘇るさ！！」

「ふふ、その様子だと大丈夫そうね。でも風邪をひかせてごめんなさい…」

「なぁになぁに！穴があるとも知らずに適当に歩いていた俺のせいだし、お前が気にする事はない……それより…寒！！」

「あわわわわ！！このままじゃ保坂さんが死んじゃうぅぅ！！」

「大丈夫だってヴぁ！！！！」

っまあ、辛いのを我慢した甲斐があったのかな？

とりあえず今朝から元気のなかった早川の元気を取り戻す事には成功したっぽい。その後薬局に寄って小太郎が「チハレベルのお前が９０式並になれるかもしれないぞ？１２０ｍｍ漢方薬！さぁ買え！！」といって変な薬を買わされそうになったけど。とめに入った榛名のおかげでまともな薬をゲット。

途中Ｒ－３２と五十鈴先生がバトルをしてはきそうになったけど無事我が家に到着、ようやく俺は体を休める空間に到達したのだった。

Ｐａｒｔ２５．またどこかへ…

その２日後、俺の風邪は完治した。

「保坂さん、よかったです」

「いや、これほど重度の風邪をひいたのも実に８年ぶり。その時同様俺はわりと短期間で熱をさげ、その後の僅かな時間で鼻水や喉の痛み、そして頭痛の消え去る…つくづく自分って丈夫だなって思った」

「あははは……確かにすごいけど、なんか心配して損しちゃったっていうか…」

「心配してくれるのはありがたいから気にするな。それにあの日はマジで死にそうだったし」

「確かに！五十鈴先生が帰りにぶっ飛ばした時なんて保坂さん魂が抜けてなくなってたしね」

さらっと怖い事をいうけどそれが事実。

マジであの時は死ぬかと思った。凄まじいエンジン音、耳元に響くスキール音、頭が痛いしとんでもない動きをされるから気持ちわるいし…もう二度と五十鈴先生の車に乗りたくない。

「もう一度行きたいね？」

「えっ？どこに？」

「海だよ海。ほら、何かと今回はいろいろ滅茶苦茶だったじゃない」

確かに、皆さんそろってついてきてくれたおかげでとってもカオスだった。

だけど６０％ぐらい病人だった俺が足をひっぱっていたわけだし、俺のせいでもある。

「だけど、考えてみれば旅費もないし。あてもないんだよね？」

一瞬俺の脳内にあの夜の野宿の時の早川が蘇る。

デジャブを感じました。なんかあの事件以来早川ちょっと変わったか？…俺だけか？違和感を感じるのは？

…とはいうものの、どうした？とか訊く事はできなかった。

そもそも事をそれほど重大なものだと思っているのは俺だけかもしれないし。

ただこの場で言える事は一つだろう。

「早川？」

「なに？」

「やっぱり、仕切り直ししたいのか？」

「…うん、今度はお詫びも兼ねて……」

結局あの時の海水浴、早川は楽しみにしていた海に一回も入らなかったとか。しかも俺に風邪をひかせたというたいして事でもない事ですっかり元気をなくしているっぽいし……これって俺のせい？

…いや俺のせいであってもなくてもここはもう一度行くべきなのかもしれない。こいつの事だからプールじゃ絶対足りないはずだ。

「…保坂さん？」

「な、なんだ？」

「やっぱり…迷惑？」

迷惑って…何が？

「今になってようやく気がついた事なんだけど…勝手に家に押しかけては勝手に済ませてもらって…それに皆のおかげもあるけれど、わがままを聞いて海まで連れてってもらって……でも結局保坂さんが苦しかっただけ。海なんか入れなかったし。それに日常でも何かと迷惑をかけているだけ…かも」

そりゃ確かに。今まで1人暮らしだったからトイレの鍵を開けてトイレをしていたら早川が入ってきてよくあるように理不尽ながらビンタを食らったりしたし。あと洗濯ぐらいは俺がやろうと思ったら早川の下着が混じってやりづらいと思っていたらそこに早川が現れ、見ないでと叫びながら回転キックをお見舞いされたりとか、うん。面倒くさい事はあった。

でもそこまで考えるほどの迷惑はかけてはいないと思うぞ、むしろ飯つくってくれとか起こしてもらったりとか。こっちが迷惑を掛けている気がする。そのおかげで元々壊滅的だった料理がもうなんの事やら、あっちの世界にいっちゃった気がする。それぐらい長い間料理はあいつに任せてたし。

…っと考えていたらまた早川が話し始めた。

「やっぱり…この家に来て迷惑ですか？

話というより質問だった。

「い、いや別に。俺はむしろお前がいないとやっていけなくなるほどのダメ人間になったとか？そういう感じで俺は全然迷惑に感じてないから！」

呼び止めている事には変わりない。でも今の言い方だと早川のせいで俺がダメ人間にみたいな…

全然説得になってない気が？はぁ、俺ってばかす…

「やっぱり、それじゃあ…私のせいで保坂さんがダメ人間になっちゃったみたいじゃないですか…」

まずい！これはまずい！

既にいつもの天然っぽさと明るさを見せず、口調も普通と敬語が混ざったようなのから完全に敬語になっていた。

「いや、そんな事はないと思うけど。そりゃあ掃除洗濯炊事とかあらゆる分野が出来なくなってきたし、財政的に余裕がないのも確かなんだけど…」

うわっ馬鹿！！なんでこんな時に限って無意識に追撃するような事を！！

「ごめんなさい…」

「いや、謝る事は…」

「やっぱり、お荷物な上に堕落の原因ですよね？…一人で…消えちゃったほうがいい…ですよね？」

「お、おい…」

なんかダメだ。早川（こいつ）が泣き出すのが恐ろしくてあんまり強く呼び止められない。この状況だと俺が怒鳴ったら周りも俺が悪いって事にするだろう。まあ事実そうなのかもしれないけど。

「私、貧乏人です。自宅もありません。だから家があって、食べ物を沢山食べるお金もあって、テレビも何時間でも見ててよくて…ついお金持ちだって勘違いしていました。やっぱり保坂さんも普通の人…お金なんてそんなにあるはずがありません…しかも保坂さん自身をダメにしていたなんて…」

「いや！ダメなのは元からだから――」

「ご迷惑おかけしてすみません…でした…」

「は、早川？…えぇ！？は、早川！！」

突然走り出し、向こうから扉が開け閉めされる音が聞こえた。

玄関に向う途中、顔なんて一回も見えなかったけど一瞬だけ涙らしいものを見せていた。

「…」

追えば止めれたはずなのに俺はただリビングで突っ立って沈黙する

だけだった。
今さら思い出してみれば、それはさっきのはあいつの勘違いもあるかもしれないけど、ほぼ俺が悪い気がする。あんな夜中に1人でぼーっとしてないで普通に寝てればあんな事にもならなかっただろうし、さっきも追撃するような事いわなかった家も当てもないあいつが涙を流しながら逃げる事もなかった…っと思う。

……

……

…

なんて考えていたらあっという間に日も沈み、早くも1日の明るい時間が終わろうとしていた。今日は昼飯すら食っていなかった。正直食欲がなかったけど流石に晩飯は食ったほうがいいだろうと思ってコンビニ弁当を買い、それを家に持ち帰りチンして食べた。

早川の手料理に慣れてしまったせいか、その味は不味くはなくともうまいとは感じなくなっていた。感覚が麻痺しているみたいだ。

……あ、メールだ。
…高臣かよ、なんなんだ?

『今夜暇だし、カラオケにでも誘おうと思ったんだけど優希ったら出ないんだよ。どこいったんだろ?何か知らない保坂?』

予想通り……なんて返信すればいいのやら…とりあえず。

『今朝出かけてから帰って来ないけど?ってか何回電話掛けたりメ

ール送ったりした？』

…すると３０秒もしないうちに返信がきた。

『ん～っと、両方合わせて１０回ぐらい？』

なんというしつこさ。

でも何で一回も出ないんだ？…まぁ数はどうでもいい、それさえ知ればちょっといけない技を使って通話記録を見る……あ、この小説を読んでる皆様へ、犯罪はやっちゃだめだぜ？制服さんが家に来ちゃうぞ？

まあそれはともかく、なんとか情報をキャッチした。

流石俺、ハッカーに向いてるかも。

……ってなんじゃこりゃ！？

通話記録は１０回とも十五島公園……ってこりゃ冗談じゃねーぞ！！

こっから何ｋｍあると思ってるんだ？あとメールのほうも前部そこ…これってわざと出てないか、あるいはケータイを捨てた。

前者だったら高臣だし、出るはずだ。

…まさか後者！？…そういえばあいつ出て行く前…

「…一人で…消えちゃったほうがいい…ですよね？」

っとか言ってた気が！！

「…あんのばか！」

俺はとりあえずケータイと財布を持ち、自転車に乗ろうとしたがも

う何年もノッテらずサビサビで使えそうにない、仕方ないから走って行く事にした。

…思えば行き場もないあいつと会って４ヶ月、４ヶ月前ならとりうえずどうでもよかったかもしれないけど、今じゃそう思うことすら不可能……よくわからん。

ただ、言える事はただ一つ。

「生きていてくれ早川！！畜生！！」

…ちなみにここ住宅街です。しかも今夜です。

恥かしい事を叫んじゃった気がするけどもう後の事なんてどうでもよかった。

part26．心配

これってこんな話だったっけ？
もっと呑気でシリアスっぽいシーンがない話だった気がするけど…
まぁそんなの気にしている暇はない！

……っとはいうものの、流石に手がかりの一つとなる十五島公園まで自分の足で走るのはしんどい…いや、早川だって自分の足で行ったに違いない！それを考えたら男の俺がめげどうする！
…すると近くのマンションでふと目に自転車がある。まだ使えそうな不法投棄車だ。しかも走行可能な状態だった。

…誰のか知らんけど借りるぜ！！

――それからしばらくして――

夜の公園…誰もいない。
聞こえるとすれば川の音と虫の鳴き声……きっと蚊に刺されてひどい目に遭うだろう…だがそんな事より早川だ。しかしケータイなんてものはどこにも落ちていない。

……仕方ない、とれあえず俺は川でも見ながら休む事にした。流石にもう体力が……今後の捜索の事も考えれば少し体力を温存しておく必要がある。とにかくあいつを見つけるまでは家に帰らない覚悟だ。
そう心に決め、川を見ていた。

今日だけは例年より少し気温が低く、しかも川は目の前で夜…涼しいというか肌寒い。ここで寝たらまあ風邪はひくと思う。俺のケー

タイにはメールがたくさん届いていた。皆早川の消息を心配しているようだ。

「…ぐぉぁっ！！」

突然俺の背中に誰かがぶつかり俺は川に落ちそうになった。
…ちょｗｗｗ夜の川って！折角病み上がりなのにこれはヤバスｗｗｗ

ガシッ！！

っと思ったら後ろの人は俺の手を掴んできた。

「ご、ごめんなさい」

そして謝る声が聞こえ……はい？この声は？
どこかで見たことある人でした。

「えっ？……保坂さん…」

「は、早川？」

おお！！生きていた！！なんてあやつは生きておったぞい！！
…ってくだらない喜び方している場合じゃないぞ！
とりあえずここではあれなので公園の中に移動、ベンチに座った。
夜のベンチ…俺の知識ではこういう場所には阿〇さんのような人がいそうなイメージだけど、こんな田舎じゃそんなノンケだって構わず食っちまう男が待機しているはずがない。

そもそも獲物が来ないだろ。

「…保坂さん？」

「なんだ？」

今朝同様、非常に暗い、隣にいるのが気まずいぐらいだ。

「なんで、ついてきたんですか？」

ついてきたっていうか…ちょっと口には言えない手段を使って場所を特定したとかなんて絶対言えないな。うん。

それにあんまり下手なことを言うとまた逃げ出してしまいそうだ。

「…ほれ」

俺は自分のケータイを早川に見せた。

「ふぇ？」

「俺は全然迷惑していない。むしろ謝って感謝したいぐらいだ」

「か、感謝？」

「ごめん、何も考えないでお前を傷つけるような事言って…そこまで考えてるとは思ってなかったからさ、って感謝のほうは自炊もできない俺にいつもいろいろしてくれてありがとう」

「そ…それは居候の身だったから…榛名ちゃんだっていたわけですし……」

「いや、最近榛名は部活も忙しいらしいから今頃アレだ。多分お前がいなかったらレトルト三昧だった気がするんだ」

実際榛名が中学生の頃は部活の大会が近い時や受験勉強の時は榛名の負担をすこしでも減らすためにレトルト三昧を味わった。むなしかったけど俺はそれでよかったと思っている。

今だって早川がいなかったらそうだったとは思う、が早川の飯はうまい。もうレトルト食品が食えないぐらいかもしれない。

ぶっちゃけていえば早川の料理を俺は気にいっていた。毎日味噌汁作ってくれ！みたいなセリフがあるけど満更それも嘘ではない気がした。いや、別に付き合ってくれとかそういうわけじゃないんだけど……これをいうとツンデレか？

まあそれはおいといて、今早川に消えてもらったら皆悲しむはずだ。そうさせてはいけない…と思ったら今自分がやっていることがすごく責任重大な事である気がした。

「…でも、それじゃあ保坂さんがだめ――」

「俺は元からダメ人間って前にも言っただろ？気にしなくていい、不安だったら今度からは手伝ってやる。…っていうか迷惑かけさせているんだからそれが普通だと俺は思う」

「…受け入れて……くれるんですか？」

「当たり前だろ！…一人で…消えちゃったほうがいいとか言ってたけど…間違っても自ら命を絶とうとするな！」

「…ほ、保坂さん…ごめんなさい。本当にごめんなさい！」

「早川、俺はいいから自分の事を大切にしてくれ…」

俺は早川をそっと抱きしめた。
こんな事、学校でやればそれこそ野郎どもにからかわれるだろう。
最初っからいちゃつくタイプの太一は話が別だけど。

俺はそーっと早川の顔を伺う。
早川は涙をボロボロ流し、俺の胸の中で思いっ切り泣いている。一瞬本当にどこにいったか分からなくなって焦ったし、見つかった後も俺の話を聞いてくれるかは微妙だとおもった。

でもこうしていると単純な奴だった。だけど憎めない。
こいつは単に俺の事を心配していただけだ、そして自分が居候の身で俺に迷惑をかけているんじゃないかとも思っていた。そこまで考えているんならもう俺も何も言えない。

「…帰るか？ここ寒いぞ？」

「うん」

まだ半泣きだけど大分落ち着いたみたいだ。よかった。

ーーー帰路ーーー

「あ、そういえばお前ケータイ…」

「あはは、あれ？どこに置いたか忘れちゃった」

無くしちゃったよおい！！

「いいのか？あれ個人情報とか…」

「…あぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

気づくの遅！！！

「それってやばいじゃねーか？」

「やばいやばい！保坂さん探そ！？」

「勿論！」

早川の個人情報が洩れる＝俺の情報も洩れる。
これはほっとけない！！！結局明け方まで探してようやく見つけたのちに家に帰った。ちなみに皆に連絡は入れておいたから大事には至らなかった。

やれやれ、疲れたぜ。
この日は二人とも昼まで寝ていた…俺も流石に寝ずに十五島公園まで往復、しかもケータイという小さくて見つかりづらそうなものの捜索もやった。体全体がダルい…

「……ん？」

なぜか隣に早川が…、そしてリビング。
あ、そっか。疲れた勢いで二人で床に寝ていたのか…これなんて酔っ払い？時計を見たら１２時１５分…よし。

「早川、早川…」

「むにゅむにゅ……ほぁっ!?」

変な声！今の何!?

「保坂さんおは……あれ?１２時１６分…」

時計の針は1分たったぽいらしく１６分を刺していた。早川は２０秒ぐらいボケーっとしていたが、意識を取り戻したのかあわて始めた。

「あわわわ!!お昼!お昼!!…食材がないのです!!!」

あわてて冷蔵庫をあけると何もなかった。

「早川!超音速レベルで買い物に行ってくる!!蕎麦かなんかでいい!?」

「なんでもいいよ!お願い!」

「ではこれより買い物を敢行します大佐!!」

こうしていつもの生活が戻ってきたっぽい。

そして……

ーーー夕方ーーー

「…そういえば早川。もう一度海行きたいっていってたな?」

「うん」

「…来年でいいか？俺バイトしてお金貯めようと思う」

「ええ！？…いいんですか？」

「お前の希望だろ？趣味とかには使わないように二人で管理するようにするか……」

すると突然電話がかかってきた。例によって相手は親父だった。

「もしもし？」

「もしもしイカよイカさんよ！！！」

「その電話に出た時野太い声でわけのわからない事を言うのは親父だな！！」

「ほう、わかるようになったじゃないか。実はだな、仕事は成功した」

「成功するの早！！！何の仕事！？」

ってかこの短期間に成功するとかありえないだろ普通！！

マジで親父って何者なんだ！？

「いやあ、実はだな。早川家と和解して二人で共同作業をしたらわりとすんなり…」

「和解！？和解ってマジなのか！？…ってか生きてるわけ？」

「おお、おやっさんもおっかさんも妹さんも元気そうだぞ？」

なんちゅーひどい展開！！！

やっぱりこの小説にシリアスとかそういうものはない！そうだ、ないに等しい。きっとそういうのが面倒くさいから和解させたに違いない！なんてテキトーな作者なんだ！！

「わかい？なにが？」

「早川、どうも俺の親父とお前の親が和解しったぽくて……つまりだ、俺もう命を狙われないっぽい」

「ほ、ほんと！？…でも和解ってあの二人まだ生きてるの…うぇ」

ですよねー、娘見捨てて逃げたんだからその反応は普通っすよねー。

「って、それを伝えたかっただけか親父？言っとくけど早川は帰る気なしだそうだ」

「うん！うん！あんな子を見捨てる親嫌なのです！！」

っと後ろで早川は自信ありげにいう。

普通ならここで「ダメだダメだ、帰ってきなさい」って相手の親が言うだろうが……

「それについては問題ない、当面サモアを拠点に活動するらしい」

今度はサモアっすか！？

「それでな、とりあえずだが和解を記念してお前らもいい歳、南の

島にご案内してやるぜ！！」

「はぁ！？南の島！？」

「そうそう！！保坂家が代々管理してきたマリアナ諸島にある小さい島で戦時中は軍に接収されて１２００人ほどの守備隊がいたらしいがあまりにマイナーすぎて日本やアメリカからも忘れられたという…」

そんなわけあるかぁぁぁぁぁ！！！！！

「今そいつらの子孫が島民で、って管理は我が保坂家がやっているという、日本領でもないけど日本人が管理、しかも俺の島！！いい天国だぞ！？是非招待したる！！手薬煉ひいてまってるぞ！！」

そんな島聞いたことないし！代替島買って管理するだけの金あるならもっと俺への仕送り金を増やせ！！！

「あ、そうだそうだ。別に早川家と講和したからって油断はすんな？古賀家が敵対関係である事には変わりない。保坂家と早川家の和平は中立の藤田家によってなされた。平成の薩長同盟といっても過言ではない。というわけだから８月中旬にオイパン島にちょっとこい、丘〇の飛行場に専用機を用意しておく」

「えっ？ちょっ！親父！！おい親父！！」

電話が切れ、俺は放心状態になった。

「なんだかよくわからないけどすごく超展開っぽいね保坂さん」

「……早川、水着用意しとけ」

「なんで？」

「オイパン島とかいう島に行くぞ」

「…はい！！？」

当然早川もオイパン島がどこかなんて知っているはずがない。
その後榛名も誘ってみたけどやっぱりオイパン島は知らないらしい、
当然真紅も知らん、面倒な事になりそうだから雄一達は誘わなかったが……

なぜか圭一にバレて圭一がついてくる事になってしまった。

「安心しろ！俺は真面目だ」

「どこが！？」

－－－８月１０日－－－

この日の早朝…俺達はとりあえず飛行場に行った。
どうなる事やら。

ｐａｒｔ２７．南の島

８月１０日の早朝、丘〇の飛行場には怪しげな飛行機があった。

ＨＯＳＡＫＡ－ａｉｒｌｉｎｅ

「なんっじやこりゃあああああ！！！！！！！！！」

「あれ？お前の家航空会社だっけ？」

圭一にそんな質問をされても答えられません！！

そして小太郎の影響かまたわかってしまったけどどう見ても目の前にある飛行機がベティに見えるのは俺だけでしょうか？

「不安かい充君？」

「えっ？田所のおっさん！？」

目の前の飛行服姿の男は田所啓二（たどころけいじ）、俺のおじさんだけどまだ３８歳…ここにいるって事は親父とグルなのか。

「皆さんはじめまして、充君のおじさんの田所と申します。本日は充君のお父様のご好意により、常夏の島『オイパン』島へご招待します」

「へえ、充ちゃんって実はお金持ちだったんだ」

「ちょ、ちが！」

「お兄ちゃん今度新しいケータイ買って！」

「はい！？」

「頼む！！エロゲーを毎年５０本以上買ってくれ！」

「年齢的に無理！！！ってか俺は金持ちじゃない！親父がおかしいだけ！！」

マジで親父って何者だ？本当はかたぎじゃないんじゃないのか！？

「さあ乗って」

「……これ、なんすか？」

「何って我が保坂エアラインの主力機である一式陸こ…いえ！ＨＡ－１でございます！！

保坂エアライン…航空会社なのはわかった。

でも親父、どうせ絡んでいるんだったら何故に俺に教えない？っていうか今一式陸攻って言いかけただろ！いいんかいそれ飛ばして！！

「心配するな、保坂エアラインは名ばかりで実はこれは自家用機だ。それにオリジナルと違ってターボプロップだし機体の強度も向上しているから多分墜落事故は起こさないよ」

た…多分！？

普通安心させるために絶対とかいうけど…多分って何故に自信なさげに！？滅茶苦茶不安になった！！

一一一時はまた経ちオイパン島一一一

厳しい日差し、四方に広がる海、まさに南国の島……

「うわぁ！すごいねゆーちゃん」

「本当に南の島だね！」

「優希お姉ちゃん見て見て！海の色が日本と違うね」

「おい充！本当に…本当にこの島って保坂家の私有地なのか！？」

「俺に聞くな！知らない…っていうか知りたくない！！」

飛行場は舗装すらされていない海に近い場所、遠くには古びた灯台と砲台跡、さらに飛行場には半分腐りかけている木造の高台、そしてわけのわからない旗が翻っていたけど…多分保坂家の家紋、余計に変な旗だったら困るからそういう事しておこう！

すると錨マークが入った帽子をかぶっている少々こきたない男二人が俺たちのところに走ってきた。

「おお！！充、敬礼されたぞ！ここは答礼すべきですぜ！」

「……ここは何時代っすか？」

マジで疑問に思いました。

雰囲気は平成というより昭和１０年代…なにこの海〇軍艦？

神〇寺大佐がいたりして…

俺達は男2人に、砂浜に近い場所にある木造の建物の前まで案内された。

「こちらが宿泊所であります。保坂殿に息子様がいらっしゃるという事なので勿論無料であります！」

「どうぞ！」

2人はやたらキビキビと動いていた。

「すごいね保坂さん」

「確かにすごい…あれ？」

当然こういうところって男女で部屋が分かれているわけだけど、男部屋も女部屋も鍵がしまっていたが俺達は鍵などという豪華なものは持っていなかった。

「よし、充！行け！」

「はぁ！？俺！？」

「保坂さん文句言わない、私も行くから」

「畜生圭一めぇ…」

圭一は偉そうなことをいいつつ何もしない。そういうタイプの男…つまり俺は奴に乗せられたっていうわけ。だからあいつは何もしないが俺はお仕事…誰か休ませてくれぇ！！

鍵がある部屋は無論扉がしまっている。一応俺達はノックをした。
コンコンっと音を立てるとドアの向こうから声が聞こえてきた。

「誰か！」

「ぎくっ！」

「ほほほほ、保坂さん保坂さん！なんか怖いよぉ！！」

誰か！って…あんた軍人かい！！って突っ込みたくなるような反応。

「ほ、保坂です…鍵を取りに来ました…」

俺は恐る恐る部屋に入るとこれまたこきたない男が椅子に座っていた。
壁には写真がたくさん、箪笥もあるが中身は不明、お花も飾ってある。

「オイパン島守備隊司令官、岡田徳道（おかだとくみち）、ちなみに階級は少佐だ」

しょ、少佐！？
一応目の前の岡田さんも親父の仲間…だよな？親父って何者！！？

「ほれ、鍵だ」

「あの、ちなみに岡田少佐、聞きたい事が…」

「なんだ？」

「なんで守備隊なんていているんですか？」

「ふっ、近頃古賀家の不審船がうろちょろしておるからな。ここは私有地、どこの軍も来てくれんだろうし警察もいない。万が一古賀家の人間が上陸してきた事を考え最低限の防衛能力が必要であると考えた。それがお前の親父の考えだよ」

一見正しい事いっているようだけどなんかいろいろとおかしい！まずどうやって武装した！！？……まぁ、例によって突っ込んだら負けだと思う。

その夜、周りの人が変って以外は特に変わった事もなく一晩が過ぎた…

ーーー翌日ーーー

「おおおおおお！！！！！」

目の前には水着の美少女たち…前回よりは少ないけど、でも圭一はそれでも大喜びだった。何故なら今回、早川はスク水ではなく別の水着を着用…遡ること3日前、俺と一緒に選びに行ったものだ。正直恥ずかしかった。

「いいなぁ！すばらしすぎるぞ！！スク水も萌えたがビキニもいいですねぇ…よくわかるぜ体のラインが！」

「充ちゃん、そこの変態ぶっ飛ばしてもいいと思うよ？」

「？」

榛名はもはや圭一を先輩ではなく単なる変態として扱っていた。そして早川はなんだかよくわかっていない様子だ。

「ひっど！俺ってそこまで嫌がられるタイプ！？」

「十分セクハラだと思います前原先輩！」

「前原！？おれそっちじゃないから！一応小村ですから！」

榛名からパロディを引っ張ってくるのもまた珍しい話。

それより暑い！！そりゃあオイパンというわけのわからない島だとしてもここは一応南の島だし、赤道に近いわけだから日本よりも暑いのは仕方ないけど…こりゃ耐えられん！

「嘘だ！」

真紅が突然そう叫び、なにやら危なっかしいものをもって圭一を追っかけまわした。

「Ｎｏｏｏ！！！だから俺はそっちのＫ１じゃないって！！！ってかそれモノホン？それやばくないか？ちょｗｗｗらめぇｗｗｗｗ」

その瞬間砂浜がレッドに染まり、圭一はグロテスクワールドになっていた。

あまりにグロくてモザイクがかけられるほどだ。これはひどい！

「あ、あの真紅？あれはマズくね？」

「大丈夫だよお兄ちゃん、どうせギャグ補正で元に戻るから」

ひっでえ!!!!確かに大人の都合で元に戻るっぽいけど。

「はぁ…はぁ…」

あ、元に戻った。

「ひ、ひどい目に遭った!!!!」

っていうかグロテスクワールドになっていたのに数秒で復活するお前がすごいよ!!!!

しかも真紅と榛名は死んじゃえばよかったのにという目で圭一を見てるし!お前らもう許してやってもいいと思うぞ?

「保坂さん」

「ん?どうした?」

「…ありがとう」

そういえばさりげなく海に連れてきてるっぽい。

しかも前回のような滅茶苦茶じゃない…これでよかった…っぽいな。

うん、めでたしめでたし…

……

……

…

あれ？もしかしてオチってこれだけ？
もう、いい加減ネタ切れなのか作者も？まあいいや。

part28．試験

あー、学校行きたくねー。

なんでって？お前ら夏休み明けの学生の気持ちがわからないのか？
ほら、あんだけ休みが続いて毎日ぐーだらしていたらさ、普通動くのが面倒くさくなるだろ？
それだよそれ、本当に俺今だるくてだるくて、早川と榛名に散々文句を言われた挙句の登校っすよ？

あ……マジで行きたくねぇ……

「お！充じゃないか！おっす！！」

っと太一が元気よさそうにあいさつしてきた。

「いやぁ優希ちゃんが1日行方不明になったっぽい騒動はちょいおどろ…」

「なんだ？用か？」

「なんだよぉ久々の再会だってのに！ってかお前どこいってたんだよ？ずいぶん焼けたたな！」

「失せろ…」

「はい？」

「失せろぉっ！！」

「きゃー！！みつるちゃんにおこられちゃったぼーん！！！！！」

ってかなんちゅー泣き方！？

まあいいや、うざいのはあっちにいったし。

その後、普通に教室に入ると休み明けでやる気のなさそうな奴が２人ほどいた。

「あ、保坂おはよ…」

「よう充…眠い…」

「……同志よ！！！！！」

見つけた！！俺の同志を！！

圭一、高臣…お前らは俺の同志！やっぱり夏休み明けは眠いし学校に来たくないっすよねぇ！！！！

「うわー、保坂さんがくだらない事で喜んでるー」

「ちょっと太一、どうしたの？」

「いいんだ、俺なんて、俺なんて休み明けブラザーズから追い出される運命に…」

「って太一も面倒くさいの？…実は私…なるほど。考える事は一緒

…日本もロシアも関係ないんだ！」

「なんかこっちでは国境を超えたメンドクサブラザーズが！！」

ってか俺思ったんだけど？
女も交じってるけどブラザーズでいいのかな？まあいいや、どうでも。

すると予鈴がなり、五十鈴先生が入ってきた。

「ふわあぁぁ……おはようございますぅ……んん……えっと…面倒事は起こさなかったみたいね…それでよしそれでよし…え～っと…伝達事項は……ぐぐぐ…今日は登校日なんだ…今日は登校日なんだ…」

ちょっ！五十鈴先生しっかり！！！！！
それじゃあ某４コマ漫画のあの人とキャラ被るからがんばってください！！！

「え～っと…あっという間に夏休みが明けたけど……来年は受験生なんだから気をぬかないように…以上、寝てよし」

それ先生のセリフじゃないでしょ！！！

「…あっ、大事な事忘れてた。そうそう、御存じ期末が近いからしっかり勉強してね…以上……」

うちの学校は２学期制、だから期末は９月あたりにある。
９月ったら体育祭はあるは修学旅行の準備はしなければならないわ、そして文化祭の準備もぼちぼち始めなきゃいけないわでいろいろと

忙しい時期。さらに試験もある……こんな事をいきなり宣告されたら俺はどうなるだろう？それは簡単！休み時間！！

「保坂さん」

「どうした？」

「こ、今回は一発合格したいから勉強教えて！」

「おお、構わないぞ」

まあ早川に教えるのは簡単だ。勉強面でも運動面でも飲み込みが早いし、苦手教科も見た目よりは少ないから。でも成績トップクラスの俺に集る奴は何人でもいるんだ。どういうことかわかるよな？

皆さんそろって俺を教師かなんかと間違っているんだ！！！誰がって？

「保坂～！優希だけずるいよ！ボクにも教えて！」

げっ！高臣！…一番面倒くさいぞこいつは！

さらにぞろぞろ男二人が…

「しげちー、ドンちゃん？まさかお前らも…」

「その通りだぞえヒェーイ！」

「頼む兄貴！俺達にもどうか！」

あ、しげちーとドンちゃんは俺の友、本名はしげちーが滋野千春（しげのちはる）、

ドンちゃんは土井戦利（どいせんり）となんか二人とも…っというかドンちゃんのほうはすっげえ名前だ。

「充ちゃ～ん！」

は、榛名！？

とても機嫌よさそうに勝手にうちのクラスに入ってきた1年生の榛名…もう、要件、予想つくだろ？

「今度こそ大丈夫なようにお願いします！」

「うぅ…」

俺の目の前には5人…これ無理でしょ？

「保坂さんお願い！」

「追試は嫌なんだよボク！もしハードル超えたらちゅーの上してあげるから！」

うん、きっと早川が普通の反応なんだろ。

ってかちゅーの上って何！？もしかして少年誌でやったらいけないようなエッチな事？…よし期待しよう…って何を考えてる俺！！心を鬼にし、耐えるんだ！！

「頼むよミッチー！ラーメン一杯！な？」

頼む、ミッチーって呼ぶのやめてくれしげちー！

あと…ラーメン一杯？俺ってラーメン一杯レベルなの！？

「兄貴！肉まん3個おごるから頼むよ～！」

やっぱり安いものレベルなのね俺って！！！

「充ちゃん、え～っと…私のヴァー○ンあげちゃおうか？」

「げっ！？」

「おおお！！うらやましいぞミッチー！！」

「兄貴！俺のどうて－－－」

「いらねぇっ！！！」

バキィッ！！！

うん、いい音！

っでも榛名のヴァー○ンならほしいかも…って待て待て待て！！変な事を想像するな俺！幼馴染って事で十分です！もう何なんだこいつら！？どんだけ俺に教えてもらいたいんだよ！

「無理無理無理無理！！俺教師じゃないから大人数に教えるのは無理！！」

「じゃあ勉強会なんてどう？お兄ちゃんの家で」

「ぶぅわぁっ！！！…びっくりした！！真紅か」

突然背後から声をかけられたら普通誰でもびっくりしますよねー？

ですよねー？

「なんだとはひどいなぁお兄ちゃん」

「ごめんごめん……でも案外お前の案も悪くないかもな」

皆さんで助け合えばなんとかなる。俺はそう思った。
そうすれば俺が皆さんに丁寧に教える手間が省ける。そうだ、それがいい！

っというわけで真紅案を採用、早速本日より勉強会を敢行し、９月のテストに備えた……その結果！！

……

……

…

えっ？どうしても知りたい？しょうがねーな。

「それじゃーテスト返すわよ……え～っと、荒井！池田！乾！越前……」

ものすごく…デジャブを感じます。

「滋野ー！」

「はい！……キタァァァア！！！」

ふぅ、よかったよかった。
太一とかあのへんも難なく通過。続いて高臣は受け取るも特に変わった表情を見せず、大丈夫だったっぽい…いや、わからないな。人は表情を隠す事ができるし、油断はできない。

やがて俺の番がきた。
その途中早川とすれ違いこっそりと会話した。

ヒソヒソ「どうだった？」

ヒソヒソ「ばっちりなのです！」

ふぅ、よかったよかった。
って俺は五十鈴先生の前に行く、紙が見えたが…

「はい、保坂。流石ね」

おお、相変わらずだったようだ。
やっぱり俺って元々頭がよかったわけ？畜生中学の時もっと真面目にやっとけばよかった……

「んじゃ、私から追試宣告を受けた者は後で来て。大丈夫！５分もしないわよ！あとは伝達事項なし！じゃあＨＲ終了！解散！」

教室に声が響く。皆さんテストの話をしているらしい。

って。

「高臣、どうだった？」

「えぇ？ボクね！玉砕したよ～！」

「そうかそうか…あはははは……」

「保坂～！ありがとー！大好きだよー！」

「どういたしましてー！あはははは……って馬鹿ーっ！！！」

俺は軽く高臣の頭を叩いた。

「うにゃっ！！！ごまかせると思ったのに！」

「タホー！！！（高臣の馬鹿！アホ！の略）」

っでしげちーもドンちゃんも無事通過、まさか高臣だけ？…いや、それはない。

だって……

「お～い充！！」

「お、圭一？まあ想像はつくが戦果報告をせよ」

「はっ！連隊は総力を挙げ！決死の攻撃を用紙に加えましたが我が方は甚大な被害を被りました！！今から部隊を再編し！再攻撃敢行を一週間後に予定しています！」

「ケホー！！（圭一の馬鹿！アホ！の略）それ追試じゃねーか！！

お前なんて分隊長も務まるかボケー！」

「ギャアアア！！！！」

やっぱり圭一もダメでした。

いつまで続くんだろ？これ？

Part29．銭湯戦線2009

俺、今買い物袋を両手にさげて帰宅中。

なんでかって？早川に頼まれたから。

そんなわけで今日はどんなうまい飯を作ってくれるか、期待しつつ家に帰ったら……悪夢は起こったのだ。

扉を開けた瞬間……

「保坂さぁ～ん！！！！」

「ど、どうした？」

「ふ、風呂釜がまた故障してます！」

「…はい！？」

どうやらそういう事らしい。

なんで？なんか狙ってる？まあそれは置いといて結局この日は銭湯に行くことになった。

「久しぶりだね、銭湯に行くの」

「そりゃあ家に風呂があるんだから、毎日行くわけないだろ」

「そうだね」

でも、俺はいつも警戒していた。
なんでかって？そりゃあもうアレさ。早川家とは講和したらしいけど古賀家はまだ敵らしいからさ。いやぁ面倒くさい面倒くさい。
ん？俺の耳に騒がしいけど嫌ではない音が聞こえてくる。
「あれ？路上ライブ？」
「早川の口からそれが出るとは思わなかった」
「ひど！そこまで馬鹿じゃないよぉ！！」
「悪い悪い、しかし結構人気っぽいな」
髪を染めた女の子が一人、見えそうで見えないのが惜しい！
…いや、そこは気にするところじゃないとは思うが思わず立ち止まってしまいそうだ。ってかもう止まってるけど。
「…おお」
そういえば早川って音楽好きらしい。
どういうのが好きかは知らないけど。
「…終わってからいくか？」
「うん」
こういうのも聞くのか。
「そういえば保坂さんって音楽得意？」

「えっ？何すかいきなり？…そうだな、演奏できない事もないけど……」

いっとくが俺は大体の教科は得意とかいってるけど音楽とかは普通、むし家庭科に次ぐ苦手なものでもある。ダークマターができてしまう家庭科よりはマシだと思うけど…ぶっちゃけていえば俺が演奏した事ある楽器なんて小学校の音楽の時間にやらされた笛と幼稚園の頃……

ーーー例によって過去ですぜ！ーーー

「は～い、今日はカスタネットを叩きましょう」

そういえば笛なんて吹けたもんじゃなかったし。これが一番まともだった気がした。

っでやる気なさそうに適当に叩いてた俺…滅茶苦茶ノリノリでう○たんとか言ってそうなぐらいに叩いてた隣の、誰か忘れたけど女の子。

「……ちゃん上手ね」

あれ？名前なんだっけ？まあいいや、ただ可愛い子だったってぐらいしか覚えてねーや。それにもう再会する事もないだろ。

「充君も上手よ」

「ほ、ホント！？」

「うん、上手上手」

「せんせーずるい！！！あみもほめてよー！」

「はいはい…」

あ、何気に俺もほめられたんだっけ？
いやぁ意外と覚えてるもんだねー過去って…なのに2~3日前の事
あんまり覚えてない俺って何！？

「保坂さん？」

ーーー現実ーーー

「はっ！？モンテスキュー！？」

「？……あの、終わったよ？」

「ええ！？…ああ、そうかうんうんなるへそ！」

「？」

よかったよかった。どうでもいいやって感じだ。あまりにも幼稚な
過去を振り返っていたなんてこいつには言えん！

しばらく歩くとようやく銭湯が見えた。

「じゃ、先にあがったら待ってるから」

「うん」

「あれ!?やっぱり!!!」

「ん?」

よく展開が読めません。
呼び止められ、後ろを振り向くとそこにはさっき路上ライブやっていた女の子に似たような子が……

「あれぇ?もしかして愛美ちゃん?」

「そうだよ!優希、久しぶり!!」

え〜っと…アンタ誰だっけ?
まあ俺が知っているはずもない。早川のかつての友達なんて知っているほうが恐ろしいぜ。

「充も久しぶり!」

「えっ?誰?」

「ばかー!!!」

「ちょ!えっ?会ってすぐに打ん殴られるとかどんだけりふじ…ふべぇっ!!!!」

愛美とかいう女の子のパンチが顔面にクリーンヒット!!!
そのまま俺は転んで後頭部を激しく打つ。

「いっでぇぇぇぇぇぇ!!!」

「ほ、保坂さん!?大丈夫!?」

「まったく!仲良しだったお友達を忘れるなんてひどい子になったね!」

「いや、まず誰!?あとさっきの顔面クリーンヒットと後頭部ヒットで記憶がぶっ飛んだ!!」

「…ははは!!!でもなんかおもしろい人になったかも!…んもー、愛美だよ?木山愛美(きやまあみ)」

…あぁっと俺の頭の回路がつながった。

確か……

「ほ、ホント!?」

「うん、上手上手」

「充君も上手よ」

ーーー再び過去ーーー

「せんせーずるい!!!あみもほめてよー!」

「はいはい…」

ーーーっで今ーーー

あいつかー!!!

って、見た感じだけどそりゃあ幼稚園の頃に比べたら大きくなったさ。

「思い出した？」

「多分…そういえばお前さっき路上ライブしてなかった？」

「えっ？あれお姉ちゃんだよ？」

「ｍｊｄ？」

「あたりまえでしょ！確かに音楽好きだし、お姉ちゃんなんかには負けたくないけど自分でやろうとは思ってないよ！」

流石負けず嫌いだけど面倒くさがり屋！
やる気なしかい！！！

「…あのー、愛美ちゃんと保坂さんっていつ知り合ったの？」

「ええ！？もしかして優希も覚えてないの！？…愛美達仲良しだったじゃん！！」

「ん？……」

早川はしばらく悩んだ末…

「ああ！！そういえば！！似てると思ってたけど！！」

って昔親友なのに気がつかなかったって流石天然…
いや、俺も今更思い出したから人の事は言えないが…とりあえず口に出してみることにした。

「あ、そういえばそうだった気がした」

「あんた達本当に忘れてたのね…天然……ってか、お前が一番重症だろーが！！！」

「べっぷ！！！！」

強烈なチョップが俺の頭に炸裂した。

「そっかー……っじゃ、じゃあ！！！……」

え？なんすか？急に早川の顔が赤くなったんですがこれはなんすか？あーそうか、いよいよ俺に惚れたかそーっすか…

…さーせん、変な想像してごめんなさい！
きっと今まで気がつかずに過ごしていた自分が恥ずかしくなったんだろう。俺は別にそういう感情がこみあげてきたとかないけど……ただ今更言っても遅いっすよねっていう事があるだけで。

「いやー、優希が天然だってのは昔っからだけどあんたも天然だったとは…」

「うるせー、暴力女の木山に言われたかねー」

「誰が暴力女じゃあ！」

「ひぃ！ごめんなさーい！！！」

「あと！愛美でいいの！幼馴染でしょ一応！」

「さーせんでした愛美！！」

…まずい！この調子だと愛美のパシリにされる！
なんとか強そうなところを見せねば！！！

「あと！優希の事も優希って呼んであげるの！優希も充の事、あんまりうるさい事は言わないけど充とかって呼んであげて」

「「は、はい」」

やっぱ逆らえねぇぇぇ！！！
え～っと、そういう風に強要されたんですが？やっぱ優希って呼ばなきゃダメっすか？

はい↑
いいえ（これ押したらわかってるよね？グフフ…）

いや待て！この選択肢おかしいだろ！！！
何！？グフフって！滅茶苦茶怖いんですけど！！…しゃーないですなぁ。はいでいいわもう。

「え～っと充さん？」

保坂から充になっただけであんまり変わってない…いや、変わった。
何故だ！？なんか恥ずかしいぞ！？…え～っと、やっぱ優希って呼ばなきゃ愛美に殺されるっすよね？うん。

「な、なんだ？ゆ…優希？」

「…とりあえず銭湯入ろ？」

「あ、ああ…」

「な、なんかぎこちない…しかもなんで愛美がここにいるのか問わないのかよ！」

後ろで木山…じゃなくて愛美が叫んでいたけどお構いなしに俺達は銭湯に入った、もちろん男と女は分かれているぞ。まぁ、なんかいろいろ思い出したっぽいし、いいやこれで。愛美も相変わらず一人称が自分の名前だし。お互い忘れてて…って思い出して「そ…そんな…」って展開もないっぽいし。お互いの呼び名も昔（？）に戻ったっぽいし、昔に戻ったって事で結果オーライ、これでいいや。

「…あれ？愛美も入るの？」

「うん、引っ越した家の風呂がトートツにぶっ壊れたし」

なんというひどい住宅！
まさかそれいがいにも傾いているとかヒビがひどいとか…欠陥住宅じゃないだろうな現木山家って？

「じゃあ充！」

「おう」

その後俺は一人風呂につかっていた。正確にいえばおっさん達に囲まれてだけど。
…一人でぼーっと風呂に入っていると、だんだんと昔の記憶がよみがえってきた。なるほど…愛美がいなかったら思い出さなかったというオチですな。

なんであいつも俺も思い出さなかったんだろ?まあ細かい事に突っ込んだら負けか。

「充さーん!!!石鹸ないから石鹸こっちに投げてきてー!!!

「ぶはっ!!」

今の声は早川…じゃなくて優希!?

「ちょ、ちょっと優希!それはいくらなんでも充がかわいそうでしょ!」

「へ?そーなの?」

流石天然…この場でそれを言うのに抵抗はないのかい!

「ま、いいや!面白そうだし!!ほら充!優希が構えて待ってるから早く投げなさい!」

「ぶっ!」

お前も協力するのかい!!!!!

さっきまでわりと同情的だった癖に協力すなー!(脱字じゃないよ!)

「ほれほれあんちゃん、投げてやりなさい」

「そうだぞ?一度逃したら次の機会はないかもしれん」

なんかおっさん達まで投げろっていってきるし!しかもアレな目で

俺を見ているし！

「いいじゃないか、王道っぽいけど結構いい展開じゃないか？」

「ワシはな、若いころばあさんに投げてやったらその勢いでゴールインしたんじゃぞ？お前さんが成功するとは限らんが人生なんでもやってみる事が大事、成功すればオーケーじゃし失敗したらその教訓を生かして生きればいいんじゃ」

なんか爺さんまで人生談語ってるし！！
いい事言っているように聞こえるけど目的がこれじゃどうでもいいように聞こえるのは俺だけ！？

「そうそう。俺だってあんちゃんぐらいの頃、やっとけばよかったって後悔したことは何度もあるぞ？もちろん恋愛面でもな！だから彼女さんに投げてやれ」

「いや、彼女というわけでは……」

「いいからいいから！」

「そうだ、そんな中途半端だったらいつか彼女さんから本当に相手にされなくなるぞ？」

なんという修羅場！
……ええい仕方ない！

「ほら！優希！！しっかり受け取れ！！」

俺は思いっきり石鹸を投げた。

「おお！優希ナイスキャッチ！」

「えへへ、ありがとー充さん！」

「「「ひゅーひゅー！！」」」

おっさん達が冷やかし半分応援半分でアレをやってくる。
ああもう俺この銭湯来たくない！！！

「ほらみろ！彼女さん喜んでるだろ？」

「だっから彼女じゃーーー」

「でもお互い下の名前で呼び合っておる…いい証拠じゃ」

「爺さんまで決めつけるなんてひどいっすよ！」

「いいじゃないか！お前さんはまだ若い！ワシは生き残ったからいいがワシの友達なんてみんな南方で死んでしまったぞ？ワシはうまく生き残って家族も持ったがワシの仲間はあんな南で無残にも死んでしまって…さぞ無念じゃったろう。いやぁ本当に戦場はひどかったぁ、ワシは２１歳の頃に徴兵されてフィリッピンへ。連隊からはあの命令以来命令が来ないわ、結局８月１５日を過ぎてもワシは終戦を知らず戦い続け、日本に帰ったのは翌年じゃったわい。当時のフィリッピンは……」

なんか恋愛話から戦争体験談になっちゃってるし。
ダメだもう、俺この銭湯に来たくない！来たら常連のお客さんに笑われそうな予感……なんてこったい！

結局その後、温泉を出たら……

「じゃあね優希！充！愛美ね、飛鷹高校に編入するから！優希達は？」

「同じ学校だよ？」

「やった！優希と充とまた一緒かもね！愛美楽しみにしてるから！！また明日会えるかも、じゃあね！」

「またねー愛美ちゃん」

「コケるなよ」

「ひどっ！充だって1年生（小学校）の頃みたいに突然友達からズボンを…」

「待てー！！！それ以上言うな！！」

「はは！またね！！」

「？」

危ない危ない。絶対優希にばらしてはいけない黒歴史…

あれだけは俺の身体的特徴に関わる話だからばらしたらダメだ！…

でも優希はよくわかってない様子だ。ラッキーだ…ん？待てよ？あいつ飛鷹高校？…ただでさえキャラが濃い奴ばっかり揃ってるってのに…疲れる…はぁ。

Ｐａｒｔ２９．銭湯戦線２００９（後書き）

・木山愛美
『奴には負けたくない！…けどめんどいことはしない…』
生年月日：１９９３年３月１０日
身長：１５３ｃｍ
その他のサイズ：Ｂ８０　Ｗ５５　Ｈ７７
特技：充でも従わせる事。
趣味：多趣味らしい。
特徴：充と優希の幼馴染、二人と比べればちょんと昔の事を覚えているなど
　いたって普通のようだ。
　頭脳はよくもなければ悪くもなく、普通であるが負けず嫌いであったりも
　する。ただし自分でやる気が起きないと積極的に行動しないなどよくわから
　ない人物である。付き合ってみればいい人ではあるが親密にならなければ
　うるさいだけかもしれない。この亜矢には充も同世代で唯一、頭が上がら
　ない存在らしい。
好きなタイプ：不明
得意科目：とくになし、強いて言うならば運動神経は抜群なので体育。
苦手科目：とくになし。

Ｐａｒｔ３０，音楽室にて

－－－翌日－－－

「おはよー充さん」

「あ、おはよう充ちゃん」

「んん…およは……あれ、榛名来てたの？」

「うん！ねえ充ちゃん！愛美ちゃんがこっちに来るってほんと！？」

…あ、そっか。
あれ夢じゃないのか。道理で優希が俺の事を下で呼ぶわけか…俺もちゃっかり優希って呼んでるけど。
しかし今日は…また暑くなりそうだ。

夏はとっくに終わっているってのに今年は残暑が厳しい！
まだ夏服だし。

「あづ～」

「んもぉ！充ちゃって本当に暑いのに弱いよね」

「暑いのも弱ければ寒いのも弱い、それが俺！」

「それ自慢する事？」

「ですよねー」

「ぐはっ！榛名はおろか優希にまで言われた！！！」

ある意味ショックっす。

「あれ？そういえばいつのまに二人は名前で呼び合うようになったの？」

「いや、だって愛美に……ほら、あれ…うん……」

俺は榛名に事情を話した。

っというかこいつも昔優希と仲良く遊んでたよな？もしかしてこいつも忘れてるってオチ？

「えっ！？そうだったの！？…そういえばゆーちゃん、誰かに似ているとは思ってたけど…全然気がつかなかったよぉごめんねゆーちゃん！」

「いいのいいの、私も全然気がつかなかったし」

なんなのこれ？

人の事言えないけど流石にこりゃひどくね…はっ！？

待てよ？もし学校でも「優希」「充さん」って呼び合ってたら…彼女持ちの雄一や太一はともかく高臣や圭一、あとついでにしげちーやドンちゃんにはなんて言われる事やら……

まずい！非常にまずい！

…でも名字で呼ぶと万が一愛美が同じクラスだった場合、殺されそうな気がするし…微妙なところだ。

って学校につくとやっぱり突っ込まれました。

「ええ!?優希が保坂の事を充さん!?」

「なんだと!?優希とか呼びやがって貴様ァ!!」

「ちょ!やめい圭一!!」

「みったんいつのまに彼女を!」

「ちげーわ!あときめぇからその呼び方はやめろ!!」

なんかしげちーにはもっとキモイ呼び方されてるし!
ドンちゃんも彼女いない歴＝年齢だからって泣くな!優希は違うから泣くな!まだ同志だから泣くなぁァ!!

その時、予鈴が鳴り、なんかすごいタイミングで五十鈴先生が入ってきた。

「静粛に!」

っというわれると皆黙るが俺は突っ込んだ。

「五十鈴先生、正直に言えば?」

「逆〇裁判をやってたけど意外とおもしろかった…って何言わすの保坂!!」

「それでよし!」

「よしじゃないでしょーが…えっと…とりあえず今日編入生が来るから、そういう事でよろしく」

真面目に紹介せい！
ってか編入生？もうアイツが来る以外は考えられないんですが？

扉が開けられるとやっぱり予想通り、愛美が入ってきた。

「それじゃあ黒板に自分の名前を書いて自己紹介して」

「はい」

あれ？意外と真面目？
黒板にわりと綺麗な字で木山愛美と愛美は書く。書き終わったら俺らのほうを見て笑顔で自己紹介を始めた。

「東京から来ました木山愛美です！え～っと、まあ仲良くよろしくお願いします！」

「「「おおお！！！」」」

ふ、流石野郎とも…愛美はかなり可愛いほう…期待通りの反応だぜ。

「俺小村圭一！圭ちゃんでいいからよろしく頼むぜ！」

それはいくらなんでもガキすぎだろ！！

「う～んと…前原でいいや」

「俺そっちじゃないって！！！」

「「「ギャハハハハ！！！」」」

圭一、ドンマイだ。俺だって最初はお前の名字がアレじゃない事に驚いたさ。まあ顔立ちはそんなに共通していないけど。

「静かに！話したいのはわかるけど後でね。あと…伝達事項は…あ、そうそう体育祭の事だけど来週だから練習とかがんばりなさいよ一応。じゃあ以上でＨＲ終了」

早！！

そして教室を出て保健室へ直行する先生、何をしてるかって？寝てるんだよ。教師としてはあるまじき行為な気がするんだけど五十鈴先生だからこそ許されるっていう雰囲気がこの高校にはある。

…五十鈴先生、多分他校に行くことはできないと思いますよ？うん。

「…あぁっ！！忘れてた！！木山さん席ね！！」

そういえば愛美の席が用意されてないな。

なんて先生だ。

「え～っと、ごめん！急な転校だったから用意してない！…え～っと…保坂！」

「はい」

「話を聞けばあんた木山さんの幼馴染だそうね」

「ギクッ！！」

「「「「なにぃ！？」」」」

「充！てめぇ！！！」

なんか面倒な事になってきた。

ってか話したな愛美！！その笑顔がなんか今はむかつきます！！

「はい！」

ぽ～いっと投げられてきたのは音楽室の鍵。まさか…

「音楽室ってどうせ机余ってるでしょ？それで開けて持ってきて」

「はぁ！？なんで俺なんですか！？」

「そうですよ先生、充がかわいそうですよ！」

「「「充！？」」」

「充！てめぇ！！」

男達はいちいち反応する。

俺も男だけど流石にこんなにしつこくはないぞ？あと愛美…なんで学校ではいい子ちゃんぶるの！？俺に対しては暴（ｒｙ

「一応成績優等性だよねぇ保坂？ぜひとも優等生ぶりを幼馴染の木山さんに見せてあげて。それじゃ！私は保健室でぐがーっとひと眠りを！」

「ちょ！！五十鈴先生！！」

「充！嫌だったら俺がいってやるぞ！」

「圭一は黙ってろ！とりあえず今回はもう登場すんな！」

「はぅっ！ひどいなのですー！！」

きめぇ！！！

…え～っと、こうなった以上、俺が運ぶしかないっすよね？

「…じゃあちょっと待ってろ」

「あ、充！愛美も手伝うよ」

「ええ？別にいいぞ？五十鈴先生の文句に逆らうとアレだし」

「いいの！とりあえず付き合わせろ！」

なんと強引な。

背後を見たら男達はうらやましそうに俺を見て、女子、特に高臣はにやにやしてるし、優希はちょっと複雑な表情をしていた。

ーーー充が知らぬ間の教室ーーー

「なんか仲よさそうねあの二人」

「そうだね…」

「どうしたの優希？」

「いや、なんでも？」

「はは～ん、さては。ボクが見る限り保坂は自分からアタックする事はすくないから…早く優希からアタックしないとあの幼馴染の子に分捕られちゃうよ？」

「ちょ、待ってよ朋花ちゃん！別にそういう関係じゃ…」

「わかってるわかってる！冗談！…ヒソヒソ「でも本当はそうなんでしょ？」

ヒソヒソ「…うん」

ヒソヒソ「ボクに任せるのだ！優希の為に協力なのです！」

――っで視点を充に戻して廊下――

え～っと、愛美は転校生だから当然音楽室の場所なんて知らない。それにしてもなんだろ？幼稚園の頃は二人で歩くとかあんまりなかったけど。このどうもやりにくいムードは。

「っふふふ…充って、おもしろい友達いるんだね」

突然そんな話を振られた。

「まあ…ぶっちゃけいうとキャラが濃すぎて最近俺が敬遠気味だけど」

「まあまあそんな事言わない！おもしろそうじゃん！やっぱり普通

すぎるのもつまらないからさ！！」

少なくともあんたは普通の人じゃないと思うから安心してよし！

っあ、音楽室だ。俺は鍵をあけた。

「よし、じゃあお前の事忘れていたお詫びに良質な机を選んでやるとするか」

「ありがと！やっぱり充って優しいね」

「そうか？」

あんまり自覚ないけど優希にも言われたし、俺ってやさしいのか？

…う～ん、わからない。ナ○ック星人のピッ○ロさんが恋愛とかわからないのと同じぐらいわからない。

…ん？

「ぶっ！！」

「どったの！？」

「いや、なんでもない！！」

まずい！いい机だと思ったけど中にエロ本が入ってるなんて…こいつにはばらしたくない！！

「なになに！？もしかしてリアルでエロ本入ってた！？」

「あ、こら！」

ってかなんでそんな風にすぐ発想する!?
まさか期待してたのか!?

「おお!!こりゃまた…先生に見つかったらお説教ものだね!!…
…っはははは!!何これエロい!」

なんか一人でエロ本見て喜んでるやつがいるよー、まあ俺も見たい気持ちはあるけど、今は心を鬼にして耐える、ただそれだけ!

「ほら見て充、これ!」

「ぶっ!!」

「あ、なにその反応?やっぱり年相応!?興味あるの!?」

「う、うるせー!!エロ本見て喜んでるお前に言われたかねぇぇ!!!」

「ははは!!変わらないね!ちょっと都合が悪くなったり変な事があるとすぐ突っ込んじゃう癖。愛美は結構充のそういうところ好きだよ?」

小学生かこいつは!
ってかそのエロ本をはよ隠せー!俺の理性がぶっ飛ぶ前に!!

「そーっすかい。それよりさっさと机運ぶぞ!それどっかにしまっとけ!」

「えっ!?エロ本入ってた机使わせる気?」

「う、うるせぇ！！時間ないだろ！さっさとせい！」

「は～い、仕方ないなぁもう」

そう言ってミリタリー雑誌とかが入っている机にエロ本を入れた…ん？ミリタリー雑誌？…まさかな？まあいいや、俺はその後愛美の机を教室まで運んであげた。

今回わかった事？そうだな…愛美もやっぱお年頃だって事だな。それ以外は特になし！

ーーーっで、1時間目の音楽の授業があるクラス（小太郎視点でーす）ーーー

ふふふのふ～ん、誰が音楽の時間を真面目過ごすか。

隣に座ってる中原さんの姿を見つつ、ドイツ軍歌集でも見ながら過ごすとしよう。ふふふのふ…げぇっ！？なんだこれ！？何このエロ本！？…うわ、表紙から既にエロい…ってかまずい！

「えっ！泉谷君？…なななな…何それ？…それってもしかして…」

「おお！小太郎！お前も男か！軍事ばっかりで飽きたのかとうとう！」

「戦車や戦闘機じゃおかずにはできないからなぁ」

「ちょ、おま！！」

「せせせせせ、先生！！！泉谷君が…泉谷君が！」

「ちょ、待て！！」

なんか音楽教師の高田が俺のところにやってくるし。

「ほぉ？お前は軍オタだって事はしっていたがエロにもついに手を…まあ１８歳だから買えるしな。でもお前は高校生、そしてここは高校、持ってくるのはどうかと思うし…それに！」

「あ、先生！それは！」

「趣味に文句はつけないが学校までミリタリー雑誌とか軍歌集とか持ってくるな！！！」

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ！！！！」

畜生！！エロ本なんて机の中に入れた奴！！覚えてろぉぉぉぉぉぉ！！！！

ーーーこのエロ本の末路は高田先生がおいしくいただいたとか、めでたし、めでたしーーー

Part31．本命は誰？

「…っというわけで、次のテストに出すから覚えておくように。じゃあ終了、予鈴なったらご飯とか食べていいよ。私はまたひと眠り！！」

そういって五十鈴先生は教室から出て行った。

ってか、生徒に保健室で寝ているって公然といっていいの？先生って？

「やったぁぁぁ終わったぜ！！ミーシャさん今日はなに作ってきてくれたの！？」

「んーっと、ロシア風スパゲッティです」

ろ、ロシア風のイタリアンって何！？

なんかすごく嫌な予感しかしないけど…まあ太一だし、どうでもいいや。

「っじゃあ充、俺も行ってくる」

「おう」

例によって雄一は多分梨佳さんとイチャイチャしてくるんだろ。もうこれも慣れました。

「よし！充！ナンパにい…」

「一人で行けばいいだろ」

「が～ん！お付き合いが悪いわ！いきましょしげちー&ドンちゃん！」

「「あ～ん！まってぇ圭一君！」」

なんで皆しておかま口調なの！？

きめえよ！！！

「み～つ～る！！」

「ぐぇっ！！」

突然背後から強烈なラリアットを食らった。

こんな明るい声で攻撃してくる奴なんてただ一人！

「な、なんだよ愛美？」

「学食食いにいこ？」

「いや、弁当あるし」

「大丈夫大丈夫！どうせ男なんて昼食ってもお腹満たされないでしょ！？」

ギクッ！？

こいつ…わかってやがる！

「それにあそこでお弁当食べたって文句は言われないよ！ほら行こ？優希と朋花も来る？」

「おお！ボクもいいのか！喜んで！」

「じゃあ行こ？」

なんと強引な！？

結局気分的に今日は一人で食べようとした俺は女3人に付き合わされる事になった。

っというわけで食堂、いやぁ今の時代にこんな立派なところがあるなんて嘘みたいっすねぇ。飛鷹高校に好んで入る奴はあまり多そうじゃないからこういうところで点を稼ごうとする。学校側の魂胆は丸見えだった。

「よし！食うぞぉ～、充！天丼！！」

「はっ？」

「おっ！じゃあボクカツ丼！！」

「はい！？」

優希はお弁当を食べる事にしたらしいがこの二人は俺に、お前ら男かって疑いたくなるようなメニューを注文してきた。ってかこれって…

「おい、待て？これって俺のおごりなわけ？」

「やっぱダメ？」

「いや！いくらなんでもいきなりはないだろ！理不尽すぎだろ！」

「だってぇ、お金ないんだもん！ねー朋花！？」

「うん！頼むよ保坂！飢えたボク達の為にも飯をくれぇ！」

「お前ら男かよ！ってか俺も実際そんな金持ってないし！！」

「ボクは見た！先週書店で保坂がエ（ｒｙ」

「それを言うなぁぁぁ！！！！」

なんで高臣がそれを知っている！？
そんな事知られたらまた愛美に弱みを握られる！！

「うぅ…ちなみに拒否権は？」

「ない」

「がく…」

「早くいかないと！小１の時愛美の前で突然山口君って子がズボンをパンツごと一一一」

「だぁぁぁぁぁぁ！行く！行きます！おごらせていただきます！！」

「よしよしいい子いい子！」

畜生！！！
それをこんなところで大声で言わないでくれぇぇぇぇ！！！！

泣く泣く、金を使って俺は3人分の飯を買った。
そして俺はあっという間に飯を平らげた。

「充さん、相変わらずの食欲」

「うむ、ボクも関心した」

「なるほど、愛美の未来のだん…いやなんでもない!!!」

「旦那?」

よく聞こえなかった。
何言ってたんだこいつら?まあいいや。

「お膳は自分でさげろよ!じゃあ!」

「あ!充さん!?」

「うわ、女の子3人残して逃げたぞ、充の奴」

「愛美って保坂の事利用するの好きだね」

「いえいえそれほどでも!」

聞こえない聞こえない!
とりあえず俺はこの場を去る!面倒だから!!
…とりあえず屋上まで逃げた。
流石にここまでは追ってこないだろ。うん。

「あれ？充ちゃん？」

「ん？おお、榛名か」

何故か屋上に榛名がいた。
しかも真紅と一緒っぽい。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「えっ？うん、いろいろあってだな！」

「う～ん…あ、そうだ！充ちゃん、愛美ちゃんは？」

「え？食堂にいたと思う」

「ありがと！じゃあね」

「ばーい未来の旦那！お兄ちゃん！」

うっ！真紅めまだあきらめてなかったのかよ！！
まあいいや、あの二人はどっちかといえば高臣や愛美とは違ってすぐ引くタイプっぽいし。こうして屋上には俺一人になった。とりあえず弁当を平らげた。

…ううう……流石に満腹です。

「…充！！！」

「ぐぇっ！！！」

突如として俺は後頭部を打ん殴られた。
ちょ！それは死ぬ！ってほどの攻撃だったけどその攻撃を仕掛けてきたのは圭一だ…ってかなんで雄一と太一とついでにしげちーやドンちゃんもいるわけ？

「おい！やったな充！」

「ついにお前も俺らの仲間入りか！！」

「「「うるせー！！！リア充は黙ってろ！！」」」

「「「ぎゃあああ！！！」」」

…何？
雄一と太一がぶっ飛ばされて…えっ？なんすかこれ？

「充！！お前って奴は！どこをどうやったらあんな可愛い幼馴染が！？」

「そうだぞミッチー！！なんで早川までお前の幼馴染なんだよ！？何だ？一つ年下の金剛さんに同い年の木山さんに早川さんだと？うらやましすぎるぅぅぅ！」

「兄貴ぃ！いらないなら一人譲ってくれ！ハーレムは卑怯だぞぉ！？」

3人は泣きながら（ふり？）そう俺に言ってくる。
まったく、対処に困る。

「いや、待て、お前ら何の話ーーー」

「知らないとは言わせないぞ！っで、誰が本命なんだ！？」

「いや待て圭一、本命とかって別にそういうわけじゃ…」

「だまらっしゃい！ミッチーも大好きなエロゲーだとな！幼馴染も攻略対象であーんなことやこーんなことをするシーンが拝めるんだぞ！！」

「ちょ！ここでエロゲーとか言うな！！せめてギャルゲーにしとけ！」

さて、俺はどうすればいい？
逃げても誰も文句言わないよね？うん。

「おっ？そういえば俺用事があるんだ！じゃあな！」

「あ、こら！！」

「待てぇ！！」

待てと言われて持つ愚か者がいるか！！
これは戦略的撤退！さいならー！！！！！！

っというわけで屋上から逃げてきたが…眠い。
よし、例によって保健室で寝ることに…と思って保健室に入ったら五十鈴先生が気持ちよさそうに寝ていたのであきらめました。

仕方ない…ん？あの泣きながら歩いている男は…

「うう…俺の…俺の国防軍が！帝国陸海軍が！」

こ、小太郎ー！！！

何故に涙目？とりあえず…

「よ、よう小太郎」

「ん？充か…ふふふ、俺は泣いてなんかおらへんで」

何故に関西弁？

「いや、どうみても泣いているようにしか…」

「畜生！どこぞの誰かさんが俺の音楽室の机にエロ本を置きやがって！思いっきり中原さんに見られて！ついでに高田にもバレて！軍事モノともども没収だぞ！？うわ～ん！」

やっぱりあの机…こいつのだったのか！！

…愛美……恐ろしい子！

っていうか学校にミリタリーなもの持ってくるお前もお前だろ、あえて口には言わないけど。

「俺…もうだめなのかな？」

「え？何が？」

「もうダメっすよね！？流石に中原さんに嫌われたっすよね！？」

「おま、年下相手に情けない所見せるなよ。とりあえず男なんだか

らエロくて当然だろ！？」

「えっ！？お前もそっち系なわけ！？」

「いや違うけど…あれだ！すべての人間はそれなりに変態だ！そういう事で認めてくれるって！まあがんばれ」

「おおお！！流石は我が弟的存在！サンクスサンクス！！！…よ～し今度ドイツ海軍艦艇について詳しく書かれた本をプレゼントしてやろう！」

「それはいりません」

「がーん！！まあとりあえずサンクス！じゃあお前もさっさと本命決めてがんばれ！！」

そういって小太郎は去って行った…ん？本命？

…だからそういうわけじゃないんだってヴぁ！！！

ｐａｒｔ３２．お料理♪

…さて、なんで俺がエプロンなんかしてるかって？
それは体育祭の日に遡る…

―――体育祭―――

「ちょ！すごくね充？」

「パン食い競争で一位ってどんだけー！！！」

男達が俺をある意味で称え、ある意味で見下していた。
なんでかって？パン食い競争以外では見事に平均だったからさ。優希とは違って俺は平凡な人間だからな。

「はっはっは！！食い物には目がない！人間そんなもの！うまいものを食うためなら…ぐふふ！！」

またパン食い競争のパンが中原先輩のご好意でおいしかったんだ。
ところがそこへ魔を刺す奴が…

「じゃあ自炊すればいいのに」

「うっ！！それだけは勘弁！！！」

「ははは！流石保坂！」

畜生高臣めぇ、おもしろがってるな！

「えっ？充ってご飯作れないの？」

愛美が優希に訊く。

「う～ん、充さんが料理を作ると暗黒物質（ダークマター）ができるよ」

「うわ、なんかすごそう。悪の帝王？」

「なんでそこで悪！？俺の飯ってそこまで言われるほど危険なもの！？」

「危険でしょ！前に一度だけ充さんのご飯食べたけど死ぬかと思ったよ！？」

「ぐはっ！！」

正直ショックでした…ふふふ。

「充さんいじけないでくださいよ～、今度もう二度と暗黒物質（ダークマター）ができないように料理教えてあげるから」

なんかその言われ方怖！！

「よし！優希、愛美もね、ロクなご飯つくれないの、だからついでに教えて」

「いいよ」

「おもしろそうだねぇ、ボクも参加するとしよう」

「ふ～ん、充が失敗ばかりしまくるシーンもおもしろいな」

は？えっ？なにこれ？はい！？

ーーー今ーーー

っというわけで幼馴染グループと真紅と高臣以外には俺の男友達が殺到していた。目的は俺が失敗しまくるシーンと優希と榛名のおいしいご飯らしい。

「っというわけで充ちゃん、私とゆーちゃんが親切に教えてあげるね」

「そ、そりゃどうも…」

「ぶっ！！」

畜生ー！笑うなー！

誰か俺を殺してくれぇぇぇ！

「っというわけでカレーを作りましょう」

カレー？なにそれどうやって作るの？

ってかそれ人間に作れるの？

…みんな！カレーって作れる？

作者でさえ自炊ができないからレトルト三昧だっていうのに男には無理っすよねー？

そんなわけでカレーを作ってみたけど。

「みみみ、充ちゃんそのままだと指切るよ！？」

「はい……いでぇぇぇぇぇ！！！！！」

「ちょ！大丈夫充！？」

「ちょっと待ってて充さん！すぐに絆創膏用意する！！」

こんなんだったり。

「充さん野菜は洗ってください！」

「え？マジ？」

「あたりまえでしょ！！」

こんなんだったり。

「みみみみ！！充ちゃん！いくら色が似ているからって犬の糞はやめてぇぇぇぇぇ！！！！！！」

「アホかぁ！！」

「ぐぅぇっ！！！」

思いっきり愛美に打ん殴られました（てへ♪）。
そして見事に床に叩きつけられ俺の背中。

「充さんどこで犬の糞…」

「えっ？いや、カレーの色に似てたし」

「う○ちは食べるものじゃありません！」

ですよねー、うん、それは俺がおかしかった。
ってさっきから文句を言ったり打ん殴ってきたりする愛美はっていうとそりゃあもうプロ並みのお手並みで……

「愛美ちゃん上手～」

「愛美姉ちゃんって本当は料理作れるんじゃないの？」

「えっ？そうかなぁ？」

「あのー、俺は褒めてくれないの？」

「「「褒める要素なし！」」」

ひでぇぇぇぇぇ！！！！！
しかも3人そろってなんかキモイものを新たに創りだす魔人のようなものを見ている目で俺をみないでくれぇぇ！！！

「まず充さんは実際に作るよりもいろいろ基礎を学んだほうがいいと思うよ」

「えー、じゃあ今回の実習っぽいものの意味ないじゃんか？」

「ないでしょこれじゃ、でもおかげで愛美はカレーはおいしく作れるようになったよ！ありがとね優希、榛名！また教えてね」

「うん」

さらになんか後ろのほうでも…

「なんか、どんなダークマターが？」

「さあ？…なんかマジで今日の晩飯…今すぐにでも吉〇家にいったほうがいいと思った…」

「恐ろしき、ミッチー…」

ふっ…俺には用無しかい。

結局晩飯は優希と榛名と愛美の合作だったが食わないで落ち込んだというか腹が立って外に出てったから食ってはいない。

ーーー保坂家ーーー

「あれ？保坂は？」

「ん？あいつならさっき外に出てったような…？」

「ほんと？前原？」

「たから俺そっちじゃ（ｒｙ」

「うーん…やっぱり皆してちょっと充さんをからかい過ぎたんじゃ？…何気に私達充さんのプライドに傷をつけちゃったような…」

「あいつプライドがなさそうにみえて以外とあるってやつだからな

ー、愛美小2までは充と一緒だったからなんとなくわかる」

「探す？」

「そうしよっか」

ーーー一方充はーーー

あ～あ、なんか腹たって飛び出してきたはいいが…どこで食べよ。流石に市街地は賑やかだ。なんたって１８０万だかなんだか、正確な人口は忘れたけどそれぐらい住んでるでっかい街だし、俺は今街中の公園にいた。真正面には夜でもライトとかのせいで明るいテレビ塔が聳え立っていた。

とん…

俺の肩に、やさしく手を、誰かがのっけてきて…そしてとてもやさしい声で俺の名前をよんでくれた。

「充…」

俺は一瞬胸がときめいた…こんなのはじめてだ…一体なんだろう？

「悩んじゃダメだよ」

おお、俺を心配するやつが！？俺は後ろを振り向いた…そこには。

「悩んだ時はシリアナを思いっきりひろげるのがーーーー」

「……ギャアアアア！！！！出たぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

目の前にいたのは治三朗、学校最大のガチホモだ。
もちろん、俺はこいつが大っ嫌いだ！いや、正常な男なら誰もがそう思うはず！

「えっ？なんで驚く？まったく、折角気を慰めてやろうと…

「ざけんなぁ！！おめぇが近くにいると返って気分悪くなるわぁぁぁぁぁ」

「ぶひゅるるるる～」

俺は思いっきり治三朗を打ん殴り、奴は奇妙な叫び声をあげながら夜空のお星さまになった。
あー、きめぇ、しかもなんか股間のあたりにモザイクがかかってたよぉ～、ありゃあれだ。警察に見られたら逮捕モノだ。

しょうがねー、コンビニ弁当でも買ってうちで食うか。
そう思って俺は地下鉄に乗り、自衛隊前で降りて最寄のコンビニに寄り、コンビニ弁当を買った。そして店を出ようとした時…

「あっ」

「あっ！」

…なんちゅーータイミング！？ばったり愛美と出会ってしまった。

「…えーっと、あんた今までどこに？」

「まちなー－－おぇっ！！！」

突然愛美の鉄拳が俺のアゴを狙う！
非常に正確な攻撃…そして高い威力、俺は体勢を立て直せずそのまま地面に腰を打ちつけた。

「…馬鹿、心配したでしょ！」

「？」

あれ？なんかいつもと様子が違うような？

「…なんで急に出てったの？」

「いや…なんつーか……腹が立った」

「な、なんで？」

なんでって訊かれても俺あのときいろいろとぶっ飛んでたし…答えに困ったがとりあえず…

「なんでって言われてもあの時は半分怒ってたっつーかぶっ飛んでたっつーか…今となってはよくわからん」

「……ごめん、流石にやりすぎたよね？」

「…はい？」

うん、お前がやりすぎなのは認める。
って俺がつくっても所詮ダークマターしかできないのも認める。

「確かに皆、何気にひどい事してたよね？優希が初めに気がついて、優希がいってから愛美も気がついたけ本当に鈍感だよね」

…えっ？

「誰だって不得意な事はあるよね？それを……」

えっ！？

突然愛美は泣きだした、いや…こいつの性格からいって自覚はあっても泣いてないとかいいそうだけど目には明らかに涙が溜まっていた。

「あ、愛美？」

「ご、ごめん。愛美…」

「謝るな、むしろ悪いのはこっちのほうだろ？飯をまともに作れる作れないなら克服できる事だろ？むしろ勝手に街中に逃げたっつーか…まあそんな感じで優希達の目の前からいなくなった俺が悪い。それにお前はただついでに教わりに来ていただけだろ？」

「…いいの？許すの？…だって愛美、殴ったりしたよ？ひどい事も言ったよ？」

「だからって直接的にお前のせいになるってわけじゃないだろ？まったくいつも明るい癖に実は過度な心配性だってのは変わらないな…」

「だ、だって充！急にいなくなっちゃうんだもん！…別に愛美じゃなくても皆心配するよ？すぐ帰るつもりでももう帰ってこないって

思っちゃう人もいるかもしれないじゃん！」

…そうか、そういえば優希に勝手に一人で消えるな…見たいな事を言ったの俺だっけ？って事は余計にあいつに心配させてるのか、今…

ふふ、まったく、俺ってダメな奴だぜ…

「愛美…やなの」

「なにが？」

「充がどこかに行っちゃうのが嫌なの！！」

「いや行かねーよ、金もないし、そもそも高校はもちろん大学卒業しないと今の世の中生きてけないし…」

「そう、でも…愛美が言ってるのは今回も含めて。本当はお引っ越しする時だって…」

そういえば愛美が引っ越す時ボロボロ涙を流してたっけ？

俺は男だから人前では泣かないようにしていたけど優希に続いて愛美とも離れ離れになっちまったからその日一晩はショックで眠れなかったけど。優希と同じぐらい悲しくて眠れなかった記憶があるようなないような…もう覚えてねーや。

「だから再会できてうれしかったんだよ？…確かに充面白い人だよ、あと優しいし……でもこんなのやだよ、もしまた今度充に嫌な思いさせたら会ってくれなくなりそう…」

「いや、そりゃ考えすぎじゃね？」

「考えすぎじゃないもん！充怒ると昔からどっか行っちゃうもん！…やだ、やだやだやだ！！」

ったく、未だにガキっぽいな。

まあ怒ると勝手に幼稚園脱走したりとか、小学校の時も勝手に家に帰ろうとしたりとかしたし、愛美の言う事も嘘ではないが…流石にこの反応は過剰じゃないか？

「もう充の事、怒らせないようにするって約束するから愛美から離れないで…愛美から離れちゃやだ！」

「えっ？」

突如として愛美が俺に抱きついてきた。

離そうにも離れないぐらいの力で。かといって俺は痛くない。そして顔を見せていないけど泣いている。音、そして次第に胸のあたりが冷たくなる感触。

「愛美から離れちゃやだ……」

「あ、愛美…」

流石に同情せざるを得ない。

俺はやさしく愛美を抱きかかえて優しく言った。

「ごめんな、どこも行かないって約束するから泣くな」

「泣いてなんか…泣いてなんか！」

「いや、今更遅いだろ」

「うわあああ…ごめんなさい！！」

やれやれ……

「…ほら、帰れ。親も琴音姉さんも心配してると思うぞ？」

「今日と明日…お父さんもお母さんもいろいろあっていない…お姉ちゃんちょっと小樽まで…」

うわお！なんちゅー家族だよ。

「…でも家には帰ったほうがいいだろ？」

「うん……」

愛美はまだ半分泣いている。どうやら料理の件で泣いているんじゃなくて俺と離れるのが嫌で泣いているっぽい。それにこんな夜中だし、最近物騒だし、それに愛美は力が入ってないっぽくて今にも転び崩れそうだし、仕方ないから体を支えて愛美を家まで送ってあげた。

「ここか？」

「うん…」

「ほら、お疲れだろうからよく寝ろよ？」

「…待って！」

なんだ？なんで呼びとめる？

「…一晩だけでいいからいて」

「…はい！？」

「だ、だめ！？…やっぱりだめ！？…やっぱり嫌い？やっぱの愛美って最低？」

…ダメだこりゃ。

これ以上悲しい思いをさせたらマジでやばいかもしれない。

「…わかったよ、一緒にいてあげるけど一晩だけだぞ？」

「うん…」

こうして俺は愛美に鍵をあけてもらい、小学校2年生以来初めての木山家に入った。

Ｐａｒｔ３３．木山家での一晩

っというわけで来ちまった木山家。
さっきまでのシリアスっぽいムードが嘘であるかのような雰囲気だ。
愛美も元気だし。

「えへへへ」

…まあこれはこれでよかったのか。

「充、どう。愛美の新しいお家？」

「まあ、うちよりは綺麗だと思う」

「でも欠陥住宅なんだよねー」

やっぱりかい！
いくらなんでも引っ越した瞬間から風呂釜が壊れているのはおかしいと思った！

とんでもない物件を掴まされたもんだなぁ木山家も。

「まあお前が元気になってよかった。って、帰っていい？」

「ダメ！一緒にいてくれてもいいっていったのは充でしょ？帰ったら泣くよ？」

うわ！脅迫かよ！
…まあ帰らないことにしておこう、それに数時間前まで気分は帰り

たくない…だったし。

「あ！そうだ、充って晩御飯まだでしょ？」

「お？うんそうだけど？」

「じゃあじゃあ、カレーでよかったら作ってあげる」

「サンクス！」

ぶっちゃけ愛美の腕前って知らないけど…まあ隣で愛美のつくりっぷりをみていた俺からすれば多分大丈夫だろう。
愛美はすぐさま支度にとりかかり、シンプルなデザインながらも着る人によってはすごく可愛く見えるエプロンを身に付けた。

「どお充？可愛い？」

「多分」

「多分って何よ、自信なさげぇ」

「しょうがねーだろ。見る人によって評価は違うだろ？」

「じゃあ充個人としては？」

「…多分」

「そこで多分か～い！！！」

「あべしっ！！！」

激しいチョップが俺の頭に炸裂する。
…お前、反省してないだろ？

「もういい！充だし、わからないのかも」

ってあきらめるんなら俺に聞かなければよかったのに…
っとはいいつつ、何故か笑顔で愛美はカレーを作り始めた。機嫌がいいのか鼻歌まで歌っている。そういえば愛美が料理するところって今日を除いて過去一度も…あ、あの時で小2だし、作れるわけないか。

しばらくして…

「はい！テレビで暇つぶしなんかしてる場合じゃないよ？あつあつのうちに食べてね」

「へーい」

「返事ははい一回」

「はーい」

「伸ばすな！…流石充…期待を裏切らないね」

うん、こういうのは必要かと思ったんだ。

「まあ、いいじゃないか？とりあえずいただきます」

俺がカレーを口にしようとしていると。なんか息がかかるぐらい近

い所で愛美が俺の顔を心配そうに見つめていた。

「…あのー、食いづらいんですが？」

「いいの、食べて」

お前…まあいい、とりあえずカレーを口にした。

熱！…でもうまい、思ったよりうまい。

「どう？…お、お味は？」

「普通にうまいと思う、本当に今日初めてなのか？」

「は、初めてだよ！…でもよかった。充においしいって言ってもらって」

「ん？」

「いいい、いや！なんでもない！愛美独り言とかよくいうから気にしないで！」

慌てすぎだろ…流石に怪しく思うわ。

まあカレーはうまいし、どうでもいいか。

俺はただテレビを見ながら特に会話もせずにカレーにばくついた。

そして…

「おかわり」

「へ？おか…わり…？…ああうんもちろんあるよ！男の子だもんね、

当然食べるよね？そんなこったろうと思って愛美はおかわり分を作っといたのだ！」

「おお、気が利くじゃないか」

「はい」

しかも結構な量があった。

…しかし今思ったけどこんな奴だったっけ？普通に今はただのいい子…っというか面倒見のいいお姉さんというか新妻というか…まあとにかく優しい女って感じだ。

俺はあっという間にカレーを平らげた。

「ぶはー！うまかった！ごちそうさま！」

「よかった、じゃあお片づけするね。言っとくけど暗黒物質が生まれるのは嫌だから手伝わなくていいよ？」

「へいへい」

そういうと愛美はまた何故か笑顔で作業をした。

食器洗いとか面倒くさそうだけどなんで笑顔なんだ？…そういえば最近は優希も何故か笑顔な事が？もしかして女にしかわからないなんかがあるのか？自分の食器に愛着があるとか？

…わからん。

「ふぅ！食器洗い完了！…もうすぐ１１時かぁ…食ってすぐ歯磨くのも悪いし、少しお休みしないといけないから…なんかする？」

「いや、別にいいよ。テレビで暇つぶしてる」

「…よ～し！じゃあお姉ちゃんも父母もいない事だから特別にバイオリンを演奏してさしあげましょうか！」

「ば、バイオリン？ああ、なんかギターみたいな？」

「ギターじゃない！バ・イ・オ・リ・ン！！…いくら素人でもそれぐらいの見分けはつくでしょ！」

「そりゃそうだけど…」

…そもそもバイオリンって興味ないからあんまり音聞いたことないし、ああいう形のやつを見るとすぐあーんな音（ギター）を想像するんだ俺。そんなことを考えていると愛美はどっかからバイオリンを持ってきた。

「あのー、質問。そもそもお前って弾けるの？」

「うん、お姉ちゃんに対抗して…今じゃお姉ちゃんを超す腕前！1年で追い抜いたぞ！」

流石負けず嫌い…

「…じゃあお手並み拝見といくか」

「うん、いいよ」

愛美は構えた。

そして一度深呼吸をすると愛美は演奏を始めた。

いつもは見せない表情、そしていつもの性格からは想像もつかないお淑やかそうな様子…そして見事な演奏…俺は素人だからよくはわからないけど愛美の演奏は普通にうまい。

なんというかプロ並みで…とても1年で習得したとは思えないほどだ。癒される音色…いや、癒されるのは音のせいだけではない。愛美という存在があるからこそ癒し度がアップしているんだ。

ピアノの伴奏もないのによくここまで演奏できるな…勝手に俺の頭では伴奏が響いているが…それはあくまで俺の妄想、実際にはない。

愛美の演奏…いろいろとすばらしい。

感想を言うと言い切れない…ただすばらしい。

…そう思った瞬間、演奏が終わった。

「…ど、どうだった?」

「それマジで1年で習得もの?プロ並みにうまかった」

「ほ、ほんと!?…やっぱり愛美ってお姉ちゃんより才能あるのかな?いっそプロになろうかな!?」

「今からじゃ遅くね?」

「夢は捨てちゃいけないものなんだよ?うん、お姉ちゃんがロックとかそっちに走るんだったら愛美はこっちに走ろうかな?」

まあ、夢を持つことはいいことだと思うし。

水を刺すようなことは言わないことにしておこう。それにこいつのこんな笑顔も久々に見た。

その後…愛美の家の風呂を借りて（直ったらしい）入ったけど途中で愛美にナニを見られてしまった俺はちょっとショックである。

くそっ！逆にお前も見せろとかいいたかったけど犯罪者にはなりたくなかったからやめといた。

そして夜…

「はぁ！？一緒に寝る！？」

「だめ？いいじゃん別に、昔よく寝てたでしょ？」

「そりゃあ小学生の頃であって今は…」

「別にいいじゃん、気にしなければ。愛美は別にいいよ？それに勝手に無許可で誰かの布団に寝かせるわけにもいかないし、ソファーに寝かせるぐらいだったら愛美が許可するよ」

俺の良心が止めようとしたが俺はお言葉に甘えて愛美と一緒に寝ることにした。

…しかし考えてみれば幼稚園の頃はこうやってもう一人…優希と3人で寝てたんだよな。

「…あ、そうだ！充！ちょっと待ってて！」

「えっ？お、おいどこ行くんだ愛美！？」

突然愛美は起き上がって家を出て行ってしまった。
よく…わからない…待つこと数十分、玄関のほうが騒がしくなった。

「ちょちょちょちょ！愛美ちゃんなに！？なに！？」

えっ？優希の声？
俺は思わず立ち上がり部屋を出て玄関に近づいた。

「ゆ、優希！？」

「み、充さん！？なんでここに！？」

「ちっちっちー、愛美が途方に暮れているところを保護したの！…
って、ふと思ったんだけど、久々に3人で寝よ？」

「「…ええ！？」」

「いいじゃない？昔はこうだったでしょ？優希も充の事心配だったんでしょ？」

「う、うん…」

「ほら！そういうこと」

「…へ？」

そういうことって言われてもよくわかりません俺…
なんかよくわからないけど…あれだあれ。そう、あれ（アレってなに？）。

こうして狭いシングル…じゃなくて床に布団を敷いて俺を真ん中に
3人で寝ることになった。

「ほら、充。優希になんか言うことあるでしょ？」

「あ…優希」

「？」

「…悪かった、勝手にどっか行って…」

「…いいの、充さん。困ってる人を置いて逃げる人じゃないから…」

そう、優希に自宅があるかといえば一応家族は存命だし、バヌアツあたりにいるらしいけどぶっちゃけ家があるかって訊かれたらＮｏ。
俺もこいつを放ってはおけない。

「ほほー、なかなか仲良しそうで…いいなぁ愛美も甘えていい？」

「えっ？…ちょ、おい！！」

なんか知らんけど愛美が俺に抱きついてきた。
それを慌てた様子でいろいろ喋りながら見ている優希もいた。

「あわわわ！！愛美ちゃんなにやってるの！！……」

顔を赤く染めて数秒黙り込んだ優希は……

「ひ、独り占めはダメ！ん！！」

「うおっ！！！」

左右、二人の女の子に抱きつかれた状態、しかもここベット…なにこの状況？

しかも数十秒後には俺から離れず二人は寝ていた。

…ま、いいのか、これで。

Ｐａｒｔ３４．肝試しってのがあるらしい　前編

ー翌日ー

目が覚めたら…ハジャマ姿の愛美の顔が俺の顔の上にあった。

「おはよう、充…」

「…はい？…！！！」

なんか突然口がふさがれた。

「あわわわ！！！あ、愛美ちゃん何してるの！？」

「ぷは～…何って？Ｋ　Ｉ　Ｓ　Ｓ　！　！」

「そ、そーなのかー！朝から刺激があったほうが目覚ましになるのかー…充さん！いい加減に起きてください」

「えっ？…！！？」

今度は優希に口をふさがれたような？

…ようやく解放されたらなんか知らないけど二人とも笑顔でこういった。

「「おはよう」」

「えっ？あれ？…ん？…ここどこ？」

「…愛美の家…だけど？」

「…へ？なんで？なんて俺がお前の家に！？」

「覚えてないのかい！！！」

「あべし！！！！」

…あ、思い出した。

うん、思い出しました。でも打ん殴られた後だし、もうどうでもいいや。

…そうだ、今日は日曜日だ。

もうそろそろ秋…かと思えばもうすぐ１０月だってのに日によっては未だに半袖でもいいぐらいの気温…流石に朝晩は冷え込むけれどまだまだ暖かい。ほんと、秋って微妙な季節だ。

「いやぁ本当に１０年以上ぶりかな？３人で寝たの！」

「そ、そうだね。私…未だによく状況を飲み込めないんだけど…」

「俺も」

「そもそもなんで充さん亜矢ちゃんの家に？」

「なんか知らんけど…成り行き？」

「んも～、いつも充さんってそれだよね」

「ミスター成り行きですから！」

「「そこ自慢するとこじゃない！」」

あれ？突っ込みが逆転してる？
俺っていつのまにボケになったの？う～ん、突っ込みで一生生きていこうと心に決めたんだけど…まあいいか。

「…でも、昨日3人で寝たおかげでいろいろ過去の事が思い出せた気がします。昔は私達あんなに仲良しだったんだね」

「今も仲良しでしょ！？優希と充も溝があるって感じはあまりしないし」

まぁ…あんまり溝はないだろーな。
喧嘩もいろいろな意味でよくするし。

それにしても木山愛美…か……よくわからない人だ。
昨日のアレはなんだったんだろう？通常エロゲとかだとああいうのって主人公に好意を抱いているとか…いや、愛美に限ってそりゃないか。マダオ（まるでダメな男の略）の俺だし。

「そうだね。いつまで経っても…だね」

まあなにより…これですべて元通り…なのか？
そりゃあ3人とも心身ともに成長しただろ、特に胸…胸……二人とも…いや、特に優希ってひんぬー？

いや、なんでもない！

「ほんと、変わったのは体ぐらいね。充のはなんか大きくなってて

毛も一一一」

「ダァァァァ！！！！！！！」

「？」

よかった！優希はいまり今の話を聞いていなかったっぽい！
俺はとりあえず、決めた。何か誰かが変な事を言ったらアン○ニオ猪木のように叫ぶって事に！

「あっはははは冗談冗談！しばらくぶりに見た感想♪」

「洒落になりませんよそりゃ…」

愛美、やっぱりこええ…

「充さん？そろそろ帰りましょ？」

「おう」

「ええ！？もう帰るの？どうせ今日も親も姉もいないんだからゆっくりしてってよ～！」

「いや、そうしいうわけにも…なぁ？」

「うん。それとも愛美ちゃんうちに遊びに来る？」

「うん！くるくる！」

っというわけで愛美も我が家に来ることになった。

住むとかはもちろんそうではないんだけど、ただ遊びにって事で…

ちなみに俺行方不明説ってのはさっき愛美が皆に知らせたらしく、もはや過去のものになっていた。愛美の口から発せられたことなので捏造されている可能性もあるけど雄一はこういっていたらしい。

『優希2号乙ｗｗｗとりあえず同志なんだからさっさとくっついてしまえ！』

…余計なお世話だ！

だから彼女じゃねーっての！！！

って家に帰って…何をしたかっていうと…格ゲーの対戦モードです。

「くっ！！やるな充！！」

「そっちこそ…な、なに！？」

「充さんがんばってください！！負けたらお昼ご飯がダークマターだよぉ！」

そう、格ゲーとか得意な俺なんだが愛美がつまらん条件で勝負をしかけてきた。その条件とは…俺が負けたら俺のダークマターが昼飯！…俺は負けるわけがないと思って売られた喧嘩を買ったわけだ。

ところが愛美は強かった。

おかしい！だって愛美のキャラはサ○ンだぞ！？

俺はいくらヘタレのロンリー○ルフとはいえサ○ンよりは強いはずだぞ！？

「ふふふ…食らえ！！」

「その連続は卑怯だろ！！」

「あら？そのヘタレにも似たような技があるでしょ？」

「あれとそれでは速射力が違うの！！！…ん！？」

「充さんと愛美ちゃん！どっちも残りの体力が！！」

そして同時に技が発動…こうなるとどれだけアレを回せるかが直接の勝敗につながる。俺がダークマターをつくらない為にもこの勝負！なんとしてでも勝たなければ！！！

…ちなみにダークマターを食うのは俺だけだそうです（涙）。

「オラオラオラオラ！！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄ァ！！！」

くそ！無駄じゃない！無駄じゃないんだ！！

俺は男だ！女なんかに負けてたまるかぁぁぁぁぁ！！！！

……

……

…

「おええ…」

「お疲れ様…なのです」

「うん、悪かった。流石にダークマターはきつかったか」

「あたりまえじゃ！！散々苦労したあげくできたのがこれって…自分で食って死にそうになったわ！」

結局負けました（笑）。
そして吐きました（涙）。

でもそれよりも屈辱なのは格ゲーで俺が負けただと！？
やっぱり顔に傷があるあのヘタレじゃダメなのか！？

「充さん…だからあんな勝負引き受けないほうがいいって…」

「それも俺のプライドに傷が！」

「ですよねー」

「でも、愛美に負けたのは事実！」

「ぐはっ！！」

畜生！どうやったら愛美に勝てるんだ？
格ゲーが唯一勝てそうなもんだと思ったけど…しかしこいつには逆らえそうにないしなー、何か弱点はないんだろうか？

その時、俺のケータイが鳴った。雄一だ。

「はい」

「もしもし充か？」

「俺のケータイだし俺以外は出ないと思うが？」

「ですよねー、それよりさ、今日近くの墓地で肝試しやらないか？」

はぁ？肝試し？

それって普通夏にやる事だろ？なんで今の季節？

「なんで？」

「暇だからＳＡ！」

暇か…まあ確かに暇だけど。

「暇だからって…肝試しやるにも今の時期、昼は温かくとも夜は寒い微妙な季節だろ…特に今年はなんか暖かいし」

「きききき、肝試し！？」

「どうしたの愛美ちゃん？」

「い…いやぁなんでも！！」

ん？

この反応？……愛美はそういうのに弱い？

…ひょっとするとこれはいいチャンスなのでは？

「ようし付き合ってやろう！ただし皆さん強制参加って事で」

「ひえぇぇぇ！！」

ふっふっふ…効果絶大…

「お前にしては随分乗り気だな？まあいいや、わかった。連絡回しとくわ」

そして雄一からの電話は切られた。

「きききき、きもだめ…きもだめししし……」

「愛美ちゃん、すごく震えてるよ？」

「あっははは！この格闘技においては最強の愛美がゆゆゆ…幽霊ごときに！」

「格ゲーだけどな」

「ううう…でも本当に怖くはないよ！うん！」

「どうですかねー」

「ひどいよ優希！本当に大丈夫だってば！」

わかりやす…

それより優希がこういう事、意外と平気な事に俺は少々びっくりし

た。誰がどう見ても優希と愛美、怖がるのは反対に見えるけど…まあいいや、これで俺も愛美の弱みを握ったというわけだ。

問題はアレだ、多分クジでペアを決めるんだろうがそこで愛美とあたるかだ…俺が余計に恐怖を呷って…ふふふ、これは面白いことになりそうだ！

……

……

…

っというわけで今日の夜、ご近所の霊園！

「…あのー、雄一さん？」

「なんだ？」

「…なんか…風邪ひいたっぽい榛名と真紅はいいとして…少なくね？」

確か雄一は全員に連絡回したわけだ。

ところがここにいるのは俺と優希と愛美と雄一、あとは高臣と圭一、あと井上さんだけだ。

榛名と真紅は残念ながら折角の日曜だってのに風邪…まああんまり重症じゃないらしいから明日にも治るっぽいけど。

「いやぁ、それがさ。しげちーとドンちゃんは街中でナンパしにいくっていってたしさ、太一はミーシャさんとどこかにいったっぽく

て二人とも電話に出ないしさ…泉谷先輩とか呼んでも仕方ないし、ましてや真面目な中原先輩を呼ぶのは流石に自殺行為かと思って…
…なんだ？それとも治三郎呼んだほうがよかったか？」

「いや、それは勘弁」

っていうか、今更思い出したけどなんであの時あいつ街中にいたんだ？

…まさか、マジで大〇公園でいい男をベンチで待ち構えているのか！？イザとなったら自慢のナニを晒し「やらないか」と語りかけてくるのか！？

…うん、まあ妄想はそのへんにしておこう…ってか考えたくもない。

「まあいいじゃん、ボクらだけでやろうよ」

「そうだな、あ、でも大声はだすなよ？一応他校とはいえ高校が近いんだ。俺らの行為がバレたら飛鷹としても立場がアレだし、俺らも処罰の対象に…」

じゃあやらなきゃいいだろうって突っ込みたくなるけどまあ今回は愛美をちょいといじめる為、いい事だろう。

「よし、クジをひいて同じ番号の奴がペアだ」

「よ～し！いくぞ、いくぞ……3番！！」

「ええ！？小村君と一緒！？…ちょっとがっかり…」

「うわぁっ！ひどいっすよ！少しは我慢して口を慎むとかしてくだ

さいよ井上さん！！」

ふ、圭一、お前はその程度なのよ。
…ってなんで今日の俺はサドっぽいんだ？まあいいや。

「え～っと俺は…2番」

「にばん！にばん！」

優希とペアか……う～ん…愛美とペアになったのは…高臣のようだ…よ～し。

「高臣！」

「なに？」

「ひそひそこそこそ……」

「ラジャー！ボクにまかせたまえ！」

流石高臣、わかってるじゃないか。
っじゃあ俺は優希とペアを組んで雄一に言われた通りに歩き、戦果報告或いは本人を見て戦果確認を楽しみにしつつ過ごすとするか。

Ｐａｒｔ３５．肝試しってのがあるらしい　後編

ふっふっふ……俺はなにも怖くない。
優希も…らしい。どうやら優希も幽霊とか非科学的な事は信じてないらしい……これはある意味では退屈だがまあ暇つぶしにはなる。

「ねえねえ充さん」

「ん？なんだ？」

「幽霊って何語喋るんだろう？」

そこかい！！

「え～っと…う～ん……ここは日本だし、日本で命を失った外国人じゃなかったら普通に日本語話すんじゃない？」

いや、信じてないからそんな事わからないけど。

「もしかすると！もしかするとユーレイランド語って言葉があるかもしれないよ！？」

「あるわけないだろ！」

「そうかなぁ？でも幽霊が人間界の言葉を話すってちょっと想像力に欠けてると思わない？そもそも幽霊って姿を見せるものなのかなぁ？」

いや、いないでしょ常識的に考えて。

まあ確かに巷でよく見る幽霊の想像図ってのは大体一度見たものに似ている何かにそっくりだし、宇宙人だって人型とかよくそういうのなら見るけどあんまり斬新なものってのはないな。映画で公開に出てきた化け物とか。

あと小太郎曰くC○Aとかが米軍の試作兵器の秘密を守るためにわざとプロパガンダを流しているとかいうらしいし。まあいずれにせよ、人間の想像力って案外低いのかもな。

「知らねーよ、見たことないし」

「見れるかな？お墓近いし」

「出来りゃ見たくないわ」

「わくわく、わくわく」

ダメだこいつ、完全に楽しんでる。

それにしても雄一の奴本当に何も用意していないのか？これじゃただのお墓周りじゃないか？……あ、そういえば俺って妹いたっけ？なんでも体が弱くてすぐに病気になっちゃって生まれてからずっと入院してて3年前に死んじゃった妹……まあだからといって脳に障害があるってわけでもないし、ちゃんと喋れる子で榛名とは仲がよかったけど優希や愛美は小さい頃にちょっとだけ会っただけだし、覚えてないだろうな。

…そういえば俺と優希が台所で出会った時…あいつもううちの学校にいたんだよな？妹の話とは関係ないけど、あの時既に引っ越しがなんだかって言ってて…優希は嫌がってここに…ん？

話が矛盾してね？…まさか優希自身が幽霊！？

……

……

…

ごめん、嘘です。
実は引っ越してきたばっからしく、俺も1年の末に転校生が来たとは聞いていた。でも誰だかは知らんかった。それが優希だ…前に本人が言っていた。でもすぐに引っ越しの話になったらしい。

読者の皆さま、こんな時ながら長らくの疑問に答えてみました。
さて、それはともかく妹の話にもどって…だからどうしたって話なんだけど…妹が遺骨がある墓ってここの霊園なんだよな……

もしかして妹…まあ名前は保坂須美(ほさかすみ)っていうんだけど。須美の幽霊が出てきたりして…と俺は思っていたりする。いや、そんな非科学的な事あるはずがないけど。

「あれ?保坂?」

そ、それって……
俺はちょっと墓の後ろに回ってみると……やっぱり。死んだ爺さんと死んだ婆さん、あと須美の名前が刻まれていた。ほかには昔保坂家の人間として生きていた人物の名前が……これはうちの墓だ。

「もしかして充さんのうちの?」

「そうだけど?」

「ふむふむ、最近誰も墓参りに来ていない様子…」

そりゃ妹が死んだのは忘れもしない3年前の2月26日……2歳年下だった須美は12歳ぐらいだった。ずっと病室だっただけに優希や愛美とはあんまり会った事がないしおそらく二人、少なくとも優希の記憶にはない子だろう。

まあそれはともかく、2月にならなきゃ墓参りには来ないし、受験のシーズンにはここにさえ訪れなかったからなぁ…爺婆の命日も学校とかで行けないし。

「まあ、年に1回しか来ないからな」

「ほうほう」

「人んちの墓をじろじろ見るのは失礼だと思うぞ？」

「あ、ごめんなさい。ちょっと気になっちゃったから」

いや、興味とかそういう問題じゃないと思うけど。

「あ」

っと優希が声をあげる。

どうやら須美に気がついたらしい。

「充さん？この子……」

「ああ、それ？俺の妹」

「妹!?いたんですか!?」

「お前会ってるはずだぞ?まあ覚えてないと思うけど……俺妹いたんだよ。でも生まれつき体が弱くてすぐに病気になってしまって、それでも12歳までは生きていたんだけどな」

「須美ちゃん……んんー」

優希は無理にでも思い出そうとしているみたいだ。
…でも会ったのは一度か二度、それほど思い入れがあるわけでもなさそうだし、思い出せないだろう。

「…ごめん、覚えてない」

「そうか、そういえば愛美にもまだ言ってないな。あいつは小2まで俺といたし、覚えてないかもしれないけどお前よりは会ってるから多分知ってるはずだ」

「そう…」

なんだ?
さっきから優希が暗いような気が?

「充さん…本当に1人だったんだ…」

「仕方ねーさ、それでもあいつは死ぬ直前笑顔だったけど」

「笑顔?」

兄さん、今まで…こんな私にも優しくしてくれてありがとう……

それがあいつの最期の言葉だった。

涙を流していたけど顔は笑顔だった。正直、死の直前の人の気持ちなんてわからんし、俺もまだ死にたくはないけど…でもあいつは笑顔だった。

「…う～ん、須美ちゃんってどんな子だった？」

「一応写真は常時携帯してるぞ？」

「え？ホント？」

「ほれ」

飛鷹の生徒手帳…っていうかなんでもいいから生徒手帳には俺の顔写真のほかにもどこかに須美の顔写真をはさめている。

「うわぁ…誰かにそっくり？」

…そういえば。

この黒く長くて綺麗な髪…１２歳でもそのわりには少し子供っぽい顔…なんか優希にそっくりだ。

…じゃあ優希を見て放っておけないのも妹似だから？確かに最初人の台所に潜入した泥棒猫早川優希を見た感想は泥棒めってのもあったけどそれ以外には可愛い、可愛いとは思った。でも何故だか知らんが少し特別なものを感じた。

ただ、須美と違って優希は元気で体力もあって風邪もひきにくく体

が丈夫…でもよくよく思い出してみればそれが一番の大きな違いかもしれない。須美も優希ほどひどくはなかったが少しだけ天然が入っていたし、敬語と普通か混ざった口調で喋っていた。

……なんでだろう？

そんなに似てるってなのになんで今になってようやく気がついたんだろう？それは前から誰かに似ているとは密かに思っていたけど……

そうか…俺の頭の中から須美という存在が消えかかっているのか…何故だ？たとえ須美が普段病室にいたとしても暇な時は遊びにいってあげて、あんなに仲良くしていたのに？

「…さん？充さん！？」

「……」

「み、充さん！？」

「…ん？…な、なんだ？」

「なんだじゃないですよぉ……ちょっと目に涙溜まってない？」

「そ、そんなこたぁないだろ？」

…とはいいつつも、目が非常にうるうるするし、なんだか冷たく小さなものが顔を移動してやがて落ちる感触がした。そして通った場所には今だ感覚を感じる。

「充さん…完璧泣いてますよ？」

「悪い…」

「気にする事ないよ、誰だってよっぽど仲が悪くなかったら…兄弟、死んじゃったら悲しいに決まってる……ごめんなさい、私が保坂家の墓石なんて見つけるから」

「いや、そもそもここで肝試しをやるのに乗り気だったのは俺だし、お前は気にする事ない」

それに、俺はたった今、真に思った事がある。
形見じゃないけど、それに近い人ならすぐ近くにいる気がした。

「…？どうしたんですか？」

「えっ？いやなんでもない！」

いかんいかん！変な意識するところだった！

「さぁて！そろそろ移動するか！流石に皆心配するだろ」

「そうだね」

俺は気を変えて立ち上がって。その瞬間風が吹き、不意に俺は生徒手帳を落としてしまった。

「あ、充さん」

「あ～あ、まあ下泥じゃなくてよかった…ん？」

「あ、四葉のクローバーですよ？」

「本当だ」

っていったってンな非現実的な事信じてるわけじゃないけど。
まあ縁起はいいだろ。四葉のクローバーを見つけた人には幸福が訪れるっていうし。

「偶然だね」

「そうか？ひがら一日中その辺探してたら1本ぐらいはありそうなものだけど？」

「ふふ、もしかして須美ちゃんからのプレゼントだったりして？」

「んなわけねーだろ？」

「でも偶然すぎるよ！…え？…じゃ、じゃあ今の風ってもしかして！？」

「ありえるか！んな非現実的な事！」

「はは、ですよねー」

「ま、行こうか」

「そうね」

とりあえず俺と優希は俺の家の墓に向かって手を合わせた後、この場を去った。
って、結果的に目的は…だって？そりゃあ大成功さ、雄一のこんに

ゃく作戦が愛美に見事に通用したそうで。くそ、ちょっと見たかったかも！

Ｐａｒｔ３６．修学旅行　いざ飛行機に乗らん！

ー ー ー札幌駅ー ー ー

「よ～し！全員いるか！？いない奴は手を挙げろー！」

「は～い！ボクいませ～ん！」

「いるじゃん！」

なにやってるんだろ？五十鈴先生と高臣…
…さて、１０月に入り、いい加減寒くなってきましたねぇって時、
俺らはどこへ行くかっていうと…もうタイトル見ればわかるだろ？
常識的に考えてアレだよアレ。

行き先はありがちな京都！…かと思ったら沖縄…沖縄ってなんかあったっけ？
…あ、そうだ！

「愛美～」

「なに充？」

優希と二人で楽しそうに話をしていた愛美を発見、ある事を思い出した俺は愛美に話をかけてみた。

「修学旅行ってどこいくんだったっけ？」

「はぁ？今更？…んもぉ沖縄だよ？オ・キ・ナ・ワ！」

「そっかぁ…沖縄ってさ、日米の激戦地だったじゃないか？夜になると大量に出るぞぉ？」

「ひいいいいいい！！！」

「充さん！嫌がらせしたい気持ちはわかりますけどそれは冗談抜きに怖いよ！」

「さーせん！」

ふっふっふ…弱みを握るっていいですねぇ。
まあそんな調子で飛鷹高校２年生の修学旅行が始まった。

「いやぁ！それにしても愛美達も修学旅行かぁ…早いものだね！…そうだ充！須美ちゃんって今１５歳でしょ？もし元気だったら須美ちゃんもいつ頃かは別にして修学旅行、愛美達と同じだね」

「うっ！！」

「おろ？どうしたの？」

「いやいやいやなんでもない！そうだなぁ…まあ残念だけどあいつは修学旅行にいってないわ！」

「充さん…」

ふぅ…須美は死んだよとかこの場じゃ言えないだろ…
まったく…大体その名を出すな！こっちが悲しくなるわ！

「あ！ねえねえそれどこで買ったの？」

「うん、澄川のどっかの店！」

「す…すみ…」

「あわわわ！充さんが！充さんが！もはや地名を聞いただけで悲しくなるほどのショックぅぅ！！」

もうだめかも。

あ～あ、肝試しなんて断っとけばよかった。完璧に思い出しちまったじゃねーか。

「よー、ラブラブさん」

「誰がらぶら…げっ！雄一！ついでに太一！」

「俺はついで！？しかもげって！？」

「悪い悪い、冗談だ。ってなんだよ？」

すると雄一が前に出てきたっぽい。

「まあ聞け、残念な事に君の隣の座席は俺だ」

「知ってるわ、ってなんだ？」

「うん、それだ！……まあ、ざんねーーー」

「それだけか～い！！」

「うぎゃあああ！！」

俺は雄一を殴り飛ばす。

雄一は１００ｍぐらいぶっ飛んだ…俺強！！！

まあどうせギャグ補正で１秒後にはそこに無傷で立ってるんだろうけど。

「いててて！ひでえじゃないか！」

「うるせ！井上さんはどうしたんだよ？」

「それはだな、クラスが違うからなかなか一緒になれないという罠…うう…」

「わかったから泣くな！」

ああ…めんどくさい。

って、そのあとだけどまあ、列車に乗って空港まで走る。

快速「エアポート」とかいう列車で。

「…うん、いい音」

「えっ？お前ってそんな趣味？」

「いやいや！そうじゃないけどモーター音っていいっすねぇ」

知らねぇ…

車内はわいわいがやがやうるさい…でも俺は眠い。

…寝るか、それがいい。

……

……

…

「こらぁ！おきい！！」

突如としてゴールドなボールのあたりに激痛が！

「うおおぉぉ…何をする愛美……」

「何をするって…充が寝てるからでしょ？優希も起こしたんだけど起きないからしょうがなく愛美がやったんだよ？」

「だからってここにかかと落としはある？俺のライフはもう0よ」

「うん、元気そう、じゃ、行こうか」

「ひでぇ！」

俺は泣く泣く列車から降りた。

荷物は重いし、うざい奴らも多いし、眠いし、ああ、ヤバイ。

「おい、大丈夫か？目が死にそうだぞ？」

圭一がとりあえず心配そうにする。

「えっ？大丈夫大丈夫、俺のＨＰは９９９だ」

「そうか？…どれ！お～い、じさ－－－ぐぇっ！！！」

「やめろぉ！それだけは勘弁してくれ！！！」

「ですよねー。まあ俺はさっさと逃げる予定だったけど」

「ホントそれだけはやめて！俺同性愛者じゃないから！」

「わかってるわかってる！本命はお前の家に！」

「知らん！」

もうこいつ殺していい？

えっ？いい？わかった。

「じゃあじゃあ！やっぱり木山さんか！？幼馴染だって－－－」

「どっかいけ！」

「きゃあああごめんなさぁぁぁぁい！！！！」

ちょっとマジな目で睨みながら叫ぶと圭一は逃げました。

ちょろいもんだぜ…あ、でも俺いじめっ子じゃないから心配はするな！まあそのうち圭一も戻ってくるべ。

とりあえず飛行機に搭乗、ちなみに俺は窓側で隣は優希、その隣は

高臣で向こうの隣には愛美がいた。これなんて都合座席？

「充さんどうしたの？」

「えっ？ああ、眠い」

「ま、まだ眠いの？」

「仕方ねーだろ、眠いもんは眠いんだ」

真面目に毛布を貰おうかと考えている俺、寝る気満々！

そう思っていると高臣の声が聞こえてきた。

「…ねえ保坂！これって飛ぶの？」

「はぁ！？飛ぶだろ？常識的に考えて」

「え～？ボク飛行機乗るの初めてだし～」

「いや、あのな、ベルヌーイの定理ってのがあってだな…」

「うわあ！保坂がボクに難しい話をしようとしてるー！」

「ひどいじゃないの充！愛美イジメはハンターン！」

「充さん、朋花ちゃんに難しい事を説明するのはイジメに等しい行為です！」

「はぁ！？」

えっ？なんで？なんでぇ！？
俺は単に飛行機が何故飛ぶのかって教えてあげようと思っただけなのにこの仕打ちはひどくね！？

「いや、でもあれだろ。なんで飛ぶかも知らないで乗るのって怖くね？」

「知ってるほうがいつ事故るかわかりそうで怖い！」

高臣はそうきっぱりいう。
別に事故るかどうかなんて知ってもわかんないと思うけど？

「ねえねえ充さん、そういえば前に乗った飛行機と違ってこれ、プロペラがないね？」

「えっ？ああそれはな…」

「あ、やっぱりいいです。長くなりそうだし」

「ひどくね？」

ま、いいか。
普通に暮らしてりゃ飛行機に御世話になるって機会もあんまりないだろうし。
さて、そろそろ離陸の時間だ。

「と、飛ぶの？飛ぶのかこれ！？」

「プロペラないのに大丈夫かな？」

「ううん、走ってる！こんな大きなものが！でも飛ぶの？もしかしてボクたちこのままオーバーランして建物に激突して燃え盛る飛行機に閉じ込められて焼死！？」

「だんだん加速してるよ…飛ぶのかな？」

「…はっ！？……と、飛んだー！！保坂！優希！愛美！見ろー！飛んでるぞー！！」

「うるせぇ」

「なっ！？うるせーってなによ！ひどいじゃないか！」

だってしょうがねーだろ。
飛ばない飛行機って試作機の失敗機とかまあそんな感じのものだろ？

「朋花～、確かにいくらなんでも飛行機飛ぶぐらいでそれはないわ～…でも愛美、何気に期待してるんだよ」

「えっ？何何！？飛行機が宇宙まで行くとか！？」

ないからないから！この機種じゃそこまで上昇できないと思う！

「ん～っとね…突如としてハイジャック犯が現れて、でもそこで充がハイジャック犯を3秒で仕留めて近くの空港に飛行機を胴体着陸させて怪我人は出ても全員生還という面白そうなストーリーとか！突然エンジンが故障したけど充が飛行機をハイジャックして滑空しながらどこかの飛行場に卸して皆助かるとか！」

「無理無理無理！俺操縦できねーし…つーか飛行機に乗ってる

時にそんな話すんなー！！！」

…とまあこんな感じで修学旅行は始まった。

ああ…つまんねー。

Ｐａｒｔ３７．修学旅行　沖縄♪

っまあ飛行機に乗ったり乗り継いだりでいろいろあって沖縄に到着した。
流石沖縄、道内より暖かいですねぇ～

「おきなわ～♪」

愛美は楽しんでるようだ。
って水を差すようで悪いけど…

「まあ夜は出るけどな」

「ひぃぃ！！！」

「ぶ…ッハハハハハ！！！でねーよ！つーか幽霊信じてるのか？」

「だって心霊写真とかあるし…動画にこっそり移ってたりするし…それに目撃証言あったりするし…あわわわ、想像してたらまた怖くなってきたよぉぉ！」

こりゃおもしろい！
ちなみに俺はまったく信じてないので怖くありません。むしろ発見したらとっつかまえて幽霊信者に見せてやりたいぐらいだ。

って、最初の行き先は首里城…まあ説明しなくても常識の範囲っぽいし、ゆ○りか同レベルじゃなかったらわかるだろう、うん！

「ううー…蒸し暑いです…」

「確かに……」

沖縄暑！！

最初は元気で心霊の話を聞いて冷めてまあその後もとりあえずは元気だった愛美や元から元気な陸上部員の高臣でさえ汗だくになって体力が尽きてきてるし。

しげちーやドンちゃんに至っては圭一に引きずられてるし！

「ああ…みっちー…俺もうダメー」

「兄貴ぃぃ…俺達圭ちゃんに引きずられつつ観光してるからお幸せにー…ってか暑いけどお元気でー」

「待てぇぇ！死ぬなぁぁ！！」

ダメだあいつら。

マジで死にそうな表情してるし！

そして雄一＆太一はそれぞれの彼女といちゃいちゃ…ん？井上さんって別なクラスじゃなかったっけ？

「ああ…久々に暑い…しかも城の色が余計に暑さをひきたてているような…ボクもうだめかも～」

「ああ～朋花！！暑いからくっつかないでよ！！」

「だってぇぇ愛美たん涼しそうだったんだもん」

「愛美はそんな趣味じゃない！暑い！」

ご愁傷様。

ああ…俺ももうダメ…もうダメぽ。

「ったく、皆情けないなぁ」

「あ？五十鈴先生？五十鈴先生は平気なんですか？」

「そりゃもちろん！暑い！死ぬぐらいね！」

いや、平気そうなんですけど。

バスガイドさんの方言混じりの解説は俺はは八割方聞かず、近くにいた圭一達と話をしていた。

でも暇っす。

いや、なんつーかね、最近ネタなくね？ネタらしいネタが。

実はアレなんだ。作者もいい加減にネタ切れらしくてさっさと作品を終わらせたいらしいけど未だに修学旅行でもうこの先どうすればいいのやらって思ってるらしいの。

無理にでもコメディーにしようとしてつまらなくなるのが大体のオチだし。

でも修学旅行って自分で思ってるよりもなんもねーし、どうしよ…

…よし、妄想だ。妄想しよう、それが一番だ。

ーーーつーわけで充の妄想世界ーーー

「…誰だ！？」

「ふふ…」

「何故に笑う…俺に何の用だ！？」

「…問答無用！！！」

「！？」

目の前に見える…暗くてよくわからないが少女のような人は突如として俺に襲いかかってきた。
俺は何も考えなかった。だが体が勝手に動き謎の少女の攻撃をかわした。

少女の右手にはぎらりと輝く鋭いもの……あれは間違いなく…
相手には間違いなく殺意がある！

「くっ！何様のつもりか知らねえが……そっちがそのつもりなら俺も戦わせてもらうぜ！！……うおおおおお！！！！！！！」

俺は無我夢中になり走り少女に攻撃を仕掛けるも少女はかわし、さらに当てようと俺が追撃する。それの繰り返しが行われた。

「遅い！」

「！！」

俺はなんとか攻撃をかわし少女の腕を掴んだ。

「……す、須美！？」

「久しぶり、兄さん…いや、ただいまが正しいかな？」

馬鹿な？…須美は死んだはずだ…なんでここに！？

「ふっ、帰ってきてくれたのはうれしいがこれはどういうつもりだ？」

「これ？力試しよ」

「力…試し…でもお前は病弱で生まれてこのかたロクな運動をしていないはず…」

「界〇様に鍛えてもらったのよ。兄さん、前のように私を守れるかどうか…見せて！」

「…ん！？」

俺は須美の気が次第に上昇するのを感じた。

ま…まさか！？あの赤いオーラは…まさか！？

「界〇拳！！１０倍だぁぁぁ！！！」

「うおっ！！」

俺は不覚にも一撃をくらった。

威力強すぎだろ…普通に考えて１撃ノックアウトしても不思議じゃない威力だ…だけど…立てる！？

「兄さん、強い、強いよ…界〇様の修行を受けた私の攻撃に耐えられるなんて」

なんか知らないけど…俺は…俺は強い！
行ける…これなら界〇様はおろか伝説のスーパー地球人にさえ……

「はぁぁ……」

「こ、この気は！？」

「だあああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺の体を黄金のオーラが覆う。
髪も金髪となり逆立ち、全身から力がこみあげてくるのがわかった。
あまりの力に石が空に舞い、大きめの石は割れている…これこそ…
これこそが！

「ま、まさか…兄さんは伝説のスーパー地球人なわけ！？」

「穏やかな心を持つ地球人が激しい怒りによって目覚めた伝説の超戦士…」

「それがスーパー地球人…でもそしたら兄さんは何に怒って…」

「須美！それはお前が兄に殺意丸出しな事だ！！俺の知っている須美はそんな子じゃなかった！！」

「！！」

「そりゃあもちろん元気になってくれたのは嬉しいし…生き返って

くれたのは嬉しかったさ……でもそんな乱暴な須美なら俺は戦いを選ぶ！」

「兄さん……私はいつも通り、ごめんなさいね。でも…兄さんがその意気なら私も戦いにつきあいます！」

「よし…久々の喧嘩だな…」

「ええ…」

「…須美！」

「兄さん！」

二人はその後無言でお互いに立ち向かい、拳がぶつかり合った。しかし戦闘力が平時の５０倍である俺のほうが力は圧倒的に高く、須美はぶっ飛んでいった。

「きゃっ！！！」

「…無駄だ。おめえじゃオラには勝てねえ」

なんだか俺も完璧になりきっていた。

「…スーパー地球人…でも、それは一人だけの存在？」

「なに！？まさか須美も……」

「私は弱かった…いつまで経っても弱い私に腹が立った…そこで目覚めたのが…！！！！！！！」

なんと須美までもがスーパー地球人だった。
なんてことだ…戦闘力は互角か！？…いや、そんなのはわからない。
ただ…とてつもなくでかい気を感じるだけだ！

「これで…」

「ああ、これで」

「「互角！」」

俺達はそう叫んだ瞬間にぶつかり合い、某鳥○漫画のように激しい戦いを演じた。
「この！…なに！？」

パンチを仕掛けると須美は消えた。

「…！？」

なんと後ろだった。
俺は咄嗟にその攻撃をかわし須美を肘打ち攻撃し、地面に叩きつけた。
そして……

「かぁぁ…めぇぇ…○ぁぁ…めぇぇ…」

「…まさか！？」

「波ァァァァ！！！！」

「兄さん！それは…それはいろいろな意味でヤバ（ｒｙ…ぶるあああああああああ！！！！！！！！！」

激しい爆発が地上で起こり…そこで戦いは終わった。
俺はスーパー地球人を解除して、ボロボロの須美のへ下いってあげた。

「…須美」

「兄さん…やっぱり、強くて、たくましくて…」

「別に強くなんかない。ただ俺が直に感じたのは…お前が元気になって戻ってきてくれてよかったって事だけだよ」

「兄さん…そして優しい……兄さん、兄さん！！」

突如として須美が俺に抱きつく。
すごく強く抱きしめられてる感じがするけど…でも痛い感じはまったくしない。むしろ温かみを感じる。

「お帰り、須美」

「ただいま、兄さん」

……

……

…

「…い！…おい！！」

ん？なんだ？

ーーー現実ーーー

「おい！充！」

「充さん！？」

「ん？愛美？優希？」

「充さんどうしたの？完璧上の空だったよ」

あ、そうだ。

あれ妄想だったんだっけ？俺の。

「まったく充ったら～、ホントに暇になるとすぐ自分の世界に入っちゃうよね、昔っから変わってないね」

「はいはいすいません」

「充さん、そろそろホテルに行くそうだよ？」

「あ、もうそんな時間？」

っというわけで俺はその後バスに乗り込んだ。

いやぁ…妄想っていい暇つぶしになるね！すっかり1話分になっち

やったよ。

Ｐａｒｔ３８．修学旅行　ホテル

いやあ、すっかり妄想に明け暮れ、周囲が見えなかったとは俺も末期だな…

「充さんしっかりしてくださいよぉ」

「真面目じゃないし、しっかりできねー」

「…しっかりできないの？…うわあああんまた充さんが私のせいでダメ人間にぃぃ！教育しなきゃ！調教しなきゃ！」

「せんでええ！！」

いろいろと暴走するのは昔っからかわらないな優希も。
案外人間って変わらないものなんじゃねーかってぐらい基本的には変わらないな、何年経っても。

「充さんさっきなに考えてたのかな？かな？」

「怖いよそれ！いろいろな意味で！…まあ考えていた事っていったら……暇つぶし妄想」

「暇つぶし妄想？どんな妄想？おいしい妄想？」

「おいしいかどうかはわからんけど…」

そもそもあんな某ジャ○プ妄想を俺の口から言えというのか？
無理無理無理無理恥ずかしいっす！

「なんで何も言わないんですか?…はっ!?もしかして充さん…古賀さんの陰謀で友達がいなくなっちゃったとか!?」

「なんでそこで古賀さん!?古賀さんが可哀そうでしょ!」

そういえば最近古賀3佐見ないなぁ…忙しいんだろうか?あとあの人いつまで少佐なんだろ?

「じゃあ!じゃあ!治三郎に穴を掘られて割れてるあたりの門が痛くてしょうがないとか!?」

「それもない!そうなる前に断固として抵抗する!」

つーか何気に恥ずかしい事言わなかったか優希?

「ままま、まさか充さん好みの女の子が近くにいたとか!?」

「うん、可能性はある」

「かかかか、可能性!?そんな、そんな!排除しなくちゃ!」

「なんか今日の優希怖!!」

「きき、気のせいです気のせい!」

なんというか…ヤ○デレ妹じゃねってぐらいのセリフがたまにあったり某雛○沢の鉈女を思わせるセリフがあったり…とりあえず今日は何気に怖いっす。

あとは…なんか、最近随分と積極的に話すよな優希。まあいい事だ

しどうでもいいや。

しっかし会話が続かないな～…ん？。

「ふえ！？」

「ど？どうした？」

「ななな、なんでもないなんでもない！！」

少し顔が赤いぞ？

熱でもあるんだろーか？

……っという事で到着したのは沖縄の某ホテル。

立派かといえばそうでもない普通のホテルだった。かといって汚いわけでもない。

ちなみに俺の部屋は雄一と太一と圭一が部屋仲間。

当然女と一緒なんて夢のような話はない…畜生！

「あー、疲れたぁ！」

「そりゃあ一日中しげちーとドンちゃん引っ張ってたら疲れるな決まってるわ」

「ですよねー」

圭一は完全にのびていた。

「うう！梨佳！梨佳ぁ！」

「ミーシャさん！なんで同じ部屋じゃ！」

「泣いても男女は別なんだよ、まあ治三郎と同じ部屋じゃなかった事に感謝するんだな」

正直言って俺も女の子と寝たい。

以前ならなんでそんな事考えると自分に言い聞かせてたけど最近はよっぽど、それこそ犯罪行為でない限り我を止めるのが面倒くさくなってきた。

俺って末期なのかな？

「くそぉ！こうなったらジャ○プの話でもしよーぜ！」

太一がそんな事を言う。

「暑苦しいだろ…」

ぶっちゃけ暑く苦しいと思う俺。

「いいんだ！俺は友情・努力・勝利でできた男なんだ！」

た…確かに！？

まあ友達思い、一応努力したっぽいからミーシャさんがいる。ミーシャさんをゲットしたから勝利…強ち間違いではないぞ！？

くそぉ！なんか太一に負けると無性に腹が立つのは俺だけ！？

「なあなあお前ら」

うわ、圭一復活したし！

「なんだよ」

「ここ、露天風呂あるかな？」

「まああるんじゃないか？」

大抵のホテルにはあるっていうイメージがあるのは俺だけか？

「っという事は……女湯ー－－」

「また警察沙汰するのかい！！」

俺は思いっきり圭一を打ん殴り、圭一は窓ガラスを突き破って沖縄の空に消えた。多分復活すると思うけど。

「あのー。俺の出番は？」

あ、ごめん雄一、お前空気とかしてたわ。
じゃあ出番与えてあげる。

「雄一、窓ガラスの修理頼んだ」

「はぁ！？なんで俺！？」

「やらないと作者が二度と登場させないって言っていた」

「ひどっ！！…わかった修理するから俺の存在を消さないでぇぇぇ

！！！」

泣きながら雄一は修理を開始、１０秒で元に戻った。
…てか早！！

「さて、そろそろ晩飯だ。充、勝負だ！」

「はあ？何の？」

「それはだな…晩飯がバイキングだって言うらしいじゃないか……
鱈腹食ったほうが勝ちだ」

「って、景品はないのかよ？」

「景品？男という名の勲章だ…」

お、男！？
ーーーこういう燃える展開に弱い充であったーーー

男、男…男だと！？
圭一のようなチャラチャラした奴に負けてたまるか！
フードファイター俺！いくらでも食ってやる！！

ーーー食堂ーーー

「え～、それでは飛鷹高校を代表していただきまーす！」

「「「いただきまーす！！」」」

ちなみにその代表は後期生徒会会長の根元佳織（ねもとかおり）、顔は中原先輩並に

可愛いからか人気絶頂だけど別なクラスだしあんまり俺とは縁がない人。

「うわああ…保坂さんすごい…」

「つか小村と保坂いろいろとやばくない？」

なんかもう噂されてるけどどうでもいいや！
俺は食うだけ食う！

「ふっ！充よ！俺のタンカー並の胃をなめるなよ！」

「胃のでかさなら俺も負けんわぁぁぁ！！！！！」

「な…なに！？…目にも見えぬその速さ！！…そんな…馬鹿な！？」

「でかいだけじゃない…素早くくう事も大切！！いかに速く、そしていかに多く！！これが格闘○ィナー！！！」

「ま、まさか口が巨大化！？」

「そんなグロテスクなものではない…俺は通常…コツがあるのだ！！それがわからぬ圭一には真似はできん！！！」

※よいこのみんなはよくかんで、ゆっくりたべましょう。

「オラオラオラオラ」

「無駄無駄無駄無駄ァァ！！！」

……

……

…

「ふ…食い勝負には負けた…だがな充！俺はまだ行動可能だ！」

「お…おえええ……もう、無理っす…」

「どうみても食い過ぎだろ保坂…」

五十鈴先生の仰る通りです。
マジで食い過ぎました。

ま、どうせギャグ補正で１０秒後には腹が出ているのも治るけど。

…そういうわけで本当に治った１０秒後、俺はある事を聞いた。

「ミッチー！」

「ん？あれ？しげちー？復活したのか？」

「まあ飯食ったし！それよりな、とりあえず忠告しておく」

「忠告？なんだよしげちー？」

するとしげちーは俺の耳に顔を近づけた。

「さっきからたまに見る柄の悪そうな奴らいるだろ？」

「ああ、そういえば」

学ランって男の憧れらしい。
その学ランの中でも長ランやボンタンを来ていやる奴は如何にも頭が悪そうな髪を染めているサングラスの男、そして性格悪そうな女達がホテル内で見られた。

どうみても不良校です、本当にありがとうございました。

いや、うちもエリートみたいなのはいないけどかといって特別不良はいないし、仮に入ったとしてもまあ5月ごろには中退してる。
…ってかがんばるなぁあの高校の不良…2年のこの時期までいるのかよ。

って？

「って、なんだ？あ、そういえばお前、いつもドンちゃんといるがあいつはどうした？」

「実はその事なんだよなぁ…どんちゃんなら養護教諭の世話になってるぜ」

「はぁ？」

すんまそん、いまいまち意味がわかりません。
（誤字じゃないよ！）

「いやあなんでもあいつらの事見てたら突然喧嘩を売られてフルボッコにされたんだって。ひゃー怖！俺ら喧嘩上等じゃねーのに」

少なくともしげちーは喧嘩上等の一歩手前な気がするけどまあどうでもいいや。

要は関わんなければいいんだろ？ってか関わりたくないっす。

はてさて…どうなる事やら。

Ｐａｒｔ３９．修学旅行　喧嘩上等！あんだコラ？やんのかコラ？

つーわけで養護教諭がいる部屋に俺としげちーは行った。

「失礼します。お～いドンちゃん生きてるか～？」

「あぁ！兄貴ぃ！見事にボコられしまた、てへっ」

てへじゃねーだろきめぇ！

しかしドンちゃんを見たところ本当にひどくボコられたらしい。

「土井君の命に別条はないけれど」

いや、あったら病院送りでしょ！

この養護教諭の先生は藤田咲（ふじたさき）、美人で有名でうちのクラスじゃ五十鈴先生かこの人か、どっちをとるかで野郎どもが議論するぐらいだ。

でも俺どっちにも興味ないから別に関係なし！

「ただ２～３日はおとなしくしていたほうがいいわね、それから土井君に怪我をさせた隼鷹高校の生徒はまだ誰だか特定されていないけど、あの学校ちょっと問題のある子が多いから二人もくれぐれも関わらないように注意して」

「は、はい」

隼鷹高校…正式名称道立隼鷹高等学校は市内でもトップレベルの不良校で別名「ヤンキー収容所」と言われているが「バカの吹き溜まり」や「ヤクザ製造工場」ともいわれるほどの底辺高校、ついでに卒業生の３割はヤクザ関係の職業に行くらしい。

大学進学者?そんなまともな奴だったらまず隼鷹入らないと思うよ。
ちなみに去年の校内暴力ランキングは市内はおろか道内でダントツ1位でした。

「きゃーこえええ、みっちゃん。全員ぶっ飛ばしてよぉ」

頼むからミッチーとかみっちゃんとかみったんとかやめてくれ。
正直キモイわ。

「嫌に決まってんだろ。俺は関わりたくないの、しげちー1人でよろしく」

「ちょ!ひどっ!」

「だってお前があっちの世界に一番近い人間だろ?」

「そりゃひどくね!?」

「と、とにかく滋野君もギリギリセーフだけどあっちには行かない事、何か悩みがあったら遠慮せずに先生にいってくださいよ?」

「ええ!?俺そこまで悪に見えるんですか!?」

う~ん、微妙な所。
まあただの女好きだなしげちーは。

「保坂君も気をつけてくださいよ」

「はい」

俺は素直にそう返事をする。
っというわけで俺は部屋に戻った…って、当然女子が遊びに来るという夢のような展開はなかった。ですよねー。

「…ってうわっ！太一どうした！？」

何故か太一がボコボコだった。

「いやぁ！ミーシャさんにナンパする輩がいて困っていたから、助けてあげようと思ったら見事にボコられましたぁ！」

ちょ！おまえも犠牲者かい！
ってか隼鷹の奴らも喧嘩すきだなぁ…

「あー…喉乾いた…」

「大丈夫か太一？缶ジュースぐらいなら買ってやるぞ？」

「マジか？頼む」

太一の願いを聞き、俺は財布の中の１２０円を確認した。

「おい充、一応気をつけとけ。なんでも隼鷹の奴ら手当たり次第人打ん殴ってるらしいぞ。３人は隼鷹の教員につかまったらしいけど後の何人かはまだバレてないらしいぞ」

っと一応室長訳の雄一は俺に警告する。

「どんな奴らだよ。手当たり次第って…よく2年生のこの時期まで

やってられたな」

「修学旅行で日ごろの鬱憤でも晴らそうとしてるんじゃねーか？」

いつもお気楽な圭一は軽々しくそう言った。

まあそうだろうとは思うけど。

「とにかくさっさと帰ってこいよ充。俺、さっきの室長会議で五十鈴先生にあんまり部屋の外に出ないように言ってくれって伝達されたから」

「んじゃぱっぱと終わらせてくるわ」

とりあえず俺は部屋から出た。

…あ～あ、ここのところ全然おもしろい事がないっていうか…似たような事が続いてるっていうか…多分読者も飽きている頃だろうなと主人公ながらに思う俺。

ん？階段のほうに高臣を発見！

焦ってるらしい、まあ俺もある意味では急ぎ用、奴らに見つかったら痛い痛いだろうし。

「あ！保坂じゃんラッキー！」

「な、なんだよ？」

「ええっと、これからボクが言う事はまあ聞いてほしい」

「はい？」

いや、よくわからん。なんか用？

「んーっと…優希なんだけど…アッハハハ！例の不良に絡まれちゃったよー」

「そうかそうか、なんだぁそんなことかぁ、アッハハハ…ってのんきに言うなー！！！」

やっぱり！？まあ予想はしてたよこういう展開だし！
やっぱ俺って一応主役だから戦う運命にあるの！？いや、都合よすぎると思ったよ、なんかあっさり戦い回避できそうだったし、それに缶ジュース買いにいくという喧嘩するきっかけを作るご都合主義的な出来事もあったし！

あああ！俺って不幸！

「っというわけだからなんとかしてよ保坂！」

「んー、多分大丈夫じゃね？」

「な、なんで！？」

「だって、現役自衛官をぶっ飛ばす女にそこらのヤンキーが勝てると思う？」

「うっ…確かに…でも不安だよボクは」

「心配しなくても俺が行った頃にはヤンキーどももフルボッコだって、じゃあ」

「あ、保坂！」

普通なら慌てる所。
でも俺は慌てない、それは優希が現役自衛官を一撃で天空への旅をさせてしまうほどの実力だから。
まあ多分大丈夫だろ。

そう思って俺は自販機がある場所に行ったが…ん？優希…ってか何あの柄悪そうないかにもヤンキーの兄ちゃん達！？

「おら嬢ちゃん！ボケっとしてるんじゃねえよ！」

「えぇ～？眠いのにやだよ～」

「て、てめえ！それ以上逆らうとマジレ○プだぞ！？」

やっぱりな！特別怖がる事もなく普段通りの優希がいた。
流石だぜ…ある意味すごい！

っまあ優希なら多分1発であいつらを火星にぶっ飛ばす……

「あ、充さ～ん！自販機に用？ついでにりんごジュース買って～！」

ば、馬鹿ー！！！！！
俺に話かけるなぁぁぁ！！ヤンキーどもも「なにだてめえこの野郎」的な目で見てるし。

「あぁ？なんだてめぇ？連れか？」

「え～っとその…ただのクラスメイトです。はい」

こういうのはこういうふうにまあ適当にやっていればおK。

「何してるんだ？」

「何って…缶ジュース買うだけ」

ああ…なんて面倒くさい事に…

「そうかそうか」

「そうなんですよ～、あはは…で、では」

「あ？どこ行くんだコラ？」

はい？

「え、部屋」

「てめえこのまま帰れると思ってるのか？先公にちくられちゃあ困るからなぁ」

「はは、ですよねー」

やっぱ戦わなきゃダメ？

ああ…泣きたい。

え～っと、どうしよ？

1：喧嘩上等！かかってこいや！

2：ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！
3：逃げるが勝ち！

う～ん、2は俺のプライドが許さない。
3もなんか…よし、2！！！

「ん？」

「ごめんなさ……っぽろアタァーック！！！」

「ぐぉっ！！」

説明しよう！さっぽろアタックとは謝ろうとして敵が油断した瞬間を攻撃する保坂家代々伝わる秘技である。当然俺が今勝手に考えた技だけど…この技の特徴…それはパンチはおまけ。大事なのは敵の隙を無理やりつくる事！どんなに強い相手でも隙さえあればダメージを与えられる…でも隙なんてない。

ならばつくればよい！

どうだ！？完璧だろ！？

「お、お前卑怯だぞ！！このやろぉぉぉ！」

「み、充さん！？」

俺に卑怯？いい言葉！

「やっぱ俺喧嘩はだめっ……すながわキック！」

「おえっ！！！」

すながわキックもさっぽろアタックと同じようなので敵に隙をつくらせ、一撃を食らわす技だ。

「な、こ…この…うっ！？なにしやがるこのアマ！」

なんと優希が男の手を掴んだ。

「とりあえず手伝います充さん！」

ヤンキーは投げられ、背中を床に叩きつけた。

って俺はあとの2人を必殺おたるラリアットで撃退、あ～終わった終わった。

えっ？その後？…そうだな、圭一の世渡り上手を利用して隼鷹の生徒同士で殴りあったという事にしておきました。なんて卑怯なんだ俺ら。

－－－翌日－－－

「しっかし～、セ○シーコマンドー的な攻撃を仕掛けるお前もすごいけど早川もすごいよなぁ～」

「夏休みに見なかったっけ圭一？前に古賀さんぶっ飛ばしてただろ？」

「えっ？そうだっけ？」

ちょっ！覚えてないんかい！

っまあ俺と優希がちょいと戦ったおかげで今日、隼鷹の奴らにうちの生徒が打ん殴られたって話は聞かないし、ついでにいえば攻撃参加者は皆先生沙汰してるとか。ざまぁｗｗ

さて、なんか退屈な修学旅行は二日目を迎え、三日四日と経つもなにもなかった…つまんねえ！

ｐａｒｔ４０．日常…っすか

「あー、疲れたぁ」

「ようやく家だね」

「ああ」

ん？なんだって？修学旅行はどうしたって？
んーとね、あれさ。

正直言って何もなかったんだよ。
そりゃあ楽しかったけど本当にどこにでもありがちな感じで。だからその…なんかあったのは初日だけだったんだ！！そういうわけで一気に自宅に帰るところまでタイムワープしたのさ。

って、修学旅行の感想？
そうだなぁ…まあいろいろさ！

「はぁ～、もう歩く気力もねぇぇ…」

「充さんそれは疲れすぎだよ」

「あ～あ……脱力した！なんだかもうすべて脱力した！」

「なんか充さんが末期です！」

うん、俺末期！
…ふ、痛いな、俺。

「充さんしっかりしてくださいよ～！！お買いものは付き合って！」

「わかってるって…でもぐだぁってさせてくれぇ……」

「お疲れだね」

「お疲れです」

だって結局男メンバーでいろいろ話してて夜とか寝てないし。いろいろ動き回るし隼鷹の奴らと喧嘩はするし…もうお疲れです俺。

って、しばらく休んだ後に俺は優希と買い物に出かけた。

「だ、大丈夫？」

「保坂充！今なら逝けそうな気が！」

「逝く！？逝くってそれはやめてくださいよぉ！死体処理をするのに周りに迷惑がかかるから！」

そっち！？心配するところってそっちなの！？

数分後……薄れゆく意識の中でドアチャイムが聞こえてきた。さらに数十秒後、優希と真紅と榛名と古賀さんの声が聞こえてきた。そして古賀さんの叫び声が聞こえた。

はー…なにしてるんだろう？

「お兄ちゃんお帰り」

「充ちゃんお帰り」

「んあー？ただいま……って優希、その右手の血は？」

「ああこれ？あっははは、ちょっとね、赤い絵の具に手を誤ってつけちゃって…」

その言い訳を横で聞く二人はなんだが何かを隠しているような…はっ！？ま…まさか！？

古賀三等陸佐！？

ご…ご愁傷様……

最近出番がなくてやっと登場かと思いきや優希に殴られるとは…不憫なお方。

「そういえば古賀さんの声も聞こえたような…」

「あ、気のせい。だよね？真紅ちゃん？」

「う、うんそうだよ！お兄ちゃん一回耳鼻科いくといいと思うんだあたし！」

ちょ、無理に同意しなくてもいいから。

もう古賀さんがぶっ飛ばされた事ぐらいバレバレです！

「ゆーちゃんったら、流石に無理があるよぉ」

「ですかー」

そうだろ、榛名の反応が普通だと思うぞ？

「ありゃー、充ちゃんお疲れみたいだね」

「もうね、くたばる寸前…」

「大丈夫？」

「ダメぽ」

なんつー退屈な会話！

「それでさ榛名ちゃん、充さんったら疲労のあまりにお買いものについていく元気すらないらしい」

「わかった、私ちょっと買いものにいってくるね、真紅ちゃんは二人の面倒見てて！じゃっ、すぐ帰ってくるから！」

っといって榛名は家を出て行った。

代わりに買いものにいってくれるなんてそりゃ助かるぜ。

「ぐはぁ……」

「…お兄ちゃん本当にお疲れみたいだね。よし、今から風呂沸かすね」

「おう」

「あ、真紅ちゃん手伝うよ」

「えっ？いいよ優希お姉ちゃんもゆっくりしてて」

「そ、そう？ありがとう」

今初めて真紅がいい子に見えた。

……

……

…

激しく眠い、今何時かもわからない。

「充さんお風呂入ってくるね」

「ぐぅ…ん…んん……ぐぐ…」

意識もほとんどありません。

返事なのかどうかすらわからないように俺は答えた…事すら覚えていない。気がつけば榛名も家にいて晩御飯の準備をしてるし、真紅もそれをお手伝いしているようだった。

眠い…しかも誰か知らないけど親切な事にタオルをかけてくれたようだ。でもなんか暑い…汗がひどいなぁ……どのみち晩飯食うのに起きるし…起きるか。ついでに汗臭いし、風呂入るか。

「ん…あぁ…」

「あ、充ちゃんおはよー」

「んあ？おはよ…はぁ…」

「まだ疲れてるの？」

「そりゃもう、まだまだ寝れるぜぇ」

「うわあ…充ちゃんお疲れ……今日はそっとしておこ」

お心遣い感謝します。
俺は半分寝ている状態で浴室に接近した。

はぁ～、風呂入って飯食ったら寝よう……そう思いさっさと服を脱いだ俺は扉を開けたんだ。
そしたらなんと…どういうことでしょうかー、優希がいました。

「へ？」

「…はい？」

わけわからん。
これは一体どういう事だ？…長く濡れた髪に突然の出来事でよくわかっていないような表情をしていて、そして綺麗なお肌を晒している優希…か、かわいい……いや待て！じっくり見ている場合じゃない！！

「え～っと…その…すまん！！寝ぼけてた！！！」

「えっ！？…み、充さん！？」

俺は扉を閉めてすぐに服を着て走って階段を上って部屋に逃げた。
やばい！これはやばい！叫ばれる前に逃げたんだけどどうなるんだろうこの後…まあこの作品自体コメディーっぽいらしいからそういうルートはないとは思うけど…まさか俺逮捕！？

それだけは嫌ァァァァァ！！！！！！

こうしてかれこれ１５分が経過した。

下からはお風呂だよ～っと榛名が声をかけてくる。
…行けるか馬鹿野郎！…でもそういうわけにもいかないし…よし！

俺は走って風呂場に行き、途中見かけた榛名や真紅や問題の優希をスルーして風呂に入った。

……はぁ…もうダメだ…

すると向こうから足音が聞こえてきて、そして、突如として扉が…
そこにはなんとまあ服は着ていたけど優希が！

「ぶっ！！！！」

「やあ」

俺はお湯から顔を出して言った。

「やあ…じゃねーだろ！！！なに！？なにこれ！？」

「えっ？ん～充さんが覗いたからお返し♪」

「お、お返しって…打ん殴るとかゴールドなボールを思いっきり蹴るとかならまだしも同じこと！？」

「痛い目に遭うのは古賀さん！私と同じ恥ずかしい目に遭うのは充さん！…じゃあ！私は寛大だから特別に許してあげる」

そういって優希は風呂場から出て行った。

…なんだったんだろ？あいつの基準がよくわからん。

天然だから？それとも意図的？

う～ん…謎である。

それともさらなる恐ろしい報復がこの後待っているとか？

とにかく様々なアニメとかゲームをやってきた俺からしてみれば女の子の風呂を覗いた後、しばらくはロクな事がない！

っというわけであがってみると。

「み～つるさん！」

「うっ！！！」

よ、予想通り！！

笑顔の３人がいた。

「ささ、とりあえず座って、食べて」

「は…はぁ…」

笑顔がむしろ怖い！

「え～っとですね……近くの中華料理屋で今度女性限定「第２回秋の餃子大食い大会」っていうのをやるらしいんだけど……それで…」

「ま、まさか！？」

キター！！報復だ！これは間違いなく報復だ！俺に女装をさせるという報復！そうに違いない！

「「はい！」」

はっ！？

それって…うちの高校の制服…いや待て！なんでそれが！？

「あ…あのー、一応聞いてもよろしいでしょうか？なんすかこれ？」

「えっ？飛鷹高の制服が何故……」

「まあまあそれは作者に質問って事で」

「はぁ！？」

すると優希が顔を近づけ、耳にこっそりと話した。

「実は大食いは嘘で最近飛鷹高の女子生徒を狙った犯罪が多発してるの…だからさっきのお詫びも兼ねて悪党を退治して！…ってさっ

き愛美ちゃんから頼まれたの」

あ…あいつのせいかぁぁぁぁ！！！

いや、でも優希の計画的犯行という可能性もある…さっきのあれからして…とれあえず。

「ひ、ひでええええええ！！」

「まあまあ、ネタなかったんだし、お願い！…じゃないと…通報しちゃうよ？」

「やりますやれます！喜んでやります！！」

こうして半分脅迫の優希の頼みごとを俺は受け入れてしまった。

そもそもマジなの？悪党出没って…はあ…死にたい。

ｐａｒｔ４１．俺は男だ喧嘩上等だ！

っというわけで俺は今飛鷹高の女子の制服を着ている。
ついでにヅラも被ってる、でも…

「おい、流石にこれはムリがあるだろ…」

「えっ？そう？」

「ぶっ！！に、似合ってるぞ充！」

「う、うるせー！！愛美は黙ってろ！！」

うわあああああ！！優希ってやっぱりこええぇぇぇぇぇぇぇ！！！！
つーかこれ！絶対バレるだろ！俺特に女々しいとかねーし、体も普通に男で背も小さいとかいうより高いほうだし…ひょろっとしているわけでもないし…いや、かといって太ってはいないけど。

でもとにかくこれはバレバレだろＪＫ！

「ん？…うおっ！な、なんだこのデカ女！？充じゃないか！」

「ほんとだ！これ保坂君じゃない！」

げっ！雄一と井上さん！
やっぱりバレバレじゃないか！

「なるほど…充。お前、そんな趣味が…」

「いやちが（ｒｙ」

「わかってるよ保坂君！私達は止めたり咎めたりしないから」

「はい？」

「ああ、充、わかってるさ、じゃ、じゃあ！！」

「待たんかてめえらぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

……

……

…

「…つーわけだから俺は決してそういう趣味はない！」

「どーだか、ハーレムの充だし」

「誰がハーレムじゃ！！あとこれはマジで俺の趣味じゃない！優希のせいだ！」

「お前…ひどいやつだな…早川に責任をなすりつける…

「いい加減にせい！」

俺は思いっきり雄一をぶっ飛ばし、雄一は車道を走っていた車と激突した。

…まあ雄一お得意の必殺技により車は8秒で直ったが…その後俺は

優希と愛美に妨害されながらも事情を説明した。榛名と真紅？あの二人は女装男と歩くのは恥ずかしいとかいって…畜生！

しかも提案した朋花の姿はない…もしかしてこれって優希の企画なんじゃね？やっぱり。

「そもそも優希、なんで今日は休日なのにわざわざ制服なんて着るんだ？どうせ制服だったらいつもの男の制服でいいだろ？」

「だめだめ！私達は部活帰りという設定…そこへ私と充さんを襲う悪人をどかーんっと一発やるのです！」

…ところで悪人がいるってマジな話なの？

「…なあ、雄一、あ、この際井上さんや愛美でもいいや。うちの生徒を狙ってる犯罪者がいっるてマジな話？」

「うん、そうらしい。愛美もあんまり知らないけど…なんでも犯人は隼鷹の生徒だって噂だよ」

隼鷹…噂をすればドンちゃんをフルボッコにして俺にも襲いかかったあいつらか…確かに2年生は修学旅行でも3年生や1年生は地元で悪事を働いているんだろうしな…十分ありえるが…なにも女装する必要なくね？

「優希、マジで俺が女装した意味って…」

「えっ？昨日お風呂覗いたお返し？」

「やっぱり！？」

「なにぃ!?充がそんな事を!?…あ、愛美、愛美はそんなお前に失望したぞ!」

「俺もだ!充…変態だとは知っていたが…」

「早川さん、気にしないで、保坂君がそういう趣味なだけだから…」

「だから勝手に解釈するな!あれは事故!事故なんだ!」

俺の声は大きかったのか周りまで俺を見ていた。
しかも俺、普通に地声で喋ってるから余計に嫌な視線で…はぁ…俺もう外出れない…

「よう誰かと思えば…前に俺達の事打ん殴ってきた奴じゃねえか?」

えっ?何?この絆創膏とかいろいろ張ってる男達、なんか増えてるゆうにも見えるし…
ちょっ!なに!?みんな悪そうな人に見えるんですが!?

「ぶっ!なにしてんのお前!女装?きめえよ!」

「う、うっせえ!これは好きでやってるんじゃねーって!だからやだんったんだよ~!!もう勘弁してくれ優希!」

「う~ん?じゃあそれとってもいいよ」

「おK!」

俺は制服を採った。

その下はTシャツに短パン…なんだけど…寒！

「…充、俺のでよかったらジャージあるぞ？」

「ふ、珍しく気がきくな雄一、サンクス！」

っというわけで俺は雄一が『何故』か鞄に入れていたジャージを俺は着用した。さて、まず問題は…なんでしょう、このいかにも隼鷹の生徒って感じの人々は…そして俺が女装していた意味ってなんでしょう？やっぱり完璧優希個人のお楽しみ？…それよりどうしよ、ヤンキーさんが１０人いるんですが？俺の前に。

「さ、さて梨佳」

「うん、がんばってね保坂君」

「えっ？おい、雄一、井上さんはいいとして雄一はどこいく？…おいコラ！逃げんな！お前男だろうが！コラー！！」

雄一ぃぃぃ！！逃げやがったな畜生！！！

「そうだ愛美！お前運動神経はばつぐーーー」

「えー！？暴力ハンターイ！愛美一応女の子だし、痛い目は嫌だ。じゃあ充、がんばってねー」

「ちょ！見捨てるなぁぁぁぁ！！」

え～っと…優希以外に見捨てられました、俺。

「ひゃーっ！頼もしい助っ人だねぇ！！」

どこがだよ！敵前逃亡っておま…畜生！もしそこに銃があったら銃殺だぞ！

「あ、あははは。じゃあ俺、そういう事で、ジャージ返さなきゃいけないし、またいつかお会いしましょう…優希、行くぞ」

「うん」

「おい待てよコラッ」

「はい？」

「はいじゃねーだろ？逃げんのかコラッ？」

「ははは、ですよねー」

「そうだろ？なぁ！！」

男は俺にパンチを仕掛けていた。

まあある程度予想はしていたから回避には成功した。

「よっ！」

「くっ…貴様ァァ！！」

「充さん！どいて！！……きゃあ！ちょっと…えい！あっち！あっちいけ！えい！えい！」

「ギャアアアア」

「ししししし…死ぬぅぅぅぅ！！」

「やめて！去勢だけは勘弁し――――Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！！」

声は可愛いけどなんか音がグロいぞ？
気がついたら道路血の海だし！

「ひ…ひぇぇぇ！！なんちゅー女だ！」

「お前ら！ずらかるぞ！」

「「「お、おう！！！」」」

そういって隼鷹のヤンキーさんたちは去っていった…
あのー…まだ伸びている人…これ、死体？生きてるの？これ？

「どうしたの充さん？」

「い、いや！ただ…こいつら生きてるのか？」

「大丈夫、みねうちだから♪」

楽しそうに言うなぁぁぁぁ！！！！
とりあえず犯人が俺達だって思われたくないからさっさとこの場から離れる事にしよう！

「とりあえずいくぞ優希！」

「おろ？」

俺は優希の右手を掴んで走って家に戻った。
ようやく家に到着し、俺も優希も息切れしていた。

「…ごめんなさい、充さん」

「ん？なにが？」

「いや、こんな事頼んで…それに女装して恥かいちゃったし…」

「いや、別にいいよ。まあ暇潰しにはなったし。惜しいといえば喧嘩シーンで俺が全然活躍してない所だけど」

「そう」

なんでか知らないけど男達を倒した時とは正反対なぐらいに優希は落ち込んでいた。
今度はどうしたんだろうか…俺にはわからん。

ーーーここから優希ーーーー

私はとりあえず部屋に戻った。

…充さん…普通の回答っぽかったけどやっぱり怒ってるかな？
確かに報復もあったけど…これは朋花ちゃんが考えた作戦。今いる犯罪者を利用して一緒に共闘し、一気に距離を縮める作戦…だったのに。

…あっ、電話。

「もしもし？」

「もしもし優希？どうだった？例の作戦？」

「…だめ…ただ充さんに迷惑かけちゃっただけだし…全然予定通りできなかった」

「ありゃ…まあどんまいだって、あいつはあれぐらいで優希の事嫌うような奴じゃないから」

「うん」

「それにあいつちょっと鈍いし、一度の失敗気にしない方がいいよ…でも今にしてみれば最初から失敗だったよ……ごめん…」

電話が切れた。

一度の失敗か…でもその一度でもし充さんに嫌われたら？

ほんとなんでだろう。最初はただ居候させてもらうだけの予定だったし…よくはわからないけど保坂家と早川家が和睦したって話だし、両親の態度も気持ち悪いぐらい以前とは変わってるし…前だったら今なら帰ってもいいはずなのに…帰れない。帰りたくない。

ここにいたい。充さんと一緒がいい。

充さん…充さん…お願いだからあっちに行かないで、こっちに近づいて、そして言わせてください…

Ｐａｒｔ４２．優希、決断ス

※完全優希視点ですぜ！

……１１月、北の大地は寒くなってきました。
でも街中は賑やかです。

なんで私が街中にいるのって？
それは…ちょっとした事…朋花ちゃんと愛美ちゃんとで遊んでいた帰りなの。

あの日以来私と充さんはあまり会話をしていない。
充さん自身は怒ってないっていうけれど…いや、違う。避けてるのは私…充さんが怒っているんじゃないかって恐れていて、なかなか声を掛けられなくて、反応もなんだかぎこちなくて、次第に会話の回数が減っていって…

そう、充さんは今まで通りに接しようとしていた。
でも私のせいで次第に会話が減った…文化祭の時も文化祭自体は成功だった…

ーーー回想っぽいものーーー

うちのクラスは定番の喫茶店らしきものをやった。

「らっしゃい！らっしゃい！」

「しげちー、お前だと客が逆に逃げるから厨房手伝え」

「ひでえみっちゃん！わかりましたよぉ～」

「まったく！しげちーはちょい顔が怖いからダメなんだよ！そんなに客引きしたかったら整形しなさい整形！」

もうしげちーって人、名字とか下の名前とか誰も覚えてない、それぐらいしげちーってあだ名がうけたみたいでクラスのほとんど全員がしげちーってよんでいる。

「ぐはっ！木原まで…ぐふっ」

愛美ちゃんの毒舌アタックでしげちーの心は折れちゃった。

「優希！」

「ふにゃ？」

「宣伝宣伝♪」

「…私が！？」

「そうだよ？愛美と朋花と三人で組んだらまず客来るでしょ！男ばっかりだと思うけど」

「う…うん」

ーーー現在ーーー

結果的に文化祭は成功だった。

私と愛美ちゃんと朋花ちゃんの3人トリオは確かに人気急上昇で男の子のお客さんだけじゃなく、女の子のお客さんもうちにきてうちのクラスはほかのところよりも輝いていた。

でも、朋花ちゃん命令のできるだけ充さんと一緒にいなさいってやつは果たせなかったし…それに話は全部充さんが振ってきて…特におもしろい話でもない。

…はっ！

私は咄嗟に身を隠すように電柱の後ろに隠れた。
充さんがいた！…でもしげちーと柊君が一緒だった。

何か話てる…距離もわりと近い、街は思ったよりも騒がしくない…だから会話が聞こえる。
何を話しているんだろう？

「はぁ～、雄一、お前歌下手だな」

「うっせえぞ充！これでも梨佳よりは上なんだぞ！？」

「ちょ…井上ってどんだけ下手なの？」

「うるせー！最強オンチッチーのしげちーは黙ってろ！」

「ぐはっ！雄一にまで言われた！俺もうダメだ！」

男3人でカラオケ？
寂しそう…でもよかった。充さん、最近あんまり笑わないから…楽しそうな所をみるとこっちまで満足しちゃう。

「さあて…次行くか次！…ゲーセンにでも行こうぜ？」

「なあ充？お前いいのか？もうそろそろ夜だし…早川も心配してるんじゃないか？」

「大丈夫だって、確かにあいつ、最近ちょっと暗いし、あんまり話してくれないし、何かあったのか気になるけど俺も一応高２男子だし、多少夜遅くても大丈夫だろ」

「まあ確かに、みっちゃんが女の子だったら態度は変わるかもしれないけどな」

充さん…気にしてたんだ。
やっぱり…私ってダメな子なのかな？

…言葉って難しい…なんだか表せない…

嬉しいような…自分が愚かなような…
あ…柊君がしゃべ…

「お前…わかってないのか？」

「はあ？なにが？」

「とぼけるな。早川の事だ」

「優希がどうした？」

…私の話？

「お前ら最近あんまり仲良しじゃなさそうだろ」

えっ！？

「な、なんの話だ？確かにあんまり話さないけどさ…」

「なんで気づかないんだよ？充…お前マジで馬鹿か？」

「ちょ！雄一どうしたの！？みっちゃんと喧嘩しても勝てないのは多分予想通りだと思うけど！」

「しげちーは黙ってろ」

「ひぃ！」

えっ？えっ？なに？

なんでさっきまで仲よさそうだったのに柊君と充さんが喧嘩…なのかな？

「確かに女装事件は誰の企画かは…いや、正確には知ってるがまあ参加していた早川も悪い所はあると思う」

「女装事件？ああ、あれか。そういえばあれって首謀者誰？」

「…高臣だ」

「つーかなんなのこの展開！？雄一ももういいでしょ！」

「だからしげちーは黙ってろ！！」

「ひぃぃ！！」

充さん…知っちゃった。
どうしよ朋花ちゃん…朋花ちゃんもしかすると充さんに怒られちゃうよ…ところでなんで柊君が知っているんだろう？電話かメールでしかやり取りしていないのに…もしかして朋花ちゃんの仲間？

「高臣かぁ～、まああいつらしいといえばあいつらしいし、別にいいや…つーかなんでお前が知ってるの？」

「高臣に友としてお前の青春を手伝ってやれって言われたからだ」

「せ、青春？わけわからんけど？」

やっぱり、柊君も朋花ちゃんの仲間だったんだ…すごい複雑…

「ともかく…なんで高臣がこんな事を首謀したと思う？」

「知るか、例によっていつもの悪戯だろ？」

「ちげえよ…早川の為なんだよ…」

「あいつの？」

「あの作戦…名前は「今いる犯罪者を利用して一緒に共闘し、一気に距離を縮める作戦」ってやつで俺も一緒に立案した作戦なんだけど…」

「たから都合よく、しかもバレないように井上さんと登場したのか

よ…でも女装はひどすぎだろ…」

「すまん…それだけは謝る。だがなんでいかなる手を使ってでも距離を縮めようとしたかっていうとな…早川はお前の事が好きなんだよ」

「はっ？」

…やめて柊君…それ以上、充さんを責めないで。

いきなりいわれてもわからないと思う…私だって同じ条件であんな状況でいきなり言われても答えられないし、わけわからないと思う…それにあんな方法じゃ縮まるはず…

「はっ？じゃねーだろ…本当に気がつかないのかよ？嫌いだったら普通だったら保護者さんも見つかってるんだし、もう戻っていてもいい頃だろ」

「ちょ、待て！わけわからんぞ？大体くっつける為ならほかにも方法あるだろうし…あんなわけのわからない作戦考えるか？」

そうだよ…あの後結局朋花ちゃんも気がついて謝ってたぐらいだし…しかもいつもの明るい声じゃなかったよ。

「そうだな。だけどそんな作戦を発動する前に気がつかないお前も悪い。今まで何度仕組んで早川にチャンスを与えたと思ってるんだ？前の肝試しだって仕組んだやっだったんだぞ」

あれも…そうなの？

あれは聞かされていなかった…道理で私と充さんがわざとらしくペアになったわけだよ…

「ちょ、なんなんだよ雄一…全部俺が悪人みたいに…大体お前と高臣が考える作戦も問題アリだろ」

「そうだよ…気がついてやれねえお前が悪人だよ」

「はぁ!?ちょ、待て!いきなりンな事宣告されてもな…わけわからないだろ…」

どうしよう…充さんいきなりすぎてよくわかってないよ……あっ!

「お前って奴は!!!」

「うっ!!」

柊君が充さんを思いっきり殴った。
周りの人は柊君の大声とパンチの音に立ち止まって見ていた。

「いてて…何すんだ!!」

「確かに俺らがやった事は迷惑だったと思う……それは多分早川も薄々感じている事だとは思う…だけどな、早川は本気だ…それをてめえは…てめえは!!」

「ぐっ!!」

今度は蹴り…顔面に…
やめて……充さんが…充さんが怪我しちゃう!

「…雄一!さっきから黙ってきいてりゃ全部俺を悪人みたいにいい

やがって！！」

「ちょ！やばっ！みっちゃんがキレた！」

どうしよう！充さん…本当に怒っちゃった。

「うるせえ！お前のような最低な野郎！！パンチやキックの1～2発じゃ足りねえ！！」

「俺が何したってんだ！！！…頭きた！こっちむけ雄一！歯ぁくいしばっとけバーカ！！！」

み、充さん！！！！！

「うぐぁっ！！！！！…がはっ……」

「ちょ！雄一！！！！」

柊君は倒れこんだまま起き上がらない、充さんはそのまま何も言わずに場を去ってしまった。
もう耐えられない！…私は飛び出してしまった。

「柊君！」

「あっ！やばいぞ雄一！伸びてる場合じゃねえ！早川だ！」

「ん？…あれ！？…なんで？」

「そこでずっと…聞いてました…」

どうしよう…どうしよう！

「そっか…すまん。お前の大事な人殴っちまって……ちょっと俺もやりすぎたっつーか、俺、馬鹿だった…」

「…」

「あいつとお前の事も考えないで高臣を先導してまであんな作戦考えて…」

「えっ？」

信じられない言葉だった。
もしかしてあの作戦って…

「悪い、あれを考えたのは８０％ぐらい俺だ……ただあいつ…あんだけやって早川にまるで興味がなさそうだったからつい……いや、今だったら俺、何言ってもおかしいな。とりあえず謝る事ぐらいしかできない…すまなかった」

悪気…あったんだ…
でも…

「よっ」

えっ！？

「あれ？高臣？」

「ほ、朋花ちゃん！？それに愛美ちゃんまで！？」

「ごめん！完全に全部見てたわ！…本当にごめんね…優希…」

「え～っと…愛美、事情は知らないけど…充と柊の喧嘩シーン見てる優希を見てたら本気なんだなって思って…」

愛美ちゃん…

「え～っと…ぶっちゃけいうと愛美も充の事好きだったけど…充を殴った柊とそれを見ていた優希を見ていたら吹っ切る事ができたよ、がんばりなさい優希」

「ホントごめん！柊の馬鹿止めれなくて！」

「ちょ！公然といわれると俺もショックなんだけど！？」

「あのー、俺は無視ですか？…じゃあ…みっちゃんでも追ってくるか」

みんな……

私…馬鹿だ…

「ちょ…泣くなよ優希、なにも優希のせいじゃないんだから…もうあんな事しないって約束する、でもボク応援してるから」

「ふにゃ？」

「愛美も」

「俺もだ、とりあえず充の馬鹿、探しに行こうぜ？」

「…」

どうしよう…何も言えない…どうしよう…

「優希…」

「朋花ちゃん…今までのような支援はこりごりだけど…でも…今なら言える、はっきり」

「そう…まあがんばって、途中まではボク達も一緒にいってあげるから」

「…うん！」

充さん…待っていてください…本当の気持ち、伝えます！伝えますから！

Ｐａｒｔ４２．優希、決断ス（後書き）

おまけ‥

「あのー作者、前回から優希側になっちゃってるんだけど、視点が」

「そうっすねー充君」

「俺、主役から降格なの？」

「どうでしょう、ぐふふ」

「もうだめかもわかんね」

Part43．ラスボス!?

――その頃、主人公の保坂充は――

…いってぇぇぇ……

殴られた顔もいてえし…逆に雄一の顔面殴った手もいてえ…まあ水で冷やしたら大分マシになったけど……

それにしても久々にキレたなぁ…

ったく、何のつもりだったんだよ…雄一は…

…それに、優希が俺の事を好き?

……わからない。

俺、成績は学校ではいいほうだけど世間に出たら多分馬鹿以外の何物でもないぞ?運動神経だって当の優希に劣るし…むしろあいつの強さには憧れる何かがある。

…それに……むしろ好きなのは俺、俺が逆に優希が好きだ…今気がついた、まだあんまり実感ないけど。

嫌いだったり普通だったらたとえ会話が少なくて、しかもたまにあっちから断る事があったらもう断交してるだろ。心配だから声かけてるんだよ…特にあいつほっといたら自殺まで考えそうだし…1人にしたらとても生きていけそうにないし…

でも優希にそのつもりがないと思ってたし、言って今までのいたって良好な関係が崩れさってしまうのが嫌で言えなかったし…俺も言うほど根性ねえな…

…こんなところで不貞腐れてる場合じゃないな。雄一の件は明日だ。
それよりも…両想いだって事を知った。だったら…今なら、いや、今しかないかもしれない。結果的に高校を卒業したら離れ離れだろうし、そもそも親が見つかったんだから3年生になっても近くにいるとは限らない。

俺だって親父の都合で急な転校とかだって考えられるし…今しかない、間違いなく今しかない！そう考えれば雄一の言う事もその通りなのかもしれない…俺って馬鹿野郎だぜ…

問題はどう優希が言うかだ…俺女装後喧嘩巻き込まれ事件以来自分に責任感じちまったのか控え目になってしまった優希にいきなり「好きだ！」とか言ってもなぁ…どうしよ？

さりげなく慰め続けてクリスマスまでに関係を修復させた上で告白するか？
それが一番いい方法かも。

…なんて、どうやって優希に本心伝えるかを考えつつ、俺は夜の大通公園を歩いていた。
とりあえず俺はベンチに座って持っていた手帳を開いた。
そこにはもちろん、亡くなった俺の妹の須美の笑顔の写真があった。

……須美、お前も生きていてもし元気だったら今頃楽しくやってるんだろうし、そろそろ初恋ぐらいしていたんだろうな…

お兄ちゃん、お前の分もしっかり生きて必ずお前の分も含めて幸せとかいうものを取ってやるからな、心配しないでゆっくりしていてくれよ。

…そう念じて俺は手帳を閉じた。
意味があるかなんて知らないけど…

「…おい、保坂充！」

「…ん？…そ、その制服！？…まさかと思うけどアレっすか？」

「そう、アレだ……この前はよくも俺の後輩虐めてくれたなぁ？ああ！？」

まずい…こんなところで隼鷹の奴らと出会っちまった。
しかもなんだこの角刈りで顔に傷が入っていていかにも怖そうでごつい男は？…まさか番長か！？

「お、おい、お前の名前はなんだよ？」

「俺か？俺は古賀元徳（こがもとのり）、隼鷹の番張ってるもんじゃあ」

「古賀？」

「ふふ…流石は保坂の息子…俺はな、古賀真紅って子を知ってるだろ？そいつの親父の兄の弟だ」

やっぱり…刺客かよ。
後輩の仇打ちと汚名返上もあるんだろうけど多分こいつの一番の目的は保坂家の人間である俺の排除だろう…

相手は古賀元徳を含めて5人…数だとこっちが不利だ…
だけどこの状況で逃げるわけには……よし！

「いいぜ、隼鷹の番長だかなんだか知らねえけど相手になってやるぜ。お前の最大の目的は俺の排除だろ？」

「ほう？年下の癖に生意気だがよくわかってんじゃねえか、お前ら、こいつにつきあってやろうぜ」

「「「「おう！！」」」」

「よし、充君とやら、相手になろう」

「ふっ、じゃあこっちこい、人目のつかないところでやろうぜ？」

…何やってんだ俺？

でもこの状況じゃにげられない…喧嘩は俺の趣味じゃないけど…仕方がない！

「ふ、おい、行くぞ？移動中には手を出すな？思いっきり戦いたい」

「了解！」

ーーーしげちー視点ーーー

「や…やべーよ…ようやく見つけたと思ったらみっちゃんの奴隷鷹の番格に喧嘩売られて買いやがったぜ……ぜってえみっちゃん勝てねえよ…よし！こうなったら…援軍を呼ぼう！……もしもし！？早川か！？」

「はい…そうですけど…その声はしげちーですか？」

「そうだけど大変なんだ！聞いてくれ！…みっちゃんが…みっちゃ

んが隼鷹高校の番格に喧嘩を売られて…」

「ええ!?」

「相手は5人だ…しかも1人は番格だし…とてもみっちゃんの勝てる相手じゃない……早川、頼む!俺も手伝うから呼べるだけ人を呼んでくれ!みっちゃんを助けねーとみっちゃんが無残で面影のない姿になって帰ってくるかもしれない!!」

「わ、わかった!…急ぐ!」

ようやく電話が切れた。

「…どうする?俺も加勢するか?いや…俺口で言うほど喧嘩強くねーし…介入して日露戦争のアメリカのごとく双方を和睦させるほど口もうまくないし…とにかく人だけ呼ぼう!」

一一一元に戻って…一一一

建物の裏……本当に人目につきづらい場所だ。
叫べば人に聞こえるが……戦う分には関係ねえ、広さも十分だ。

「充君よぉ?かわいそうだなぁ…結構いい顔して、俺の喧嘩を買う根性があって女にモテそうなのにここで死ぬことになるとはな…」

「ちっ…」

「舌打ちか?…まったくどこまでも生意気な奴だ…いくぞ!!!」

「来てみろよ?」

古賀元徳さえ倒せば…残りの４人は戦意を失う！
よし…まずはあいつから！！！

「「「「うおおおお！」」」」

「へ？うおあっ！」

俺は４人から仕掛けられる攻撃を次々とかわした。

「ちょ！待て！…戦うのはお前じゃないのかよ！！」

「貴様ごときを倒すのにこの元徳様が直接拳を下すまでもない！やれ！！お前ら！好きなようにしろ！殺してしまえ！！」

「「「「了解！！」」」」

「そんじゃあ…くたばれよぉ保坂ァ！！！」

「うおっ！！」

俺は思いっきり顔を蹴られ、一瞬よろめき、さらに４人から追撃を受けた。
まずい！！このままではやられてしまう！！

「…てめえら…いい加減にしろぉぉぉ！！！」

「なにっ！？…ぐはっ！！」

「うっ！！」

「おえっ！！」

「ぎゃっ！！」

俺は４人を殴ったり蹴ったり肘打ちしたら頭突きしたりで攻撃、４人は一度よろめいた。でも俺は追撃しようとしたが体が痛くて言う事をきかなくなってきた。

「ちぃっ…やるぜぇこいつ？」

「ああ、油断はしねえほうがいいな」

「ったく…おいお前ら！！！なに１人に手こずってるんだよ！！」

「はっ！申し訳ございません古賀さん！」

俺、あんまり喧嘩は強い方じゃない。

…でも戦える？…もしかして…こいつら実は口で言うよりも弱い！？

…だとしたら…本気出せば勝てるかもしれない！よ～し…４人一辺に片づけてくれる！！

「うおらぁっ！！！」

「なにっ！？…うぐっ！！」

「こいつ！！」

「ちっ…いてえ…いてえじゃねえかてめえ！！！」

「うあっ！！」

「な……なんなんだよ保坂充って…俺達４人を相手に…」

「ば…化け物じゃねえのか！？」

化け物だと？化け物…いや！

「化け物？違う…俺は悪魔だ！」

「はっ？なんだお前？ドラゴン○ールの見過ぎじゃね？」

「あ！隙アリ！」

「なに！？…ぐはっ！」

俺は赤いリーゼントを倒した。

そいつは俺のパンチでも起き上がる事はなかった。残りは３人！

「オラオラオラァ！！！お前らぼさっとしてると俺にやられるぞぉぉぉ！！！！」

「ちょ！こ、こいつ俺らよりヤバいんじゃねー…うわあっ！！！！」

続いていまいち特徴のない茶髪の男を倒す。

「相良先輩！！…てめえ…うっ！！！！」

さらに坊主のチビを倒し……

「ひ…ひぃぃぃ!!!つ…つえええ!!!…こいつ、今まで戦ったどこの高校の奴らよりもつえええ!!!…も、もしかしてお前、飛鷹高校の番張ってる3年生なんじゃねーのか!?」

「残念だけど俺は2年でうちに番長なんていない!!!てめえらのような不良はいねえんだよ!!!!」

「ぎゃあああああ!!!!」

最後に金髪の頭の悪そうな男を倒した。
これで古賀の手下は一掃した。

だがしかし。

「オラァッ!!!」

「うヴぉっ!!!?」

…あまりの痛さに俺は一瞬、気を失いかけた…

ｐａｒｔ４４．援軍到着！反攻開始！

…痛い…激しく…腹が…

倒れこんだ俺…見上げるとそこには古賀元徳の姿が…

「ふん！俺の手下をすべて片づけた事は評価してやろう…だが先ほどもいった通り俺は隼鷹の番張ってるんでなぁ…さっきてめえが相手した奴らとは一味違う…俺は市内で敵なしと恐れられている男だ」

敵なし？

流石古賀家…軍人家庭だけあって伊達に訓練やってないぜ。

でもその強さ、なんか使う方向間違ってね？

「おらおらどうした？立てよ…」

「ちっ……なんちゅー怪力だ…そっちが怪力ならこっちはスピードで！！」

「無駄ァッ！！」

「なっ！？」

なんてスピード！？

かわすのが精一杯だ！しかもさっき殴られたから言えるけど…こいつの攻撃はスピードだけじゃなくて力もあるし…それに…

「くそっ！隙アリ！！」

ドスッ！！

「…なんなんだ？今のは？」

「くっ…ぐわあああっ！！」

俺は背中を地面に叩き付ける。
こいつ…力が強くてスピードもあるうえに打たれ強い！
こんなのどうやって倒せばいいんだよ…

「どうしたどうした！さっきの威勢はどこいった！？俺の強さにビビって戦意失ったがゴルァ！！」

「ぐはぁっ！！」

…ダメだ…戦いは諦めたら負けだ！まだ俺は諦めていない…まだ負けていない！勝負はこれからだ！
悪い優希、俺死体になって帰ってくるかも。でも…せめて叫ばせてくれ…

「優希！！！好きだァァァァァ！！！！」

「あ？どうしたおめえ？頭イカれたか？…じゃあ頭殴ってやるよ！！オラァッ！！」

「うっ！！このっ！！……」

その時、俺の左腕に激痛が走った。

頭への攻撃を防ごうとして出した左手が……

「ギャアアア

「おらぁっ！！」

「ぎゃあああぁぁぁ

俺は腹の横から蹴りを入れ、少し怯んだところで右手で首にチョップをした。
そして少し離れてから猛ダッシュし、思いっきり元徳の体に体当たりを行った。

「うぅっ！！」

一瞬元徳がよろめき、鉄パイプを手から離した。
その鉄パイプを俺は持って元徳の顔をそれで打ん殴った。

「ぐはっ！！！」

元徳はよろめき、一端倒れた。
元徳はぴくりとも動かない。

「はぁ…はぁ…はぁ……なにっ！？」

いやっ！元徳は目覚めて立ち上がり、折れている俺の左腕に強烈な蹴りを入れた。

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

俺は思わず倒れこんでしまった…
流石にダメだったか…こいつには勝てない。俺はそう思った。

「充君…やってくれるじゃないか…俺に痛みを感じさせた上に俺を一回倒してしまうとは…なかなかの実力だ。最初に言った事は撤回しよう…だが貴様もこれで終わりだ！！」

はぁ…俺もとうとう死ぬか…
俺が行くのはどっちだろう?須美がいる天国かな?それとも総統閣下が多分いるであろう地獄かな?どっちに転んでも死後の世界なんて覚えてないだろうし、俺死後の世界のあれこれとか全部信じてねーし、ただ、須美に会いたいな…そういう理想はある。

「天誅!!!!!」

あいつが持っているのはナイフか…だめだ…もう…

「充さん!!!」

…えっ?

「ぐぉっ!!」

…ぼやけて見える俺の目に映ったのは優希だ。
…優希?なんでここに!?

「さっすが優希!実力は充以上!愛美感激!」

な、なんだ?なんで愛美まで?」

「ああ!見てあれ!…保坂がぼろぼろ…」

「きゃあああ!!こ、こえええ!!」

「しげちー!あんた男でしょ!ボクでさえ逃げようとはしてないのに!」

「さ、サーセン！」

なんで高臣としげちーまで？

…なにわともあれ…じゃなくてやめろ！古賀元徳ってやつは只者じゃねえ！お前ら束になって勝てると思ってるのか！？

「おい、充！」

「…ゆ…雄一？」

「しっかりしろ！なんだよこの様は…すっかりボロ雑巾じゃねーか」

雄一まで…なんでお前もここに？

「充…俺、どうしても言わなきゃいけない事がある…ごめん！！それだけだ、この状況だとベラベラ語ってられないし、後ほど時間があったらしっかり謝る！」

「ゆう…いち……」

「まったく…そこの不良さん！どうした？怖気づいたか？」

…へ？あれって…治三郎！？

なんであいつが！？…そういえば前もこの辺で…あいつもしかして夜中は街中の男を狙ってるのか？つーかそいつを挑発するな！

「な、なんだこの男！？」

「ゴルァ！！…俺の息子になんて事をしてくれたんじゃ！？」

はっ！親父！？

…なんで親父まで！？

それと親父の隣にいるら○まに出てくる天道○雲みたいなおっさん！？

「君が保坂充君かね？」

「お、お父さん！？」

「お…おとうさん？」

御父さんだって？優希、それってどういう事だ？

まさか…このおっさんが！？

「おっと、紹介が遅れた。私は早川早雲、文字通り！早川優希の父親だ！」

「…は…はぁ…」

「たまたま今日は久々に日本に帰ってこられへんにいて…君の親父さんに届いた報告を受けて駆けつけてきた。一部始終を見ていたが相手の男は中々の達人！先祖代々、まあ道場は昔予算の都合でうっぱらってしまったが…我が早川流武術の使い手からみてもあの古賀元徳はかなりの達人！…その男を相手に傷をつけるとは…それに…君骨が折れとる。そんなになってまであの男と戦った事…最近の軟弱な男子ならば逃げだすだろうが君はすごい！その根性！大いに評価する！」

優希のお父さん…思っていたよりいい人に見える。

とても育児放棄するような人には見えない…そうか、貧困は不幸も呼ぶが調子のよかった人をダメにする…そういう事か…

「充君！君の息子はすばらしい！これなら私の優希を渡せるぞ！！」

「…はい？」

「ええ！？おお…お父さん！」

「案ずる事はない優希よ！お前はこの男が好きで帰ってこなかったんだろ？」

「へ！？」

「まあよい…それよりもすまなかった…実は破産は嘘で…またかつて、この保坂君との間で優希と充君を勝手に許婚としてしまった」

「ええ！？」

「ちょ…それ初耳だぞ親父？マジなのか？」

「ああ…悪かった。ついでに言えば…保坂家と早川家は同盟関係にあってお前に教えた歴史の５０％は嘘だった。歴史的な対立が深いのは実は古賀家で…ただ早川家の中にも古賀派がおって、そいつらの工作で早川家も仲間であるかのように古賀家ではされたんだ。そしてそれを利用して…」

「うむ！充君の根性試しをしてみたのだ！！優希が君の家に忍び込んだのは偶然だが我が家の御家人に充君の家にいくようにそのうちすつるもりだった…まあなにわともあれ合流したから成長した君に

…本当に優希のお婿となるにふさわしいか根性試しを行った」

あ、なるほど。

道理であっさり保坂家と早川家が和睦したわけ？

「そ…そんなお父さん！！勝手にひどいですよ！しかもそれ充さんが一番迷惑じゃない！」

「そうだよ！優希の言うとおり！愛美は絶対今回の事件の元凶になったのはそこのおっさん二人だと思う！」

「「ちょ！」」

おっさん二人は青くなった。

まあ仕方ないだろう。俺も怪我が治ったらこいつら2人しばいてやる。

「で…でも…なんで俺に対する根性試しを突然やめたのですか？…」

「それはだな、古賀家の…なんて名前か忘れたが陸自3佐の男とその人の家に住んでいる真紅ちゃん以外が今度の根性試しの件で打倒保坂のスローガンを見直し、本格的に動いてしまった…それを止めなければ今回のように、充君の命が本当に危ない、それどころか娘にも被害がでてしまう…そこで一時的に根性試しをやめたのだ。そう、保坂家と早川家は改めて完璧同盟し…打倒古賀家の大半を掲げたのである！」

そ…そうか…

…ダメだ…考えるのもつらいぐらいに痛い…

「充さん…ごめんなさい…うちのお父さんが根性試しなんて言ったから…こんな事に巻き込んでしまって…」

「いや、何も知らなかった俺らのせいじゃない…悪いのは…明らかにおっさん2人だ……くっ」

「充さん！無理しないでください！…おとなしく…お父さん一応武術の達人だからごついヤンキーさんなんて！」

「…つ…つーかてめら！！俺を無視すんじゃねえ！！！…なんだよ…数が増えたからって俺に勝てるとでも思ってんのかよ？俺は…大人も怖くねえし…警察も、公安も…自衛隊も！…つーか米軍も怖くねえ！！俺は…俺は古賀元徳…隼鷹高校の番を張る男…負けられねえんだよぉ！！！！」

すると、優希のお父さんの目つきが代わり、体に力が入ったようだ。そして、いかにもこれから戦うといった眼差しで徐々に優希のお父さんに近づく元徳を睨みつけた。

「何が早川流だぁぁぁ！！裏切りもののめぇ…隼鷹高校番長兼務古賀家最強担当のこの元徳様がぶっ殺してくれる～！！！！！！！！！！！」

「…無差別格闘早川流拳法秘奥義……狼牙…風〇拳！！」

ちょ！それヤ〇チャ！

「な、なにぃ！？」

「はいはいはいはいはいはいっ！オウッ！！」

「ぐぁぁぁぁ！！！」

つ…つえぇぞあのおっさん…

元徳が瞬時にして倒れた。なるほど、優希の強さは父親譲り！

「…ああ…こ…古賀さん！！」

「て…てめぇら！寝ている場合じゃねぇ！！」

「お…おう！！」

「よくも古賀さんを！…次は俺ら４人が相手だ！！古賀さんとの戦闘で疲れているお前らなんて敵じゃねぇ！！！」

まずい…あの４人が目を覚ました。

っと思ったら…

「あら、いい男じゃないの？どうだ？俺とやらないか？」

「いえ…けっこ…ぎゃあああああ！！！」

り…リーゼントォォォ！！

治三郎はいい男を見るとついやりたくなっちゃう男だ…そしてしばらくは手放さない…がんばれ、リーゼント！

「充に倒せた相手なんだから愛美が倒せないわけがない！！くらえ！…愛美ちゃんアターック！！」

ただの体当たりじゃん！

…でも傷だらけのあいつらには効いている！

「今だ！朋花！」

「うっふふ…陸上で鍛えたボクの足腰をなめちゃだめなのだ！」

朋花は目立たない茶髪にハイジャンプキックを食らわせた。
もう男は戦意はない…つーか気絶した。

「や…野郎！」

「お、この坊主…てぇっ！！」

「イテッ！！」

「あぁ！…てめえ友達盾にすんのかよ！」

「うっせえ！戦いにきたねえもくそもねぇ！食らえ！神風しげちー特攻隊！！！」

「コラァー！！俺は特攻兵器じゃない！！…おぇっ！！」

「ぎぇっ！！！」

雄一はしげちーを武器にして戦った。
文字通り、母機である一式陸上攻撃機（ゆういち）から切り離された桜花（しげちー）は隼鷹高校軍巡洋戦艦「ヤンキー」に特攻！撃沈（いろいろな意味で）した！

後は…あの坊主だけ！

「げ…ま…まずい…みんな…やられちまった…」

「私も…私も充さんの為に戦います！…坊主くん♪」

「は…はい」

「く・た・ば・れ♪」

「嫌アアアア

「泣くな優希よ、充君は安心して眠っただけだ……ん？」

向こうからサイレン音が聞こえてくる。

「やれやれ、保坂君」

「ああ、ようやく…警察と救急車が来たみたいだな」

「なんでも愛美が知る限り隼鷹の生徒は手当たり次第暴力を振るうらしくて、一部メンバーは夜になると街に出没して女性を狙って犯罪行為をしているとか…」

「うむ、怪しからんやつらだ…しかし、我々が到着するまでこの充君は彼らを相手に勇敢に戦い、時間を稼いだ。さ、後は病院だ。優希、行くぞ」

「え…でも…」

「ああ、この事か？心配すんな、早川家と保坂家が協力してこの事件で飛鷹高校生徒が戦った事については…なかった事にしておこう」

「ありがとう」

…言わなきゃ！

「お父さん…充さんと一緒に救急車、乗っていい？」

「元よりそうさせるつもりだった。遠慮するな。我々は後で向かう」

「…はい！」

こうして、救急車が到着した無事に充さんは救助された。

よかった…本当によかった……

part45，本当の気持ち

…あれから…今日は土曜日、散々ボコボコにされたし、骨も折られたけど明日退院できるらしい。傷も骨折箇所と特にひどい所は大分癒えたし、特にひどい所も痛いだけでもう入院する必要のないレベル、まあ痛いのは確かだけど……

結局俺が今入院しているのは市街地の病院、その為親父と優希のお父さんと古賀さんはよく見舞に来てくれるが学生メンバーは距離と時間の都合上、まだ見舞には来てくれない。
親父と優希のお父さんは来日中に暫定的にうちに住んでいるそうで優希は1人じゃないそうだ。あと古賀さんの情報によると古賀元徳ら5人は現行犯逮捕だったらしい。

それと、俺らが喧嘩したっていう事は保坂家と早川家の力でないことにされたそうだ。おかげで俺らが停学処分を受ける事もなく、俺と特攻したしげちーは交通事故に遭ったって事にされたそうだ。

まったく…うちの親父と優希のお父さんって何者なんだろう？まさかマジでヤバい奴ら？

「あらあら充君？大分元気そうになったねぇ」

「あ、どうもです」

この人は山内（やまうち）トキさん、かなり前から入退院を繰り返している老婆で、休みの日や暇なときに地下鉄に乗って須美の見舞に来ていた俺やその須美本人の顔も覚えているし、特に須美が死んだ時は俺と一緒に涙を流した人だ。

「まったく、須美ちゃんが死んで悲しいのはわかるけれど…交通事故には気をつけなさいよ」

「べ、別にまだ引きずっているわけじゃありませんよ！…それよりトキさんまた入院しているようだけど元気そうでよかったですよ」

「あたしゃは１００まで生きるよ！」

そうっすか。お元気で。

俺はロビーに向かった。別に病人じゃないし、骨折はたのは左手だから歩くのに不自由はないし、もうほぼピンピンしているし、暇だから。

「…あっ」

「あっ」

…ばったりあった。

優希と…しかも優希は１人だった。

「１人？」

「うん」

優希は微笑みながら頷いた。

その後俺らは屋上に向かった。街中だし、綺麗ってわけじゃないけれどまあ高い所ではあるな。

「充さん…本当にお騒がせしました」

「別に今更謝る事ないよ、その事については後で2人まとめてしばいとくから」

「充さんらしい」

なんだかしらないけど優希は嬉しそうだ。

「あ、これ、充さんのケータイ、あの日落ちていたのを拾って…無事だったから」

「おう」

「充電しておいたよ」

「ありがと」

よかった。

ケータイなくなってどうしようと途方に暮れていたところだったし。

…しかし、風が気持ちいい。

寒いけど……

「ふえっくしゅん！」

「おい、大丈夫か？暖かい格好してるからって風邪ひかないわけじゃ…ぶぇっくしゅ！！」

「充さん！」

「だから屋上はやめよっていったのに…もう11月も中、もうすぐ下旬だぜ?初雪も降ったし…」

「そ、そうだけど…こういうところじゃないと言えない事だから…」

言えない事。

予想はついた。いや、優希から言うのか?俺も今、言おうとしていたけど…じゃあ、言わせてあげようか。

「充さん…好き…好きなのです!」

すると優希は俺の唇にキスをしてきた。

なんというか…俺も本気だからか前とは違う感触…温かくてやさしい唇を感じた。優希の舌を、自分から夢中で吸っていた。

俺は口を放し、優希を優しく抱きしめた。

「ふにゃ?」

「俺は…優希が好きだ」

「!?」

「悪かった、言えなくて…関係がぶっ壊れるのが恐ろしくてな…まったく俺って根性ねーな…」

「そんな事ないよ…ヤンキーさんに立ち向かってったし…私の事何度も助けてくれたし…」

「そうか、まああんまり細かい事は聞かない事にしようか」

「うん」

俺と優希はもう一度唇を合わせた。

…離れたくない、きっと優希もそう思っているはずだ。

このままずっと一緒にいたい。こうして優希と口づけをしているとその気持ちが次第に大きくなっていく。

「ぷはっ…充さん…病室、戻ろ？」

「…おう」

その後、俺は優希の手を借りながら部屋に戻り、ベットに横たわった。

すると、優希までベットに入り込んできた。

「ゆ、優希…これってまさかの？」

「えっ？違うんですか？本当に好きな人とやる事だって真紅ちゃんが言っていたけど？」

し…真紅めぇ～……

「それはそうだけど…今ここで？」

「うん」

まずいな、誰かに聞かれたりしたら…そけに窓から見られる可能性もあるぞ、隣のビルの人にとか…よし。とりあえず俺は部屋のカー

テンを閉めた。

部屋は少し暗くなる、日差しも入ってこない。

優希は仰向けでベットに横たわり、俺はその上に馬乗りする。

ああ…まずい、このままだと確確実にＲ１８…でももうダメだ…とめられないし、今止めたら優希も俺も気が済まない。

「優希、後悔しないよな？」

「うん」

優希は微笑んだ。

俺も知らずと顔が微笑んでいた。心の底から嬉しい。

優希と恋人同士になれたんだ…優希失踪…あのあたりから俺は優希が放っておけなくなって…夏になんだか離れるのが完全に嫌になってそれ以降…そして雄一に打ん殴られて初めて自覚して…

優希も俺の事が好きで…俺が怪我して入院して…そして告白されて…結果的に恋人同士になった。恋人ってどんなのだか…俺も実際よくわからない。ただ、兄弟や幼馴染と違って、ずっと、末永く一緒にいれる関係…なのか？

…よくわからない。よくわからないけど俺はこう思う、感じるだけでいい。

そう、単純に好きで、男の俺はずっと女子（ゆうき）を守ってあげたい…それだけ。それだけで十分だ。

「じゃあ……」

俺は前戯をしようと、優希の服に手をかけた。
どういう事がこの日、優希は制服を着ていた。

「そういえば優希、なんで制服？」

「えっ？…充さんは制服萌えって榛名ちゃんから…」

榛名が犯人かよ！
制服萌えなのは認めるが余計な事を教えるなよ…

俺はベストを脱がし、優希もそれを手伝うかのように体を動かした。
さらに俺はボータイを解き、いよいよブラウスに手をかけた。

ブラウスを脱がせばそこは…

「……ぅおっほん！」

「ひゃっ！！」

「げっ！！」

なんとそこには親父と優希のお父さんが……あれ？これって何？死亡フラグ？

「ほほほ、保坂君、ここここ、これは何事で…？」

「えええ？やだなぁ早川君、どうみたって愛の営みであり、Ｆ○４の愛のテーマが似合う場面ではないか？」

「そそそ、そういう事か……そうだ、確かに…うむ、2人は年頃、それもアリか…」

「ちょ！誤解です！これは誤解ですよ！！親父もピンチの息子の為にフォロー入れるとかなんとかしろよ！」

「なんでですか充さん！？私じゃダメなんですか！？」

「えっ！？」

ちょ！おいなんで優希まで！？

「そういう事だ充よ！優希ちゃんを大切にするんだぞ！それからそういう事は昼じゃなくて夜をオススメする！」

「そうそう、充君も優希もそういう運動は夜のものでしょう」

はい！？ってかこの馬鹿親父どもは認めちゃってるわけ！？

それならそれで…いや！全然よくないぞ！！！

絶対おかしい！

「ってか！なんで2人がここに！？」

「「見舞」」

ハモってんぞ…

「ようし！なんならあれだ！2人もようやく晴れて恋人となった…なぁ保坂君？」

「うむ、人生において一度は経験したい事…真の幸せ…なあ早川君？」

「うむ、ようし！準備だ！！服と会場！あっ！お金とか…人も招待せねば！」

「えっ！？ちょ！？何の話！？」

「「結婚」」

だからハモるな！！

ってか結婚！？いきなりすぎるだろ！

俺ら恋人になってから２０分も経ってないんだけど！

「ちょ！お父さん！いくらなんでも結婚は早すぎるよ！だって充さん１７歳だよ？私はともかく充さんはまだ年齢的に結婚できません！」

「そうそう！少しは考えてくださいよ早川さん！あと親父！！」

「えっ？早川さんなんて…充君もアレだなぁ…今日から私の事はお父さんでいいんだぞ？」

何故！？

すると廊下から足音が…そして。

パァン！

「充ちゃん！ゆーちゃん」

「お兄ちゃん！優希お姉ちゃん！」

「「ご結婚おめでとう！」」

「「えええええ！？」」

俺と優希は驚いた。

さらに雄一、太一、圭一、しげちー、ドンちゃん、小太郎といった男メンバー、愛美、高臣、五十鈴先生、中原先輩、井上さん、ミーシャさん、さらに何かしらないけど例のトキさんまで…

「保坂君…えと…その…おめでとうございます！」

「充！おめでとう！ついでに言うとだな、俺も昨日ダメ元で中原さん…いや、亜衣に告白したらＯＫだった」

「小太郎君…そんな、恥ずかしいから言わないでよ…」

「ままあま！」

小太郎！！！てめえもかよ！！

「ようやく充も俺達の仲間入りか」

「ああ、長いようで短かったな」

雄一と太一が腕を組みながらそういう…さらに…

「畜生！俺らは…」

「「ああ！！」」

「「「永遠のロンリーウルフ！」」」

なにやってんの圭一、しげちー、ドンちゃん…

「充！優希！おめでとう！愛美充と優希の結婚式の為ならお父さんやお姉ちゃんのお小遣い盗んでも行くよ！」

「優希、ボクもちゃんと優希の花嫁姿を見るからね」

「えっ？えっ？み…みんな！？」

ダメだ、優希も困り始めてきた。

「私達もお祝いするよ、保坂君、優希」

「うん、結婚式必ずいくからね！」

井上さんとミーシャさんまで…そして……

「保坂ぁ！早川ぁ！私を差し置いて結婚とはいい度胸！！……っといいたいが私は他人の幸せは邪魔しない、教師として、お前らの幸せを心から祝っている。学校のほうにも許可をとるようにしておくから心配はしなくてもいいぞ2人とも」

「ちょ…あああ！！！！皆話が行き過ぎじゃあああああああああ！！！！！！！！！」

…あれ？誰か忘れてない？

……あっ！古賀さん…そうか、自衛官だしな…休むわけにも…ってか、こいつらなんとかならないのかぁぁぁ

final, goal in

……オッス、オラ保坂充。

ん？あれからどうしたって？

そうだなぁ…いろいろあったよ、苦労とかな。

そして1年後…苦労の末……やったよ！札大うかったよ！

「やった！！俺の番号あるじゃん！！」

「がく…落ちたぁぁぁ」

「気を落とすなよ愛美、別に会えなくなるわけじゃねーんだし、二次募集頑張れ、それに万が一でも大学じゃ一浪はつきものだ」

「うっさい！黙ってろ！愛美はどうせおちこぼれだもん！」

「愛美ちゃん…落ち込まないで。もし来年入ってきたら私先輩としてがんばる！」

「そうだな、愛美が後輩っていうのも面白い設定かもな」

「ひっどぉ！充には絶対敬語で放さない！」

「そこまでいうか！」

っとまあこんなわけで愛美は落ちたけど俺と優希は大学受かりました。

あとのメンバーは報告によると太一はミーシャさんの案内で訪露し、ロシアに留学したらしく、雄一は梨佳さんと一緒に別な大学を受けて合格、高臣も短大を受けて合格し、しげちーは家業の豆腐屋を継ぎ、ドンちゃんはどこかは忘れたけど就職、去年卒業した中原先輩と小太郎は驚くべき事に東大に受かって現在東京に同棲、親父と馬鹿やろ（ｒｙ…お父さんは平成の薩長同盟という事で成功しており、太平洋の島々はある意味ですべて2人の配下になったとか…一体どんな犯罪を？

古賀さんは晴れて昇進し、2等陸佐…つまり中佐に昇進。
五十鈴先生は魔が刺したのか2年の終わりに隼鷹高校へ転属になったらしい。

でも飛鷹では見せなかった女〇様キャラを発揮、不良どもも黙る鬼教師だったらしく、でも本人はそういう人じゃないから耐えられないらしく、今年また飛鷹高校に戻ってくるという話を聞いた。

あのおホモの治三郎は自動車修理工を目指しているらしい…これなんてアッー？

榛名と真紅は今年から受験生、なんでも最近榛名に彼氏が出来たらしく、俺も一度会った。黒髪で超イケメンでルックスもいい男でしかも優しすぎるっつー…まさに甘えん坊の榛名向け？

なんか悔しいけど…1年前だったら榛名も同じ思いをしていたんだろうな。
って、俺は今どこにいるかっていうと……実はここ、市内にある式場…なんと親父が言うに合格祝いはずっと計画していた結婚式だそうだ。

結婚…か…確かに大学生なら結婚している奴がいてもおかしくはないよな……
でも、２人ともまだ１８歳、こんなに若い年齢で結婚する人なんて今どき珍しいんだろうな…

「おっ！充よ、似合ってるではないか！」

「なんだよ親父かよ…」

「あらあら、充ったら本当に男前だわ」

「お、お袋までなんだよ？」

目の前に現れた実年齢よりも若く見えるセミショートの女性は保坂（ほさ）真由子（かまゆこ）、俺の実の母親だ。

「うむ、これなら…これなら婿に出しても恥ずかしくはない！！」

「ええ、お父さんが若いころにそっくりでかっこよくて決まってるわよ。はぁ～、お母さん惚れそうだわ」

「勘弁してくれ」

「ひどいじゃないのぉ～」

「あ～あ、お前のその姿を見れただけでも俺は幸せだ。もし生きていたら…いつかは須美の花嫁姿も見てみたかったものだ」

「その話題引っ張るなよ、悲しくなるだろ？」

「あらあら、まだ引きずってるのね？」

「う、うるせー！」

悪かったな！結構ショックだったんだよ！須美の死は！

…っと心の中で叫んだ瞬間、ドアがノックされた。

「はいはい～」

お袋がご機嫌よさげに出た。

「あら早川さんじゃない、それに優希ちゃん？まあお似合いですよ～、充が見たら鼻血吹くわ」

は、鼻血！？

ったくそんなわけねーだろ、ってか糞おと（ｒｙじゃなくてお父さん爆笑してるし！これは抗議せねば！

「笑わないでくださいおとうさ――――うっ！！」

「むにゃ？」

「！！」

なんだこの破壊力の強さは！？

優希の花嫁姿…ここまで威力が高いとは！！

「…充さん…いえ、あなた。いろいろと迷惑をかけるとは思いますがよろしくお願いします」

「えっ？いや…そういうのはこの後でも…」

「私楽しみなの、あなたと一つになれるのが……もう、これからは早川優希じゃない。保坂優希だよ？」

まあ確かに、日本は夫婦同姓制だからどちらかの名字になる。まあ大半は男側の名字になるんだけど、俺達の場合は優希の名字が保坂になる。

「おい、そろそろだぞ？」

「うん…いこ？」

「おう」

……

……

…

すまん、え～っとだな。

作者は独身だ、彼女いない歴＝年齢でもある。結婚式に招待されたとしてもそれは幼少期…そしてそういうのに興味がないせいかロクに勉強もしておらず…つまり！結婚式の描写が不可能！

…ごめんなさいごめんなさい！勝手に脳内補完して！ｂｙ保坂充

結婚式も終わり。

「お～い！保坂！早川！」

あ、五十鈴先生だ。

「どうもです」

「あ、お久しぶりです五十鈴先生」

「いやぁ、今年からまた飛鷹の教員として働く事になって…ついでに二人の結婚式にもご家族からの招待があったから来ちゃったけど…保坂も早川も大学も受かったみたいで…よかった……あっ！そういえばもう二人とも結婚したのか！」

「はい」

「そうですよ」

「ってことは…すまん！今は保坂優希だった！」

「いえ、早川でいいんですよ？五十鈴先生」

「いや、そういうわけにも…よし、今日から2人を名前で呼ぶとしよう」

まあそれが一番手っとりばやいだろうな。

俺と早川は五十鈴先生の提案に同意した。

「しかし…いいなぁいいな！私も婚活中だけどなかなかいい男が…充、優希の事しっかり頼んだぞ！」

「はい！」

すると五十鈴先生がこそこそと声をかけてきた。

「あと…夜のほうは子供が欲しくないのならちゃんと避妊するんだぞ？」

「ぶっ！！…五十鈴先生！それはアドバイスすべきことじゃないでしょ！」

「はっはっは！それもそうだな、まっ…2人とも幸せにな。私は多分数年は飛鷹にいるから暇な時とかたまに会いに来てくれよ」

「「はい！」」

「そんじゃ、またな。お幸せに」

五十鈴先生は笑顔で去っていった。

あんな笑顔はこれまで見たことがないぞ？

あっ、ちなみに家だけどあの保坂家、親父にくれてやると言われて3年生の時ついでにリフォームしてもらった。たまには気がきく親父だろ？ちなみに俺も18歳、優希もいつか二人っきりで海に行きたいとか言っていた。

だから頑張って免許取って中古で安セダンだけど車を購入した。親父の金だけど。まあまだ若葉マークだけど一応運転できるんだぜ俺？

「さ、帰ろうか、優希」

「はい、あなた」

婚姻届を出したのは結婚式の2日前だけど…何故か今日から夫婦気分、そして優希の俺の呼び方も充さんからあなたに変わっていた。漫画の影響？

俺達は車に乗った。しかも優希の希望でまだ式の時の服装…俺の隣には花嫁姿の優希、ん？窓を叩く奴が。

「充ちゃん！」

「兄さん！」

「けっ！お前に兄さんって呼ばれる筋合いはねーぞ？雄太」

雄太…本名は中村雄太（なかむらゆうた）、例の榛名の彼氏だ。

「いいじゃないですか。それより…」

「写真取らせて充さん！ゆーちゃん！」

「どうする優希？」

「いいじゃん、この服着るの多分今日が最後だよ？撮ろ？」

「…ああ！」

タイトルは…車内の新郎新婦…らしい。

実は雄太の奴はカメラマンになれるんじゃないかってぐらい写真を撮るのが上手だ。よし、期待してやろう。

「はい！兄さん！奥さん！チーズ！」

「お、奥さんなんて…」

「たせから俺は兄さんじゃ…うおっ！眩し！」

写真撮られちまったぜ。
撮られたからには見ざるを得ない。

「どれ？どうだよ雄太？」

「い…いや、そのだな……写っちゃった」

「はっ？」

何が？
俺は雄太のカメラを覗きこむ…すると、確かに車の近くにどこかで見たことあるような女の子の影が……

「ちょっ！これって…」

「あああ…あなた！これ…これって！これって！流石の私も心霊写真はちょっと怖い！」

「消去！消去だ！」

「ダメあなた！消去したら呪われるかも！」

「えええ！？じゃあ雄太！なんとか…おい…おい雄太！榛名連れて

逃げるなぁぁぁ！！」

「そのカメラ兄さんにあげます！」

「ないわそれ！！！コラー！待てぇぇ！！！」

「あああ！あなた待ってください！！！こ、この服！この服走りづらいの！待ってぇぇぇ！！！！」

結局こうなるのか！！！！！
俺ってやっぱ不幸ーーー

…いない……
かといって榛名は逃げたし…ここにいる若い女性って優希…いや、
でもまだ子供のような声だったような…

「あああああ…あなた！それ！それお化け！おばけえええええ！」

「げっ！幽霊って実在してるの！？ちょ！誰か科学的に説明してくれえええええ！！！！！！！」

……

……

…

ーーーっというわけでいままでありがとうございました。
あっ、ちなみに自己紹介が遅れました。今まで－－－（）－－－で喋っていた私は保坂須美！あの世からお兄ちゃんを見守る可愛い妹です。

って…え～っと…2人はその後も幸せに行きました。めでたしめでたし。

…えへへ、台本棒読みしてみました。
それじゃも機会があったらまたいつか。

－－－ＦＩＮ－－－

ｆｉｎａｌ，ｇｏａｌ　ｉｎ（後書き）

今までご愛読ありがとうございました。
予想以上のお方がご愛読になられている事に驚きました。本当に今までありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0057k/

貧乏な彼女

2010年11月25日12時08分発行